
真・恋姫無双 もう一つの袁家に仕えし者

くせっ毛のキタロー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫無双 もう一つの袁家に仕えし者

【Nコード】

N3218S

【作者名】

くせつ毛のキタロー

【あらすじ】

袁術軍の紀霊に転生した主人公。しかしそこは、なぜか有名武将達が女の子の世界。そして肝心の主は、蜂蜜大好きなおバカっ娘だった……

主人公設定

名前：姓・紀 名・霊 字・白怜^{はくれい}（字は不明なため、オリジナル）

真名：八雲

年齢：21歳

容姿：顔は若干優れる程度（平均を50とするなら65）。長身で、髪は目と耳に掛かる程度の長さ。髪色は黒で、所々に茶色が混ざっている。

服装：上は白のスタンドカラーシャツに青色の着物（襟と袖口は紺色）、下は紺色の馬乗り袴（ズボンの様になっている袴のこと）に足袋、草鞋^{わらじ}を履いている。戦闘時には、白の手甲と脚絆^{きゃはん}（脛の部分に巻く布製の被服。活動時や長期歩行時に、履き物の裾が障害物に絡まるのを防ぐ、脛の保護、鬱血を防ぐなどの目的がある）を付ける。

武器：朧：柄は青、刀身は白、鰐の部分が鈍い銀色の倭刀

ステータス（恋姫風）：統率3・8 武力3・8 知力3・8 政治3・8 魅力3

備考：身体能力は全体的に高い。対武将戦は、防戦に徹すれば自分より強い相手にも善戦出来る（が、勝率は二割五分くらい）。本気で怒ると、関羽と同程度の強さになる（が、関羽に勝てるわけじゃない）

どこか達観した所があるためか、性格はクール気味。異性を好きになつた事が少ないためか、自身に向けられる恋心には鈍いが一途である。他人からはよく、のんびり屋だと思われがち。口調は、普段は物腰が柔らかい感じだが、同じく袁家に仕える顔良と文醜と張勳、計三人の前だと、素の状態の口調がつい出てしまうことがある。

主人公設定（後書き）

どうも皆様、お久しぶりです。初めての方は、はじめまして。くせつ毛のキタローと申します。

まずはこの作品に目を通して頂き、ありがとうございます。まだまだ未熟なうえ、文才も乏しいので、前作同様、ここは直した方が良いなどの、指摘やアドバイス等をして下さると嬉しいです。

今回も完結目指して頑張っていこうと思いますので、生温かい目で見守って下さい。よろしくお願い致します。

その男の名は紀靈

ここは、荊州南陽郡。そこを本城として、少女と呼べなくもない人物が暮らしていた。

後漢が起こされてから長きに渡り朝廷に仕え、ついには最高位の官職である大尉・司空・司徒の総称である三公を、四代に渡り輩出して来た名門、汝南袁氏の一族である。

その人の名は袁術、字は公路と言う。ある時、そんな彼女の下に、一人の男が仕官して来た。男の名は紀靈、字は白怜、真名は八雲と言った…。

Side：八雲

執務室に入ると、今日も朝から山のように案件が上って来ていた。机を埋め尽くす資料の山を見てしまうと、せつかく出て来たやる気もこぞって息を潜めてしまう。

上から数枚ほど、資料の山から手に取ってみる。その内容は、庶人から集めた税の使い道、警備隊の編成や街の治安状況、商人から送られて来る商売の許可申請の書類、治水工事にかかる費用の承諾など…。あれが終わればこれ、これが終わればそれと、引っ切り無しの状態だ。

別にこれらを、全て一人でやっているわけじゃない。ちゃんと、優秀な文官達にも手伝って貰っている。それでもなお、この量なのだ。それと、勘違いしないほしい。ここの太守は、俺ではなく美羽様

だ。俺はここ数年前に、ここへと仕官した一介の武將に過ぎない。

そして、本来の太守であり我が主でもある美羽様と、その守人兼召使い兼武將である七乃は…。

「七乃、妾は蜂蜜水を所望するのじゃ。早く持ってきて来るが良い」

「はい、お嬢さま」

…毎日、ず～～～～と、この調子だ。七乃は優秀なのだが、美羽様が関わらないと実力を発揮せず、主を甘やかし続けるという始末。七乃が手伝えばこんなことにはならないのに、四六時中べったりだから政務が滞ることも少なからずある。

こんな生活がこうも毎日続くと、仕えるべき主を間違えたんじゃないかと思ってしまう。いや、確実に間違っているだろう。やっぱり、給金の良さだけで選んだのは失敗だった。かと言って、今になっていきなり主を見限るというのも気が引ける。それに最近、七乃とも仲良くなってきたんだ。とりあえず今は、このまま仕えていよう。そのうち、良いことの二つや三つくらいは起きるはずだ。俺はそんなことを考えながらも、政務をやり続けていた。

コン、コン、コンッ

時間を忘れて政務に明け暮れていると、扉を叩く音がした。なに、この時代にそんな習慣は無いって？ いや、俺の部屋だけは義務付けている。だって俺は、転生者だから。でも、チート能力とかでたれめな性能の武器とかは、いっさい貰ってない。あるのは記憶の引き継ぎくらいだ。…とりあえず、この話は置いておくとしよう。

扉を開けて入って来たのは、この城で働いている侍女。

「失礼いたします。紀霊様、館の方より孫策様がお見えになっておりますが…」

「そうか。じゃあ玉座…は止めて、ここに通して下さい。あと、出来ればお茶の用意も」

「了解しました」

しばらくして、孫策が部屋に入ってきた。

「…相変わらず、すごい量ね。本当に、手伝って貰ってるの？」

「ええ。これでも、かなり手伝って貰ってますよ。中には俺が判断を下せないような案件がたくさんありますけど…。さ、立って話すのも何なので、適当な所に腰掛けて下さい。侍女に、お茶の用意もして貰ってますから」

「ありがとう」

俺も椅子から立ち上がり、孫策と向き合えるような場所へと座り直す。話を切り出そうとした時、侍女がお茶を持って来てくれたので、ありがとう、と一声掛けておいた。

用意してもらったお茶を飲み干し、一息ついてから話を切り出す。

「実はですね…漢王朝の方から、各地で暴動を起こしている黄巾党を討伐するようにとの通達が来ているんです。それで斥候を出したところ、荊州の北側に黄巾党の本隊が、南側に分隊がいるとの報告

がありました」

「で、私達を北の本隊に当てるつもり？」

俺が来る前から、美羽様が色々と無理難題を押し付けていたみたいで、こういう時に限って孫策の機嫌が悪くなる。

「孫策さん達を本隊に当てるのは間違ってますが、それでは兵数や兵糧、軍資金の問題もあるでしょう。なので、俺も部隊を率いて共に戦闘します」

「…良いの？ そんなことしたら、袁術ちゃんが駄々こねるんじゃない？」

孫策が言うのも当然だ。美羽様は孫策達を属領にいる将、つまり程の良い下っ端としか見ていない。だから、俺がわざわざ孫策達に手を貸すことを面白く思わないだろう。

「…かもしれませんね。でも美羽様自身は何もせずに、朝廷からの指示はきちんとこなせるんですから、特に問題ないでしょう」

「それで、出発はいつ？」

「今すぐです。出かけて来ると伝えて来ますので、先に城の外で待つて下さい」

孫策にそれだけ指示して、俺は玉座へと向かった…。

S i d e : 雪蓮

紀霊が来るまでは、袁術ちゃんに色々ときき使われていた。けど彼が来てからというものの、無理難題を押し付けられることはほとんど無くなった。それどころか、賊の討伐に駆り出されても彼が手伝ってくれるから、私達の負担がけっこう減った。

正直な気持ち、何で彼は袁術ちゃんの配下になろうと思ったのかしら？　それが謎だわ。

「お待たせしました。さ、行きましょうか」

「あら、思ったより早かったのね。で、何か言われた？」

「ええ、まあ。『八雲がわざわざ、孫策なんぞに手を貸す必要など無いのじゃ！』って言われました。けどその辺はほら、孫策さんに太っ腹なところを見せておかなくてとはとか、美羽様の部隊がいるからこそ勝てるんですとか、適当なことを言って納得して貰いました。それじゃ、まずは館にいる周瑜さん達と合流してから、黄巾党の討伐に行くとしましょう」

城を出発してから一刻もしないうちに、私達の住んでる館が見えて来た。館の外には、冥琳達が私を出迎えるため、外に出ている。

「お帰りなさい、雪蓮。それで、どうして白怜殿まで一緒に？」

「今から、黄巾党の本隊を叩きに行くわ。彼が来ているのは、私達に力を貸してくれるからよ」

「…本当、お主が来てからというものの、儂ら孫呉の負担は格段に減ったわ。しかしな、なぜそこまでされるのが、儂には疑問なんじ

やが？」

たしかに、と私も相槌を打っていた。

「今こうやって、美羽様があそこにいられるのって、孫堅さんの行いがあってこそなのでしょう？」

たしかに、母さまが南陽の太守を殺した時に、ちょうど袁術ちゃん
が転がり込むような感じで南陽太守になって、孫呉はそのまま袁術
ちゃんの支配下に入った。だから袁術ちゃんは、私達をこき使うの
は当たり前だと思っているけど、彼は母さまがいたからこそ、今の
袁術ちゃんの暮らしがあるって思っているみたい。

「それなのに、うちのおバカな主ときたら無理難題ばかり押しつけ
て…。本当に申し訳ないです」

紀霊は、私達に向かって頭を下げて来た。ここまで来ると、あの袁
術ちゃんの配下とは思いたくない。それに、主をバカ呼ばわりする
だなんて…。たしかにバカなことに間違いはないんだけどね。

「さて、それじゃそろそろ黄巾党の討伐に行きましょうか」

「ええ。冥琳、準備は出来てる？」

「既に済んでいるわ。何時でも出撃できる状況よ」

「それでは、行くとしましょうか」

準備を済ませ、紀霊の部隊と共に館を出発した…。

その男の名は紀霊（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

仇なす者達

S i d e : 八雲

荊州北部、黄巾党の本隊の陣地があると報告のあった場所へと向かっていた。

「いよいよ、戦乱の幕開けね。…ゾクゾクしてきちゃうわ」

俺の横でぼそりとつぶやく孫策の顔は、ヒステリックとまでは行かないけど、妖艶さと不気味さが入り混じっていた。

「孫策さん、発言が危ないですつて。隣にいる俺が、とりあえず怖がってますよ?」

「仕方が無いでしょ? 私の本心なんだもの」

だから、そんな楽しそうに言わんでくれ…。

「しかし、この大事な初陣の相手が黄巾党とは…。何とも、力不足な感じが否めないな。」

「まあ、勘を取り戻すと思えば、ちょうど良い相手じゃろつて」

「そうですね…。いくら錬度を落とさないように兵達の訓練をしても、実戦を経験しないことには完成しませんし…。……」

その後も、雑談とは言えないような話を交わしながらも、戦場特有の張り詰めた空気が、否が応にも皆の気を引き締めさせていく。相

手は賊とは言え、舐めてかかれれば待っているのは死のみなものだから…。

この世界、この時代に来て、俺は弱肉強食の現実を嫌と言うほど見せつけられた。今ではもう、自分に仇なす者を殺すことに躊躇いはない。だからと言って、殺すことに慣れたわけでも、人の死に慣れたわけでもない。ましてや、殺しに快感を覚え、狂気に溺れたわけでもない。ただ、殺されるのが嫌だから、怖いから、死にたくはないから、強くなつていっただけに過ぎない。

…おっと、何だか自分一人で勝手にシリアスになってしまった。反省、反省。

「それで、何か策とかはあるんですか？」

「策なんていらないでしょ？ 相手はたかが賊なんだし…」

「雪蓮、我ら孫呉の名を広く知らしめるには、たかが賊でも圧倒的な勝利というものが必要なの。だから最も損害が大きく、痛快な勝ち方をしなければならぬわ」

「ふん。……で？」

「そうね…。火計なんてどうかしら？」

孫呉のお家芸ですね、わかります。

「良いわね、それ。赤々と燃えあがる炎って、好きよ、私」

「では、これで決定じゃな」

これで、今回の作戦が決まった。きっと皆の心の中には、『汚物は消毒だあ』という言葉が根付いているのだろう。

ちよつとだけ賊を憐れんでいると、報告します、と声を上げながら兵の一人が駆け寄って来た。

「前方一里の位置に、黄巾党本隊と思しき陣を発見いたしました！その数、およそ八千と思われます！」

「分かった、下がって休め。……さて、派手に決めるとしましょうか。黄蓋殿、先方は伯符に行かせますので、二人にはその補佐をお願いします。兵は四千ほどでよろしいかと……」

「うむ、任せておけ」

「私と伯言は、残り千の兵を五百ずつに分け、両翼より時期を見て火矢を放ちます」

あれ、俺の配置はどこだ？

「白怜殿には敵の背後に回ってもらい、総攻撃の際に伯符の部隊と敵を挟撃して頂きたいのですが、よろしいですか？」

「もちろん。了解です、周瑜さん」

「では、儼らは公瑾の合図と共に、一旦軍を引けば良いんじゃないかな？」

「ええ」

「了解じゃ。…策殿、くれぐれも暴走などせんでくれよ?」

黄蓋の発言で、全員の視線が孫策へと集中する。

「んー……」

それから数十秒ほど唸り続け、出て来た答えは…。

「分かんない。それは戦場に出ないと、何とも言えないわ?」

「やれやれ…。まあ策殿のお守りは儂が引き受けよう。公瑾と伯言は、時期を見誤らんようにな」

「その辺はご安心を。冥琳さまに、きちんと叩き込まれていますから」

「頼むぞ。それでは策殿、儂らはそろそろ行くとしようではないか」

「ええ」 それじゃ三人とも、また後でね」

孫策と黄蓋は、先に配置へと付いて行き、軍師の二人は両翼に陣を展開させながら、火矢の準備も進めている。俺も気付かれないよう、部隊を幾つにも分けて敵陣の後ろ側へと回り込み、部隊を待機させた…。

前方にある敵陣から、怒号や金属音が起こり、それは徐々に戦場へと響き渡る。孫策達が率いる先鋒部隊が、賊と戦闘を開始したのだろつ。その音は、止むどころかさらに激しさを増していった。

さすがに敵の数の方が圧倒的に多いためか、いくら孫策と黄蓋という勇猛な将達であっても、じわりじわりと前線を押し上げられていく。そして、それを見た賊達は、自分達は優位に立っていると勘違いをし、調子に乗ってさらに前線を押し上げて行った。

だが賊は知らない。その行動を取らせることこそが、こちらの策であることを…。

しばらくして、両翼から合図と思われる銅鑼の音が戦場に響き渡り、先方の部隊は一気に前線にいる兵士達を後退させた。味方の後退を確認すると、敵陣へと火矢の雨が降り注いで行った。その火は敵陣の兵糧や天幕へと引火し、浮足立った賊達は散り散りになって行く。

それを好機と感じ取ったのか、孫策の部隊は反転して総攻撃の指示が出る前に敵陣へと突撃し、黄蓋の部隊も一足遅れて突撃を始めた。

それからしばらくして、周瑜と陸遜の部隊も総攻撃に加わった。

火矢の雨から畳み掛けるように次々と襲い掛かってくる孫策達に恐怖を抱いた賊達は、単純に俺の率いる部隊が待機している後方へと逃げて来る。

「こっちに逃げて来る賊の、大体の数は？」

「およそ、三千強と思われます」

「なら、急ぎ弓兵部隊を孤月陣に展開しろ！」

弓なりに陣を敷き、敵を包囲するように展開する。

「紀霊將軍、弓兵部隊の準備が整いました！ 賊との接敵、間もなくです！」

「弓兵、斉射用意。……放て！」

広範囲から空高く放たれた数千もの矢が、風切り音を生じさせながら、賊を包むかの様に急降下して行った。

矢は賊達の身体へと突き刺さり、その足を止めていく。賊の群れの後方には、孫策達の部隊を確認することが出来た。挟撃を仕掛けるために必要なだけの足止めは、これくらいでもう十分だろう。

「各員、抜刀。生き残りたければ、一人でも多く敵を撃破しなさい。全員、突撃開始！」

半分以上の賊は戦意を喪失していたが、今までにして来た所業を考えれば、誰一人として助かる道理などない。

前から突っ込んできた賊の攻撃を、右側から回り込むようにかわし、背後から袈裟切りで斬り付ける。続け様に、自分目がけて振り下ろされた剣を受け流し、相手の顎を蹴り上げて、脳震盪を引き起こさせる。そして、崩れ落ちた賊の胸に逆手に持ち変えた刀を突き刺した…。

その後は孫呉の部隊と挟撃を仕掛け、賊を蹴散らし続けていく。その結果、周瑜の考えた策通りに八千もの賊の討伐が完了した。その後、孫呉の将達と合流を済ませ、お互いの被害状況を確認した。

「策を弄したおかげで、損害は大分抑えられたようですね。それと疲れているところ悪いんですが、手伝って貰いたいことがあります」

「私はそんなに疲れてないけど…。何かしら？」

「賊や兵士達の屍を一箇所に集め、火を放つのを手伝って貰えますか？」

「どうしてそんなことをする必要があるの？ 兵士達はともかく、こいつらは今まで多くの民達を殺して来たのよ！？」

「そういえば、この時代は土葬だったな。これは、説明しておかないといけない。」

「死んだ者に、良いも悪いもありません。むしろ放置された屍は、腐敗して伝染病の媒介になる危険性があります。そうなればこの近辺にも影響が出るかもしれませんし、鳥などが感染したら、さらに遠くの庶人までが伝染病に罹ってしまうかもしれないですよ？」

「え、そうなの！？ それは不味いわね…。冥琳！」

「ええ。皆、疲れていると思うが、この戦場にある屍全てを一箇所に運んでくれ！ 手の空いたものは、薪を集めて火の準備だ！」

比較的被害の少なかった俺の部隊が死体運びと穴掘りを担当し、孫呉の部隊にはこちらの手伝いと火葬に使う火の準備をしてもらう。

孫呉の兵士達の迅速な行動もあってか、どうにか二刻ほどで準備が整う。

「では、火を放って下さい」

俺の合図で、屍へと一斉に火が点けられる。火を絶やさないように薪を焼く^くべていき、焼却しきつた後は穴の中へと入れていく。何だかんだで全てが終了した時は、既に日が傾き始めた時だった。

「それでもう大丈夫です。皆さん、お疲れさまでした」

「ふう、今までこんなことしてなかったから大変だったわ…。さてと、私は袁術ちゃんに報告しないといけないから、一度紀霊と共に本城に行くわ。冥琳、あとよろしくね？」

「分かってるわ。気を付けて、いつてらっしゃい」

周瑜達と別れ、孫策と共に本城へと帰還した…。

仇なす者達（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

俺が配下で主がバカで

S i d e : 八雲

本城へと到着してすぐに、玉座にいる主の下へと向かった。

「美羽様、ただいま帰還いたしました」

「おー、八雲よ、ご苦労だったのじゃ」

「劳いの言葉、ありがとうございます。それよりも美羽様、孫策殿の方より報告が…」

数歩ほど横へとずれて、様子を見ることにした。

「袁術ちゃん、聞いてると思うけど、黄巾党の本隊は殲滅しておいたわよ」

「うむうむ、良くやったじゃ。褒めてつかわずぞ」

「私は別に、劳いの言葉なんかいらないわ。私が欲しいのは、約束の履行なんだけど…」

「約束？はて、何のことじゃ？」

美羽様は約束のことを覚えてなさ気に、視線を斜め上の方へやっっている。しかし俺には、白を切ろうとしているようにしか見えない。俺が予想するに、美羽様は孫策との約束を守る気はないのだろう。

「…反故^{（は）}にしようと言うの？時期が来れば、孫呉復興のために手を貸してくれるという約束を…」

「おお、おお、そういえばそんな約束もしておったな。…しかしじやな、孫策よ、妾にはまだ時期が来たようには、到底思えんのじやが？」

「そうですよ。それに今は、黄巾党が各地で暴れ回ってるんですから、私達だって手を貸す余裕なんてありませんしい」

「張勳の言う通りじゃ。…まあ約束に関してはおいおい考えて進ぜよう。それで良いじゃろ？」

何とか表情には出さずにはいるが、孫策のイライラが伝わって来る。それもそうだろう。美羽様達は隠しているつもりだろうが、他の者達からしてみれば、反故にする気満々なのが見え見えなのだ。

「……まあ良いわ。黄巾党の本隊は私達が殲滅したから、南部の分隊は貴女達で何とかしてよね」

「お前に言われんでも、すぐに殲滅してやるのじゃ」

「そつだそつだあ」

「あつそ。じゃあ、お手並み拝見と行くわ」

「うむ。……ご苦労孫策、下がって良いぞ」

我が主は偉そうに指示を出し、孫策は荒々しく玉座から退室して行った。その背中では、不機嫌さを一切隠すことなく怒りに満ち満ちて

いた。その怒りは、いつか必ず袁術様を飲み込むことだろう…。

孫策が玉座からいなくなった後…。

「孫策さんの背中、怒りに燃えてましたねえ…。でもお嬢さまあ、孫策さんの扱いは今後どうするんですか？」

「どうするもこうするもないのじゃ。約束などは出来るだけ引き延ばして、妾のために働かせ続けられよう」

「それが一番ですよねえ。でもお、そんなことしたら孫策さんが怒っちゃいますよ？」

「ふん。反抗なぞすれば、妾の軍団で返り討ちにしてやるのじゃ！」

それは無理だと思っただけど、そんなことは全く考えちゃいないんだろうな…。

孫策達の力も有り、荊州にいた黄巾党を討伐してから数カ月が経った。しかし、それもこの土地での出来事に過ぎない。

各地方の豪族や諸侯達の力を借りてもなお、大陸に広まり収まる気配のない黄巾党の暴乱に、業を煮やした漢王朝は大軍を率いて黄巾党の本隊と激突した。だが敵の数の多さと、何より元々は農民でしかなかった黄巾党員に負ける官軍の弱さも相俟って、黄巾党はますます規模を拡大していった。規模が拡大したということは、無益な血がたくさん流れたということでもある。

そんな中、目覚ましい働きを見せる諸侯達がいた。許昌を本拠地とする曹操、袁術様の従姉妹であり、河北を抑える袁紹。幽州の公孫賛に、義勇軍を興して各地で連勝を重ねる劉備。そして…孫呉の力を使う（借りてるの間違いだが、主が認めようとしない）、荊州太守の我らが主だ。

その諸侯達の活躍もあつてか、黄巾党の勢力にも陰りが見え始めた時のこと。美羽様に本城へと召集させられた孫策へ、今までで最大の無理難題が押し付けられた。——黄巾党本隊と戦闘し、これを撃破せよ——と…。

「——というわけでの、今こそ黄巾党を殲滅する時期じゃとは思わんか？」

「時期は間違っちゃいないわ。でもね、私の兵だけじゃ不可能よ」

「何じゃ？ 最近民達に英雄とか祭り上げられておるようじゃが、まさかその期待を裏切るつもりなのかの？」

美羽様は、算数もろくに出来ないのだろうか…？ 俺の受けた報告によると、黄巾党本隊の数は最低でも二十万。その二十万もの大軍相手に、孫策達たった一万で勝利しろと言つのは、七乃単騎である飛將軍に勝てと言つてると同じくらい不可能だ。

「そうじゃないって…。単純に兵数が足りないから、無理だつて言ってるのよ。相手は少なく見積もってもざっと二十万に対して、私の兵は最大でも一万しかないの。これじゃ話にならないわ。ただ…各地に散らばってる呉の旧臣達がいれば、撃破することも可能でしょうね……」

美羽様は、どう判断するか？　せつかく、孫呉の力を分断するために各地へと散らせたのに、それをこの為だけに呼び戻させるのか。それとも、旧臣を呼ばせない代わりに、自らが兵を出して戦うのか…。ここで美羽様を選ぶべきは、誰の目から見ても後者だろう。

「ふむ。ならば認めてやるから、さつさと呼び戻して出撃せい。その代わり、紀霊の手を借りることは金輪際無し、これが条件じゃ」

…やっぱり、バカはどんな時でもバカだった。旧臣を呼び寄せたら、俺の手助けなんざもついたらないってのに。美羽様の斜め後ろで話を聞いていた俺は、やれやれ、と内心呟きながら項垂れて首を左右に数回振った。

七乃を見れば、美羽様のおバカな振る舞いの様子を見て嬉しそうにしている。…本当に、変わった子だ。

「……良いわ。で、袁術ちゃんはお陣しないの？」

今、一瞬ではあったけど、孫策がほくそ笑んでいるように見えた。

「朝廷からの命令じゃ。妾も出るぞよ」

「私達は万全の準備をした後、西進して敵の別働隊を叩くんですよ。孫策さんは強いんですし、北方で黄巾党の本隊と戦って下さいね？」

何故か知らないが、胸を張ってそう答える七乃。自分達は楽な方を選んでいるんだから、そんな堂々とした感じで言う必要は無いと思うんだけどな…。

「ほんと、無茶言ってくれるわ…」

「孫策ほど強い将ならば、敵も強い方が良いじやろう。頑張って、名声を得るが良い」

「…とりあえず、ありがとうと言っておくわ。通達はこれでお終い？」

「そうですね。後は、いつ頃出陣するかの報告をお願いしますう」
分かったわ、とだけ伝えると、孫策はこちらに背を向けて玉座の間から退室して行った…。

それから約十日後、孫策の送って来た使者から、黄巾党本隊の下へと出陣する旨を伝える文が届けられた。

「美羽様、孫策さんから出陣の連絡が届きましたよ」

「では七乃よ、妾達も出陣じゃ。準備を初めよ」

はい、と返事をした張勳は、兵舎の方へと向かっていった。

「美羽様、一つ質問をしてもよろしいでしょうか？」

「何じゃ、その質問とは？」

「はつ。…今の世は既に漢王朝の統治能力は無いに等しく、そのことが民の不安を煽っています。ですが最近では、力を持った有力な諸侯達が次々と台頭しております。そして黄巾党が鎮圧された後の

時代は、必ず群雄割拠の時代がやって来ると感じ取っていることでしょう。そのため、黄巾党本隊との戦闘には多くの有力諸侯達が参戦すると思われます。…そこに、我らは赴かなくてもよろしいのでしょうか？」

これは、美羽様に先を見通す能力があるのかが試されるものだ。いくらバカでも、せめてこれくらいは持つていて欲しい。一応、こんなでも名門の血筋だと言い張るのだから…。頼む神様、どうか奇跡を起こしてくれ……！

「赴く必要などないのじゃ。そういうのは、今後も孫策達にやらせておけば良い。妾達は樂をして、孫策達の持ち帰る手柄を待つておれば良いのじゃ。で、聞きたいことはそれだけかの？」

やっぱ、蜂蜜水にしか興味のないバカに、そんな能力があるわけ無かった。ついでに、少しでも期待した俺も馬鹿だった…。あと神様、心の中であなたに祈りを捧げた分の労力を返してくれ。

「美羽様、八雲さん、出撃の準備が終わりましたよお」

「うむ。では皆の者、妾達も出陣じゃ！」

「はあい」 「御意」

こうして、本来顔を出しておくべき黄巾党の本拠地ではなく黄巾党の別働隊を撃破するために、軍を西へと進めるのであった…。

俺が配下で主がバカで（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

主を愛でる大將軍

S i d e : 八雲

軍を西進させてから三日後…ようやく、黄巾党の別働隊と思われる陣地を発見した。陣地の規模からして、二万程度はいると思う。それにしても、賊にしては上手い場所に陣を構えたもので、陣地の後方には結構な高さのある崖がそびえ立っている。

「…厄介ですねえ。後ろから回り込んでせめようにも、あの崖ですしい…。あそこから攻めても、ゆっくりと下りてたら弓矢とかで射抜かれちゃいますねえ」

「あの崖を馬で下れたら、最高の奇襲になるんですけどね。それが、あの崖の上から岩を落とすとか…」

「問題は、その岩をどこから調達するか、ですよねえ」

はあ、と二人揃って溜息を吐く。あの崖を馬で下りようにも、さすがに源。経のようには行かないだろうことは予想出来る…。

「これじゃー、正面からの正攻法しかなさそうですね。部隊割はどうしますか？ 私はいつも通り後曲で、美羽様のお世話の片手間で全体の指揮をしますけど…」

「誰も見ていないんですし、重装歩兵とか投入しましょうか？ 実戦経験を積ませないと、この先戦っていきませんから」

「そうですね。じゃあ、重装歩兵の部隊を前曲の左右に分けて配置

しましょう。歩兵部隊全体の指揮は、八雲さんに任せても良いですかあ？」

「良いですよ。それと、両翼には騎馬隊と弓騎馬隊を半分ずつで配置して下さい。弓騎馬隊の方も、まだ出来たばかりの部隊ですから、様子を見ておく必要があります」

「はあい。そちらの指揮も、七乃ちゃんにお任せあれです。私が指示したら、後退して下さいね」

こんな軽い感じで平気なのかと、仕官して来た当初はずっと思っていた。でも、今ではこれが当たり前になっている。

とりあえずこれで、部隊割は整った。今回連れて来た兵は二万。その内、前線にいる軽装の歩兵は五千、その内千人は弓兵、左右にいる重装兵は二千。両翼の騎馬隊は五千に、弓騎馬隊は三千。後曲で美羽様達を守るのは、五千の歩兵。これだけいれば、賊相手は事足りるだろう。

配置へと付き、黄巾党との戦闘を開始した…。

まずは弓兵で前線にいる敵を散らし、それから歩兵を突撃させるとしよう。

「弓兵、斉射用意。…今だ、発射！」

一斉に矢を発射させた後、弓兵を後方へと下げる。それに合わせて歩兵部隊を突撃させた。

兵士達は臆することなく前へと突き進み、次々と賊を殲滅して行く。だが、賊だって生き残るのに必死だ。こっちの兵士達の死体も、ちらほらと確認出来る。

そんな中、なかなかの戦果を上げているのは、試験的に導入した重装歩兵の部隊だった。

「ウォーピックの方は、なかなか使い勝手が良さそうですね」

ウォーピックとは戦鎚せんついの一種で、片方は平らで殴るのに適し、もう片方は鳥の嘴の様に尖っている。これは使う人によって、鎧の上からだろうと盾の上からだろうと貫通させられるほどの破壊力を誇る。生身で受ければ言わずもがな、一溜まりもない。

重装兵達は、盾で賊の攻撃を防ぎ、平らな面の方で賊を殴り倒していく。あれはもう、助からないだろう。この時代の医療に、陥没した頭がい骨を修復するなんて不可能だ。この戦いで、武器の威力は証明できた。後は上手く機能するように、調練を重ねていかないといいけない。

戦況を見ていると、報告します、と伝令兵が駆け寄って来た。

「大將軍様より、前線部隊は一時後方へ下がるようにとの命令が！」

「ご苦労様。では張勲に、了解したと伝えておいて下さい」

了解しました、と言葉を残し、伝令は本陣に戻って行った。

「前線部隊、一時後退するぞ！ 弓兵、弓を放って敵を威嚇しろ！」

出した指示は迅速に行われ、歩兵部隊は前線から一時後退した…。

Side：七乃

前線にいる八雲さん達が下がって来るのが確認できた。

「伝令兵ー、両翼の騎馬隊及び弓騎馬隊に伝令を頼みます」

「はっ。通達する内容は？」

「弓騎馬隊が斉射後、全ての騎馬隊は敵に突撃をするように。以上です」

「御意！」

さてさてえ、新しい部隊はどれくらい活躍してくれるかなあ？

不意に、服の裾が引つ張られる。まあ正体はお嬢さまと分かってるから良いんだけど…。

「七乃、喉が渴いたのじゃ。蜂蜜水を用意せい！」

「さっきあげたじゃないですかー？ それに、さっきあげたので持つて来た蜂蜜は切れちゃいましたよ？」

「ならば、どこかで調達してくるのじゃ！」

「そんな無茶な……」

やっぱり、我が儘を言って来るお嬢さまの相手をするのって楽しいなー」 あ、そうだ。騎馬隊の方は、どうなっているかなー？ ……
って、こんな後ろからじゃ分かるわけ無いか。

「七乃！ ばーっとしとらんで、早く蜂蜜水を用意するのじゃ！」

「だから、蜂蜜が切れちゃったんですってばあ。あんまり我が儘言ってる、今度から量を減らしちゃいますよ？」

「うっ…」

「それが嫌なら、城に戻るまで我慢して下さいね？」

「……分かったのじゃ」

私のお願いを聞いてくれたお嬢さまの頭を、偉い偉い、と言いながら撫でてあげる。お嬢さまもまんざらでもないらしく、くすぐったそうにしているけど嬉しそうだった。ああもう、どうして美羽様ってこんなに可愛いんだろう！

「そうじゃ七乃、賊はもう成敗出来たのか？」

「あともう少しで終わりますよ？ 騎馬隊の働き具合が分かれば、すぐにでも次の命令が出せますしね」

遠くから、大將軍様ー、と呼ぶ声が聞こえて来る。どんな報告が来るのやら。

「報告します。敵は騎馬隊の導入により混乱、総崩れになっており

ます！」

「なら、全軍に総攻撃開始と通達して下さい。私は、美羽様の相手に忙しいので…」

「了解しました！」

「七乃ー、妾はもう待ちくたびれて眠くなったのじゃ」

「じゃあ天幕でお昼寝しましょうか。賊との戦は、後は八雲さんが何とかしてくれるでしょうし…。行きましょ、お嬢さま」

お嬢さまと共に天幕へと向かい、その中にある寝台で一緒に横になった。八雲さん、後は頼みましたよ…。

S i d e : 八雲

何か今、すつごく面倒事を押し付けられたような気がしたな。まあいい、どうせ残りの賊は隊長格とその取り巻き数百位だから、ささと終わらせてしまおう。

「全員、三列で鶴翼陣を展開、その後は逃げ道を塞ぐように敵を包囲しろ。騎馬は左翼、歩兵は右翼だ。一列目には、弓兵及び弓騎馬が立て！」

敵を包囲して、一気に殲滅するでしょう。

「包囲完了しました！」

「よし、弓を構えろ。…放て！」

四方向から放たれた矢は、逃げ場を失った賊達の命を散らしていく。

「よし、弓兵と弓騎馬は後方へ下がれ。歩兵と騎馬隊前へ出る！
賊を…滅せ」

兵士達は、今まで蹂躪され続けた力なき庶人達の恨みを晴らしてやらんが勢いで、賊を殲滅して行つた。その手に持つ武器や鎧には、べつたりと血が付着している。

これで、賊の討伐は終了した…。

——ふと、視線が何かを捕らえた。それは、どこかに隠れていたらしく、隙あらば逃げ出そうとしている黄巾党の隊長格の姿だった。

「…逃がしませんよ？」

気取られないように近付き、背後から蹴り飛ばす。突然のことに賊の隊長格は混乱していたが、目の前に立つ俺と、その周りを囲む兵士、兵士の奥に転がる賊の屍を見て、自分の置かれている状況がようやく分かったらしい。

「た、た、頼む、助けてくれ！ 殺さないでくれ！」

隊長格の男はまるで、地獄へと垂らされた、俺という蜘蛛の糸を必死で掴もうとする罪人のようだった。

「俺の願いを聞いて頂けますか？」

「あ、ああ！ 聞く。助けてくれるなら、何だつて聞くさ！ で、願いつて何だ？ 金か？ 女か？ それとも、食い物か？ 食い物なら、たくさんあるぞ！」

そう言つて、倉庫のような建物を指差しながら、下卑た笑いを浮かべている。今までしてきたことを棚に上げて、自分だけは生き残ろうとするこの男の姿に、静かに怒りを覚えた。

「……死んでくれる？」

「へ——っ？」

ザシュツ ザシュツ ザシュツ

鞘から刀を抜き放つ勢いのまま、抜きつけに左から斬り上げ、右からの横薙ぎ、逆袈裟と斬り付けていく。

「……さよならといこつ」

血振りで刀に付いた血を振り落とし、賊に背を向けて納刀する。

カチンッ

「あが……」

納刀と同時に、刀で斬られた傷や口から大量の血が噴水の如く噴き出し、男は息絶えた。

「さあ、賊の討伐は完了した。勝鬨を上げろ！」

「「「「うおおおおお！」「」「」

それから一段落付き、落ち着いてから死んだ者達の火葬が始まった。死んだ者達は、賊であろうと何だろうと善悪は無い。孫策に言ったことに間違いは無く、生き残った者達全員で黙祷を捧げた。

「さあ、袁術様の下に戻りますよ？ 負傷している者は、決して無理をせぬように」

呑気にも昼寝をしていた美羽様に賊の討伐が完了したことを告げ、俺達は本城へと軍を引き上げた…。

主を愛でる大將軍（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

乱世へと招く檄文

Side：八雲

黄巾党の別働隊を撃破して本城へと戻って来てから数日後、孫策が本隊との戦果を伝えるために登城して来た。話によると、黄巾党の本隊は諸侯達の活躍により討伐され、消滅したとのことだ。

「でもまあ、残党は大陸のあちこちにいるだろうし、当分の間は残党を狩り尽くすことになるだろうけどね」

「それは別に良いのじゃ。その時はまた、孫策達にたくさん働いてもらうからの。報告は、それで終わりかえ？」

「…ええ」

「うむ、ご苦労であった。下がって良いぞ、孫策」

それじゃあね、とだけ言って孫策は帰って行った。その背中には、以前のようなイラつきは感じ取れず、独立の二文字が着実に近付いていると感じ取っているようだった。それには、ちゃんとした理由がある。

今回の一件で、江東の虎の娘であり、自らも江東の麒麟児と噂されるようになった孫策の名が、大陸全土に広く知れ渡ったからだ。その結果、孫策の下に若者達が集まるようになり、有力者の援助もあるらしい。孫呉は着実にその力を戻しつつあった。

一応、美羽様の命令で館を見張ってはいるが、向こうはうちの主み

たいにバカじゃない。そう簡単には、尻尾を掴ませてはくれない。

孫呉の動向に、いつも以上に目を光らせてから一ヶ月が経った時、孫呉には吉報で、うちには凶報である報せが、大陸全土を駆け巡った。漢王朝滅亡への序章——後漢王朝の第十二代皇帝である霊帝が崩御した……いや、たいして統治能力も残ってなかった朝廷に敬意なんて払っても仕方ない。簡単に言えば、霊帝は死んだのだ。あれほどまでに無様な所を見せてしまったのだから、別にどうとも思わないが……。

この報せは、各諸侯達の動きを活発なものへと変えた。大將軍である何進と十常侍の間で起きた確執は次第に周囲を巻き込む混乱へと発展して行った。それはやがて、霊帝の後継者である少帝弁の暗殺、最後には地方領主である董卓の手によって劉協という名の皇太子が献帝として祭り上げられるまでに至った。

その内乱の最中、何進は十常侍に、十常侍は何進の副将であった袁紹に暗殺された。そして十常侍の筆頭である張讓は、董卓に殺されてと、血みどろの暗殺劇が繰り広げられていたのだった。

その茶番劇とも言えるくだらない政争も、董卓の手によって一応は収まりを見せたかに思えた。しかし、権力を欲する人間がいる限り、権力争いという嵐が止むことは無い。何ともはた迷惑な話だ。

そのはた迷惑な嵐は、反董卓連合の参加要請という檄文を生み出し、群雄割拠の時代に生きる諸侯達の野心をこれでもかと煽り立てて行く。そしてこの戦こそ、孫呉が支配下から独立するための最高の舞台だった……。

S i d e : 雪蓮

袁術ちゃんはどうするのか確認するため、届けられた檄文を手に本城へと登城する。玉座の間に通されると、中には袁術ちゃんと張勳、何か疲れた顔をしている紀霊がいた。

「袁術ちゃん、私の所にこんな檄文が届いたんだけど…。そっちは来てるの？」

「檄文？ 何じゃそれは？」

…もしかして、届いてないのかしら？ それか、黄巾党の本隊を討伐した時にその場にいなかったから、送る必要がないと判断されたか…。まあどっちでも良いか。

「あなたの従姉妹の袁紹からのものよ。はい」

「…ふむ、見て進ぜよう」

手渡した文を、袁術ちゃんはじいつと見つめている。

「ええと…んと…ああ、もう！ 七乃、この手紙を読んでも。妾は手紙を読むのは嫌いじゃ」

それって…単純におバカだから、手紙が読めないだけなんじゃないかと思ってしまう私の考えは、間違っではないわよね。

「はいい」 ええと…ふむふむ…ふんふん…なるほどお」

「一人で納得しておるでない！ それで、何と書いておったのじゃ

「？」

「袁紹さんは、董卓さんが洛陽を制圧しちゃってるのが許せないみたいですわね！。それで、皆で寄つてたかつて袋叩きにしますわよっ！　つて言ってます」

「何じゃそれは！　めかけの娘の分際で、妾にこんな手紙を送り付けてくるなんてふざけてるのじゃ！」

その手紙、私に送られた物なんだけどね…。

「それに孫策には送つて、妾には送つて来んというのが余計に失礼じゃ！　孫策の主である妾を、無視するなんて酷いのじゃ！」

…別に、好きで貴女の客将になつたわけじゃないんだけどね。まあそのうち独立するんだから、ここは我慢するとしましよう。

「でも美羽様ー、これって大陸全土の諸侯達に送られているようですよし、参加しておかないと後で面倒なことになっちゃういそうですよ？」

「例えそうだとしても、めかけの娘の下になんぞ付きたくないのじゃ！」

「まあ、我が儘なんだからあー」

「嫌じゃ嫌じゃ！　妾は嫌なのじゃ！」

袁術ちゃん是我が儘を言い続けていたけど、蜂蜜水あげませんよ？　という張勳の一言で押し黙った。…蜂蜜水、恐るべしね。

「でもさ袁術ちゃん、ちょっと考えてみなさいよ?」

「…何をじゃ?」

「これって好機だと思わない? 袁紹が集めた諸侯達を、貴女が上手く操れるとしたら?」

「…どういうことじゃ?」

袁術ちゃんは無い知恵を必死に絞ってるけど、元が元だから出る筈もないわね。

「袁紹と仲の良いふりをして、連名で反董卓連合の発起人つてことにすれば、袁術ちゃんの今後の発言力が高まると思うの。それに、首尾良く董卓を追い払って都に入った暁には、袁術ちゃんが帝になることだって不可能じゃないわ」

「妾が帝じゃと!?」

「ええ。現皇帝は、今や董卓の傀儡でしょ? 董卓を追いだせば、実権は宙に浮くわ。それを袁術ちゃんが握っちゃえば、あとはやりたい放題じゃない」

今でも十分、やりたい放題だけどね…。そう思っているのは私だけじゃないらしく、彼も溜息を付いている。

「妾が皇帝…」

「皇帝…新皇帝美羽様万歳! やりたい放題万歳! 将来偽帝と呼

ばれること、間違いなしですよ、美羽様あ！」

「妾は帝になるのじゃ！」

何て単純な子なのかしら。それと張君、それは褒め言葉でも何でもないのでしょに。袁術ちゃんも、褒め言葉とそれ以外の区別が付いてないのかしら？

「なりましょ」美羽様、皇帝になったら蜂蜜水もごま団子も桃まんも食べ放題に飲み放題ですよ！」

「七乃、妾は決めた。妾は、皇帝になるのじゃ！そして、妾が皇帝になった暁には、杏仁豆腐で建てた城を、七乃にやるのじゃ！」

「杏仁豆腐で建てたお城！？ やゝん」食糧不足になること間違いなし。国の予算の無駄使いも間違いなし。こんなこと、美羽様くらいしか思い付きません！ いよ、阿呆め、愚帝め、美羽様めー」

「七乃よ、もつと妾を褒めてたも」

「「……はあ」「」

そんな物作った時点で、国家が転覆しちゃうわ。子供じゃないんだから……って、頭の中は十分子供か……。

「じゃあ、袁術ちゃんは参加するのね？」

「うん！ するのじゃ！」

「分かった。袁術ちゃんが参加するなら、私達も参加するわね。……」

袁術ちゃんが皇帝になるために、協力してあげる」

「うむうむ、良い心掛けじゃな。今までの恩を返すためにも、しっかりと働くのじゃぞ」

「はいはい。……はあ」

ほんとと、疲れる子だわ。こんなのと毎日いたら、私ならおかしくなっちゃいそう。張勳はおバカだから平気そうだけど、紀霊は大変かもね。

「じゃあ袁術ちゃん、私は館に戻るわね。…色々と用意しなきゃいけないから」

でも私の話は聞いていないらしく、おバカ二人は騒ぎ続けていた。そんな二人に呆れていると、紀霊が近付いて来て、城の外まで送りします、と言って来た…。

城の廊下を二人で歩いていると…。

「上手いこと、話を持って行きましたね？」

「…気付いてたの？」

「ええ。少なくとも、美羽様が気付いているということは無いでしょう。七乃はどっちでしょうね？ 美羽様があの調子ですから、気付いているけど悟られないように演技をしているのか。それともおバカ故に、本当に気付いちゃいないのか…」

「…袁術に言うつもり？」

そうなれば、今まで色々良くしてくれた紀霊でも斬らなければならぬ。気付かれないように、左手を剣へと伸ばす。

「主が決めた決定は、俺の力じゃ覆すことは出来ません。俺が何を言ったところで、連合参加の意思は変わらないでしょう。だから、心配しないでください」

「…そう。良かったわ、貴方を斬らずに済んで」

剣へと伸ばしていた手を戻し、警戒を解いた。

「…全くです。俺の実力じゃ、孫策さんには勝てるかどうかも怪しいでしょうからね」

「その言葉が本当なのか、この場でちょっと試してみる？」

「遠慮しておきます。俺はまだ、死にたくは無いので」

「ぶう」

こんな感じのやりとりをしていたら、気付けばもう城の出口だ。

「それじゃ、気を付けて」

「じゃあね」

紀霊に別れを告げ、館への帰路に就いた。

孫呉独立の夢は、確実に近付いて来ている。そう思うと、嬉しくて仕方が無かった。さあて、帰ったらお酒でも飲もうと……♪

乱世へと招く檄文（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

御遣いとの邂逅

S i d e : 八雲

美羽様が反董卓連合に参加の意思を表明してからだいたい十日：準備が整い、連合軍の合流地点へと向かった。

——はいつ！ てな感じで、合流地点へと到着したうちの軍は、連合の発起人である袁紹の陣営の横に陣を構え、天幕の準備などをしていた。

うちのバカ主は到着して早々、天幕で昼寝を初めてしまい、七乃もその付き添いで傍を離れられない。その結果、俺が名代として袁紹に挨拶をするはめになった。

こちらとしては袁紹の尻馬に乗った形での参加なので、形式的にはこの連合内では偉い立場だが、実質的にはあまりそうでもない気がする。

挨拶するため隣にある袁紹の陣営へと足を運ぶと、ちょっと待て、と天幕前にいる兵士に呼び止められた。美羽様の名代として挨拶しに来たことを伝えると、すんなりと通してくれた。

中に入ると、豪華な椅子に腰かけた袁紹と、その両側に二枚看板の顔良と文醜の姿があった。

「袁紹さん、お久しぶりです。顔良さんと文醜さんも、お久しぶりですね」

「あーらあ。誰かと思えば、美羽さんのとこの紀霊さんじゃありませんか。それで、私に何の用がお有りで？」

「いや、大した用ではありません。お昼寝している主の名代として挨拶に訪れただけです…」

「あら、そうでしたの？ 貴方も大変ですわね？ あーんなお馬鹿さんの下で働いているだなんて…」

お前の部下も、十分苦労してそうだけどな。特に顔良は面倒見が良
いせいもあつてか、他の二人に振り回されがちだ。

「いえいえ、そのようなお気遣いをして頂けるだけで十分です。では、俺はこれで御暇させて頂きます。まだ準備の方が残っておりますので…」

一礼して、袁紹の天幕から出る。出てすぐのところにいる兵士に、お
疲れ様です、と一声だけ掛けて自陣へと戻った。

戻って来ると、いつの間にか七乃が兵達の指揮を取っていた。いつ
の間にか、天幕も張り終わっている。

「あれ、美羽様の昼寝に付き添ってたんじゃない？」

「八雲さん一人に、全部任せるわけにはいきませんからねえ」

急用が出来たら伝令兵に頼むので、と散歩して来ることを勧められ
た。折角の厚意だ、今の内に休んでおこうということで、陣内を歩
くことにした。

諸侯達が犇めき合う陣内を歩いていると、色とりどりの牙門旗が風の力を借りて踊っている。そしてそれぞれの旗の付近には、旗の色と同じ色の軍服を来た兵士達が集まっていた。

「これだけ揃うと、壮観ですねー」

それから一通り陣内を見て回り戻って来ると、紀霊様、と名を呼ばれた。

「大將軍様より、そろそろ軍議が始まるから参加するようにとの言伝を預かっております」

「分かりました。張勳はどこにいったか、分かりますか？」

「袁術様と共に、先ほど軍議の席へ向かいましたが…」

「そうですか…。ご苦勞様、下がって待機してて下さい」

失礼します、という言葉と共に敬礼をして、兵士は下がって行つた。さて、俺も軍議の方に参加するか…。

……軍議が始まった、そう思っている時期が俺にもあった。

今、中央にある大天幕の中には、袁紹と顔良達、美羽様と俺達、曹操に孫策の名代である周瑜、公孫賛に馬騰がいるが、話がいつこうに先へと進まない。総大將が決まらないのだ。袁紹がやりたそうにうずうずしているが、自ら立候補しようとはしない。他の諸侯達も言動に責任を持つのが嫌なのか、総大將に立候補しようとせず、だ

からと言って袁紹を総大将に推薦しようもしない。

こんな腹の探り合いばかりの集まりの、どこが軍議なんだろうか。そのうち、公孫賛が軍議の席から出て行った。重苦しい雰囲気になったらしく、気分転換をして来るとのことだ。

それから数十分ほどして、初めて見る男女と共に公孫賛が戻って来た。

「済みません、遅れました！」

「…貴女達は誰ですの？」

「私は平原の相、劉備です。それで、私の隣にいるのが天の御遣いであり、私達のご主人様でもある——」

「北郷一刀だ」

天の御遣い…管路の占いにあった胡散臭い話か。でも、学生服来てるんだから、まんざら嘘ってわけでもなさそうだ。それに俺、転生者っていう存在がいるわけだし…。

それにしても北郷とかいう男、容姿は凄く良いけど能力的にはどうなんだろうか？ あと、ご主人様って呼ばせるのはどうかと思う。もしかして、メイドと主人のいけない関係的なのが好みなのかな？
…あ、鼻の下がもの凄く伸びてる。

たしかにここにいるのは、紛うこと無き美人揃いだ。その気持ち、分からなくはない。だからと言ってそんな大っぴらにしていると、せっかくの男前がただの女たらしへと成り下がる一方だ。他の諸侯

達も、あまり良い顔をしていない。

その諸侯達の視線に気付いたのか頭を何度か左右に振って元の男前の顔へと戻し、話し始めた。

「なあ、こんなことしてる場合じゃないだろ！？ 董卓の圧政に苦しんでいる人達がいるってのに、何で腹の探り合いなんかしてるんだよ！ この間にも、董卓軍の軍備は整って行くんだぞ？」

随分と、直球勝負な発言だ。たしかにそれは的を得ていると思う。でも新参者…特にまだ弱小とも言える勢力の人間が、自分達より上の立場の人間に敬語を使えないというのはよろしくないだろう。

「良いことを仰いましたね。ですが、名門でもない貴方がこの私に大して随分と慣れ慣れしく物を言いますのね？ 礼儀というものを知らないんですの？」

袁家の人間は、こういうところだけは敏感なんだよなあ…。これは面倒になりそうだし、さっさと終わらせるためにも助け船を出すしよう。

「まあまあ袁紹さん、落ち着いて下さいよ。彼だってきつと、今は感情的になってしまっただけだと思いますから、軍議を先に進めましょう。ね？」

仕方ありませんわね、と言った後、一つ咳払いをして軍議が再開された。

「せっかいですから、新参者である劉備さんとやらに聞いてみましょうか。この連合を率いるに相応しい人物は誰でしょう？」

「…袁紹さんで良いんじゃないですか？ 袁紹さんだって、総大将になりたいんでしょう？」

「私はそんなこと言った覚えはありませんが、なり手がいらつしやらないのであれば、仕方なく、この私がやってさしあげてもよろしくてよ？」

袁紹の発言を皮切りに、他の諸侯達が一気に賛成の意見を出した。

「あらあら、やっぱり皆さんそうだったんですの？ ならば、決定ですわね。この私が、連合軍の総大将になって差し上げますわ♪」

おーっほっほっほ、と気分良さ気に高笑いを上げていた。その様子を他の諸侯達は冷ややかな沈黙の中、呆れたように見ていた。しかし美羽様まで呆れさせるとは…。袁紹、何たる馬鹿さだ。

「とりあえず、これで本題に戻れるな」

そんな公孫賛の発言に、お任せするから後ほど伝えてくれれば良い、と曹操と周瑜がそれぞれの陣内に帰って行ってしまった…。

周瑜と曹操が出て行った後、残った諸侯達だけで軍議が再開された。

「何じゃあの二人は。身勝手にも程がある！」

いやいや美羽様、身勝手さじゃ貴女には敵いませんって…。

「どうするんだ、本初？」

「ふん。私に任せると言った以上、きちんと私の指示に従って頂きますわ！」

袁紹は不機嫌さを隠すことなく不満を口にした後、「ご自慢の邪魔くさい髪の毛を靡かせて、劉備と北郷の方へと向いた。

「さて劉備さん、貴女方の発言で総大将という重責を担うことになつてしまつたんですけど……」

劉備達に責任があると言わんばかりに、袁紹は言葉で攻め立てていく。その結果、劉備軍が前曲を任されることになつてしまつた。だが劉備達も、袁紹に兵糧と兵士の提供を求め、袁紹もしぶしぶそれを了承した。

「袁紹さん、作戦はとかつてあるんですか？ それを示してくれないと、私達も動きようが無いんですけど……？」

「作戦？ そんなものありませんわ」

「……へ？ 作戦、考えてないんですかー！？」

「な、何でそんなに驚くんですの！？」

むしろ言いたい、何で作戦を考えてないのかと。しかも、策の重要性を総大将を務める人物が、理解してないだなんて……。

「だ、だって普通、軍を動かすなら作戦に沿つて軍を動かすはずじゃないですか？ 作戦が無いなら、どうやって進軍すれば良いのか

…」

「ああ、どのように進軍するかは決まってますわ」

「…だ、だよなあ？　これだけの規模の軍事行動で作戦が決まっ
ないとか、さすがに有り得ないよな。…ちよつとびくりしたじゃ
ないか」

「ほ、本当だよね、あははは、それで、袁紹さんが考えたのはど
んなやつなんですか？」

そして俺達は、自分の耳を疑うことになる。もちろん、非常に悪い
意味でだ。

「雄々しく、勇ましく、華麗に進軍、ですわ」

「——」

劉備達は、二人揃ってぽかーんとしている。対する俺達は、袁家の
お馬鹿加減に抵抗があるためか、驚いてはない。その分、あまりの
無能さに呆れ果ててはいるが…。

「あら、どうかされたのかしら？　二人揃って馬鹿面なんか下げた
りして」

「あ、えーと、あまりにも予想外な作戦だったから、思考が停止し
ちゃって。あはは、あははは、はは……」

「私の素晴らしい作戦に、思わず絶句してしまったのですね？　分
かりますわ、その気持ち。私もこの作戦を思い付いた時には、自分

自身の素晴らしさに酔ってしまいましたもの」

「そ、そうだったのかあ。はあ……」

さすがに対袁家の抵抗力が低いのか、劉備も北郷も何か喋れば溜息を付いている。まあ、それが普通だろう。

「じゃあ、とりあえずは雄々しく華麗に進軍すれば、あとのことはこっちの好きにしても良いってことだよな？」

「当然でしょう。どうして総大将が、ここの部隊の作戦を考えなければならぬのですか？ 貴方達はただ、雄々しく、勇ましく、華麗に戦って下さってれば良いのです。良いですわね？」

「了解。…そっちこそ、兵糧と兵の提供のこと、頼んだよ？」

「そんなこと、言われなくても分かっておりますわ」

袁紹へと最後に一声かけた後、北郷と劉備は天幕から揃って出て行った。その顔は、不安一色でしかなかった。しかし、これでようやく不毛とも言える軍議が終了した。それにしても、この先に起こるであろう戦いの行方が不安で仕方が無い…。

御遣いとの邂逅（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

？水関の戦い

Side：雪蓮

腹の探り合いとか疲れるだけだから、軍議は冥琳に任せることにした。さすがにこれだけの諸侯が揃ってるんだから、けっこう時間が掛かるはず。だから私は…。

「暇だし、天幕で寝てようかなあ。でも冥琳に見つかったりでもしたら、何言われるか分からないし…」

結局、何をしようか考えているうちに時間は過ぎて行った。まあこのままぼーっとしてるのも悪くないかなって思い始めた時、私の声を呼ぶ声が天幕の外から聞こえた。外に出ると、冥琳が立っていた。

「雪蓮、大本営より作戦が届いた。我らは、これに従って進軍するのだそうだ」

「やつとおくくく？ …まったく、待ちくたびれちゃったわよ」

「…仕方ないでしょ？ 総大将をやりたがる人間が、自分から立候補しようとしなかったんだもの」

はいこれ、と手渡された作戦の詳細が書かれている巻き物を開くと、そこに書かれていたのは――

「なになに…雄々しく、勇ましく、華麗に進軍……。え、これだけ？」

どんなに目をこすって見たところで、書いてある文字の羅列は変わらなかった。それにしてもまあ、随分と大雑把な作戦なこと。袁家の頭の中って、普通の人より馬鹿である事が共通してるのかしら？

「そうだ」

「ふん。…面白いじゃない？」

「おいおい…。総大将が作戦の一つもろくに考えられない事の、何が面白いって言うの？」

「これってさ、各部隊が勝手にすれば良いって事でしょ？　むしろ総大将の命令なんだから、そうすることこそが正義。…でしょ？」

「それは…。たしかにそうとも読み取れるが…」

私の言ったことに対して、冥琳の顔はさっきから渋いまま。もっと肩の力抜いても、平気だと思っただけだなあ…。

「なら、私達は私達の戦いをしましょ？　どうせ、本気で戦うつもりなんて最初から無いんだし」

「我らの本位は、袁術からの独立。たしかに本気で戦うつもりは無いけど、それなりの姿勢を見せておかないと、袁術に気取られるやもしれないぞ？」

「それを見抜ける目を持つてるんなら、それなりに張り合いがあるんだろうけどね」

「油断は禁物よ、雪蓮。我らの本願を叶える為にもね…」

「了解。…もう、真面目なんだから」

そんな私の軽口に、我が主が驚くほどずばらな方だからな、と軽口で返されてしまった。まったく、厭味だけは忘れないんだから…。

それから少しの間、私の雑談相手になってもらった後、冥琳は軍の編成へと戻って行った。

多分、本気で戦わないのは私達だけじゃないはず。例えば、曹操辺りがそう。逆に、一生懸命に戦わなくちゃいけないのは劉備の軍か。それなのに、先陣を取らなきゃいけないとか大変でしょうね、きつと…。

S i d e : 八雲

連合軍の総大将である袁紹の号令によって、全軍が？水関へと進軍した。そして現在、それぞれの配置へと付いている。軍議の場で言われた通りに劉備軍は先陣を務め、総大将である袁紹軍は、中軍やや後方に位置している。なんとまあ、他の諸侯達から見たら邪魔くさい位置にいるんだか…。

そんな俺達袁術軍はというと、袁紹軍の左後方に配置されている。さすがに袁紹のところほどでもないが、こちらも兵の数は多い。だから、他の諸侯達の邪魔になりにくい位置を選んだのだ。おお、劉備軍の将が二人で？水関の方へと向かって行くのが確認出来る。

「ちょっと見にくいけど、ここからでも前線の状況も良く分かりますし、何より袁紹さんの所が盾になってくれるって言うのが良いで

すねえ」

「七乃、俺達はこんな所でのんびりしてても良いんですか？」

「良いんじゃないですかあ？ どうせ、本気で戦うのは先陣の劉備さんの軍と、袁紹さんのとこの顔良さんと文醜さん、後は普通さん代表くらいでしょうし…。わざわざ前線に出て、無駄に兵を失うのも馬鹿らしいです。…何より、力を温存しておかないと美羽様を皇帝にするのが、大変になっちゃいますからあ」

…途中まで、途中までは、七乃はやっぱり優秀なんだなって素直に見直してたのに。何で一番大事な理由がそんなに不純なものなんだよ…。

俺が内心呆れていると、大將軍様！、と叫びながら兵士が走って来る。

「報告します。劉備軍は、？水関より出陣した華雄將軍に苦戦！前線を押し上げられ、本陣にいる袁紹様へと接近しております！如何なさいますか？」

「こつちまで被害が及ぶ危険はないと思いますけどお、念のため各部隊に戦闘準備だけはしておくように伝えて下さい。あと、各諸侯の情報は逐一報告するように言っておいてね」

「了解しました！」

兵士が去って、またすぐに別の兵士が来た。

「大將軍様、敵の華雄將軍が本陣へと乱入！ 本陣前は大混戦とな

っております！　なお、曹操軍は本陣へと救援を送り始めており、孫策達は？水関を落としに前線へと突出している模様です！」

「麗羽は何をやつとるのじゃ！　下賤の輩を袁家の旗に近寄らせるなど、呆れて物も言えんのう…」

「まあ、袁紹さんの下にいるのは顔良ちゃんと文醜ちゃんですからねー。二人して馬鹿だから仕方ありませんよー。」

「良い将を揃えるのも、名門当主の仕事であろくに。全くもって、嘆かわしいのお」

「その点、美羽様には私と八雲さんが居ますからね」

…評価されてるのは嬉しいけど、俺達と袁紹達の配置が逆だったら、同じことを袁紹に言われるんじゃないかなろうか？　でもこれを言うと美羽様が怒りそうだから、口に出すのは止しておこう。

「で、どうします？　俺達も本陣に、救援を出しておきますか？」

「うーん…。救援を出して、前線の混乱に巻き込まれるっていうのは、あまりよろしくないですよねえ。彼我戦力差を見れば、負けることなんて有り得ないですもん。だから放っておきたいんですけど、何もしないっていうのは、流石に他の諸侯達からの印象は悪いですし…」

七乃が悩んでいる原因はあれか？　『美羽様を皇帝に仕立て上げて楽しちゃおう計画』に支障が出るとか考えているからか？

「なら俺が部隊のいくらかを連れて本陣救援に行くので、二人は？」

水関を落としに行くっていうのはどうですか？」

「そうですねえ、じゃあそれで行きましょうか。というわけで美羽様あゝ、総攻撃の命令と本陣救援の命令、お願いしますね」

「うむ。妾に忠義を尽くす兵達よ！ いざ？水関に討ち入りなのじゃ！ それと紀霊、お主は本陣の救援へと向かうのじゃ！ 妾は蜂蜜水を飲みながら、其方らの吉報を待つておるぞよ！」

「……………応つ！……………」

…兵士達は優しいなあ。さて、こつちも本陣へ急ぐとしよう。機動力重視の部隊を連れて行きたいけど、混戦している以上、騎馬隊なんて連れていけない。となると、軽装の歩兵部隊だけだな。

「紀霊隊、本陣の救援に向かいます！ 俺の後に続いて下さい！」

歩兵のみで編成された一個中隊を連れて、本陣へ向けて戦場を駆け出した…。

本陣付近へ到着すると、劉備軍と袁紹軍、曹操の所の夏侯惇が率いる部隊に敵の華雄將軍の部隊と、ごちゃごちゃにも程があるほどの混戦模様だった。とりあえず、袁紹の所の二枚看板は無事かな？ ああ、良かった。

「顔良さん、文醜さん、大丈夫ですか？」

「あ、紀霊さん！ 今のところは大丈夫です」

「でもさアニキ。劉備のお姉ちゃんも、もうちょっと頑張ってほしいよなー？　いくら弱小って言ってもさ、これじゃ先陣としての務めを果たして無さ過ぎだろ……」

「たぶん、これはわざとそうしたんじゃないですかね？」

「「ええ！？」」

文醜はともかく、顔良までそんなに驚かなくても良いんじゃないかって、そっぴや二人とも軍師じゃなかったんだよな。袁紹があんなだから、どうしても二人がしっかりしてるように見えてしまう。

「袁紹さんに無理やり先陣を務めさせられた意趣返しと、弱小勢力故に自分達の兵力を減らさないよう、他の諸侯達を巻き込むのが目的だったんでしょう。戦略的に間違っはいいませんが、こちらとしては迷惑なことに変わりはありません……」

「ほんとだよなあ。どれくらい迷惑って、姫の我が儘に振り回されるくらい迷惑な話だよ」

「……劉備軍の思惑通りに働かされるのは、何だか癪ですね。……劉備の手柄をかつさうか」

「……紀霊さん、素の口調が出ちゃってますよ？」

顔良に言われて気付き、こほん、と咳払いをする。

「……失礼。同じ袁家の苦勞人である二人の前だと、どうも素が出やすいようでして」

「アニキも面倒なことしてるよなー。わざわざ、そんな丁寧な喋り方なんかしなくてもいいのに。あたいなんか、姫の前でもこんなんだぜ？」

「物腰は、柔らかい方が良いでしょう？　どこの誰かも分からない人みたいに、慣れ慣れしく話しかけて来るよりは…」

「あー、あの天の御遣いとかって言われてた人のことですか？　確にかにかつこよかったですけど…」

顔良は、必死に思いだそうとして唸っている。でも、今見せている感じからするに、それ以外印象が無いのだろう。……そろそろ行かないと、本当に劉備の思うつばになっちゃうな。

「さて、俺はそろそろ前線へ出ます。二人は、袁紹さんを守るから出れませんか？」

「一応親衛隊を付けてありますが、念のため私達はここに残ります」

「分かりました。では、俺はこれで…」

二人と別れ、混戦模様の前線へと向かう。すると前方に、緑と金色の鎧を着た兵士達がそこかしこに横たわったり、空高く吹き飛ばされて見えた。その状況を作り出している元凶は――

「弱い！　弱過ぎるぞ、貴様ら！　華雄隊、このまま敵陣を突き破るぞ！　狙うは総大将の頸のみ――」「ところがぎつちゃん！　…なんてね」…貴様、何者だ？」

「袁術軍の将が一人、紀靈と申します。貴女をこのまま野放しにはしておけませんので…。どうです、一戦いかがですか？」

鞘から少し刀を抜いて見せてみる。すると、華雄の目つきが変わった。

「ふんっ！ 良いだろう、その辺の雑魚共とは一味違うようだしな」

大きな戦斧を構え直し、名乗りを上げる。

「我が名は董卓軍の将、華雄！ 世に謳われた華雄の戦斧、その身でとくと味わうが良い！」

華雄との真剣勝負の火ぶたが、切って落とされた…。

オマケ

自陣へと戻った張飛。

「お兄ちゃん！」

「どうした鈴々！？」

「華雄と戦おうとしたら、お兄ちゃんよりはかっこよくないけど背の高い男の人が、先に戦い始めちゃったのだ！」

「な！？　嘘だろ！？　これで華雄を倒されたりしたら、俺達は仲間内を混乱させて被害を出しただけになっちゃうじゃないか！　…何か手を打たないと……」

一刀はいつたい、この事態をどう対処して行くのか…？

？水関の戦い（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

一騎討ち

Side：一刀

鈴々から聞いた話によると、俺よりも背の高い男がこっちの策を邪魔したらしい。せっかく皆で考えて、愛紗と星が危険を冒してまで華雄を？水関から引っぱり出して来てくれて、あとは鈴々が華雄を討ち取るだけだったのに…。

背の高い男って言うのはきつと、軍議の場にいたあの男だ。たしか、紀霊とか言ったっけか？ 何か軍議の時に袁紹の機嫌を取ってて、腰巾着みたいな奴だったはずだ。あいつが俺達から手柄を横取りしようって言うなら、どんな手を使ってでもそれを阻止して俺達の手柄にしなくちゃいけない。

「なあ朱里、紀霊に華雄を倒される前に俺達で倒す良い方法はないかな？」

「うーん、ちょっと難しいですねえ。華雄さんは既に、紀霊さんと戦い始めてしまったようですし…。ここは紀霊さんには悪いですけど、敗走するのを願いつつ、鈴々ちゃんにはすぐにでも華雄さんと戦えるような場所にいて貰うしかないでしょうね」

「何で？ 華雄の足が止まったところを、気付かれないような場所から弓矢で狙えば、あいつに横取りされな——」「ご主人様、それは本気で言っておられるのですか？」 え？」

何だか、愛紗の様子がおかしい。いや、愛紗だけじゃなく鈴々や星もだ。何て言えば良いんだろう、何か皆が怖い。

「主よ、もう一度聞く。それは、本気で言っておられるのか？ 武人にとつて一騎討ちとは神聖なものであり、それ自体が戦の花でもある。いくら我らの手柄のためとは言つても、その花を無闇に摘み取ることなど許されはしませぬぞ？」

「そうですね、ご主人様。いくら天の御遣いであるご主人様であるうとも、それは例外ではありません。そんなことをしたら、手柄以上の悪評が我が軍に下されてもおかしくはありませんよ？」

「だけどここのままじゃ、俺達は手柄を失うどころか他の諸侯達から足手纏いだと思われるんだぞ！？ それだったら、偶然を装つたりするなりして、華雄を倒すしかないじゃないか！ それかいつそのこと、？ 水関を——「あわわ！？ ご主人様、それはもう無理だと思います…」離里、どういうこと？」

「？ 水関には、既に孫策さんと袁術さんの部隊が向かっています。今から向かつて、もう遅いかと……」

華雄に手を出そうにも、紀霊のやつが負けて敗走してくれないと不可能。華雄を捨てて？ 水関を落として行くにも、孫策と袁術の部隊が既に向かつてるから、一番乗りも出来ない。何だよこの状況、八方塞がりもいいとこじゃないか……。

「決めた。こうなったら、強引にでも華雄を倒しに行く。朱里、離里、袁紹から借りた兵も含めて、弓兵を二十人くらい選別してくれ。それと出来たら、どつちか付いて来てくれ。鈴々は、俺達の護衛を頼む。…乗り気じゃないのは分かってるけど、今は耐え忍んでくれ」

「ご主人様、愛紗ちゃん達の話聞いてた！？ 一騎討ちに水を差す

なんて駄目だよ！」

「桃香、俺達は戦のない世を作るために戦ってる。それを実現するためには、どうしても力は必要になるんだ。……だから、ごめん。今は、名より実を取りに行く」

準備できました、という朱里の報告を受け、鈴々と朱里と弓兵達を連れて出撃した…。

Side：八雲

お互いに武器を構えた。じりっ、じりっ、とお互いに間合いを測る。そして俺と華雄の間に、一瞬の静寂が訪れた。いや、戦場に静寂などそぐわない。そう感じたのは、それほどまでに集中していたからだ。

「はああ！」

ガキンッ

掛け声と共に、戦斧による横薙ぎが繰り出される。左手を刀の峰に当て、華雄の一撃を受け止めはしたが、勢いに押されて地面を滑るような形で吹っ飛ばされた…。

「あ、危なかったあ。華雄さんの一撃は、想像以上に重いですね」
でも、ただ重いだけじゃない。何か腕力とは別の重さも伴った一撃だった。こんな重い攻撃を、どうしたら放てるのだろうか？

「当り前だ！ 我らが主である董卓様を、貴様らのような何も知らぬ輩から守りきるためならば、我が一撃はいくらでも重くなるう！」

「…何も知らぬ輩？ 董卓というのは暴君ではないのですか？」

「だから貴様らは、何も知らぬというのだ！ 董卓様は…本当の董卓様はなあ、とても心優しく、他人が傷付くことを嫌うようなお方だ！ そんな董卓様のことを貴様らは暴君と称して悪人扱いし、よってたかつて命を奪おうとしている。そんな貴様らの方が、よっぽど悪ではないか！」

悪ではないか…その言葉に、俺は言葉を失った。たしかに、この諸侯も董卓がどういう人物なのかを言及することは無かった。それどころか、この一件を踏み台にして、さらに鳴り上がろうとする者達ばかりだ。正直、董卓が善人であろうと悪人であろうと、そんなことは関係ないのだろう。結局は、ただきかけが欲しかっただけなのだ。

「…それは、事実なんですか？」

「無論だ。信じるかどうかは貴様次第だが、私は董卓様への忠誠にかけても嘘は言わん」

言い切るその目には、一点の曇りも無い。おそらく、華雄の話は偽りではなく真実だろう。

「…そのお話、俺は信じます。ですが董卓さんの話と、貴女との戦いでは話が別です」

「それくらい、百も承知だ。さあ、かかって来い、紀霊！」

「――参ります！」

刹那、お互いに地面を蹴り、敵へと突き進む。

華雄の放った戦斧による足払いを側宙でかわし、着地すると同時に一気に間合いを詰めて左から斬り上げる。しかし、寸での所で柄に防がれ、鏑迫り合いのような状態になった。

「今のは、決まってもおかしくないと思ったんですがね……」

「そう簡単にやらせはせんさ」

一度仕切り直すため、お互い後方へと飛び退く。こうして手合わせしてみても分かったが、華雄は強い。猪なところはあるが、猛将にして勇将という噂に違わぬ實力をしている。

「今度は、こちらから行かせてもらうぞ！」

勢い良く突進して来た華雄は、首元を狙って戦斧を左から薙いで来た。その一撃をしゃがんで避けたが、華雄は最初の一振りで得た遠心力を利用して、さらに威力を増した斬り上げを放って来た。

「くらえい！」

「ぐっ！？」

咄嗟に刀の切っ先を下に向けて防御する。しかし、しゃがんでいたため踏ん張ることが出来ず、吹っ飛ばされて地面を三回ほど転がった。

「どうだ！」

「……さすがに、今は危険でした。ですが斬られたわけじゃないんで、俺はまだまだ行けますよ？」

立ち上がり服に付いた土埃を払い、華雄を挑発するように刀の切っ先を向ける。

「ふん。そう言っていていられるのも、今のうちだあ！」

今度はさっきまでと違って、数十合に及ぶ激しい打ち合いから始まるような一進一退の攻防が繰り広げられていった。

こちらが繰り出した袈裟斬り、左薙ぎ、右からの斬り上げは、ぎりぎりのところで華雄が全て防がれた。反撃として華雄が放つて来た右薙ぎを刀で受け止め、足払いをして華雄を転ばせる。これを好機と刀を振り下ろそうとした時、石突きによる突きを腹部にもろに受け、怯んでいるうちに態勢を整えられた。

すると今度は、華雄が主導権を握る。斬り上げや薙ぎ、袈裟斬りに逆袈裟と、畳み掛けるように攻め続けて来て、俺は重い一撃を何とか防ぎ続けた。そして一瞬の隙を突いて、長柄武器の短所とも言える懐へ強引に潜り込んで斬り付けたが、紙一重の部分で避けられ、軽い傷を付けるだけに至った。お返したと言わんばかりに華雄が戦斧を振り下ろし、避けきれたと思ったら、こっちも浅くではあったけど切り傷が付けられていた。

「ふう……。華雄さん、そろそろ決着を付けませんか？」

「望むところだ。我が渾身の一撃にて、見事貴様を討ち取ってくれよう!」

一騎討ちを始めた時と同様に、一瞬の静寂が訪れる。

「——ふっ!」

お互いに、何を合図にしたかは分からなかったが、直感的に動き出した。

先に仕掛けたのは華雄。戦斧を振り上げ、渾身の力を込めて振り下ろして来る。

「でやあああ!」

ブォンッ

さっきまでとは比べ物にならないくらい、速さも重さも増した一撃がこの身へと襲い掛かって来る。——その時、振り下ろされる戦斧も自分の動きでさえも、やけにゆっくりに感じられた。左半身の体勢をとって華雄の一撃をぎりぎり回避し、刀を握る手に自然に力が入る。

「……これで終わりです」

ザシユッ

避けた状態から右足を踏み出し、華雄とのすれ違い際、右の脇腹に一閃による一太刀を浴びせた。

「うぐっ!？」

「勝負あり…ですね？」

「まだだ、まだ私は…戦える！」

華雄は、傷を負った脇腹を抑えながら、もう片方の手で戦斧を支えに立ち上がった。

「華雄將軍！ これ以上は——「来るな！」 し、しかし！」

「まだ、くっ…勝負は、付いておらん！」

「…貴女は、本当に強い人だ。だから俺は、そんな貴女に敬意を表し、次の一撃で終わらせます」

しかしこの一騎討ちの結末は、予想を裏切る形で終わることになる…。

S i d e : 華雄

まずい…。このままでは、負けてしまふ。董卓様を守るためにも、こんな所で負けるわけにはいかんと言っのに！

紀霊は刀を頭上高く構え、振り下ろそうとしている。

「華雄將軍、覚——」

その時だった。

「今だ皆、矢を放ってくれ！」

誰かの号令の後、聞き慣れた風切り音が、私の背後から次々と近付いて来る。私はすぐに、その正体が矢だとわかった。だが振り返るうにも、脇腹に受けた傷が痛み、それすら満足に出来そうにない。まさか一騎討ちではなく、こんな形であっさりと死んでしまうのかと思った時…。

私の身体は、いきなり横へと突き飛ばされた。私を突き飛ばした正体は――

「ぐっ！？　があ！」

「き、紀霊！？　貴様…」

紀霊だった。しかも、その身体には数本の矢が刺さっている。奴の姿を見ながら茫然としていると、部下達が近付いて来る。

「華雄將軍！　大丈夫ですか！」

「…私は平気だ。それより紀霊、貴様は、何故私を助けた！？」

私達は敵同士だ。奴には、私の命を助ける意味など無いはずなのに…。

「…くつ。貴女と…一騎討ちして、いたのは、俺ですよ？　その決着が付く前に、誰かに貴女との勝負を搔っ攫われるなんて真似…許せるはずが、ないでしょう？」

「…私は貴様に一太刀入れられ、拳句に命まで救われた。だからこの勝負、貴様の勝ちだ。私の命、好きにするが良い。だが、部下達は見逃してやって欲しい。頼む！」

「じゃあ華雄さん、部下の人達を連れて…急いでこの戦場から離脱して…下さい。そしていつか、この勝負の決着を、付けましょうね？」

この男が、いったい何を考えているのかは良く分からんが、私自身も奴とはきちんと決着を付けたいと思っているのは確かだ。

「良いだろう、ここは引かせてもらう。お前達、魚鱗陣を展開しろ！我らはこれより、敵の守りが薄い箇所を、一点突破して戦場を離脱する！…紀霊よ、さらばだ」

部下達に手を貸して貰い、私は戦場から離脱した。董卓様をこの手で守りきれないことは悔やまれるが、今は奴と交わした再戦の約束を守るためにも、ここで死ぬわけにはいかない…。

Side：八雲

華雄は部隊を引き連れ、戦場から撤退して行った。上手く行けば、追手を振り切り、逃げ延びることが出来るだろう。

そして肝心の俺は、右肩と両足の太腿、計三箇所矢が刺さっていた。

「紀霊將軍、大丈夫ですか!？」

「これで大丈夫だったら、くっ…医者なんて要りませんよ？ 悪いんですけど、軍医の所まで運んで貰えますか？」

「はっ！ おい、將軍を軍医の下まで運ぶぞ！ 陣を組んで、將軍を守りながら進むんだ！」

「おい、將軍がこんな目に遭ったつてのに、あいつらにやり返さなくても良いのか！？」

兵士達の目には、緑を基調とした軍服と牙門旗を掲げる者達と、そこに交じっている金色の鎧を着た兵士達に対して、明らかに怒りの感情が映し出されていた。そしてその場で、兵士達が激しい口論を始め出した。かなり近くで怒鳴られているためか、傷に響く。

「貴様らあ、いつペン黙らんかあ！」

「くくくく…えっ！？」「くくく」

俺が普段出さないような怒鳴り声を上げたことで、兵士達が一気に静まり返る。それは良いが、怒鳴ったことで余計に傷に響いて仕方が無い。

「…こほんっ。皆が怒るのは、当然です。ですが今は冷静になり、今為すべきことをしなさい。こんな所で彼らに報復をしたところで、何の価値もありません。彼らには、そのうち相応しい処罰が下りることになるでしょう」

「しかし、それでは！」

「良いから。その代わり、事の経緯を必ず…張勳に伝えて下さい。」

そうすれば、後は彼女が万事解決してくれますから。さ、本陣救援の役目は終えました。自陣へと戻りましょう。誰か、俺を運んで下さい」

担架のような物に乗せられ、自陣へと運ばれて行く。おっと、言い忘れていたことがあった。

「敵将華雄、袁術軍の将が一人、この紀白怜が撃退しました…」

それだけ言い終えると、急に眠気が襲って来た。受けた傷と一騎打ちで溜まりに溜まった疲労が、この眠気の原因だろう。今は兵士達に守られているし、戦う必要はないだろうと判断し、俺は意識を手放した…。

一 騎 討 ち (後 書 き)

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

行動の代償

Side：七乃

結局、？水関陥落の功績は孫策さん達に取られてしまった。その報告を受けて美羽様は怒っていたけど、蜂蜜水をあげたらすぐにご機嫌になった。ああ、蜂蜜水を飲んでる時の美羽様って、やっぱり可愛い！

でもまあ、八雲さんが本陣救援に行っていることですし、他の諸侯達からの印象は悪くならないはず。それは良いことだ。とりあえず、このまま本陣で八雲さんが戻って来るのを待つとしましょう。

のんびりしながら待っていると、兵士の一人が天幕へと飛び込んできた。…たしか、この人は八雲さんの部隊の兵だったような気が…。

「大將軍様、大変です！」

「どうしたんですかあ？ そんなに慌てて？」

「紀霊將軍が、矢で射られました！」

「……え？」

嘘…そうとしか思えなかった。だって八雲さんが、矢に射られるだなんて信じられなかったから。

「そ、そんなまさかあ？ どうせ、私達を驚かせるた「嘘」じゃありません！ 現在、軍医に処置して貰っています！」…美羽様、私

「ちょっと見て来ますね？」

こちらです、と案内された天幕へ足を運ぶと、その中にある寝台の上には、たしかに八雲さんが横たわっていた。肩や太腿には血が滲んだ包帯が巻かれ、今は胸に出来ていた切り傷を治療している最中だった。

「…このようになった状況を、話して貰えますか？」

「はっ！ 紀霊將軍からも、大將軍様に経緯を伝えるよう言われております！」

兵士達から、八雲さんが怪我を経緯を聞かされた。華雄將軍と一騎討ちをして、痛手を負わせたこと。勝利の寸前で劉備さんの所の兵士が矢を放ち、華雄さんを討ち取ろうとしたこと。その中には、袁紹さんから借りた兵も交ざっていたこと。八雲さんが華雄さんを庇い、助けたことで怪我したこと。そして、後は私が万事解決してくれると言ってたこと…。

「分かりました。じゃあ、後のことは八雲さんの言う通り、私に任せておいて下さい。」

「は、はあ…」

あえていつもと変わらぬ調子で返答し、天幕から出た。？水関を越えれば、次は虎牢関を攻略するための軍議が開かれる。劉備さん、私は彼と違って優しくありませんからね…？

連合軍は、二日を要して？水関前から虎牢関前へと移動した。この二日間で、八雲さんの状態は良くなったものの、あまり激しい動きは取らないように軍医から言われている。

そして今から、待ちに待った軍議が始まる。

大天幕の中で待っていると、次々と諸侯達が集まっていく。そして、劉備さん達も来た。気まずそうな顔はしてなく、普段の様に笑顔のままだ。御遣いさんも、何食わぬ顔で席に付いた。

「ではこれより、虎牢関攻略「すいません袁紹さん、ちょっと待って頂けますかあ？」何ですの、張勳さん？ 邪魔をするのでしたら、ここから出て行つて下さらない？」

「いえいえ、これは連合軍の為にも話しておかないといけない事なんですよあ。ねえ、天の御遣いさん？」

私が声を掛けると、一瞬にして気まずそうな顔になる。ふふ、お愉しみはこれからですよ？

「劉備さんと、御遣いさんにお訊ねします。…どうして、紀霊さんと華雄さんの一騎討ちを邪魔したんですか？」

私の一言で、諸侯達の視線が劉備さん達へと突き刺さる。御遣いさんは、ばつが悪そうな顔をしている。さて、いつ本音を零すかなあ？

「その場にいた兵達の報告によると、紀霊さんが一騎討ちで勝利を収めようとした時に、劉備さんの軍の部隊が手柄を奪おうとして矢を放ったそうじゃないですか？ おかげで、うちの大事な戦力である紀霊さんが矢傷を負ってしまったんですよ？ それについては、

「どう思います？」

「ご主人様、私達は紀霊さんに怪我を負わせたなんて聞いてないよ！？」

「あ、あれは！ あいつが、華雄の前に飛び出したのが悪いんだ！俺達は、華雄を討ち取るうとして矢を放っただけだよ！」

「…北郷とやら、お前は自分が何をしでかしたのか分かっているのか？」

予想外にも、口を挟んで来たのは周瑜さんだった。

「お前のしたことは、二人の武人の誇りを土足で踏みじつたも同じ。ここに白怜殿がいれば、何をされても文句は言えんぞ？ それと劉備、何故この男の愚行を止めなかった？」

「私はちゃんと止めたよ！？ でも、ご主人様が…」

「あら、御遣いさんの独断専行だったんですかあ？」

「くっ！」

諸侯達の視線は、より一層きついものへと変わっていく。でも御遣いさんは、自分は間違ったことはしていないのにみたいな顔を未だにしていた。それは間違っているということを、教えてあげなきゃいけませんねえ。

「じゃあ早いとこ、私達の軍が負った損害について、何かしらの形で賠償してもらいたいんですけど？」

「ちょ、ちよつと待てつて！ 北郷だつて知らない事はあるんだから、今回はお咎めくらいで良いじゃないか！？ それとこの戦が終わるまで、こいつらは私の下でちゃんと面倒見るから、今回の件は多めに見てやつてくれないか？」

伯珪さんに庇われたことで、御遣いさんが浮かべた安堵の表情は、私を無性にイラつかせた。なら、伯珪さんという守りを引っぺがしてあげますよ。

「別にそれでも良いですよ？ その代わり、伯珪さんが賠償して下されば良いだけの話ですから。でもうちは貴女のこと違って、そこそこ大きな勢力ですので、その分お金もかかるんですよ。なので、最低でも伯珪さんのとこの三年分の予算くらいは一括で払って頂きますけど、それでも劉備さんを庇うつもりですか？」

「うつ！？ …ごめん桃香、北郷、さすがに民の生活がかかると、私でも庇いきれない…」

「…白蓮ちゃん」

「さあ、劉備さん。早いとお、どうやって賠償してくれるのかを決めて下さい」

「え、あ、あの…どうしよう、ご主人様？」

御遣いさんは、劉備さんの問いかけにも答えることなく、俯いたまま肩を震わせている。そして思い立ったかのように顔を上げて、机を思いつ切り叩いた。

「元とは言えば、袁紹が俺達に先陣を任したりなんかするから悪いんだろうが！ それとあいつが、俺達皆が必死になつて考えた作戦を邪魔しなければ、こんなことにはならなかった！ なのに何だよ、こんな寄つてたかつて俺達のことばかり責めやがつて！」

「それが本音ですか…。でも、人のせいにするのは良くありませんよ？ 策が成就しなかったのは紀霊さんのせいではなく、貴方達の部隊の錬度の低さが招いた結果です。責任を擦り付けようとするのは、止して下さい。むしろ、被害を広める前に紀霊さんが止めたんですから、感謝して貰いたいくらいですよ。それと、賠償に関しては必ず払つて貰いますから、そのつもりでいて下さいね？」

さ、軍議に戻りましょう、という私の言葉でこの一件は終了したが、諸侯達から下される劉備さん達の評価は地に落ちた。ちなみに言う、と、その後の軍議は滞りなく進み、劉備さん達の軍と袁紹さんの軍が先陣を取ることとなり、曹操さんの部隊は左翼、孫策さんの部隊は右翼へと配置された。そして私達は、後曲へと配置されることが決まつた…。

Side：八雲

軍議が開かれた日の夜、手紙で北郷に呼び出された。いったい、何の用だろうか？ 手紙を見せた際に七乃は、謝罪でもしてくれるんじゃないですかあ？ と冗談交じりに言っていたけど…。

手紙に書いてあつた場所に行くと、北郷が一人で待っていた。

「…北郷さん。こんな時間に、いったい俺に何の用ですか？」

「やっぱり俺は納得いかない。矢で華雄を討ち取ろうとしたのを非難されることも、あんたが華雄を庇ったことも、そして逃がしたことも。あんたがした行動全部が納得いかない！ おまけに、権力に媚び諂^{へつ}うようなその態度、見ていてイライラするんだよ！」

「何を言い出すかと思えば……。貴方は、わざわざそんなことを言う為だけに俺を呼び出したんですか？ もしそうなら、呆れて物も言えませんか。せっかくの男前な顔が、台無しになっちゃってますよ？ それと俺は、それでも忙しい身ですので、これで失礼します」

着いて早々、踵を返して自陣へ戻ろうとすると――

「ふざけんじゃねえ！」

振り向くと、握り拳を肩の位置まで持つて来ていた北郷が、すぐそこまで迫つて来ていた。でも、相手は将じゃなく一般人でしかない。突き出された拳を避けると、背負い投げの要領で投げ飛ばす。……まったく、こっちは怪我人なんだから無理をさせないでもらいたい。一応暴れられると面倒なので、投げた時に掴んでいた腕を捻り上げ、背中を足で踏むことで無力化しておいた。

「くそ、離せ！ 離せよ、この！」

「離したら、また襲い掛かって来るのでしょうか？ なら、こうやって無力化しておかないと危険ですから」

それでも北郷がじたばた暴れ回るので、さらに腕を捻り上げると、今度は痛い痛いと思鳴を上げ始める。あまりに煩いから、流石に少しだけ緩めた。

「主！ 貴様、我が主に何をしている！？ 返答次第では…」

そう言つて、俺に二股の直刀槍の切っ先を向けて来る女性…。主と呼ぶつてことは、劉備軍の一人か何かだろう。

「俺は袁術軍の将で、紀霊と申します。貴女の主にここへと呼び出されて、いきなり襲い掛かつて来たものですから、こうやって無力化させて頂きました。そう言う貴女は？」

「これは失礼した。我が名は趙雲、字は子龍。真に申し訳無い、我が主が迷惑を掛けたようで…」

構えていた槍を下ろし、こちらへと近付いて来る。

「いえ、平気ですよ。とりあえず、北郷さんを引き取つて貰えますか？ そうして頂ければ、今夜のことは口外しませんから」

「…忝い。かたじけな後のことは、私に任せて貰おう」

「そうだ北郷さん、貴方の質問に答えておいて上げましょう。戦場での俺の行いは、武人にしか分からない。武人ではない貴方に、理解することなど出来ませんよ？ それじゃ趙雲さん、これで失礼します。おやすみなさい」

趙雲に後のことを任せ、俺は自陣にある天幕へと戻り、さつさと寝ることにした…。

行動の代償（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

サボタージュ in 虎牢関

Side：一刀

昨日の軍議は結局最後まで発言を許されることは無く、また袁紹によつて無理やり先陣を務めさせられることになった。袁術の部隊は後ろにいるけど、あいつはまだ戦えるような状態じゃないから、今度は邪魔されずに済みそうだ。でも俺達に下された評価は、下の下だ。今回で、どうにかそれを払拭出来る様な戦功を挙げないと…。

「朱里、虎牢関の情報は手に入ってる？」

「はい。虎牢関の守将は天下の飛將軍、呂布さんと張遼さんということですよ」

「呂布……大陸一の武と言っても過言ではないと言われている、あの呂布か！」

「張遼は…張文遠のことか。私も旅先でよくその名を聞いていたが、どの噂も張遼を称賛する物ばかりだった。たしか、その用兵術は神速とも言われていたな…」

そうになると、次の戦は大苦戦すること間違い無しってことか。俺がいた世界でも、呂布や張遼の名前は有名だった。そういえば呂布には、陳宮っていう軍師がいたはずだ。覚えている限りだと、献身的に呂布に仕えていた知将だったはず…。さすがに超一流とまでは行かないけど、それでも歴史に名を残すような軍師であることに間違いは無い。

「呂布の武力に陳宮の知力、そして星の話からするに指揮能力にも長けている張遼か…」

考えただけでも気が重くなる。皆も同様なのか、表情は暗く俯いている。

「でも…やるしかないよ、皆」

「桃香様の言う通りです！ 例え呂布が現れようと、この私が討ち取って見せましょう」

「……愛紗、一人で戦うことだけは止めてくれ。これは、鈴々と星も絶対遵守で頼む」

「どうしてですか！？ まさかご主人様は、私が呂布に劣るとでも？」

「そうじゃない、そうじゃないんだ。三人が強いことは、これまでの戦いで俺も重々承知しているつもりだよ…」

俺が知っている三国志の世界…その中に描かれている呂布は、一騎当千の武將だ。虎牢関の戦いだと、劉備と関羽と張飛の三人がかりで戦っていたにも関わらず、引けを取らない強さだったはずだ。それだけの強さを持つと思われる武將を前に、愛紗一人で立ち向かわせるのは俺達に取ってデメリットの方が多過ぎる。

「でも俺は、万が一でも愛紗を失いたくはないんだよ。愛紗だけじゃない。鈴々も、星も、朱里も雛里も桃香も、ここに居る皆を俺は失いたくない！」

「ご主人様…」

愛紗の頬が、うつすらとピンク色に染まっているのに気付いた。良く見ると、他の皆にも、愛紗と同じような徴候が見られる。

「だから約束してくれ。卑怯だと思いかもしれないけど、呂布と対峙する時は、必ず一人で当たらずに皆と協力すること。良いね？」

「…分かりました。ご主人様がそう仰るのであれば、私はそれに従います」

愛紗の返答に、それならばと星や鈴々も了解してくれた。良かった、三人が納得してくれて…。

「それじゃ皆、そろそろ行こう！」

「「なのだ 応！」」「「うん！」」「はい！」」

出陣しようとして天幕から出ようとした時、主よ、と星に声を掛けられた。

「どうしたんだ、星？」

「今言うことではないのやもしれませぬが、昨夜のような血迷った行動は取らぬようお願いしたい。あれは実際、運が良かったとしか言いようがありませんからな…」

「…大丈夫だ。もう二度と、あんな真似はしないよ」

そう伝えると、ならば良いのです、と天幕から出て行く。

俺達にとって、絶対に負けるわけにはいかない戦いが、兵士達の雄叫びと共に始まった…。

S i d e : 八雲

前線では、既に戦いが始まったようだ。虎牢関を守っているのは、飛將軍呂布と張遼。前線にいる部隊だけじゃ、苦戦は必至だろう。それなのにうちの軍は、後曲でなんかのんびりしちゃっている。一応、いつでも援軍に行けるように兵達は戦闘準備を済ませた状態で待機させてあるけど…。でも俺は、数日前に受けた矢傷の件で、軍医から激しい動きは止すように言われていたから、自ら戦うことは出来ない。

「八雲さん、分かっているとは思いますが、今回は部隊の指揮することだけに専念して下さいねえ？　もしも、昨夜みたいなことになったら…分かってますね？」

「…七乃、もしかして見てたんですか？」

「ええ。草陰から、ばっちりと見てましたよお」

「いや、あれはですね、彼が襲い掛かって来たから仕方なく…」

あれ、あそこに草陰なんてあったっけ？　たしか昨日の夜は、天幕から少し離れた場所で、岩場みたいな場所だったはずだ。

「ふん…。あの人、八雲さんに襲い掛かったんですかあ。へえ…」

「もしかして、鎌をかけました？」

「はい、何があつたのか知リたかつたので…。それにしてもあの御遣いさん、全然懲りてませんねえ？　せつかくですから、これをネタに賠償金の水増しを請求しちゃいましょうよ」

「…それは、止めてあげて下さい。彼を見つけて引き取つて行つた趙雲さんの苦勞が、水の泡になつてしまいます。それに俺が口外しないと言つたのに、七乃が言つてしまつたら、彼らは俺が話したと思つて、俺が嘔吐き呼ばわりされてしまいます…」

それよりも、まさか七乃が鎌をかけて来るだなんて思いもしなかつた。普段からそれくらい計算高くいてもらえると、こつちも色々と助かるんだけどな。主に政務とかで…。

なんて、今考えなくても良いことを一人考えていると、報告します、と斥候の一人が戻つて来た。

「虎牢関の防衛に当たつていた部隊が、城外に布陣した模様です！　それにより、先陣を務める劉備の部隊が、呂布隊及び軍師の陳宮隊との戦闘を開始！　同じく先陣を務める袁紹様の部隊は、張遼率いる騎馬隊によつて混乱している模様です！」

「他の諸侯の動きは、どうなつてゐるか分かりますかあ？」

「孫策の部隊は我関せずと言つた状態で、攻城を開始しております。曹操の部隊は、袁紹様の部隊の方へと接近しています。馬騰の部隊は、曹操同様に袁紹様の部隊の方へ、公孫賛の部隊は、劉備の方へとそれぞれ応援に駆け付けている最中です！」

どこの部隊も動いているのか…。その中でも特に危険な綱渡りをしているのは、劉備の所だろうな。あそこが崩されれば、うちの軍が呂布の相手をしなくちゃいけなくなる可能性が高い。そして呂布に耐え得るだけの堅牢な守りが、はたしてうちの軍に築けるのだろうか？

「美羽様、皆戦ってますけど、私達はどうしましょうかあ？」

「このまま、動かんで良い。妾達は時期を見計らって、虎牢関一番乗りを目指すのじゃ」

「さっすが美羽様！ 考えることが汚い！ よっ、生まれながらの極・悪・人」

「むふふ。七乃よ、もっと妾を褒めるのじゃ」

……無理だよなあ。

きゃっきゃ、うふふ、とはしゃぎ回るバカ主に、それを囃し立てるバカなのか優秀なのか未だに良く分からない側近。そして、いつの間にか無駄に過ぎている時間…。城でよく見るような、いつもの風景がそこには広がっている。こんなところを、他の諸侯に見られずに済んで、本当に良かった…。あれ、おかしいな？ 自然に目から汗が……。

バカ騒ぎが起きてからしばらくすると、さっきとは別の斥候が報告にやって来た。

「申し上げます！ 前方に舞っていた砂塵が、先ほどより収まり始めています！ なお、呂布及び陳宮の旗は、劉備の部隊によって倒れ、張遼も曹操の部隊によって捕縛されたとのことです！」

まさか、劉備の部隊が呂布を抑え込むとは思わなかった。意外と、やるものなんだな。

「美羽様、頃合いですよ？ 号令を掛けて下さい。」

「うむ。皆の者、虎牢関へといざ討ち入りなのじゃ！ 今度こそ、孫策なんぞに一番乗りの功を譲るでないぞ！」

「「「「「応っ！」「」「」「」

こうしてうちの軍は、サボりにサボってようやく出陣した…。

Side：思春

？水関の時と同様、袁術が城攻めの功を狙うために出陣して来たとの報告が、放っていた斥候より上がって来た。これは急ぎ、黄蓋殿の下へと孫策様を連れて行かねば。

「…孫策様。黄蓋殿が、至急孫策様を連れて来るようにと」

「…やだ」

「嫌がるならば、首に縄を付けてでも連れて来いと言われているのですか？」

「…私は犬じゃないから、もつといやだ」

「……はあ」

こうなつたのには、それなりに訳がある。それは、周瑜様の判断で野戦ではなく攻城を選んだからだ。孫策様は戦いたがつていたが、王が前線で戦つてどうする、という周瑜様と黄蓋殿のお二人の言葉と判断によつて攻城することになった。それがきっかけで、孫策様が拗ねてしまわれた。妹君である蓮華様は真面目な方でいらつしやるのに…。

「雪蓮、いつまでも駄々をこねていないの。貴女は孫呉の王なのよ？ 万が一のことを考えたら、あの決定は当然でしょ？」

「分かつてるけど…つまんないんだもん！」

「…はあ。興霸、私が許す。強引にでも良いから、伯符を黄蓋殿の下まで連れて行け」

「御意。さあ孫策様、斥候の報告では袁術が虎牢関に迫つて来ているとの報告も有りますので、先を急ぎましょう」

「はあ…い…」

周瑜様公認の下、孫策様を強引に黄蓋殿の下へと連れて行つた…。

S i d e : 祭

ちょうど穏と策殿の噂をしておつたところに、興霸が策殿を連れて

来た。やはり、噂をすればなんとやらじゃな。

「黄蓋殿、孫策様を連れて参りました」

「うむ、ご苦労。穩、あとどれくらいで虎牢関を落とせる？」

「もうちょっとです」

「よし。ならば興覇よ、お主の部隊でだめ押しをせい！」

「はっ！ 甘寧隊、これより城攻めに参加する。我が旗に続けい！」

興覇の部隊が行けば、攻城についてはもう心配せんでも良いじやろうて。さてと…。

「策殿、まだおむずがりですか？」

「もう！ 人を子供みたいに言わないでよね？ もうむずかってなんかいないわよ」

「ならばよし…。主を演じるというのにお疲れだとは思うが、君主とはそういうものだとご理解めされい」

母君である堅殿が、そうであつたようにな…。

「そんなの、母さまから教わったから知ってるわよ。だけど、感情を押し殺してまではしたくないっていうのが、私の本音なのよ」

「それはそれで良い。だが天下を目指すのであれば、そういった振る舞いをせねば、民は付いて来ん」

「それは分かつてるけど…」

「我らの勢力が安定すれば、策殿の好きなように振る舞って良い。だからせめて、それまでの間は君主を演じて下されよ？」

「はいはい。…はあ、めんどくさいなあ」

策殿も、もう少し権姫を見習って真面目に事に当たって貰いたいものだ。だが待てよ…？ 策殿が真面目なところは想像付かんが、自由奔放な権姫はもっと想像が付かん。なぜに姉妹でこうも差が出るんじゃないか？

「さすが堅殿の娘じゃな。同じことを言われる」

「うそ？ 母さまが面倒だなんて言ってるって、見たこと無いわよ？」

「若い頃のことじゃからな。その頃は、よくおむずがりでいらつしやったよ。だが戦を繰り返すうちに、君主としての成長を積み、やがて呉の統一を果たした。…儂も公瑾も策殿には、いつかは堅殿のようになって貰いたいのじゃよ」

「いつかは、ね。それじゃ祭、牙門旗持って来て」

「ん？ まだ城門は突破できておらんが…」

「そろそろ落ちるわよ？ 城壁の兵士達に、動揺が走ってる。それぐらい、観察しておきなさいよね、宿将さん？」

策殿の言う通り、城壁の上にいる敵兵達には明らかな動揺が見て取れた。まったく、こういうところは相変わらずじゃな。さすがは、戦の天才と言うところか。

「むう…。天才の感性を、凡人に押し付けないでいただきたいものじゃ。…誰かある！」

「はっ！」

「孫呉の牙門旗を持てい！ 高らかに天に掲げ、虎牢関一番乗りを喧伝せい！」

「はっ！」

風に靡く深紅の牙門旗が、虎牢関へと向かって行く。これで今回も、袁術なんぞに手柄を取られんで済むわい。

「それじゃ策殿…参ろうか？」

「了解。虎牢関なんてさっさと落として、早く洛陽に向かいましょ」

儂と策殿が虎牢関へと乗り込んだ頃には、既に大半の守備兵の撃破が済んでおり、虎牢関は程なくして陥落した…。

S i d e : 八雲

結局、虎牢関の城攻めの功も、孫呉のものとなった。それにより、美羽様は再び怒り始めたが、七乃がすぐに蜂蜜水で機嫌を取ったため、そこまで面倒にならずに済んだ。

ちなみに、すぐにも洛陽を目指すのかと思つたら、どこの部隊も傷兵の後送や予備兵の補充を行っていた。洛陽までは数日の距離があり、実質これが最後の休息と言えるから、兵士達の休息も兼ねて、一日駐屯するようだ。

「美羽様、まだ洛陽一番乗りが残ってるじゃないですか？ 一番に入れば、皇帝への道が一步近付きますよ？」

「うむ。ならば明日は、何が何でも洛陽へと一番乗りをするのじゃ。麗羽に後れを取ってはならんぞ？」

「大丈夫ですよ。あそこは揃ってバカばかりですし、私達が出しぬかれるなんて事はありませんから」

「ならば良い。ふう、明日が楽しみじゃな、七乃？」

「はい」

この二人、実に幸せそうな顔をと頭をしている。対する俺は、嫌な予感しかしていない。それが何なのかは分からないけど、その予感が的中しないことだけを神様に祈っておくでしょう。今度こそ、叶えてくれよ、神様…。

サボタージュ in 虎牢関（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

洛陽の前でバカと罵る

Side：八雲

休息を一日はさみ、連合軍は洛陽へとその歩みを進めた。そして相変わらず、劉備の部隊は袁紹によって先行させられている。そのため、劉備達の方が二刻ほど早く洛陽に到着している。

「七乃、袁紹さんや美羽様は、劉備を先行させたら洛陽一番乗りも劉備になることに気付いてないんでしょうか？」

「そうですねえ…。私は気付いてましたけど、あの二人は気付いてないと思いますよ？ 袁紹さんは言わずもがなバカですし、お嬢様も似たようなものですから。ようは本人達が、一番乗りだ、と思っていれば良いんですよ」

「それもそうだな。知らない方が幸せってことも、世の中にはある。特に、なかなかおめでたい頭をしている二人には、その方が良いのかもしれない…。」

Side：一刀

連合から先行した俺達は今、洛陽の前にいる。敵の大軍が配置されていると思い、経過して進んで来たけど、大軍どころか敵兵一人すら見ずに、洛陽の前まで着いた。

「何か、あっさりとここまで来ちゃったな。敵と会わなかったのは良いことだけど、拍子抜けだなあ」

「来ちゃったねえ…。何も起こらなかったんだから良いことだと思うけど…」

「相手の手の内が、まったく読めませんね」

「…斥候、出してみましようか？」

雛里の言う通り、こういう時は斥候を出すに限る。でもその前に、星にも聞いてみよう。

「星、城の様子は？」

「動き無し…。その一言に尽きますな。詩でも作れそうな程ですな」

「よし。じゃあ雛里、斥候を出して、可能なら城内の様子を探って貰えるか？」

「はいっ」

雛里が斥候に指示を出しに行くと、鈴々も斥候に出たいと言い始めた。訳を聞くと、自分の目で確かめたいからと答えてくれた。…鈴々なら強いし、城内の威力偵察にもなるはずだ。でも、やっぱり不安は残る。

「危険じゃないかな？」

「危険は有るでしょうな。だが、状況が不透明な今、多少の危険を冒してでも情報を手に入れなければならぬでしょうな」

「分かった。じゃあ鈴々、頼むよ」

「おう、任せろなのだ！」

元氣の良い返事が聞けたところで、雛里が斥候を率いて戻って来た。事情を説明した後、鈴々を先頭にした斥候隊が城内へと侵入して行った…。

しばらくして、鈴々が斥候隊と共に戻って来た。その足取りは軽く、特に怪我らしいものも見当たらない。

「無事だったか！ 戻って来るのが遅いから、皆で心配してたんだよ」

「鈴々は大丈夫なのだ！ それよりもね、街の様子がおかしいのだ」

「どういうこと？」

「あのね、董卓が逃げようとしてたのだ」

全員がぽかんとする。俺達は誰一人として董卓の顔を知らないのに、どうして鈴々はそんなピンポイントに名前を出せたんだろうか？

「なっ！？ 鈴々、それはいったいどういうことだ？」

「んつとね、董卓軍の兵士に囲まれた女の子が、偉そうな奴と一緒に逃げようとしてたのだ。多分あれが、董卓本人だと思う」

「思いつて…。名前を聞いてもないのに、何で分かるの？」

「だって、街の中に兵士はいなかったのに、その子の周りだけはすごく厳重に警護してるみたいだったから。だから、そうじゃないかなーって」

連合軍が近付いて来てるのに、兵が街の中にいない。鈴々を信じてないわけじゃないけど、そんなことが有り得るのだろうか…。

「…鈴々ちゃん、街の様子とか人通りはどうでしたか？」

「うーん…。街は普通だったし、人通りはあまり多くは無かったかなあ？」

「…雛里ちゃん」

「うん。きっと私達が思ってる通りだと思う」

何故か、朱里と雛里だけがお互いに意思疎通を図っている。何の話をしてるのか、聞いてみよう。

「二人とも、何の話をしてるの？」

「鈴々ちゃんの言う通り、城壁の向こうのことを考えていたんです…。それで、私も朱里ちゃんも、董卓さんは本当に逃げようとしてるんだと思いました」

「え、でも、董卓さんの兵力を考えれば、まだ全然戦えると思うけど？」

「いいえ。戦ったところで、援軍が来ることは無いでしょう。それに、現状の様になってしまうと、占領している洛陽そのものが重荷になって来るでしょう。その場合、諸侯達の妬みの元である洛陽を捨てるのが、最良の選択なんです」

なるほど…。諸侯達が連合を組んで董卓に敵対したのも、結局は洛陽にある玉座に座る存在を独占されるのを恐れたが故にか。なら、その元凶を捨て去れば、事態がどうなるか分からなくなる。

「でも、それだけで本当に戦は収まるのか？ 俺が考えるに、言い方は悪くなるけど、生贄が必要になって来ると思っただけ…」

「ご主人様の言う通りです。きっと連合は、董卓さんを処断するまで追い詰め続けることでしょう。それが、権力争いというものです…」

「なんか、そう聞くと、董卓さんが可哀想になって来るね…」

「連合の宣伝では、洛陽は悪人董卓によって占領され、民は怨嗟の声を上げている…でしたね。しかし来てみれば、そんな様子は微塵もない…。我らもまた、諸侯の権力争いに巻き込まれた…ということか」

「でも、これはまだ憶測に過ぎない。事実が確定していないのに、思い込むのは止しておいた方が良さそうだな。…雛里、俺達はこのまま洛陽に入った方が良いかな？」

このままここにいと、また勝手な権力争いに巻き込まれる危険性があると俺は考えたから、それとなく雛里に聞いてみた。

「はい。このまま肅々と入場し、住民達の慰撫を行う方が得策だと思います。ね、朱里ちゃん？」

「うん。私も、雛里ちゃんと同じ意見です」

「分かった。じゃあ鈴々、城門に近付いて、中の様子を見て来てくれるか？」

鈴々は、合点なのだ、と返事をして、すぐに城門へと向かって行った。

「愛紗と星は、何かあった時にすぐ軍を動かせるように、待機していてくれ」

「「御意」」

「朱里と雛里は、無事に入場を済ませた後の指示を頼む。…そういや、俺と桃香はどうすれば良い？」

「そうですね…。ご主人様と桃香様は、兵隊さん達に乱暴狼藉の禁止を徹底させて下さい。それから、街の有力者を捜し、交渉するのが良いでしょう」

乱暴しないから、大人しくしてくれってことか。

「じゃあ、その辺りの指示出しは二人に任せても良いかな？」

「「御意です」」

その後、鈴々からの合図を受けて、洛陽へと入城した。そしてそこ

で、まさに逃げようとしていた董卓と賈馥に遭遇し、説得の末に俺達で身柄を確保することになった。…名を捨てて、俺付きの侍女になるという形で。他の諸侯達に気付かれようと、袁紹と袁術にさえ気付かれなければ、問題は無いだろう…。

S i d e : 八雲

劉備を除いた連合の全部隊が、洛陽に到着した。先行していた劉備の部隊は、兵士は確認出来るものの、北郷含め将達全員が見当たらない。多分だけど、既に入城を済ませているのだろう。

だが、そんなことは正直どうだって良い。それよりも大きな問題が、目の前に広がっているからだ。

「ちょっと美羽さん！ 連合軍の総大将はこの私なのですから、一番乗りは私にお譲りなさい！」

「何を言つとるのじゃ麗羽！ 先着順なんじゃから、譲るのはそちらであろっ！」

「そうだそうであ！ 顔良ちゃんも文醜ちゃんも、下がりなさい！」

「そんなの出来るわけないっつーの！ お前ら、袁術隊なんかに負けんじゃねえぞ！」

「こつちこそ！ 袁紹隊なんかに負けるなー！」

これによって、両部隊の兵達が半ば暴走気味の状態で、洛陽の中へ

と入って行った。その勢いは、何か問題を引き起こしそうな雰囲気だ。唯一の良心である顔良も、この状況を見て呆れ果てている。他の諸侯達などは、明らかに侮蔑の目でこちらを見ていた。

「…紀霊隊、速やかに洛陽へと入城し、中の状況を俺に伝えて下さい。それと、さっきの兵士達が問題を引き起こしていたなら、強引にでも止めて来るように…」

「…了解です。はあ、何だかなあ…」

流石の事態に、うちの部隊の兵士も呆れ返っている。

それからしばらくして、計五十名近くの袁紹のこの兵士達が、俺の部隊の兵士によって無理やり引き摺られて来た。

「紀霊將軍、こいつらが洛陽に住む民達から略奪行為を行おうとしておりました！　なお、こいつらを止める際、先に入城していた劉備の部隊に協力をして頂いております！」

「分かりました…。その兵士達は、ありったけの縄を使って、手足を縛っておいて下さい。出来れば、舌を噛み切られないように、口にも縄を忘れないように…」

「了解しました！」

さあ立て、と捕まった兵士達が、次々と連れて行かれる。そして、自軍の兵士が罪のない洛陽の民に対して略奪行為に走っていたにも関わらず、肝心の大将はどちらが先に洛陽入りするかどうかの言い争いを未だに続けている。あれ、何だろう…無性にイラついて来る。

言い争いをしている場所から、少し離れた所にいた顔良の隣に立つ。

「あ、紀霊さん！…どうしましょう、あれ？ 私には、とてもじゃないけど収められそうになくて…」

「…袁紹さんか美羽様のどちらかさえ黙らせれば止まると思いますから、さっさと終わらせてきます。それと顔良さん、そちらの兵が洛陽の民に略奪行為を行おうとしていたという報告が入ってますよ」

「そ、それ、本当ですか！？」

「ええ。うちの兵が止めに行った際に、劉備さん達も鎮圧するのに協力してくれたおかげで、未遂で済んだそうです。…俺はあのバカ共を止めておきますから、劉備さんのところに行つて来たらどうですか？」

「は、はい！」

深々と一礼した後、顔良は劉備達の下へと向かった。さて、こちらも早く黙らせて、劉備達に礼を済ませて、寿春城に帰るとしよう。善は急げという言葉を実行するため、言い争いをしている四人の下へと足を運んだ…。

よくもまあ、飽きることなく言い争いを続けているもんだ…。でもよく見ると、七乃はあまり参加せずに、いつもの美羽様観察に耽っている。彼女も、何で飽きないんだろう。

「…いつになったら、この無駄な話し合いは終わるんですか？」

「無駄ですつてえ！？ 紀霊さん、どういうことですか！？」

本気で言ってるのだろうか？ この二人が功を焦った結果、洛陽と皇帝という存在の価値が無くなったと言うのに…。ああ、バカだから普通ならある程度分かるものも、全然分からないのか。それなら仕方ない。

「洛陽一番乗りなら、もう二刻半も前に劉備さん達が果たしてますよ…。まったく、揃いも揃ってバカばかりなんですから。ほら美羽様、七乃、城に帰りますよ？」

「嫌じゃ嫌じゃ！ 妾は洛陽で、皇帝になるのじゃ！」

…そろそろ俺、ゴール^{キレ}しても良いよね？ 俺、けっこう耐えてたよね？

爪が手の平に食い込むくらい、拳を強く握り締め――

「……いい加減にしろ、このガキい！」

ゴッソッ

「なんかおまけで、お前もだ！」

ゴッソッ

バカ二人の頭に、全力で拳骨をかました。

「ふぎやつ！？ あう、七乃お、痛いのじゃー！」

「…い、痛い、ですわ…」

「いつまでも我が儘言つてないで、とつと城に帰るぞ！ 袁術隊、撤退の準備だ！ 準備が出来次第、本城に向けて行軍を開始するぞ！ 全員、行動開始！」

「……はっ！」「……」

兵士達は、今まで見せたことのない速さで撤退の準備を始めていく。バカは七乃が面倒見てるし、劉備の所に行っておかないと。

「七乃、ちよつと劉備の所に行つて来ます。少しの間、留守を頼みますよ？ それと美羽様、帰つて来た時にまた我が儘言つてたら、もう一発ですからね？」

「……………」

どうやら拳骨の威力は相当なものだったらしく、一言も喋らずに頭を縦に振り続けていた。

その姿を見て安心した俺は、劉備達の下へと足を運ぶことにした…。

劉備達の下へ向かうと、顔良が北郷に何かを言われていた。その様子を見るに、どうやら兵士達の責任の追及をされているようだ。他の面子を見ると、たまたま数人と目が合った。俺の姿に警戒すると思いきや、目の前で繰り広げられてる事態に、どうやら苦笑いを浮かべざるを得ないらしい。

「顔良さん、まだここにいたんですか？　こちらはもう収まりましたよ？」

「え、もうですか！？」

「ええ。それで、北郷さんとどのような話を？」

「どのようなもののようなもあるか。袁紹のこの兵士達が略奪行為をしようとしてたんだぞ！？　どうしてちゃんと兵士達の手綱を握ってないのか、顔良に聞いただしてたんだ」

「文句を言う相手を間違ってるだろ。？　水関の時もそうだが、今回のことだって顔良はほとんど悪くない。たしかに、兵士達の手綱を握りきれなかったのは事実だ。でも、主な原因は袁紹達なのだから、文句を言うなら袁紹に言えば良い。」

「ああ、そのことですか。それに関しては、うちの兵士達に協力して頂き、ありがとうございました。ですが、北郷さん…二回連続で文句を言う相手を間違えるというのは、さすがにどうかと思いますよ？　もう少しほら、落ち着いてみたらどうです？　間違いが減るかもしれませんよ？」

「二回連続？　紀霊殿、それはいったいどういう意味だ？」

「おっと、口が滑ってしまいましたか……。知りたければ、北郷さんと趙雲さんの許可を取って下さい。ですが二人にも、黙秘する権利くらいはあることをお忘れなく……」

あとは七乃にも知られてしまったけど、これは黙っていても問題な

いだろう…。

「二人とも、隠しごとがあるならちゃんと私達にも教えて…。私達、仲間でしょ？」

「…こうなつては仕方ない。主よ、ここは腹を括つた方が良さそうですね」

「…分かつたよ」

じゃあ聞かせて、と言う劉備の声で、その場にいた全員がこちらを向いた。…美羽様に負けず劣らずな口リがいる。どうやら北郷は、ストライクゾーンが広めのようだ。

「あれはたしか、虎牢関攻略のための軍議があつた日の夜のことでした。俺は北郷さんに呼び出されたんです。そこで話したことは、大したことじゃありません。どうして、手負いの華雄を矢で狙う事が悪いのか。何で俺が、怪我をしてまで華雄を庇い、そして逃がしたのか。そういうば、俺の態度が気に入らないっていうのも有りましたね」

「…俺は今でも、間違つたことを言つたとは思つてない。手負いの将だとしても、討ち取つてしまえば武功は同じはずだ。なのに、お前はそれを妨害し、さらにその手柄をみすみす逃がした。俺からすれば、そんなの有り得ない！ たしかに、一騎討ちは戦の華って言われたけど、何でそこまで拘る必要があるんだ？ 勝つためには手段を選んでいられない時だつてあるだろ？」

「…武人同士での、暗黙の了解とでも言うんでしょうかね？ だから言つたでしょう、貴方には理解できないって。でも、だからと言

つて貴方だけは、それを破っても良いという訳じゃないんですよ？
ここはもう、貴方が暮らしていた場所じゃない。郷に入っては郷に従え…違いますか？」

「…くっ」

北郷は下唇を強く噛み締め、悔しそうな顔をしている。痛いところを突いたんだから、それが普通の反応か…。

「でもそれって、ご主人様と紀霊さんがただお話をしただけじゃない。何でそんなことを、私達に隠してたの？」

「誰もまだ、終わつたなんて言つてませんよ？ この話には続きがあります。話が終わつたので帰ろうと北郷さんに背を向けたら、彼がいきなり背後から襲い掛かって来たんです。まあ、すぐに無力化して趙雲さんにお渡ししましたがね…」

自分達が『ご主人様』と慕う人間が、背後から襲いかかったと聞かされ、劉備達一同は強い衝撃を受けたようだ。部隊を率いて敵部隊を背後から急襲することはあっても、一対一で背後から急に襲うなど、武人として許せるものじゃないからだろう。あまり良い顔色とは、お世辞にもいえない。

「つまり、北郷さんが本来文句を言うべき相手は袁紹さんや俺の主である袁術様であつて、俺や顔良さんではないと言ふことですよ。顔良さん、俺達はそろそろ失礼しましょう。彼はこれから、話し合いが必要になりそうですから」

「…そうですね。じゃあ劉備さん、私達は失礼します」

その後、顔良と別れて自陣へ戻ると、撤退準備は全て完了しております、と兵士に声を掛けられた。ご苦労様です、とだけ返事をして、七乃達の下へ向かうと二人揃って寝ていた。

「はあ…」

面倒だとは思いつつも、二人を馬車まで運び、自ら御者を務めて本城への帰路に就いたのだった…。

洛陽の前でバカと罵る（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

群雄割拠、乱世の開幕

反董卓連合から、一ヶ月の時が過ぎた。今回の一件で、どの諸侯にも、朝廷から褒美が与えられた。一番大きな褒美を与えられたのは、劉備軍だろう。何せ、平原の相から徐州の州牧に昇格したのだから。劉備達を除けば、曹操もいくらかの領土を褒美として貰っている。

そしてこの一ヶ月の間に、ある報せが各諸侯達に伝わった。袁紹が公孫瓚を破り、青州や并州を含めた河北四州の制圧に乗り出したのだ。敗北した公孫？は、劉備の下へと落ち延び、事なきを得たらしいけど…。

S i d e : 華琳

全員を玉座へと呼び出し、それぞれの得た情報を報告させることにした。

「まずは、桂花から報告をしなさい」

「はい。まず一つ目は、呂布が徐州南方にある下^{かひ}？城に居ることが判明しました。それと呂布が虎牢関より逃亡した際、軍師の陳宮も共に行動していたようで、現在も共に行動しているものと思われるます」

地図を広げ、場所を確認する。城の周囲には大きな勢力もないし、それにあの辺りは無法地帯となっている。拠点を構えるにはちょうど良いかもしれないわね。

「どういたしますか、華琳様？ 呂布が本気になれば、我らもかなりの規模の被害を被ることになると思われますが…」

「…今は、放っておきましょう」

「華琳様、それはいくら何でも危険過ぎます！」

桂花が危険というのも分かる。けど今は、呂布という人物のことを少しでも知らなければならぬ。私や孫策と言った、英傑の一人となるのかどうかを…。

「…霞、呂布は王となるに足る器の持ち主なのかしら？」

視線が、一斉に霞へと集中する。

「…正直、うちには恋が何を考えるのか、全然分からん。まあ、器があるかどうかと聞かれたら、恋にはあらんやろな。軍師の陳宮の方はそこそこ切れ者やけど、まだまだお子様やし…。まあ、変な入れ知恵でもせん限りは、手を出して来ることは無いと思うで？」

「分かったわ。ならば、監視だけは怠らずにやるように兵に言っておきなさい。それに今は、もっと警戒すべき相手が他にもいるわ。秋蘭、報告を」

今度は一転して、秋蘭へと全員の視線が注がれる。

「はっ！ 袁紹に関しましては、その後青州や并州にまで勢力を伸ばし、今や河北四州はほぼ袁紹の勢力下となっております。これ以上北へは進めませんから、後は南下して来るだけかと…」

「なら、次に狙って来るのは私たちでしょうね」

「え！？そこは劉備では無いのですか！？」

「麗羽は、見てくれの通り派手好きでね。大きな宝箱と小さな宝箱を並べたら、小さな宝箱なんて眼中に入らないのよ。つまり、劉備よりも領地の大きな私達が、麗羽の次の標的となるわけ…」

あれはバカだから、何でもかんで大きければ良いって考えているしね。あれじゃ、部下も大変でしょうに…。

「そういうことから、国境の各城には万全の警備であたるように通達しておきなさい。それと、河南の袁術はどう？」

「報告によると、今のところは大きな動きも無いようです。あるとしても、我々や劉備の国境を偵察する兵が散見される程度ですね…」

「あれも麗羽と並んでかなりの俗物だけど、部下に少しは使えるのがあることが麗羽よりは救いね。でもあれが動かないというのは気味が悪いし、警戒は怠らないようにしなさい」

「はっ。そちらにも、既に指示は出しております。そういえば華琳様、俗物で思い出したのですけど、劉備軍を率いるあの北郷とか言う男についてはどう思われますか？」

桂花から急に振られた話で、劉備軍にいるあの北郷とか言う男の事を思い出す…。

「…正直、あまり思い出したくは無いわ。義勇軍を率いて賊を討伐

していた時のあの図々しさや、私と対等の立場にいと勘違いして話して来る態度は、今思い出しても癪に障るもの。あとはそうね……？水関で行っていた軍議の最中に、劉備と共に天幕に現れた時は、私達のことを見るなり鼻の下をだらしなく伸ばしていたかしら。それとその時に見せた、まるで女を品定めするかのような目。……ああいう欲望丸出しの浅ましい顔を見ると、ついつい首を斬り落としたくなるのは私だけじゃないと思うのよね？」

「……あの男、華琳様のことをそんな風に見ていたなんて！……あの全身精液孕ませ男、絶対に許さない！もし戦うようなことがあったら、ただじゃ済まさないわ！私の軍略で、けちよんけちよんにしてやる！」

「それだけじゃありませんよ、華琳様！あいつは？水関で武人の誇りを容易く踏みにじっただけでなく、友軍にも無駄な被害を出すような輩！あのような男が生きている価値など、道端に転がる石ころ以下です！」

「……姉者の言っていたこともそうだが、配下である関羽たちや君主である劉備にまで、ご主人様などと呼ばせているというのが、全身に虫唾が走るくらいに不快極まりない。奴には、そのように呼ばれる価値など無いと言っのに……。自ら部隊を率いて指揮を執るわけでも無く、後方で待っているだけ。この乱世で、何故あんなのが生きているのか謎なくらいです」

「……皆も、それぞれ思うところはあったようね。ともかく、あんな下品の下品を天の御遣いなんていう御輿に担ぎ上げ続けているようでは、あの軍も先が見えているでしょう。あのような凡愚が我が軍に来なくて、本当に良かったわ。どうしてあんな屑の下に、関羽や張飛といった猛将達が集まるのか。さすがの私も、それだけが解せ

ないけどね…」

何だか軍議から一変して、あんな存在価値の無い男の話になってしまったわ…。とりあえず、今やるべきことは決めたのだし、軍議を終わらせるとしましょう。

「一応、今日話し合うべきことは全て終わったわ。これにて、軍議を終了とする！」

解散を告げ、各々がそれぞれやるべき仕事や持ち場へと戻って行った…。

S i d e : 八雲

連合が解散してから一ヶ月…俺の生活はいつもと変わらないようで、ちよつとだけ変わっていた。

「…美羽様、いい加減に機嫌を直して下さいよ」

「嫌じゃ。せつかく、妾がもう少しで皇帝になれたというのに、それを邪魔しおって…。それにお主の拳骨のことも忘れてはおらんぞ？」

「いやいや。美羽様が皇帝になったら、三日も立たずに処刑台に送られるのがオチですって…。あの拳骨だって、暴走する主を止めんがためにやったことですからば！」

「ぐぬぬ。…ともかくじゃ！ 八雲は三ヶ月の間、給金は無しじゃ！」

「そ、そんなあ。……………はあ、不幸だ」

がつくりと、膝から崩れ落ちた。いくら何でも、給金カットは無いでしょうに…。ほら、元気出して下さい、と七乃に肩を叩かれたが、それで元気など出るわけもない。

「そういえば八雲さん、今し方戻って来た使いから、呂布さんとの交渉の席を設けられたって報告がありましたよ。それで向こうはどうやら、兵を養うための兵糧が底を尽きそうになっているとかあ…」

「それは本当ですか！？　ならば、今すぐに出ます。兵糧は何人分ですか？」

「たしか四千くらいとか…。兵糧の準備は私の方でしておきますけど、兵の方はどうしますか？」

「交渉する以外は兵糧を運ぶだけなので、精兵が五百もいれば十分でしょう。そっちは自分の部隊から連れて行きますから、大丈夫ですよ」

それからしばらくして、連れて行く騎馬隊の準備と兵糧の準備が完了した。美羽様が関わらなくなると、とたんに仕事が早くなるんだよな……良いことだけだ。

「これより行軍を開始します。目指すは徐州の下？城、数日かかる道のりになると思いますが、皆気を緩めぬように！」

「……………はっ！」「……………」

「よし！ 紀霊隊、行軍開始！」

手綱を引き、馬を歩かせ始める。相手はあの飛將軍とまで謳われた呂奉先、そう簡単な交渉とはいかないかもしれない。最悪、決裂して戦にでもなったら全滅は免れられないだろう。心して交渉に臨まないといけないな…。

二日間の道のりを経て、ようやく下？城へと着いた。城門を守備している兵士に自らの身分を明かし、兵士が確認を取った後、ようやく城の中へと入れて貰う。

こちらです、と董卓軍の装備を身に付けた兵士に案内された場所に向かうと、赤毛で二本のくせ毛が特徴の女性と、その隣に小さな女の子がいた。

「お初にお目にかかります。袁術軍が将の一人、紀霊と申します。此度はこのような交渉の席を設けて頂き、ありがとうございます」

「ん、良く来てくれたのですぞ。ねねは陳宮、そしてねねの隣におられるのが呂布殿です。こちらもそろそろ兵糧が尽きそうだったから、助かったのです」

…驚いたな。まさかあの呂布が、こんなに可愛らしい外見をした女の子だったなんて。実際に会うまでは、筋骨隆々の姿とかを勝手に想像してた。陳宮だってそうだ。俺は勝手に、ちっちゃいおっさんみたいなのを想像していた。

「そうでしたか。…では、率直に聞きます。貴女方は今、何人分の兵糧が必要ですか？」

「…約四千です。ですが、そんな量——」「すぐに用意できますよ」
な、何ですとー！？」

「今回の交渉において、我が軍の誠意をお見せする意味も込めて、約五千人分の兵糧を持参して来ました。我が軍と同盟を結んで頂けるのであれば、今すぐにでも城内に搬入させることが可能です」

「……でも、袁術は信用出来ない」

今まで一言も口にしなかった呂布が、急に言葉を発した。先の一件では敵同士あり、尚且つ連合の発起人のうちの一人として名を連ねた美羽様に手を貸すのだから、言い表せないような感情が呂布の中で渦巻いているのだろう…。もしくはそうじゃなくて、渡された兵糧に毒が仕込まれているのかもしれないと、こちらを疑っているのかもしれない…。どちらにしろ、美羽様が信用できないのなら、それ以外のものを信じて貰えば良い。

「…なら、先に兵糧をお渡しします。もちろん、毒などは一切入ってはいません。それに関しては、俺の命に替えて約束致しますでしょう。ですがもし、たった一人でも身体に異変が起きたのなら、俺の首を差し出します。それでも、信じて貰えませんか？」

「…ちんきゅー」

陳宮に声を掛けると、一度だけ頷いた。どうやら、俺の態度で何とか信じてくれたらしい。

「了解なのです！ 紀霊殿、我らは貴方に力をお貸ししますぞ！」

「良かった…ん？ 今、貴方って言いました？」

「……袁術は、やっぱり信じられない。でも、お前は信じる」

「そういうことなのです！ ですから、我らはこれより紀霊殿の指揮下に入らせて頂きますぞ！」

…何か、俺の部隊だけ強くなり過ぎてね？ まあ、強くなるのは良いことだけぞさ。

「そうですか。じゃあ、二人からの信頼を預かるのですから、俺の真名を二人に預けておきましょう。俺の真名は、八雲と言います」

「……恋は、恋」

「ねねは、音々音ですぞ。ねねと呼んで下され！」

「じゃあ改めて…恋、ねね、これからよろしく願います」

二人と握手を交わし、これから共に戦っていくことになった。そして、恋はこんな可愛らしい容姿をしているのに、食べる量は軽く十人前という何ともまあアンバランスな事実を知ったのは、他でもない…。

Side：一刀

桃香が徐州の州牧に就任してから、早くも一ヶ月が経った。この一

ヶ月は、生産高や産業の状況を把握するためだけに消費された。でも、おかげで色々知ることが出来た。朱里からの報告によると、この生産力は平原よりもはるかに高く、鉄や銅の産出が可能だということ。人口も多く、交通の便も良いことから、力を蓄えるのに適した豊かな土地だということだ。逆に言えば、それだけ治世が難しく、狙われやすいという事を意味すると、雛里は言っていた。

「なら、速急に軍備の拡張をしなくちゃいけないな」

「…だが主よ、拙速な徴兵は民が不満を抱く元となる。上手くやらんと、すぐに沈没してしまいますぞ？」

「うーん、そうか…。朱里と雛里の意見は？」

「私達の意見としては、内政をして国力を充実させつつ、徐々に軍備の増強を図るしかないかと…」

二人がそう言うなら、やっぱりそうするしか無さそうだな。

「でもさ、その二つを同時に進行させて行くのって、すごく難しいか？」

「それはそうですよ。背反する二つの命題を、達成させないといけませんから…」

「軍備とは、即ち兵。兵というのは、基本的には非生産階級ですから、兵を増やせば生産力は必然的に落ちて行きます。さすがに、簡単なことではありませんよ…」

兵を増やせば生産力は減り、生産力を増やせば兵が減る。これはど

うにか出来ないだろうか…？ いや、皆で力を合わせれば、何とかやっつけていけるはずだ。皆もそう思っ、俺の下に居てくれているはずだし…。

「…今は、難しいと言っても仕方ない。とりあえず俺と桃香と朱里は、内政に力を注いで、雛里と愛紗と星と鈴々の四人は、軍備の方に力を注いでくれ。定期的に報告しあっ、それによって微調整を加えて行くっ、感じで行こう。それで…良いかな？」

「問題ないと思います」

「よし！ じゃあそれを基本方針に——」

その時、兵士が玉座へと突然入っ、来た。もしや、もうどこか攻めて来たんだろうか？ 俺達の間、緊張が走る。

「申し上げます！ ただいま城門にて公孫贇様が、多数の兵を引き連れ、保護を求めていらっ、やるのです！」

「何だっ？ すぐに白蓮をここに通してくれ！」

「は、はっ！」

兵士に連れ、来られた白蓮は、酷く疲れた顔をしていて、鎧のあちこちに、赤や黒の斑点がいくつもあっ。話を聞くと、袁紹の奇襲に遭い、遼東の城を全て落とされ、らしい。そして、兵達と命からがらここまで逃げて来たと言っのだ。本人は急に転がり込んで来て申し訳なさそうにしていたけど、俺達は一度、白蓮に世話になった身だから気になっ、していない。むしろ、白蓮が生きていたことを喜び、仲間になっ、くれることを歓迎していた。

全て話し終えると、緊張の糸が切れたのか、その場に倒れ込んでしまい、兵達によって、空いている部屋へと運ばれて行った。

白蓮が運ばれてから直ぐ、今度は間者が入って来た。今度はいったい何だろうか？

「報告いたします！ 何者かが国境より領内に侵入！ 現在は、彭城より南方に位置する下？へと進行しております！」

「数は！？」

「およそ五百。しかし、運ばれている兵糧の量があまりにも多く、少なくとも四千は賄えるものかと思われます！ それと、『紀』と書かれた牙門旗も掲げられておりました！」

「何だと！ ご主人様、どういたしますか！？」

下？つてたしか、呂布がいた場所じゃなかったか？ もし本当に呂布がいて、あいつの狙いが呂布と手を組むことなら、あとあと面倒だ。その可能性がある以上、二人が会う前に叩いておかないと！

「皆、出陣準備だ！ 俺達にとって良くない方向に働く可能性がある！ そうなる前に、危険の芽を摘んでおこう！」

「ご主人様、相手は五百程度ですよ？ 全員で行かなくても…」

「いや、ある程度の主力は必要になると思う。今紀霊のやつが向かっている場所には、俺の知ってる史実通りなら呂布がいるかもしれない所だ。断定は出来ないけど、最低でも愛紗と星と鈴々には出て

貰わないといけない。あとは朱里にも来てもらって…桃香と雛里は、念のためここに残っていてくれ！」

「了解だよ、ご主人様♪ 愛紗ちゃん、星ちゃん、鈴々ちゃん、ご主人様を守ってあげてね？ 朱里ちゃんも、ご主人様達に力を貸してあげて？」

「お任せ下さい、桃香様。ご主人様のことは、我らが必ずや守ってみせます！」

俺達は一万弱の兵士を連れて、下？へと部隊を進めた。連合の時は、苦汁を嘗めさせられたんだ。この借りは、必ず返してやる。そう決心して出撃したが、この出撃が自らの首を絞めることになるうとは、この時は思いもしなかった…。

群雄割拠、乱世の開幕（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

利のある策略、利の無い戦

時間は、紀霊が城を出た時まで遡る…。

S i d e：雪蓮

連合解散から一月…。洛陽での復興作業とたまたま見つけた玉璽を使っての噂が功を奏したのか、大陸各地の庶人から高く評価された。それにより、黄巾党を討伐した頃と比べて、人も援助も格段に多くなった。そろそろ、私達の戦いを始める頃ね…。

連合に参加させなかった蓮華は今、江東で小蓮と共に民に偽装化して身を隠している。理由は、蓮華が見出した呂蒙とかいう子の策を実行しているため。あとは、江東で農民による一揆が起きたと袁術ちゃんに報告が届けば、鎮庄のために必ず私達が駆り出される。そして、鎮庄に行くと見せかけて偽装している蓮華達と合流し、反転して一気に逆撃するっていう算段になっている。

そのための仕込みの方は、冥琳がやってくれたからほぼ完了しているし、決行の日取りも蓮華達に知らせてあるから、あとは袁術ちゃんに一報が届くのを待つだけ…。

そんな時、最大の好機を告げる報告が入って来た。

「孫策様！ 周瑜様！ 早急の報告がございます！」

「どうした？」

「はっ！ 紀霊殿が大量の兵糧を持ち、城から出発されました！ 方向から考えるに、豫州もしくは徐州に向かうのではないかと思われそうです！」

「そう。ねえ冥琳、これって最高の好機って思わない？」

「ええ。今袁術に一報が届けば、確実に我らの有利に働くでしょうね」

たしかに紀霊は袁術ちゃんの部下だけど、あまり殺したくはない。彼は今までずっと、私達に良くしてくれたから、出来れば仲間になつてほしい。それが無理ならば、せめて敵対はしたくない。それに、何故かは分からないけど、冥琳とも気が合うみたいだし…。だから、城を空けてくれているのは助かる。

「…冥琳、来るわよ」

いつもの勘が、私に知らせてくれた。何が、と聞き返す冥琳の聲に被せるように、館の外から複数の蹄の音が聞こえて来る。袁術ちゃんに、一揆の一報が伝わったことを知らせてくれる蹄の音が…。冥琳も、その音で納得してくれたみたい。

「いよいよ、孫呉の大地を取り戻す時が来たわ」

「そうね。雪蓮、分かっているとは思いますが、ここから先は貴女の演技に掛かっている。…頼むわよ？」

「了解」

ああ、早く一揆の鎮圧命令を出しに来てくれないかなあ…。

Side：七乃

八雲さんが呂布さんと交渉するため城を出て行つてすぐ、兵の一人が玉座の間に慌てて入つて来た。もう、せつかくこれから美羽様の蜂蜜水を嬉しそうに飲んでいるところを眺めようと思つてたのに……。

「申し上げます！ 江東の各地で、農民達による一揆が発生致しました！」

「なんじゃとつ！？」

「現在、江東の各地を占拠しつつ、この城へと向かつて来ております！ その数はおよそ十万ですが、今後も増えて行くと思われます！」

「ぐぬぬー！ たかが農民風情が、妾に刃向かうとは良い度胸なのじゃ！ 七乃、すぐに鎮圧に向かうのじゃ！」

八雲さんに基本任せつきりだったからあまり分らないけど、そんな一揆が起きるような治世はしてなかったと思うんだよねえ……。それにしても、十万以上かぁ。八雲さんがいないと鎮圧するの大変だし、適当に答えちゃおうつと。

「ええゝ。無理」

「はやっ！？」

「いやいや。農民とはいえ、十万人相手に戦うなんて私でも無理ですよ。うちで一番の戦力になる八雲さんは、今さつき呂布さんを交渉しに行っちゃいましたし…。それにほら、私ってば基本的に城攻め専門？ 大量生産した衝車で、一気にドーンッ！ って、戦い方しか出来ませんしい」

「むう。ならどうするのじゃ？」

ああ、美羽様ってば怒った顔も可愛いんだからあ。もうちょっと見ていたいけど、続きはまた別の機会にしてくちゃね…。

「まあ、美羽様ってばうつかりさん♪ こんな時こそ、美羽様の剣であり盾でもある孫策さんの出番じゃないですかあ？」

「おお、そうじゃった！ 孫策のことをすっかり忘れておったわ。それじゃ七乃よ、さっさと孫策に命令するのじゃ！」

「了解でえゝす」

美羽様の命令で、孫策さん達の屋敷へと向かった…。

説明は、以下省略！ ほらそこ、メタな発言とか言っちゃ駄目ですよあ？

「——というわけですね。袁術様は暴徒の鎮圧をお望みなんです」
♪ 当然、行ってくれますよね？」

「はあゝ…」

孫策さんは、呆れ返ったような顔をしている。私、何か変なこと言った？

「あれ、どうかしましたか？」

「いや……張り合いがない相手って、本当に疲れるものだなあって思ってたね」

「おおー！ 庶人達に英雄とか言われて良い気になっちゃってる、孫策さんらしいお言葉ですねー」 暴徒なんて、張り合いがない。うんうん、その気持ちは、よく分かりますよあー だけど、袁術様のご命令ですから、すぐにでも出撃して貰えますか？」

「…了解。全ての兵士を連れて行くけど、問題ないわね？」

「相手は十万人って話ですから、当然問題ないですよー」

そして、あわよくば孫策さん達の力が減ってくれば、こちらも万々歳ですから。

「分かったわ。じゃあ袁術ちゃんに、頸を洗って待ってなさいって伝えておいて？」

「はあーい」

首を洗ってってことは……お風呂にでも入ってゆつくり待っておけてことかなあ？ とりあえずお城に戻ったら、美羽様と一緒にお風呂に入ろつと…。

Side：雪蓮

張勳が帰ると、隠れて話を聞いていた皆が出て来た。

「開いた口が塞がらないとは、このことね。全く……」

「楽だから良いけどさー、最後の皮肉にも反応してくれないんだもん。何だかつまんないわね…。まあ良いや、興覇、幼平！」

「はっ！」 「はいっ！」

「移動の準備、よろしく頼むわね」

「「御意！」」

命令を出すと、二人は迅速に兵達を動かして準備を進めて行く。

「じゃあ私は、兵站の方を担当しますね」

「頼む。準備が出来次第、すぐに出陣するでしょう。白怜殿がいつ戻って来るか分からんからな…」

「りょかい」

その後すぐに準備が整った私達は、蓮華達と合流するために屋敷から出陣した。さあ、紀霊が戻って来る前に、ささっと城を落とすようにしましょうか…。

S i d e : 八雲

何か嫌な予感らしきものがしたが、きつとまた美羽様が我が儘を言いまくっているだけだろう。

恋とねねの二人に、あとは二人が率いていた大勢の兵達と共に、寿春城へと戻っている最中…董卓軍の兵士の一人が、恋の名を呼んで来た。

「呂布將軍、こちらへ突撃して来る砂塵が確認出来ますが、いかがしますか？」

「……様子を見る。迎撃準備、急ぐ」

「了解しました！」

兵士が去って行くのを見送り、こちらでも少数ながら迎撃準備をした。

「今の呂布殿に敵などいないと言うのに…。どこの誰かは知りませんが、突っ込んで来る奴は余程のバカですな…」

「…この辺りだと、劉備さんのところかもしれませんね？ そういえば、虎牢関では恋とねねの部隊を、劉備さんたちが敗走に追いやつたと聞いてますけど？」

「むむむ、それは違うのです！ 呂布殿は、少しでも多くの兵達を逃がすために足止めた後、退却したに過ぎません。それに…関羽と張飛と趙雲は、三人がかりで戦っても呂布殿には刃が立たず、逆に呂布殿が見逃してやったのですぞ？ それなのに呂布殿を倒したなどと言うとは、おこがましいにも程があるのです！」

それは敗走したと言っんじゃないかと思いつつ、関羽達を圧倒した件について恋に聞いてみる。

「恋、本当に一人であの三人を？」

「……………」

恋は、何も言わずに頷くだけ。さすがと言っべきだけど、どういう強さをしているんだ。いずれは五虎將軍に名を連ねることになる三人相手に、情けをかけることが出来るなんて…。俺なら、誰か一人相手でも勝てるかどうか怪しい。

「紀霊將軍、砂塵の正体が判明しました！ 牙門旗を見るに、関羽、張飛、趙雲の三人の様です！ 兵数は、一万程かと」

「ご苦労様」

下がって行くうちの兵士を横目に、部隊をどう展開して行くかを考える…あ、軍師がここにいたんだった。

「ねね、敵はこっちの二倍はいますけど、どうしますか？」

「……………じゃあ、こんな方法はとうでしょう？」

まずは、とねねが説明を始める。その内容はこうだ。まずは巨大な『凸』の形で陣を組み、左翼は俺で右翼が恋、中央の指揮はねねが受け持つ。作戦としては、まず最初に恋が敵の左翼を撃破、制圧する。すると敵は正面と右翼に集中することになり、こっちを分断して各個撃破するために自然と敵が正面へと集中する。その攻撃を正

面の部隊が少しずつ後退しながら受け止めている間に、左翼の俺が敵右翼を撃破して敵を包囲、残った敵部隊を背後や横から攻めて殲滅するというものだ。

「たしかに、上手くはまれば勝てそうですけど、ねねの部隊だけで猛者達を防ぎ切れますか？」

「それは分からないのです。なのでこの策が成功するかどうかは、呂布殿が最初に撃破する敵の数と、八雲殿がどれだけ早く敵の右翼を制圧出来るかに掛かっているのです！特に八雲殿の方は一秒でも早ければ、それだけこちらの負担も減りますからね」

思っていた以上に期待されていた。まあ、恋ほどじゃないにしろ、その期待には応えないといけないな…。

「あと提案なんですけど、恋の牙門旗は最初から掲げないでもらえますか？」

「何故ですか？」

「恋の牙門旗を見つければ、敵の数を減らす前に右翼へ敵が集中してしまう可能性があります。そうなれば、今回の策も失敗してしまうかもしれない。それを避け、尚且つ恋の牙門旗の効果を最大限生かすためには、ある程度敵を撃破したところで、急に掲げた方が良さと思うんです。もとよりこちらの数は敵より少ないんですから、それくらいの奇襲染みたことはあっても悪くはないでしょう」

「…たしかに。じゃあ呂布殿の旗は、途中で掲げることにしましょう」

納得してくれたところで、恋が眩く。

「……来た。二人とも、準備」

その言葉が表す通り、さつきよりも砂塵が高く舞い上がっている。急いで準備しなければ、先手をみすみす渡すことになる。

「それじゃ二人とも、頼みましたぞ？　呂布隊、陳宮隊、配置に付くのです！」

「紀霊隊、こちらにも配置に付くぞ！」

少数精銳の強さを、その身をもつてとくと味わってもらおうじゃないか。でも配置に付く前に、ねねに一つだけ入れ知恵をしておいた…。

S i d e : 愛紗

敵の部隊が確認できた。報告にあつた通り、紀霊の旗がある。それ以外に見えるのは、『陳』の牙門旗のみだ。呂布の旗は確認できなかったが、油断は出来ん。本陣の指揮を朱里に任せ、私は正面を攻め、鈴々が左翼、星が右翼を攻めることになった。

「敵の手勢はこちらより少ないからと言って、何をして来るかわからん。油断だけはするなよ！　全軍、突撃い！」

怒号と砂塵を巻き上げて、敵部隊へと突撃して行く。すると、敵の前線で横一列に並んでいた弓兵が、一斉に矢を放って来た。放たれた矢は弧を描き、次々とこちらの兵士に突き刺さる。だが、次の弓

を射る前に、近付いてしまえば問題は無い…はずだった。

「うわあ！」

「ぎゃあ！」

「いてえ！ いてえよお！」

敵の弓兵は、一列ではなくその後ろに、何列も発射準備をした状態でしゃがんで待機していたのだ。矢を射終えた弓兵はすぐにしゃがみ、それと同時に後ろの弓兵が立ち上がって矢を射っていく。それが終わればまたしゃがみ、後ろの兵が立ち上がって矢を射るの繰り返し。ようするに、間髪入る隙も与えてくれはしない矢の波状攻撃だ。

「くっ！ 生意気な！」

敵の攻撃で、こちらの負傷者は見る見るうちに増えて行く。これでは、徒に兵を減らすだけ。こういう時こそ、私が先陣を切って対処しなければ…。

「これしきの攻撃で、私を止められると思うな！ でやあ！」

「ぐわあ！」

「がはっ！」

飛んでくる矢を悉く叩き落として行き、弓兵達を一掃する。これでようやく進めると思った時だった。

「か、関羽様！ 張飛様が率いる左翼が、もの凄い勢いで瓦解しております！」

「何だと！？ くつ、鈴々は何をやっている！」

「そ、それが、深紅の呂旗が左翼に突如現れまして…」

「な、何だと！？ それは本当か！」

「はい！ このままでは、左翼が完全に崩壊し、敵に制圧されるのも時間の問題かと！」

不味いな…。三人がかりで勝てなかった呂布を、鈴々一人で相手に出来るわけがない。だが、ここで鈴々の助太刀に向かえば、正面の敵に押し返されてしまう。星が敵の左翼を制圧してくれば、まだ何とかなるかもしれん…。

「…我らはこのまま前進して正面の敵を押し切り、その後、呂布の部隊の背後を突いて鈴々と合流する！」

「…「応っ！」」」

正面に見えるのは、軍師である陳宮の旗。そうそう我らの攻撃に耐えきれぬものではないだろう。そう判断して突撃した。その結果、敵は少しずつ後退して行く。

「よし、このまま押し切るぞ！ 全員、命を惜しむなよ！」

このまま戦局を保てれば、一気に正面の部隊を撃破できるし、鈴々の救援にも行ける。私はそう思っていた。

だが、私達は後で思い知ることになる。ご主人様の判断で仕掛けたこの戦に、何一つ利は無く、そして勝利の可能性すら存在しなかったことを…。

利のある策略、利の無い戦（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

重すぎる敗北

Side：八雲

恋が敵の左翼を崩して、敵の正面部隊はこちらを分断させようと、躍起になって戦線を押し上げて来ている。今のところは、ねねが立てた作戦通りだ。ならそろそろ、うちも動くでしょう。連れて来ているのは、騎馬隊が三百に、弓騎馬隊が二百だ。

「弓騎馬隊、各自の箠えびらには矢が何本ずつ入っている？」

「各自、二十本入っております」

一人二十本で、騎馬の数が二百だから…単純計算だと四千本。矢の当たり所やこつちが撃破されることを考えると、全部矢を放つても撃破出来るのは、良くても二千弱つてところか。

「よし、ならば弓騎馬隊はまず半分に別れる！ その後、片方は敵部隊を中心に右回りに、もう片方は左回りに馬を疾走させながら敵部隊にありつたけの矢を見舞って混乱させてやれ！ 矢を余らせようなどと思うな？ それは、驕りの始まりだ。分かっているな？」

敵の右翼を制圧した後、正面の敵を恋達と包囲殲滅しようにも、手を抜いたことで右翼が制圧出来ないんじゃない意味がない。矢が無くなれば、弓騎馬隊も普通の騎馬隊に戻るんだから、初めから出し惜しみする必要なんてない。

「はっ！」

「よし。じゃあ騎馬隊は、五人一組を作って敵部隊に突撃を掛ける！特に、弓騎馬隊を攻撃しようとした歩兵は見つけ次第、すぐに蹴散らせ！敵兵の実力は未知数だから、気を引き締めて掛かれよ！」

「……はっ！」「」

「よし。紀霊隊、行動を開始しろ！」

雄叫びを上げて、兵士達は敵部隊へと突撃して行く。早速、指示通りに弓騎馬隊が二手に別れ、敵兵達を左右両側から攻撃していく。見た感じ、矢の命中率も悪くなく、肩や足に刺さって良い感じに敵の動きを制限している。中には、運悪く胸や頭に刺さった者もいるようだけど…。

そんな中、うちの騎馬隊を薙ぎ倒して突出して来る人が見えた…と言っても、あの混戦の中、抜けられる人など一人しか思い付かない。

「…連合以来ですから、一ヶ月ぶりってどこですかね、趙雲さん？で、今日のご用件は？」

「鈴々の救援に、早いとこ向かわせてもらおうと思ってな。紀霊殿、覚悟！」

——その刹那、紅い槍の切っ先が心臓を一突きにしようと放たれる。

「くっ！？」

すぐに刀を鞘から引き抜き、かろうじて防ぐことが出来た。

「ほう、我が一撃を防ぐか…。さすがに、猛将と言われた華雄とやりあっただけはあるようだ」

「いやいや、今のはかなり危なかったですよ？」

「ふ、冗談を——！」

さつきよりも、さらに鋭い攻撃が飛んで来る。しかも今度は心臓狙いの単発じゃなく、緩急を付け、様々な急所を狙った連続攻撃だった。その攻撃にも徐々に慣れて行き、確実に一撃一撃を刀で往なしていった…と自分では思っていたけど、所々にうつすらとした傷痕が付けられている。きつとこれが、俺と彼女の地力の差ってやつなんだろう。

それからまた、数十合ほど打ち合った……と言っても、こっちは防戦一方だったけど。

「意外にしぶといですな。まさか、貴方の武がここまでのものとは思ってもよらなかった」

「趙雲さんにそう言われると、個人的に悪い気はしませんね。それと、一つだけ良いですか？」

「…何ですかな？」

「俺を倒すのに集中しているところ悪いんですけど、そろそろ部隊の方に指示を出してあげないと、そちらの兵士達が全滅しますよ？うちの兵士達に、趙雲さんがどんな評価を下されているのか分かりませんが、あまり嘗めてもらっては困ります」

趙雲の後ろには、負傷したり命を落したりと、様々な理由で地面に倒れている兵士達の姿がちらほらと確認出来る。その大半は、劉備軍の兵士達だった…。

S i d e : 星

彼の言葉で後ろへと振り返ると、信じ難い状況が視界に入ってきた。こちらの兵数は二千五百ほどいて、相手は騎馬のみで五百程度。油断したわけじゃないだろうが、こちらの方が明らかに数は多いのだし、すぐに撃破できると思っていた。

だが、実際はどうだ？ 自分達の半分にも満たない相手に、劣勢を強いられているどころか崩壊一步手前にまで追いやられている。その主な原因を生み出しているのは、あの弓矢を持った騎馬隊だ。あんな騎馬隊、伯珪殿下の下で客将をやっていた頃はおるか、連合でもそれ以前に大陸を旅していた時でさえも見聞きしたことすら無い。

「まさか、こんなことが…」

「……勝ちを急ぎ過ぎましたかね？ 呂布さんの存在を、過剰に意識し過ぎたが故にでしょうけど…」

「くっ！」

自分が反省すべき点を的確に突かれ、咄嗟に槍を彼に向けて構え直す。だが、後方から蹄の音が響いて来たため、我が軍のものかと思いい、構えを解いたが、それは彼の部隊の兵士のものだった。

「紀霊將軍、敵部隊の鎮圧がつい先ほど完了しました！」

「そうですか。こちらの被害と、敵に与えた損害は？」

「弓騎馬隊は六十騎、騎馬隊も百四十騎ほどやられました…。ですが、右翼に展開していた敵兵の大半が、死亡ないし重傷によって行動不能。行動可能な者も、こちらと戦う意思は既になく、武装放棄して逃亡する者や、降伏を宣言して来る者が続出しております」

あれだけ兵士がいたにも関わらず、紀霊殿の部隊に与えた損害は半分以下。これは単純に、我が軍の兵の実力不足が招いた結果であり、勝ち急いで指揮を放棄して一対一に固執してしまった己の責任でもある。そして最も大きな敗因は、敵の騎馬隊一人一人の錬度の高さだろう。

「分かりました。じゃあ、逃げ出した兵については捨て置いて構いません。降伏した兵については、いつも通り縄で縛っておいて下さい。それと、乱暴はしないようにと」

「了解しました！」

新たな指示を与えられると、再び蹄の音を響かせて反転して行く。

私も、一度で良いからあのような兵士達を指揮してみたいと思った。

…多分、叶わぬことだろうがな。

「そんなわけで趙雲さん、俺との勝負はそちらの圧勝でしょうけど、戦ではこちらの圧勝のようですね」

「……そうですね。今や私は、たった一人の兵すら率いておらぬ孤

独の将。対してそちらは、まだ半分以上も兵が残っている。今からこの場で貴方と一騎討ちを再開しても、そう経たぬうちにそちらの兵達がこの場へとやって来ることでしよう。そうなれば、私に勝ち目はない。よって、私も降伏するでしょう。そのかわり、我らは今後どういった扱いをされるのか、お聞きしてもよろしいかな？」

「別にとつて食おうとか全然思っていないんで、安心してもらって良いですよ？　ただ、一つだけ聞かせて欲しいことがあります」

「何ですか？　ちなみに、私の男性経験については答えませんぞ？」

「貴女が誰かに抱かれてようが、抱かれていまいが、そんなことは別にどうでも良いです。趙雲さんの男性経験なんて俺は一切興味ありませんし、最初から聞く気もありませんから。俺が聞きたいのは趙雲さんが今仕えている主達について、どう思っているかです。それによつては、こちらの取るべき行動が変わつて来ますから」

面と向かつて、しかも真顔でそう言われると、さすがの私でも傷付きますぞ…？　それにしても、今の主達について…か。正直に言つてしまうと、期待外れというところだろうか。それとも、そんな期待外れを選んでしまった己の落ち度を責めるべきなのか…。

まず桃香殿には、曹操や孫策のような英傑としての器や、王としての風格があるわけでもない。だが、二人にも負けない仁徳がある。これが、人々を惹き付け、桃香殿と共に歩みたいと思わせる。だがやはり、劉玄德という人間は優し過ぎるために、王としては不向きな御人だ。それに、今後はその優しさが仇になりそうな気がする。

そしてもう一人の主である一刀殿も、出会った当初はまだ良かった。

天の御遣いとして、少しでも多くの民を救ってやろうという気概や努力がちゃんと感じられた。だが？水関での戦いを境に、主は少しずつ変わられていった。その主たる原因は、今日の前にいる紀霊殿……主はきつと、心のどこかでこう思っているはずだ。自分は天の国から来た人間なのだから、紀霊あいつよりも劣っているはずが無い、と……。だから此の度の戦は、それを証明するための主の我が儘と言っても過言じゃないと思う。

だが私は、主よりも紀霊殿の方が優れているとこの戦を通じて感じていた。まあ、確信などという大それたものがあるわけでも無ければ、自らの言葉できちんと言い表せるものでも無いが……。

「……一言で片付けるなら、私は主選びに失敗したのやもしれませぬな」

もしあの日の夜、主が紀霊殿に処分されていたならば、こんな無益な戦が起こるようなことも、主の我が儘で多くの兵達が命を落とすことも無かったのだろうか……？

「そうですね……。なら、趙雲さんさえ良ければ、これからは敵としてではなく、仲間として共に戦ってはくれませんか？」

「もしや……私を引き抜くおつもりですか？」

「駄目、ですか？　これから先の乱世では、呂布さんを仲間に出来たとは言えども、まだまだ人材不足なのは否めません……。特に急務なのは、兵の指揮が出来て腕も立つ貴女のような方を、うちの軍に少しでも招き入れる事なんですよ。まあ、趙雲さんが仲間になってくれれば、一番良いんですが……。あとは、内政とかが得意な軍師が

数人いてくれたら良いなっと思っていますかね」

…ふむ。もしかしたら、桃香殿の下よりも活躍できるやもしれんな。それに、あの飛將軍と謳われた呂布とも共闘していける。それはつまり、己の武を磨くまたとない好機。

ここ最近の主の行き過ぎた言動に、此の度の戦…さすがに私もうんざりしていたところだ。愛紗達には悪いが、見限るには頃合いなのかもしれん。それにやはり、誰かに必要とされているのは何だか悪い気がしない。

「……良いでしょう。ならば今この時より、この趙子龍の槍、紀靈殿に預けましょうぞ」

「あ、ありがとうございます！」

さあ、桃香殿達から鞍替えして、新しく我が主として選んだ紀靈殿の下では、果たしてどのような戦いが私を待っているのだろうか？
今から楽しみで仕方が無い…。

S i d e : 愛紗

もう少し、あともう少しで正面の敵部隊を押し切れる。あとは星が左翼の紀霊を打ち取れば、呂布の部隊を背後から攻撃し、鈴々の救援にも向かえる。そう感じていた時だった。

「か、関羽様！ 呂——」「……邪魔」ぎゃあ！？」

「どうし——なっ!？」

鈴々の部隊と戦っていたはずの呂布が、私の後ろに立っていた。そのことを知らせようとした兵士は、私に声を掛けると同時に、呂布の持つ戟によって一文字に斬り捨てられた。しかし呂布は、斬った兵士に興味のかけらも示さず、私に向かって『誰か』を投げ捨てて来た。放り投げられたそれは、二三度転がって止まった。その正体は……いつも私と共にいて、腕白で生意気盛りの、私の妹の様な存在。

「り、鈴々？　鈴々！？」

しかし、返事は無かった。その小さな身体には、大小様々な切り傷や刺し傷、かすり傷など、とにかく色々な傷が至る所に存在しているが、脈を確かめるとまだ息はあるようなので一安心だ。

鈴々は呂布に負けたことが相当悔しかっただろう、気を失いながらも蛇矛だけはしっかりと握り締めていた。

「……念のため聞くが、これはお前がやったのか？」

「……なかなか強かった。でも、恋には勝てない」

「……そうか」

もっと早く、私が正面の敵部隊を押し切れていれば……。目の前の敵に固執せず、すぐに救援に向かっていれば……。もう二度と戻ることには無い過去を悔み、傷だらけになった妹分の姿を見たことで、怒りに肩が震える。妹分の無念を晴らさんがために、自然と偃月刀を握る手にも力が込められる。

「呂布、貴様だけは…絶対に許さん！」

「……許される覚えも、筋合も無い」

「よく言った。覚悟しろ！ でええい！」

得物を構え、呂布へと斬りかかるうとしたその時――

「待て、愛紗！」

聞き慣れた声に、突然呼び止められる。その声の主は、星だった。

「星！？ 貴様、そこで何をしている！？」

「見ての通りだ。この戦は我らの…いや、既にお前達の負けだ。大人しくこちらへ投降しろ」

投降しろ…だと？ 何を言っているんだあいつは…。

「……どういう意味だ？」

「言葉のままの意味だ。察しの良いお主なら、それがどういうことか分かるであろう？ 何故私が、敵だったはずの紀霊殿が傍にいないのに攻撃しないのかを…」

「星…まさか貴様、ご主人様と桃香様を裏切るつもりか！？」

「裏切ったのではない。見限ったのだ！ 愛紗とて、最近の一刀殿の言動は目に余るものと思わんのか？ 紀霊殿にいらぬ対抗心など燃やさなければ、兵達が無駄に命を散らすことも無かったのだぞ！

？」

「たしかに、ご主人様は？水関での一件以来、どこか変わられたのは認めるし、言動が目に残るというのも認めざるを得ん。だが我らが戦を仕掛けたのは、そやつがこちらの領内に侵入したのがそもその原因であらう！」

だが、ご主人様が先走ったのもまた事実。本来ならば、いきなり戦を仕掛けるのではなく、まずはこちらの領土に侵入して来た目的と理由を聞き、それがこちらを脅かすものであったなら、その時こそ奴らに戦を仕掛けるべきだった。

「たしかに、関羽さんの言い分にも一理ありますね。…じゃあそんな貴女に問いますが、どうして最初からこちらの目的を聞こうとせず、戦を仕掛けて来たのですか？」

「…ご主人様が、貴様の取る行動は今後、我らの脅威になりかねないと判断したからだ。我らは、ご主人様の言を信じて行動を起こしたに過ぎん。…逆に問おう！ 貴様が徐州に進軍して来たのは、どういった目的でだ？ 正直に答えてもらおうか！」

「呂布さん達との交渉のために、護衛と兵糧の運び役を兼ねた兵を、自ら率いて出向いただけですが？ それなのに、事情も聞かずに攻撃して来るなんて…。俺が貴女達に、攻撃する意思を見せましたか？ それとも、あれですか？ いっその機会に俺を殺して、賠償金の話ごと無きものにしようって魂胆だったんですか？ ……まあ、今となってはどうでもいいことです。それ相応の賠償を、貴女達に払って頂くだけのことでですから」

「…ちなみに、貴様の言うその賠償とは何だ？」

「無条件での、徐州の明け渡しを要求します。何か、文句ありますか？」

文句があるか、だと？ 文句なら、あるに決まっている。どうしてこやつに、徐州をくれてやらねばなんのだ！ 徐州は、我らが朝廷より賜った領地。そう易々と明け渡せるものではない。

「徐州をよこせだと！？ 冗談も、休み休み言ってもらおうか！」

「じゃあ今すぐ、賠償金を一括で払って下さいますか？ 今回の一件で受けたこちらの損害や迷惑料も加えとなると、今の劉備さん達じゃこの先六年分くらいの予算と同じくらいの額になりますか？ それでも良いなら、何も文句は言いませんよ。そのかわり、民の心は劉備さんから確実に離れて行くことでしょうけど…」

「くっ！」

徐州を明け渡せば、我らの居場所が無くなる。かと言って渡さなければ、国の予算は六年先の分まで無くなり、政を行うためには民から過剰な税を吸い上げねばなくなる。どちらを選んでも、我らに救いはない。

「…それ以外、という選択肢は無いのか？ 例えば、期限付きで我らが袁術に手を貸すとか…」

「……はあ、全くもって話になりませんね。趙雲さん、もっと話の分かる人はいないんですか？」

「そうですね…。本陣へ行けば朱里がいるし、彭城に戻れば雛里も

いる。その二人ならば、少なくとも愛紗よりは話が分かると思いますぞ？」

「じゃあその二人と、改めて話を進めるとしましょうか。またあの顔を見なくちゃいけないと思うと、今から気が重いな…」

その後、私は星の手によって拘束されて、まずは本陣へと連れて行かれた。私達の姿を見た朱里やご主人様は状況が把握できずにいたが、紀霊によって私同様に拘束された。意外にも鈴々だけは丁重に運ばれ、私達は城へと連れ戻されて行った。

私達は、仲間に見限られただけでなく、連れて行った兵達を悉く失うという最悪の形で敗北を喫したのだった…。

重すぎる敗北（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

一難去って、また一難……どころじゃない

Side：八雲

拘束した関羽達を連れて、彭城にある城へと歩いて行く。その途中、その様子を目の当たりにしていた民達は、どうしたものかとそれぞれ顔を見合わせていた。それもそうだろう、自分達の住んでいる土地の領主がご主人様と慕う人物とその領主の配下達が、見知らぬ男達に縄で拘束された状態で街中を歩かされているのだから。

城の前に着くと、一連の事態を聞き付けていた劉備と、目深なつばの付いた……主に魔女っ娘が被つていそうな帽子を被っている女の子がいた。二人の顔は、酷く心配そうな表情だ。

関羽の言い分に一理あると、本人の前で認めた以上、それなりの態度を一度とっておかないと、発言についての示しが着かない。ここはまず、謝罪から入るとしよう。

「連合の時以来ですね、劉備さん。まずは今回の件についてですが、呂布さん達との交渉が急を要していたものでしたので、そちらに使者を送ることを怠ってしまいました。そのことでそちらにご迷惑をお掛けしたことを、先にお詫び致します」

劉備に向かって、謝罪の意味を込めてお辞儀をすると、何故か向こうもつられてお辞儀して来た。この子、意外と天然なのか？ まあ、それが本当なのかどうかは、この際おいておこう。

「ですが、貴女方にも責めに帰すべき点はあるんですよ？」

「ふえ？ 何で？」

「何でって…。国境の警備隊が誰一人として来ませんでしたし、北郷さん達だって、どのような目的でこちらが領内に入ったのかを聞いただしもせずに、いきなり攻めて来られたんですよ？ まるで、俺達が不逞の輩だと言わんばかりに…」

「は、実際そうだろ？ お前は人の領内に無断でずかずかと入り込んで来たんだから、不逞の輩って思われたって、何もおかしくないじゃないか！」

北郷が、俺と劉備の会話に口を挟んで来る。こいつが絡んで来ると面倒なことこの上ない。

「そう仰いますけど、実際に軍を率いて出撃していたのは北郷さんですよ？ 本来ならば、貴方がその指示を出さなければならぬんですが…。それとも貴方は、配下の方達がその都度言って教えてくれなくちゃ何も出来ない、ただのお飾りさんですか？ もしそうなら、天の御遣いが聞いて呆れますねえ」

やれやれ、と北郷に背を向けて肩をすくめる。この時、本気で呆れ顔をしていたのはここだけの秘密だ。

「何だと！？」

不快感を露わにし、俺に突っ掛かろうとしてくるが、北郷を拘束しているうちの兵士によって、それは阻まれる。それでも北郷は、制止を振り切ろうと暴れながら俺を怒鳴り散らす。…これ以上、こっちの会話に口を挟まれても困るな。

「…時間は、無限じゃないんです。これ以上貴方と話しては、貴重な時間を無駄にする一方のようですね。劉備さん、誰か話の分かる方…この軍の軍師の方はいらっしゃいますか？」

すると、魔女つ娘帽子を被った少女が、一歩前へと出る。

「…あの、私がこの軍の軍師で、えと、名前は、鳳統でし……あう」最後の最後で舌をかんてしまったのが恥ずかしかったのか、それとも元々恥ずかしがり屋なのかは分からないが、名を名乗った途端に耳や頬を真っ赤にして俯いてしまった。

「趙雲さん、軍師は彼女だけですか？」

「いや。あそこで拘束されている女子もそうですよ、紀霊殿」

趙雲が教えてくれた子は、ベレー帽を被った女の子。そういえばさつきの子も、洛陽の前で話した時に一緒にいたな…。

「彼女の拘束を、解いてあげて下さい」

兵士に命令して、彼女の縄だけを解く。自由の身になった少女は、すぐさま鳳統へと駆け寄り、抱き締めあつて互いの無事を喜びあつていた。

「ええと、貴女の名前を教えてくださいませんか？」

「は、はい！ 姓は諸葛、名は亮、字は孔明と言います」

まさか、伏竜鳳雛が揃つて口りつ娘だとは思わなかった。身近にい

た軍師が周瑜のような知的な大人の女性だったからこそ、その落差が酷く大きいんだろう…。そういえば、七乃も美羽様も、元気でやっっているだろうか？

「あ、あの…どうかしたんですか？」

おっと。思いのほか、今とは全く関係ない思考に浸かっていたようだ…。

「あ、いえ、別に。ちよつと考え事をしていたものですから」

「それじゃ早速、本題に入りたいのですが…。ここだと込み入った話が出来ないので、どこか落ち着けるような静かな場所で話し合いをしたいんですけど、構いませんか？」

「「はい」」

二人が了承してくれたおかげで、話がすんなりと進んでいく。話が分かる人が相手だと、こんなにも気苦労なく会話が進むのか…。

「朱里も雛里、二人ともちよつと待った！」

…また口を挟んで来るのか。こいつは、空気を読むっていうことを知らないんだろうか。

「どうしたんですか、ご主人様？ 紀霊さんとの話し合いの内容なら、終わり次第、私と雛里ちゃんでお伝えしますけど…」

「いや、俺が二人に言いたいののは、そう言うことじゃなくてだな…。三人だけでそんな静かな場所へ行つて、そいつが急に朱里や雛里へ

襲い掛かって来たらどうするつもりなんだ！？ 誰でも良いから、見張りを付けた方が良いつて！」

「心外ですね。俺が子供に」「私はこれでも、立派な大人の女の子です！」…それ

は失礼しました。兎も角、俺がその日にあつたばかりの女性へ、すぐに手を出すような輩に見えると。貴方は、そう言いたいわけですか？」

「ああ、そうだ！ だから見張りを付けろ！」

駄目だこいつ。何かもう、いろいろと駄目だ。言うならば、ロリコンここに極まれりって感じだろう。もしくは、ホ。ト崩れの温室。郎つてとこだ。心配してもらっているはずの諸葛亮達でさえも、冷めた目で見つめている。でも、ここで時間を食うのはよろしくないし、ここはロリコンの言う通り、誰かを見張りに付けることにしよう。

「なら劉備さんに、見張り役をお願いしましょう。貴女がこの太守なんですから、話も聞けるし俺の見張りも出来る。一石二鳥なんですから、良いですよね？」

「……分かりました。そのかわり、腰にある武器はこっちで預かって良いですか？」

「もちろん、構いませんよ。こちらがしたいのは、賠償に関する交渉だけですから」

腰から得物である刀を鞘ごと抜き、どうぞ、と劉備に手渡す。それを受け取った劉備は、左手で鞘、右手で刀の柄と、簡単には奪われ

ないようにしっかりと掴んだ。

その後も、北郷が色々と煩かったが、全部無視して、城内にある一室へと案内された…。

S i d e : 桃 香

朱里ちゃんと雛里ちゃん、紀霊さんと私の四人で、適当な空き部屋に入る。まあ、私は紀霊さんの見張り役なわけだし、難しいお話は全部二人にお任せーって感じだから、楽にしよう。

「それじゃ、早いとこ始めましょう」

「そうですね。まずは、紀霊さん側の要求を教えてください」

「こちらは……徐州の無条件明け渡しを要求します」

「え、ちょ、ちよつと待ってよ！」

そんなことされたら、私達の住む場所が無くなっちゃう。義勇軍を興した時に、逆戻りしちゃうよ。しかも今度は、白蓮ちゃんにも頼めないし…。

「いきなり徐州を明け渡せって言われても、そんな一方的な要求は無理だよ！　ここは私達が朝廷から任された領地で…　それでもって私達が頑張った結果が形になった場所なんだよ！？」

「……今回の件も、そちらが初めから使者を送っていれば起こらなかったはずの戦です。それにも関わらず、徐州の明け渡しを望むの

は少し強欲過ぎるかと…」

おお！ 雛里ちゃん、良く言ってくれた！ これで紀霊さんも、少しは考え直してくれるかな？

「鳳統さん…。それは逆に考えれば、この軍の国境警備兵は誰も役目を果たしていないと、軍師自らが認めていると考えてもよろしいんですよね？ 誰一人として、こちらを制止しようとする兵士が来なかったのですし…」

「あわわ！？ それは…」

あれれ！？ 何だか、立場が逆転されちゃった。

「それだけじゃありません。貴女方は、下？に呂布さん達が逃げ込んでいたことや、あの辺り一帯の土地柄を把握していましたか？」

「あう…。実を言うと、徐州全体の生産高や産業状況が把握出来ただけで、これから本格的に徐州各地の領土調査を行おうとしていたところなんです…」

「…赴任してから一ヶ月弱。把握すべき事が想像以上に多いのは分かりますが、もう少し外にも目を向けることをお勧めします。それと下？は今、無法地帯と言っても過言じゃありません。これは単に、劉備さんの支配が下？に全く及んでないことを表しています」

うう、そうはつきりと目の前で言われると、やっぱり落ち込むなあ。ただでさえ私達は、朱里ちゃんと雛里ちゃんの二人に、抱っこにおんぶの状態なのに…。

「…そんな中、あの周辺一帯の治安が何とか保っていたのは他でもない、兵糧も尽きかけていた呂布さん達でした。けどそれが本来、どんな危険を孕んでいたのか…軍師のお二人なら、すぐに分かりますよね？」

「…兵糧を、自分達が生きていくための糧を手に入れるために、賊徒となつて周辺の村や町を襲う可能性が十分にあった…ということですよ？」

「その通りです。だからこちらも、使者を立てて通行許可の返事が返つて来るのを待たなくて、そんな悠長なことを言っていられる状況じゃありませんでした。急いで運ばなければ、罪のない人達が略奪行為に遭っていたかもしれないのですから…」

「そう考えると、紀霊さんはやり方は強引だったけど、結果的には呂布さん達の危機を救つて、間接的に周辺の村や町の人の被害も未然に防いだつてことになるのかな？」

「…そうですね。あとは、桃香様の名を下げずにも済みました。もし紀霊さん達が運んでいた兵糧が間に合っていなかったなら、おそろく下？一帯での桃香様の信頼は、危ぶまれていたと思います」

知らないうちに、私まで助けられちゃつてたのか…。これは何か、大きな借りを作っちゃつたって感じかな…。

「そこで一つ、提案というか、要求内容に変更があるのですが…」

「何でしょう？」

「先ほどは徐州を明け渡すようにと言いましたが、お互いに何かし

らの非がある以上、こちらでも要求する内容を下げた方が良いと思いまして…。まず絶対なのが、下？国のみ無条件での明け渡しとその後一切の不可侵。それと出来れば、内政に強い人材を数人ほど頂きたい。この要求ならまだ、東海郡、琅邪国、ろうしゃ彭城国、広陵郡の四つは劉備さん達の領地ですし、下？の調査をしなくて済む分、他の事に労力を回せるので、良いと思うんですが？」

「…たしかに、そうですね。どちらかと言えば、こちらの方が助けられているような状態ですし、それくらいまで妥協して頂けたのであれば…」

朱里ちゃんも雛里ちゃんも、何だか納得し始めちゃってるけど、さすがに領地を明け渡しちゃうってというのはどうだろう？

「ねえ、紀霊さん。どうしても、領地じゃなくちゃ駄目なの？」

「こちらとしては、別に領地じゃなくても良いですけど、それ以外に何で賠償出来るんですか？　ちなみに、期限付きでこちらに力を貸すだなんて、関羽みたいな戯言は言わないですよ？　ましてや、話せば分かるか思っているのであれば、それは論外ですよ？」

「うっ……」

見抜かれちゃった…。でも、愛紗ちゃんも私と同じようなことを一度は考えてたんだ。

「それと劉備さん。もしも金銭による賠償を選んだ場合、政を行うためには民から過剰に税を吸い上げなければならず、少なくとも五年から六年の間は、民のために民を苦しめ続けるという矛盾した治世を行わざるを得なくなります。そうなれば、人心は確実に劉備さ

んから離れて行くことでしょう。それでも、金銭での賠償を選びたいと思いますか？」

「ん、それは避けたいかなあ。私達が立ち上がったのは、力のない人達を苛める世を変える為だから、その私達が民の皆を苦しめちゃいけないと思うの。それだったら、皆を苦しめずに済む方を選ばなくちゃいけないわけだし…」

何だかんだで私達には、紀霊さんに要求を下げさせる以外に選択肢は無かったんだ…。

「じゃあ、交渉成立…ってことでよろしいですか？」

こればかりは仕方ないと思うし、朱里ちゃんや雛里ちゃんも、私の方を見て頷いている。

「……はい。私達は、紀霊さんの要求を飲みます」

「…良かった。どうやら交渉成立——」

突然、扉が乱暴に開けられる。扉の向こうにいたのは、銀色の軍服を着た袁術さんのとこの兵隊さん。紀霊さんを見るなり、いきなり前のめりに倒れてしまった。見れば、背中には何かで斬られた傷がある…。紀霊さんもその人と面識があるのか、慌てて駆けより抱き上げる。

「その傷は、いったいどうしたんだ！ お前達には留守を頼んであっただろう！？」

「し、將軍、一刻も…早く、本城へ…！」

兵隊さんの手が、震えながらもしっかりと紀霊さんの腕を掴んでいた。

「本城がどうしたと言っただけ!？」

「孫策が、反、乱を…。既に、城の周囲は、取り囲まれ…城が落ちるのは、時間の……問題——」

何とか最後の言葉を振り絞ると、兵隊さんの手がするりと力なく床へと落ちた。

伝えるべき事を伝えるべき人に伝えられたからか、兵隊さんの表情は満足そうだった。紀霊さんはもう動かない部下に、よく頑張ってくれたな、とだけ伝えて、私達の方に振り返る。

「…聞いての通り、本城が危機的状況ですので、俺はこれで失礼します。先ほどの決め事、くれぐれも破らぬようにお願いしますよ?」

「分かってますよ。はいこれ、返しておきますね?」

交渉の前に預からせてもらった武器を返すと、どうも、と会釈だけ済ませ、血相を変えて部屋から飛び出して行った…。

オマケ

一刀の暴走からどうやって再度陣営を纏めたのか、その過去視点が欲しいとのご要望がありましたので、?水関の戦い直前から洛陽で

月達を保護した直後までの過去視点を、桃香視点から見た日記形式（抜粋）でお送りしたいと思います。

○月×日

袁紹さんに、無理やり先陣を取らされるはめになった。それを皆に伝えたら、呆れて物も言えないような顔をしていた。それでも、皆で打開策を考えて、結束が強まった気がした。朱里ちゃん達には、相変わらずすごい苦勞をかけちゃっている。私も頑張らないと…。

○月×日

今日は昨日考えた作戦を展開しようとしていたら、袁術さんのこの紀霊さんって人が、先に華雄さんと戦い初めちゃって、ご主人様は私達が一騎討ちの邪魔は駄目って言っても、聞く耳を持ってくれず、そのまま兵と鈴々ちゃんと朱里ちゃんを連れて出陣しちゃった。それからちよっとして、華雄さんが紀霊さんに敗れて逃げに行ったって報告が入って来た。帰って来たご主人様は、なんかすごく不機嫌で近付きづらかった。その後は皆でご主人様を褒めちぎって、何とか機嫌を直してくれた。不機嫌になるくらいなら、最初から私達の言うこと聞いて、出なければ良かったのに。そしてこの日から、ご主人様が紀霊さんに対して対抗心を抱くようになった…。

○月 日

軍議の結果、虎牢関の戦いも先陣を任されることになった。ついでに、張勲さんの暴露話によって他の諸侯達からの評価はガタ落ちで、張勲さんからは莫大な慰謝料を請求された。朱里ちゃん達曰く、私達は完全に捨て駒扱いにされたらしい。そういえばその日の夜、ご主人様の姿が見えないなあとか思ってた探していたら、星ちゃんと一緒にどこからか戻って来た。何だか星ちゃんにいろいろと叱られてたけど、何だかちゃんと聞いてないみたい。それにしても、何で怒られてたんだろう？

○月 日

愛紗ちゃん達が、あの呂布さんを退けるといふ大金星を上げた。でも何だか、あまり嬉しそうじゃなかったな。それと結局、虎牢関の一番乗りも孫策さんに持つて行かれた…。あと、ご主人様にお尻を触られた。ちよつとびつくりしたけど、嬉しくなかったと言えば嘘になるかな…。

○月 □日

袁紹さんの命令で、洛陽へと先行させられた。そこで月ちゃんと詠ちゃんを見つけて、ご主人様の侍女として匿うことにした。ご主人様も相変わらずで、可愛い女の子を見ると、まるで呼吸でもしているかのように口説き始める。それで愛紗ちゃんが嫉妬するけど、そこはご主人様。ちゃんと私達のこと、言葉巧みに口説き直しちゃう。…ちよつと嬉しかったな。

それから少しして、袁紹さんのとこの兵隊さんが略奪行為をしようとしてたのを、皆で協力して防いだ。

顔良さんが一人で謝りに来たら、急に強気になって怒鳴り始めていた。見ていて、ご主人様がすごく大人げなく感じられた。他の皆も苦笑いをしながら、すごい呆れ果てていた。ご主人様がお説教を始めてから少し経つと、紀霊さんも来た。すると今度は、紀霊さんに怒鳴り始めた。でも紀霊さんは、大人の対応でそれを難なく往なした。それを見ていた私は、余計にご主人様が子供っぽく見えた。きつと皆も同じ気持ちだろう。

紀霊さんの口が滑った発言によって、あの日の夜に星ちゃんに怒られながら帰って来た理由がようやく知ることが出来た。でも、それを知ってしまった私は、何だかすごく惨めな思いがした。他の皆も、

非難するような目でご主人様を見ていた。紀霊さんが顔良さんを連れ帰って行った後、私達は全員で有無を言わずに説教した。これで、ご主人様が少しでも良くなるように祈ろう…。

○月○日

徐州の州牧に任命された。ご主人様は相変わらず紀霊さんに対抗心を燃やしているのか、ご主人様の前で名前を出すことがあると急に怒り出したりするし、訳も分からず乱暴になる。この間なんか、詠ちゃんが、あんなち。こ太守の下で大丈夫なのかな、と月ちゃんに疑問を投げかけて、大丈夫、問題ないよ…きつと、と月ちゃんが苦笑い気味で答えているのを見てしまった…。

以上、桃香の日記（抜粋）でした…。

「難去って、また一難……どころじゃない（後書き）」

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

いざ寿春へ……

紀霊が城を出た翌日、孫策達による反乱が起きた。呂蒙の策で、兵と共に偽装化していた孫権達と合流した孫策らは、袁術の本城である寿春城へと兵を進めて行く。

そして、その道のりの途中にある小城をその日のうちに次々と占拠すると、ついには寿春城にまで辿り着き、城を取り囲むように軍を配備して攻め始めた…。

一方、紀霊を欠いている状態の袁術軍は、大將軍である張勳が兵達に忙しなく指示を出し続けて奮闘するも、力を付けた孫呉の軍勢の勢いを耐え凌ぐことが出来ず、城の守備を何とか一日半保たせるので精一杯の状態。他の小城と同様に寿春城が陥落するのも、もはや時間の問題と言えるのだった…。

S i d e : 八雲

部屋から飛び出して城外へと出ると、恋とねねが知らない二人組と趙雲は公孫賛と話していた。お互いに色々と話合っている。けど皆には悪いが、今はのんびりと話なんかしている場合じゃない。今の俺には、その一分一秒が惜しいのだ。

「恋、ねね、趙雲さん、今すぐにここを発つので出発の準備を急いで下さい！　うちの兵士を見ただしょうから何となく不味い状況なのは分かっていると思いますが、七乃と美羽様のいる寿春城が、孫策さん達の襲撃に遭いました！」

「何ですと！？　そこを落とされたら、ねね達は本拠を失ってしまうのです！」

どうするのですか、と慌てふためくねねを他所目に、今一番口を挟んで欲しくない人間が口を開いた。

「は、はっ！　今までのツケが、ようやくお前に回って来たみたいだな。あの孫策達が相手なら、今さら戻ったところで、お前の主も仲間も全員やられてるだろうな！　ざまあみる！」

初めてだ……。初めて、本気で、自らの意思で人を殺したいと思った。でも、今こいつを殺したところで、ゴミ屑以下の価値も無い。むしろ、ついさっきの決め事も破談になるかもしれないというハイリスクが伴う。もしもまだ二人が無事にいるならば、新たな拠点を自ら放置するのは、あまりにも馬鹿な判断だ。

無表情を装いつつも手の平に爪が食い込ませ、怒りを必死に押し殺している、恋達と話していた二人組がこちらに来た……というより、眼鏡を掛けた少女が、オドオドした感じの少女を半ば強引に引っ張って来たと言う方が正しいか……。

「月、やっぱりボク達は、あんな腐れち。こ太守の下にいるべきじゃないわ！　恋やねねもいるんだし、説明すれば何とか分かって貰えるかもしれない！」

「で、でも詠ちゃん、分かって貰えなかったらどうするの？　もうご主人様の所には、戻れなくなるんだよ？」

「そ、その時は、ボクの全てに掛けて、月を必ず涼州へ返してみせ

る。だから、あの男一度と話してみよう？　ねえ、そのあんた！
こう忙しい時に、何で話しかけて来るかな？　不満に思いながらも、表情には一切出さず、二人組へと目を向ける。

「何でしょうか？　こちらは一刻も早く、ここを発ちたいんですが？」

「急いでるのは分かってるけど、ボク達の話聞いてくれない？」

「その話は、長くなりそうですか？」

「いいえ、すぐに済むわ。ボクは賈馱、こっちが董卓よ。訳あって死んだことになってるけど、実際はここで保護してもらってるの」

なるほど、死んだという噂は嘘だったと言うことか……。そしてこの二人が、あの董卓と賈馱……。本来ならば、この場で殺すべきなのかもしれない。でも俺は少なくとも、華雄が言っていたことを信じていた。他の諸侯から見れば甘いと思われるかもしれないが、一つだけ質問してみることにした。

「今になつては、貴女達の生死が嘘か真かなど些細なことです。庶人は既に、二人は死んだものと認識しているのだから。……董卓さんに、一つだけお聞きします。貴女は、庶人を虐げるような政をする人じゃなかったと、誰に対しても胸を張って言えますか？」

「……はい！」

その目は、華雄の目と同じように一点の曇りは無く、透き通った瞳をしていた。

「……恋、ねね、お願いがあります」

「何ですか？」

「詳しい話をするのはまた後でになりますが、一先ず彼女達と兵士達を連れて、先に下？城へと向かって下さい。ついさっきまで行っていた交渉で、下？国の明け渡しを約束して頂いたので、あの土地はもうこちらの領土です」

「……分かった。月、詠、こつち。ちんきゅー、皆を……」

「了解なのです！」

恋もねねも嬉しそうな表情を浮かべながら、董卓達と兵を連れて下？城へと向かって行つた。その間、北郷や関羽、公孫賛と言った劉備陣営の人間達は、淡々と進んで行く事態を、ただ茫然と見ているだけだつた。

「趙雲さんは、俺と共に来てもらいます。七乃と美羽様の救出に、手を貸して貰えますか？」

「よろしいですとも。それと、今後私のことは星と呼んで下さつて構いませぬ。……それにしても、まさか仕えて早々に、我が主の主を救出するための手伝いなどという大役が回つて来るとは思わなんだ」

「期待してますよ、星さん？」

「ならば見事、その期待に応えなければなりませんな。この趙子龍、

向かい来る敵の全てを穿って見せますぞ」

「じゃあ、行きますよ！」

行きは兵糧があつたから時間が掛かったが、本来、寿春からなら彭城も下？も、急げば馬を使つて一日で行ける距離だ。北郷達との戦やら交渉やらで半日ほど掛かっている以上、一刻の猶予も許されてはいない。星と自らの部隊の生き残りを連れて、彭城を発った…。

S i d e : 雪蓮

今後のことを考えて、蓮華に今回の戦の指揮を取らせてみた。結果、敵が一度城内に後退した後、城壁の上を見ずに城に接近しようとしたこと以外は、特に問題は無かった。

「蓮華様、敵軍が総崩れとなっております！　今こそ、突入の好機かと！」

「ええ。お姉様っ！」

「分かつてるわ。……行つて来るわね、冥琳」

「仕上げを頼む。……明命、雪蓮の護衛、任せたぞ」

「はいっ！」

明命と一緒に、城内へ侵入する。ついに、この時が来た。結局、紀霊が間に合わなかったみたいだし、思った以上に手応えのない戦いだった。まあ、それだけ楽に取り返せるんだから良いんだけどね…。

城内には、既に大勢の兵士達が流れ込んでいる。敵兵はほとんど掃除したし、ここから形勢を逆転されることは、まず有り得ないでしょう。あとは、袁術ちゃんと張勳のおバカ二人を見つめるだけか…。

S i d e : 七乃

私達の負けは確定。でもせめて、美羽様だけは無事に連れ出さない…。

玉座から美羽様を連れだした後、比較的守りの薄そうな裏門へと向かっていた。ただ、裏門へ行くには、中庭にある回廊を通らなくちゃいけないんだよなあ。

「見つけたぞ！」

そんなことを考えてたら、敵の兵士に見つかっちゃった！

美羽様を背中に隠して、剣を抜く。私だって、これでも将の端くれなんだし、美羽様を守るにはこうするしかないもんね。

「ええーい！」

ザシュツ

「ぐっ！？」

何とか倒せたみたい。でもまさか、こんな奥にまで敵が来てるだ…

んて……。

「はあ、はあ、はあ。こんな所にまで、孫策さん達の兵が……」

「うっー、七乃お、怖いのじゃ……」

「大丈夫ですよ美羽様、七乃が付いてますからね。それに、万が一を考えて、八雲さんがいそうな下？と彭城に、伝令を放っておきましたから、きっと助けに来てくれますって。それまでの辛抱ですよ？」

「うむ、ひつく、なら早く逃げるのじゃ」

ああ、怖がつてる美羽様も可愛いなあ。こんな時じゃなきゃ、もつとゆつくりと観察できたんだけど、下手したら美羽様に一生会えなくなるかもだし、そんなこと言ってられないか……。

「はい。あとはこの回廊を突っ切っちゃえば、裏門はすぐですから、もうちよつと頑張つて下さいね？」

「……。」

美羽様は何も言わずに頷いているけど、正直、体力的に限界が近そうな気がする。八雲さん、早く助けに来てくれないかなあ……。

S i d e : 雪蓮

城の中庭を、護衛役の明命と数人の兵士を連れて歩いてた。もちろん、目的はただ一つだけ。

「……さてと、袁術ちゃん達はどこに居るのかな？」

「皆、周辺を捜して下さい！」

「」「」応っ！」「」

明命の指示で、傍にいた兵士達が散って行った。そんな中、私は兵士達が散って行った方向とは違う方へと引き寄せられるかのように歩いていた。

「……あ、雪蓮様、どちらへ？」

振り返れば、明命が心配しているのか不思議そうにしているのかどっちつかずの表情をしていた。

「何かね、こっちから匂いがするのよ」

「匂い……ですか？」

「ええ。私の勘っていう名の匂いがね」

そして私は、自分の勘に従ってその歩みを進めた…。

S i d e : 七乃

あれから結局、数人の兵士に見つかり、その度に剣を抜いて戦った。気付いたら、帽子や袁家の腕章が無くなっていた。美羽様も走り回ったせいか、髪飾りが取れていた。でも今は、そんなことを気に掛

けている場合じゃない。

「はあ、はあ、はあ……。美羽様、大丈夫ですかあ？」

「ひい、ひい、ふう……。わ、妾はもう疲れたのじゃ。七乃お、妾をおぶってたも」

「さ、さすがにそれは無理ですよ。私も、体力の限界が迫って来てますし……」

それに、美羽様をおぶってたら、いざという時に戦えないじゃないですか？ 逃げるにしても、遅くなっちゃうし。

「うつゝ、みじめなのじゃあ……」

「戦に負けちゃいましたからねえ……」

「うー、七乃七乃！ 妾は蜂蜜水が飲みたい！ 蜂蜜水が飲みたいのじゃ！」

「まあ、我が儘言ってる間に、足を動かして下さいよお」

「やじゃやじゃ！ 妾はもう一步も歩けないのじゃ！」

もう、こんな非常時にまで我が儘放題だなんて……。こうなったら、美羽様には悪いけど、少し怖がらせて動いてもらうしかないかな。

「そんなこと言っていると、孫策さんがやって来ますよ？ 悪い子はいねがーって」

「それは嫌なのじゃ！ でも、蜂蜜水はもつと飲みたいのじゃー！」

これも駄目かあ……。どうしようかと献策している時、背後に人の気配を感じた。でも何故か、振り向いちゃいけない気がした。

「じゃあ、好きなだけ飲ませて上げようか？」

「「っ!？」」

「ただし、あの世で……。だけどね」

振り向けばそこには、孫策さんがいた……。

「きゃー、でたー」

「きゃっー！ でたのじゃー！」

おお、美羽様が派手に怖がってる所なんて、雷が怖くて眠れなくなっちゃった時以来かも……。って、どうしよう！ 冗談だと思ってたのに、孫策さんってば本当に来ちゃった！

「何よ、失礼ね。人を化け物みたいに言って」

「な、ななな、何のようじゃ孫策！ 妾は、お前になど用はないのじゃー！」

「そうそう！ 私達は先を急ぎますんで、孫策さんはごゆっくり――」

チャリンッ！

「ひつ！？」

孫策さんに背を向けて一步踏み出した瞬間、孫策さんの剣が鞘から抜かれる音が聞こえた。咄嗟に声を上げて振り向いたけど、斬りかかって来る気配はない。とりあえず、今まで同様に美羽様を背中では隠し庇うようにして、孫策さんと美羽様の間に入った。

「あら、つれないこと言うわね。……でも残念、私にはとっても大事な用があるの」

「ほ、ほう、なんじゃ？ 用があるなら、さっさと行って、とつとどっかに行けば良いのじゃ！」

「そ、そうですよ。こう見えて私も美羽様も、とーっても忙しい身なんですから」

「あらそう。……なら、手短に済ませるとしましょうか」

抜いた剣の切っ先を、私と美羽様へと向けて来る。

「な、な、な、何故剣を向けるのじゃ！？」

「え？ だって剣を使わないと、貴女を殺すこと、出来ないでしょ？」

「ひーっ！ 妾を殺すと言っのか！？」

「当然。……紀霊にいろいろ良くして貰ってたとはいえ、今まで貴女にコキ使われて来たのは変わらないんだから。意趣返しするくら

い、別に良いじゃない」

私達に切っ先を向けたまま、一步、また一步と孫策さんが近付いて来る。

「な、七乃！ 七乃七乃！ 妾を守るのじゃ！」

恐怖に震える手を無理やり抑えつけて、剣を抜いたけど、孫策さんが放った横薙ぎで、あっさりと弾き飛ばされた。剣を失ってしまった以上、美羽様を守る手段は、私自身を盾にするしかない。

「で、どうするの？ 一人ずつが良い？ それとも、二人同時が良い？」

「そ、孫策さん！ 私はどうなっても構いませんから、どうか美羽様だけは！」

「駄目よ。さ、いい加減埒が明かないし、袁術ちゃんの命もいい加減終わらせましょうね」

じわりじわりと、距離を詰められる。

「やだやだやだ、死にたくないのじゃ〜！」

「大丈夫ですよ、美羽様。七乃が、必ず守ってあげますからね？」

孫策さんに背を向けた状態で、へたり込んでしまった美羽様を抱き締める。剣がいつ振り下ろされても大丈夫なように、孫策さんの方を振り向きながら……。

「……そろそろ死ぬ時間よ？ 二人とも覚悟は良いわね？」

ゆっくりと、剣が振り上げられる。私達を見下ろす孫策さんの目は、冷たかった。

さつき以上にきつく美羽様を抱き締め、いつ斬られても良い様に全身に力を入れる。

……でも、いくら待っても孫策さんの剣は振り下ろされなかった。

「どうして…どうして帰って来ちゃったのよ……紀霊」

顔を上げれば、そこには本当に八雲さんがいた。良かった、伝令が間に合ったんだ。

「七乃、裏門までの道はこちらで制圧しておきましたから、もう安全です。新しい仲間もそこで待っていますから、美羽様を安全なところへ」

「は、はい！ 美羽様、行きますよ！」

私は美羽様の手を引っ張って、裏門まで全力で駆け抜けた…。

いざ寿春へ……（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

譲れないもの

Side：八雲

刀を抜く暇すらなく、そのまま鞘で孫策の一撃を防いだ。その判断のおかげもあって、七乃と美羽様をうちの部隊の兵達と星の待つ裏門へ無事に向かわせることが出来た。そしてここに残っているのは、俺と孫策の二人以外には誰もいない…。

「……いやー、ほんとに間一髪でした。二人の危機に間に合ったのは、日頃の行いのおかげですかねえ？」

自分にしては珍しく、冗談めかした事を言いながら、孫策に背を向けて歩き出す。

「……私的には、間に合って欲しくなかったんだけどね。でもまあ、こうなっちゃったら仕方ないかな——」

孫策が体勢を低く保ったまま突進して来て、その勢いのままに左薙ぎを放って来る。こっちも振り向き様に抜刀し、抜きつけの一斬り目で左薙ぎを放つ。お互いの得物が激しくぶつかり合い、その場にいくつかの火花が散り、鏑迫り合いのような状態になった。

「さっき止めれたのは、まぐれであって欲しかったな……」

「七乃達を助けた手前、そういうわけにはいかないんですよ。俺なんかで、相手になるかは分かりませんが——っ！」

後方へと飛び退き、一度距離を取る。

「お互いに、譲れないものを賭けた戦いか……。最悪、勝てはしなくても、負けるわけにもいきませんね。…紀白怜、推して参りますっ！」

「ええ、来なさいっ！」

ほぼ同時に回廊の床を蹴り、これまたほぼ同時に袈裟斬りを繰り出す。その後も、同じ太刀筋が数回ほど続く。とは言うものの、こちららは本気で向こうは七割程度だろうが…。

均衡が崩れたのは、孫策が仕掛けて来た辺りからだった。

孫策が放つて来た突きを左半身で避け、そのまま身体を捻って回転斬りを試みる。しかし孫策はその攻撃をして来ると読んでいたのか、しゃがんでこっちの攻撃を避け、こっちの攻撃は空を切った。その隙を孫策が見逃すはずがなく、立ち上がりながら胸目がけて突きを放つて来る。どうにかして身体を右へと捻るが、避けきることは出来ず、右肩に軽い傷を負った。

「ぐっ！」

「……やるじゃない。避けるとは思わなかったわ」

「避けなきゃ、胸を一突きでしたからね。それじゃ、否が応にも避けますよ」

「ふふ、そうこなくっちゃ！ まだまだ行くわよ！」

斬り掛かって来る孫策は、その容姿や服装、手にしている剣も相俟

つて、まるで曲に合わせて舞っているかのような動きだった。この戦いを傍観している人であれば、孫策の動きに見惚れていても問題は無いだろう。それくらい、見事と言うべきものだった。だが、こっちはそうはいかない。一瞬でも見惚れようものなら、そのまま自らの死に直結してしまうからだ。

上下左右の色々な太刀筋からなる斬撃の連続に突き、さらには隙あらば蹴りと、多種多様に攻め込んで来る。

最初のうちは何とか凌げていたものの、星との一騎討ち同様に、次第と防戦一方になって行く。気付けば身体は傷だらけになり、服の至る所に傷から流れ出た血が滲み、着物や袴に染みが出来ていた。さすがは小霸王にして、戦の天才というところか…。

「……どうして、そんな傷だらけになってまで、あの子達を守ろうとするの？」

「はあ、はあ、その説明をするには、少々昔話に付き合って、はあ、貰わなくちゃいけません？」

「そうね、ちょっとくらいなら良いわ」

「そうですね。あれは……」

構えていた刀を下ろし、呼吸を整える。独り言でも呟くかのように、昔話を始めた…。

——彼はもう、五年ほど前の話になるだろうか。あの頃の俺はま

だ、特定の主というのを持たず、流浪の旅を続けていた。路銀に困ればどこかの県令や刺史の下へと客将として仕官し、放浪するのに十分な資金が手に入ったら、また旅に出るの繰り返しだった。仕官していた際は、用心棒の真似事や賊の討伐に駆り出されるのが主だったが、時々文官の手伝いもさせられていた為、ある程度なら政も出来るようになっていた。

そんな折りだ。路銀が尽きかけていた際、たまたま南陽に居た俺にとって、美羽様は最初、新たな仕官先の一つでしかなかった。

「……そんな前から仕官してたのに、何で会わなかったのかしら？」

「あの頃は、今まで仕官して来たどの県令達の所よりも圧倒的に仕事が多く回って来たのに四苦八苦して、鍛錬の時以外は、ほとんど私室に閉じ籠っていましたから」

「へえ、そうだったんだ」

「ええ。それじゃあ、僭越ながら続きを……」

荊州を収めているのは、あの名門と大陸に名の知れた袁家。河北の雄と謳われた冀州の袁紹の下にも一時期とはいえ仕官していた俺は最初、他の県令達と比べた時の袁家の給金の高さに、驚きを隠せずにはいた。もちろん、それなりに役に立てていたとは思いますが、まさかこれほどのものとはと、よく自分の目を疑ったものだ。

そして今回の仕官先であるもう一つの袁家、こちらもさぞ高い給金を払ってくれると思い、城の門戸を叩いた。そしてそこで出会ったのが、美羽様と七乃だった。給金に関しては、読み通り高かったことも追記しておこう。

武人としての實力は、その日のうちに証明された。これといった将のいない美羽様のもとで一番強かったのは、軍の中で最も屈強な兵士だったからだ。数合も打ち合わないうちにあっさりと勝ってしまい、まずは武官として働くことが決まる。そして遅れること約数日、文官の仕事をやることも決まった。

「それがあのいつも机の上に広がってた、書類やら木簡やらの山に繋がると…」

「そういうことです」

そんなある日、俺はふとしたきっかけで、ある事実を知った。その日は文官達の協力もあつてか政務が徐々に早く終わり、城の中を目的がある訳でもなくただ歩いてた。すると、話声が聞こえて来るので、その声の聞こえる場所へと近付いた。盗み聞きというのもどうかとは思ってたが、柱の陰に身を隠して様子を窺ってみると、どうやら声の主は七乃と二人組の男だった。しかも男達は庶人とは違い、とても高級そうな衣服を身に纏っている。その物からして、荊州のどこかにいる豪族か貴族辺りだろう。この男達の名は今でも知らないが、城内で何度か見かけたことがあった。

話している内容があまり聞こえないから何とも言えないが、大方、賄賂か何かで七乃やこの文官達を釣ることで、美羽様という都合の良い操り人形を手に入れ、自分達だけ甘い汁を吸おうとか画策しているのだろう。

だが七乃は、二人の言うことに一度たりとも首を縦に振ろうとはしない。顔を近付けられて、睨みつけられても、必要以上の人間に聞こえてしまうような声で脅されてもだ。いい加減、何度足を運んで

も首を縦に振らない七乃に痺れを切らしたのか、暴力による実力行使に出ようとしたところで、柱の陰から飛び出して止めさせた。

男達は俺のことを見たことが無いらしく、誰だこいつ、と言わんばかりの目で睨んだ後、邪魔だ、と言って俺のことを突き飛ばそうとして来た。だが俺は、突き飛ばそうとして来た男の腕を取ると即座に捻り上げ、ついでに関節を外しておいた。それを見たもう一人の男は、痛がっている男を連れて、そそくさと逃げて行った。

どういふことなのかと七乃に問い質すと、俺が来るよりもずっと前から、ああいう輩が絶えないと教えてくれた。美羽様は幼い頃に両親を亡くしたため、誰かに愛されるということがほぼ皆無だった。もはや美羽様にとつて、血の繋がりは無くとも家族と呼べるのは、小さい頃から美羽の傳役として仕えている七乃だけだった。

そしてその七乃も美羽様を寂しがらせないために、時に母親代わりとして、時に姉代わりとして、時に友人代わりとして、そして…私利私欲のことで頭が一杯の大人達が蔓延る、薄汚い政治の世界から美羽様を守る盾として日々尽力していたのだ。まあ、中にはまともな治世者もいたが……。普段から誰に対しても笑顔しか見せない彼女が、自分の知らないところでそんな大変なことをしていたなんて、思いもよらなかった。

「……でもその時、ふと疑問が浮かんかったですよ」

「どんな？」

「美羽様を守る盾が七乃だとして、じゃあその二人を守る剣は誰なのかなって…。それで考えてみたら、あそこには誰もいなかったんですよ」

「まあ、袁術ちゃんのところは、前から腕の立つ人間がいなかったしね……」

「ええ……」

だからその時、俺は決心した。いないのなら、俺がその剣の役になつてやれば良いと……。

その後正式に仕官することを決めると、自然に美羽様と関わる機会も増えて行つた。突拍子もない言動には、もう何度も呆れさせられたし、やっぱり仕官先を決め急いだかもしれないと思いこんだのは、軽く百回は越すだろう。

それでも俺は、二人の下から去ろうとはしなかった。それには、俺なりに理由がある。まず美羽様のことは、少しばかり七乃が甘やかし過ぎた節があるし、自分もあまり叱らなかつた節があるのは否めないが、何だかんだで我が儘な妹みたいに思えるようになっていった。あとは、七乃が母親や姉の代わりと言うなら、荷が重い気もするけど、自分が少しでも父親や兄の代わりになつてやれればと思つたからだ。

そして七乃……。彼女のことは、最初は共に美羽様に仕える同職の間みたいに思っていた。でも気付けば、彼女を支えてあげたいと思うように変わっていた。言つてしまえば、七乃という一人の女性に、いつの間にか心惹かれていたわけだ。

彼女が自分のことをどう思っているかなど、全く想像が付かない。だとしても俺は、美羽様のため、七乃のために己が刀を振るうだけ。そして、時は流れて現在に至ると……。

「——とまあ、こんな感じですかね？ 七乃が話してくれたことは、どこまでが真実か定かじゃありませんが、少なくとも美羽様関連で嘘を吐くことはないでしょう」

「……それにしても意外だわ。まさか貴方が、あの子を好きになるだなんて……」

「人生何が起るかなんて、誰にも分からないものですよ？ もしかしたら、俺が孫策さんに勝てるかもしれない時が、いつか来るかもしれないしね」

とは言ったものの、星との戦いも含めて、少し血を流し過ぎたかもしれない。身体がふらつく。

「……でもそれは、少なくとも今じゃないわね——」

「つづく!？」

ふらつく身体に鞭を打ち、再び孫策との打ち合いが始まった…。

S i d e : 雪蓮

紀霊から、ちょっとした昔話を聞かされた後、すぐに一騎討ちは再開された。打ち合っつてすぐに私が優位に立ち、昔話をする前と同じ状態に戻った。

はつきりと言えることは、私の方が彼よりも強いということ。戦い始める前から傷を負ってるように見えただけ、万全の状態でやって

も私の勝ち揺るがない。うちの子達だと…明命には勝てるけど、思春相手じゃ怪しいかな。

「はあっ！ やあっ！」

「ふっ！ ぐっ！？」

紀霊の動きは次第に精彩を欠いて行き、その身に一つ、また一つと、斬撃による斬り傷を増やしていく。もうこれ以上、彼に戦う力は残っていないだろうと思った私は、彼の刀を弾き上げて――

「……お終いね、紀霊」

「が――っ！？」

無防備となった顎を蹴り上げると、紀霊はそのまま仰向けに倒れた。今のは完璧に決まったし、これでもう起きて……。

「ぐ……あ、う……」

「……え？」

既に身体は満身創痍にもかかわらず、紀霊は立ち上がって来た。でもふらついてるし、立ってるのはこれが最後つてところでしょう。こっちに向かって来る気配もないし、刀も握っているとはいえ下を向いている。

彼へと歩いて近付くと、彼の息遣いがかかなり荒いのが分かる。立っているのも、やっとの状態なのは確実…。

「はあ、はあ、はあ、はあ……」

「今度こそっ！」

前蹴りで蹴り飛ばし、回廊の柱へと叩きつけた。紀霊の身体は柱に寄り掛かったまま、ずるずると滑り落ちて行く。

今度こそ終わった……. と思っても、またよろよろと立ち上がって来る。それから何度倒しても、達磨の様に立ち上がって来る。さすがに最後の方は、軽く手で突き飛ばすだけで倒れたが、正直気味が悪かった…….

「……まも……なきや……死なせ……いか…….」

また立ち上がった。もうこれで、いったい何度目になるだろう。紀霊の目の前に立ち、しばし彼の様子を窺い、そして驚かされる。

「信じらんないわ、立ったまま気絶してるなんて。……張勲への想いもそうだろうけど、何よりあの子達を守らなくちゃって意思が、こんな事を可能にさせたのかしらね……」

ちよつとまだ、目の前で起きてることが信じられないけど……. 気絶しているのに、彼からは鬼気迫る物を感じられる。

「はあ……. 負けよ、負け。貴方の根気には勝てないわ。…明命！」

「はいっ！」

「すぐに散開した兵士達を集めて、彼を軍医のところで運ばせなさい。あとは戦闘行為を中止する旨を伝える伝令を、その中から適当

に一人選んで冥琳の所へ送りなさい。それが済み次第、袁術ちゃん達の下へ行くわ」

「了解です！」

その後、明命によつて集められた兵士達によつて彼は運ばれ、城内に居た兵達の戦闘行為も中止された。まあ既に城内の制圧は完了していたみたいだから、そんな命令を出す必要は無かったみたい…。

私が明命と一緒に裏門へと向かうと……そこには、血の付いた軍服を纏った数十人の兵士達と、怯える袁術ちゃん達。そして、劉備に仕えていたはずの趙雲がいた。

兵達は私達を見るなり警戒を強め、袁術ちゃん達の前へと立ち塞がり始めた。

「……趙雲がどうしてここに居るのかは分からないけど、まあ後で聞けば良いわ。それと、貴方達も下がりなさい？　こちらにはもう、攻撃の意思はないの。……あとは、袁術ちゃんと張勳」

「「はひいつ!?!」」

私が呼んだだけで、二人ともびくびくし始める。私、そこまで怖がらせるようなことしたかなあ……。

「……そう怖がらないでよ。別にもう、殺そうだなんて思っていないんだから」

「わ、妾達を見逃してくれるのか？ ……そ、それと八雲は、八雲はどこにおるのじゃ！？」

「彼なら、今うちの軍医に見せてる。さすがに、このまま荒野に放り出したら死んじやうからね。いろいろと良くしてくれた人に、死なれるとなると寝覚めが悪そうなもの。治療が済み次第、そっちに返してあげるわ」

「よ、良かったのじゃー！」

「ええ！ 良かったあ、無事で……本当に……」

怖がつていたのから一転、紀霊が無事だと分かって安堵の表情を浮かべた。私が思ってる以上に、この二人から好かれてたのね、彼。

「でも、良い話ばかりじゃないわよ？」

「はや？」 「ほえ？」

「今から一刻だけ時間をあげるから、その間に必要なものを全部纏めて、この城から出て行きなさい。良い、全部よ？ そして二度とこの土地も含めた私達孫呉の国に足を踏み入れないでちょうだい。もし破ったら……」

鞘から剣を抜き、少し前のように二人へと突き付ける。

「今度こそ、二人仲良く殺してあげるから……」

そう宣告すると、お互いに抱き付いて再び怖がり出した。

「わ、わわ、分かったのじゃ！ この土地には、もう二度と戻らんのじゃ！ なあ、七乃！」

「はいです！ もちろんです！ 命を助けて貰えるなら、さささーって居なくなってみせます！」

「なら、さつさと荷を纏めなさい？ 明命、二人の見張り、お願いね？ 何か変なことしようとしたら、斬っちゃって構わないから」

「御意！」

袁術ちゃんと張勳には、明命っていう十分過ぎる見張りを付けたから、もう大丈夫でしょう。

「で、趙雲？ どうして貴女がここに居るの？」

「なに、前の主の片割れがあまりに馬鹿だったのでな、紀霊殿に鞍替えしただけのことよ」

だけど、その後に聞かされた話に、少なからず衝撃を受けた。私達も細作の報告で、各諸侯達の動向とかは知ってたし、その中の一つに呂布の居場所もあった。

そしたら何と、紀霊が呂布と陳宮を仲間に加えていて、ここへの帰り際に劉備軍と一戦起こし、その戦が元で趙雲も仲間に加わったと聞かされた。しかも、趙雲以外にも離反者が出たらしく、その者達も紀霊の下へと身を寄せているとのことだ。そして極め付けは、下？を新たな領地として手に入れ、そこには既に呂布達がいるということだ。

「……紀霊はいつたい、何を目指してるのかしら？」

「そればかりは、私にも分からぬ。ただ、紀霊殿の下に居れば呂布とも手合わせが出来るし、少なくとも前よりは居心地が良さそうなもの確かというもの。それに、新たな主の下には面白そうな人が集まって来そうな気がするのだ……」

「……あれ、何だろ？ 戦も一騎討ちも勝ったはずなのに、負けた気がするのよね……」

「ははは、こういう何が起こるか分からなくて面白そうな場所というのは、結局は行ったもの勝ちということだ」

趙雲は、私に向けて意地の悪そうな笑みを浮かべて来る。私達のことにも、何か面白そうなこと起きないかなあ？

それから約束の一刻が過ぎ、必要なものが本当にそんなにあったのかと言いたくなるような大荷物と、生き残った兵士達数千人を連れ、趙雲の先導のもと寿春から去って行った…。

譲れないもの（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

互いの距離

S i d e : 八雲

……目が覚めると、寝台の上で横になっていた。身体を起こそうと試みようとしたが、身体中に痛みが走るので、止しておくことにした。大人しく寝台に身を預けたまま、もう少し詳しく現状を把握するため、いろいろな所へと目を配る。

……結局分かったことは、ここが城内にある医務室で、治療済みなのか身体中が包帯でぐるぐる巻きになっていることだけ。誰かしらいれば話を聞けるのだけど、今は生憎と部屋を留守にしているようだ。

これ以上、ここにいて分かることはなさそうだ。でも身動きが取れない以上、ここで暇を持て余すしかない。あれからいつたいどの位の時間が過ぎ、皆はどうしているのかだけが、気になって仕方ない…。

S i d e : 雪蓮

袁術ちゃん達を追い払ってから、五日が経った。その間に趙雲から聞いた話や、紀霊との一騎討ちのことを話しておいた。もちろん、彼の告白の部分とかは省いておいた。皆はその話を聞いて、信じられないような顔をしていたけど、一部始終を見ていた明命の話によって事実だと分かると、彼のことを知っている人達は揃って感心していた。まあ、その逆も然りだったけど……。

そして私は今、城の一室を勝手に借りて一人で寛いでいる。でも、
久々に羽を伸ばせると思った途端、私の休憩時間は終わりを告げた。
せつかく目の上のたんこぶが消えたって言うのに、今度は劉備の下
から一通の手紙が届いたと、冥琳が呆れた様子で伝えに来たからだ。
どうしてそんな顔をしているのか聞いてみると、これを読めば分か
るわ、と手紙を手渡された。

「えーと、ふんふん、へえー、ほあー、……はあ」

「呆れるでしょう？」

「これじゃ、呆れる以前の問題でしょうに……。宛先人、間違っ
てんじゃないの？ ついでに、差出人も……」

「私だって、何度も確認したんだがな……」

簡潔にまとめると、手紙にはこう書いてあった。『徐州の下？ 国に、
袁術軍の残党が逃げ込んで占領している。向こうは下？ を取り戻す
ため、私達は袁術軍の殲滅を行うため。双方目的は違っけど利害
関係は一致しているのだから、袁術軍残党の討伐を手伝え』と。し
かも送り主は、天の御遣いと噂されているあの男。名前は……うん、
忘れた。所詮、簡単に忘れ去られる程度の人間だから、別にどうで
も良いか……。

「ねえ冥琳、こんな話を持ち掛けられたところで、私達に何の利益
があるの？ てか、あの男は私達のことを嘗めてるの？」

「さあね……。だが少なくとも、我らにはそんな茶番に付き合っ
てやる義理がないことだけは確かだ。それに、両軍合わせれば兵数で
圧倒出来るとは言え、あの呂布と一戦構えるのは避けたい。劉備の

下にも優秀な軍師がいたはずだから、こんな意味のない手紙を送るような真似はしないと思ったのだが、私の思い違いだったか……」

「じゃあ、この件は無視を決め込むので決定……ね！」

手紙をくしゃくしゃに丸めて、くず籠へと投げる。紙くずと化したそれは、綺麗な放物線を描き、くず籠の淵に当たって吸い込まれて行った。

たった一枚の手紙に気分を害される形になった私は、気分転換にと冥琳を連れて、医務室へと向かうことにした。紀霊が起きてるのは分からないけどね……。

医務室の前に着き、遠慮することなくさっさと中に入る。すると、私達の方に目をやっていた紀霊と目が合った。

「やつほ、紀霊、やつと起きたのね？ 五日も寝てるから、さすがに死んだかと思ったわ」

「雪蓮……。分かってると思うが、白怜殿は怪我人だぞ？ もう少し静かにしないか」

「……俺、五日も寝てたんですか？ それにしても周瑜さんは、相変わらず孫策さん相手に苦勞されているみたいですね？」

「まあな。だが、苦勞の度合いで言うのであれば、そちらの方が数段上だろう？ 言い方は悪くなってしまうが、余程の物好きでない限り袁術の下では働けんさ」

「いやいや、別に構いませんよ。周瑜さんの言う通り、七乃も俺も物好きなのに変わりないですから。特に、俺に至っては超物好きと言われても不思議じゃない気がしますし……」

冥琳は、どういう意味だ、と言いたげな顔をしていたけど、とりあえず紀霊にこの後はどうするのかを聞いておかないと――

「あ、あの、七乃と美羽様は……？」

「……もう、心配しなくても大丈夫よ。二人とも無傷で、趙雲達と一緒に下？に行ったわ。その時に、ちょっとした約束もさせて貰ったけど……」

二人が無事だと分かった瞬間、彼は心からほっとしたような表情を見せた。あの時も言ってたけど、本当に二人のことが大事なのね。

「その約束というのは？」

「私達の土地に、二度と足を踏み入れないこと。貴方は別に良いけど、もしあの二人が破ったら、どうなるか分かるわね？」

「……ええ。何が何でも、その約束は守らせますので、ご心配なく」

「なら良いわ。それで、これからどうするの？ 下？に行っても良いけど、あと数日もしたら、劉備達が攻め込んで来るわよ？」

私の何気なく漏らした一言が、珍しく彼をきよとした顔にさせている。

「……どういうことですか？ 俺は劉備さん達から下？を譲り受ける際、口約束だったとはいえ、不可侵の約束をたしかに交わしたはずなんですが……」

「実はな、先ほど劉備……いや、正確には天の御遣いと噂されているあの北郷とかいう男から、一通の手紙が送り付けられて来てな。下？を取り返すために、袁術軍の残党の討伐を手伝えと、我らに言っただけだ」

「残党じゃないんですけどね。……それで、孫呉はどう動くつもりですか？」

「……我らはこの地を取り返し、袁術からの独立も果たした。もはや我らの前に立ち塞がりでもない限り、袁術達に用はない。それに雪蓮から聞いた話では、白冷殿の下には呂布や趙雲までいるそうじゃないか？ ならば尚更、民草の事を考えれば無駄に事を構えるのだけは避けたいのだよ」

「……良かった。あの二人もさすがに命が惜しいでしょうし、俺もこうやって生かして貰っている以上、わざわざ孫策さん達相手に敵対しようだなんて思いませんよ」

そう言っただけで助かる、と冥琳は安堵していた。斯く言う私も、必要以上に家族の皆が傷付かないで済むことに、内心ほっとしていた。

「とりあえず俺は、動けるようになり次第、ここを発とうと思います。俺の無事も知らせておかないといけませんし……」

「そう。なら私達はこれでお暇するから、ゆっくり休んでおきなさ

い。向こうには、勝手にやってちょうだいって内容の手紙を送っておくわ」

「何か色々と、ありがとうございます……」

紀霊は寝台に横になったまま、私達へと申し訳なさそうに会釈をして来る。

「これくらい、別にどうってことないわ。独立する前は、兵糧だの軍資金だの色々と良くして貰ってたんだし、別にこれくらいは安いもんよ。ね、冥琳？」

「そうだな。それくらいなら、誰も文句は言わんだろう。それ以前に、わざわざ奴らに付き合ってやる必要は微塵も無いんだ。勝手に戦を仕掛けて、勝手に自滅していくのがお似合いだろう。さあ雪蓮、そろそろ行くわよ？ 白怜殿、休んでいるところ邪魔をしたな」

こうして、私達は医務室を後にした。それから二日後、紀霊は最低限必要な物だけ纏めて、袁術ちゃん達の所へと帰って……いや、ここはやっぱり愛しの張勳の下へって言った方が良いのかしら？ とにかく、下？へと出発して行った…。

Side：八雲

ようやく、下？に着いた。途中、国境の警備兵に呼び止められたが、俺だと分かるとすぐに通してくれた。いやー、うちの兵達はどこかと違って、きちんと仕事をしてきているみたいで良かった。

約一週間ぶりに下？城へと戻って来ると、うちの軍服を着た兵士達

が、何故だかは分からないが劉備のこの軍服を着た兵士達と共に、城外にある調練場で訓練を受けている最中だった。邪魔しちゃ悪いとも思ったが、無事を知らせておく必要があるだろうし、兵士達の前に顔を出すことにした。

「皆、張り切ってるようですね」

「「「しよ、將軍！」「」」

俺のことを知っている袁術軍の兵士達は驚いていたが、劉備軍の兵士達の方は、誰だあいつ、みたいな顔をしていた。まあ、そのうち嫌でも覚えてくれるだろうから、別に気にしないけど。

「おお紀霊殿、無事でしたか！」

そういえば、星の真名は預けて貰ったのに、自分の真名を預けるのを忘れていた。何時までもこのままじゃ堅苦しいし、真名を預けよう。

「ええ。たった今、無事に帰還しました。それと星、この間は本当にご苦勞様でした。おかげで、美羽様達が無事で済みました。それと、これから俺のことは八雲と呼んで下さい。いつまでも紀霊殿じや、堅苦しいですし」

「では改めて……。八雲殿、無事で何より。これからも、よろしく頼みますぞ」

「こちらこそ、頼りないかもしれませんがよろしくお願いします」
右手を差し出し、握手を交わす。

「そう謙遜なされるな。少なくとも、以前の主だったあのすけこまに比べれば、天と地の差があるほど頼りがいがある。……ああ、思い出すだけでも腹が立って来た。こういう日は、自棄酒と自棄メシで一杯やるに限る。八雲殿も、一杯どうですか？」

「……いや、今回は遠慮させて頂きます。まだ傷も、少し痛みますし……」

「そうですか。メシ仲間を増やせると思ったのだが、これは残念だ……」

正直、あれと比べられて勝ったところで、何一つ嬉しくないと言うのが本音だ。それより、そんなに酷かったのか、あいつは……。それと、自棄メシで何なのかが無性に気になる所だが、何だか地雷臭がするから、聞くのは止めておこう。

「……そうだ、星。美羽様達が、何か迷惑をかけませんでしたか？」

「いや、特にこれといった心当たりはありませんね」

「そうでしたか。でしたら、俺はこれで失礼します。二人に無事を知らせないといけませんし、これ以上調練の邪魔をしては悪いですから」

「そうですか。では私も、兵達の調練に戻りますかな」

星と別れた後、とりあえず美羽様と七乃の居場所を探すため、城内を歩き回ることにした。だけど、ある問題が発生した。どこに何があるのか、まったく分からないのだ。侍女達も最低限しかおらず、

声を掛けようにも忙しそうに駆け回っているため、無理に案内させるわけにはいかない……。

こんな時に人間というのは、考えごとをしながら、自然と俯いて顎に手を当てるという仕草を取ってしまうらしい。前の状況がほとんど掴めないにもかかわらず、城内をその格好のまままで歩いていると

「うわっ!？」 「ふぎゃっ!？」

前から走って来た人に気付かず、案の定正面衝突してしまい、つい尻もちを付いてしまった。しかも、衝突された際の衝撃で、傷が若干痛む……。

「うゝ、いたいじゃゝ」

「済みません、大丈夫……」

「美羽様、大丈夫ですかあ!？」

誰にぶつかったのかって？ あの言葉使い、言わずもがな美羽様だ。痛がる美羽様の様子を見て、後ろから七乃が駆け寄り、俺と目が合う。

「ほえ……？ 八雲……さん？」

「はい、八雲ですよ。……美羽様、七乃、ただ今戻——」「八雲（さん）!」「おわっ!？」

尻もちを付いているところに、二人が飛び込んでしがみ付いて来る。

どうしたのかと聞こうと思った時、二人が、良かった、良かった、と勢い良く泣きじゃくり始めた。このままだと通りすがりの人達に、二人を泣かしたのが俺だと勘違いされそうなので、その勘違いをさせないためにも、二人の頭を撫でながら宥め続けた。少しして、ようやく二人が落ち着き始めた。

「それで、どうしたんですか？ 二人揃ってしがみ付いて来るなんて……」

「ひつく、どうしたもこうしたも無いのじゃ、ひつく、心配させおつて、このバカ者お！」

「ぐす、そうですよお！ 治療が済んだらすぐに返すって孫策さんが言ってたのに、全然帰って来る様子が無かったから、もしかしたら、ぐす、死んじやったんじゃないかって心配してたんですよ！」

……そこまで心配されてただなんて。やばい、何か目頭が熱くなつて来た。

「二人とも、心配してくれてありがとうございます。それと、帰って来るのが遅くなってしまい、申し訳ありませんでした……」

「あ、謝られても、ひつく、妾も七乃も簡単には許してやらのじや！ じゃが、ぐじゅ、妾の命令を聞けば、今回は許してやっても良いぞ？」

さすがにこのままの状況は好ましくないので、大人しく美羽様の命令を聞くことにした…。

その日の夜……。とりあえず、一言だけ言わせてほしい。

「……どうしてこうなった？」

俺が小声で漏らした本音は、誰に聞かれるでもなく、そのまま消えていく。

「それじゃ七乃よ、準備を始めるのじゃ」

「はあい、お嬢様」

状況を説明しよう。俺は今、何故か美羽様と七乃の部屋にいる。

「あの美羽様、今から何をするおつもりで？」

「そんなもの、決まっておろう。寝るのじゃ」

「寝るだけなら、むしろ俺は必要ないんじゃない？……？」

「いや、今日は——「お嬢様、準備できましたよ？」　うむ、い
苦勞七乃。さ、八雲も早く来るのじゃ」

美羽様は寝台に横になり、七乃も美羽様に続いて寝台に横になる。
ただ不可解なのは、何故か二人の間に、一人分の間隔があること。

「あの、七乃、美羽様、どうして二人の間に一人分の間隔が？」

「そんなもの、決まっておろう。八雲も今日は、ここで一緒に寝る
のじゃ！」

「ええっ!？」

「ちなみに、これはお嬢様からの命令でもあり、私達にいーっぱい心配を掛けた八雲さんへの罰でもあるんですから、逃げたりしちゃ駄目ですよ」

こちらの意図を見透かすかのように、七乃にくぎを差される。もう俺の後ろに、退路は残されていないらしい。

「……はあ」

大人しく二人の間へと入り、寝台に身を預ける。まあ、二人が寝たのを確認してから、起こさないように部屋を出れば済む――

「……あ、あの、七乃さん、これはいつたい？」

かと思っていたけど、俺の考えが甘かったらしく、七乃に阻止された。だ、大胆にも腕と足を絡ませるという方法で……。

「いろいろと理由はありますけど、まず一番の理由は八雲さんの逃亡阻止ですね。次に、美羽様に劣情を催しても手を出させないようにするための予防策です。……あとはまあ、私が何となくそうしてみたくて……」

最後の方は何を言っていたのかよく聞き取れなかったが、とりあえず、朝まで逃げる事が出来ないことだけは分かった。ただ、聞き捨てならないことがあったから、身体を起こして話し合う体勢をとる。

「……良いですか、七乃？ 百歩譲って、腕を絡めるのは俺の逃亡を阻止することが目的だとしましょう。ですが、いくら何でも美羽様相手に劣情は催しませんからね？」

俺にはどっかの誰かと違って、見た目が良けりや誰でも良いわけじゃないのだと、声を大にして言いたい。ちなみに美羽様はおバカだから、劣情と言っても、何のことだかは分かっていない。

「……それは、どういう意味ですか？ まさか、お嬢様が可愛くないとでも言つつもりですか！？」

「そうは言ってます！ ただ、俺にとって美羽様がそういう対象じゃないだけです！ それと、俺がそういう感情を抱く相手は、心から好きになつた女性だけですから……」

これじゃまるで、好きになつたら何人でも良いのかと勘違いされるかもしれないが、俺は何人も一遍に好きになれるような男でも無ければ、断じて好色漢でも無い。

「じゃあその女性っていうのは、どこの誰なんですか！？」

「……ええと、何だか話が飛躍し過ぎて、大幅にずれている気がするんですけど？」

「そんなの気のせいです！ さあ、どこの誰なんですか！？」

「それは、どうしても言わなきゃ駄目なんでしょうか？」

「「駄目です（じゃ）！」」

何故か今度は、美羽様まで七乃に乗って来る始末……。どこに行っても、いくつになっても、女性はこの手の話を好むということがよく分かった。

適当なことを言って誤魔化そうとも思ったが、俺のことを睨む二人の視線、特に七乃の視線が、嘘は絶対に許しませんよ、と力強く訴えかけて来ていた。

「……です」

「ん？ 何ですか？」

ええい、こうなれば自棄だ！ 後は野となれ山となれ！ 最悪、明日は自棄メンマだ！

「俺が好きな人は七乃です！ 何か文句ありますか！？」

「……ふえっ！？」

いきなり大声で告白されたせい、七乃は少し混乱した様子で、頬や耳には赤みが差していく。でも俺は七乃以上に顔が真っ赤になり、顔から火が出そうなくらい恥ずかしかった。

「こほん。……ああ、七乃よ、妾はちょっと、厠に行つて来るのじや」

「お、お嬢様あ、私も一緒に行きましょうか？」

「厠なんぞ、妾一人でも行けるのじゃ。それより、大事な話が残つておるじゃろ？」

そう言つて、美羽様は部屋から出て行つた…。

美羽様がいなくなると、二人の間には何となく気まずいような気恥ずかしいような、何とも言えない空気が流れ始める。

「「あ、あの！」」

同時に言葉を発したことで、再び何とも言えない空気が流れる。だがそれも、この空気に堪え切れなくなり二人同時に思わず吹き出したことで、意外にも解消された。

「実は私、こうやって男の人から普通に好意を寄せられるのが初めてで……。その、何て答えたら良いのか分からなくて……」

少し俯きながら、七乃が答える。耳が赤いから、まだ少し恥ずかしいんだろう。対して俺は、恥ずかしい気持ちはあるが、既に表面的な部分には出ていない。

「今すぐに、答えを出す必要はありませんよ？ 俺は気長に待っていますから、七乃はゆっくりと考えた上で、七乃なりの答えを出して下さい」

「良いんですか、それで？」

「ええ。何だか暴露に近い感じの告白でしたし、七乃もまだ少し混乱しているでしょう」

それに元々、俺は待っている方が好きだ。まあ、待たせるのが好きじゃないというのもあるけど。

「……分かりました。じゃあ答えが出たら、その時は私の方から伝えに行きますから」

「そうしてくれると助かります。……それじゃ、美羽様もないし自分の部屋——」「それは駄目です!」「えっ!?!」

美羽様もないことだし、今のうちに逃げようと思った瞬間、後ろから抱き付かれた。

「言っただじゃないですかあ? これは八雲さんへの罰なんですから、逃げるのは許しません! ……もしそんなことしたら、八雲さんのこと嫌いになっちゃいますよお?」

そう言う俺に、某赤い悪魔の様な意地悪でありながらも魅惑的な笑みを見せてくる。

「うつ!?!」

この小悪魔め、それを引き合いに出されたら、逃げられないじゃないか……。

その後、本当に厠に行ったのか怪しい美羽様が部屋に戻って来て、当初の決定通りに俺が真ん中で寝ることになった。でも不思議なこと、俺達は川の字ではなく、小の字になって寝たのだった…。

互いの距離（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

白蓮の決断（前書き）

心の迷いから、今まで書いてきた話を消してしまいましたが、その迷いが無くなったので、再投稿させていただきました。ご迷惑をおかけしました。

今回は最新話となります。

白蓮の決断

Side：八雲

三人で一緒に寝た翌日、適当に話し合いをするための部屋を設けて、董卓達がこちらに来た理由を改めて聞くことにした。

「さてと、この間はきちんとお聞き出来ませんでしたので、今日はこちらに降って来た理由を改めてお聞きしたいのですが、よろしいですか？」

「良いけど、でもまず先に、ボク達がどういう経緯で保護されたかを、念のため説明しておいた方が良い？」

「いえ。……天の世界の服装のことは存じませんが、見る限りでは何だか侍女の方々が着ている服に似ているので、侍女として保護されたってところじゃないんですか？」

着の身着のままで来たせいもあってか、二人とも未だにメイド服らしきものを着用している。一言で言えば、似合っていると思う。それでも、立場を利用したのかどうかは知らないけど、自分の趣味全開で着させるのはどうかとも思う。……七乃が着たら、どうなるんだろうか……？ いやでも、七乃はバスガイドだから良いのである……。おっと、少し自分の世界に入り過ぎたようだ。

「……まあ、だいたいそんな感じよ。じゃあ面倒な説明は一気に省いて、さっさと本題に入らせて貰うわ。端的に言っと、月の身と貞操に危機を感じ取ったからよ」

大分ざつくりしたと理由だが、二人にもそれなりに事情があるのだろう。ただ、離反した理由の中に、賈馱自身の身の安全が含まれていないことが疑問に残る。

「……ではまず、董卓さんの身の危険という観点から、理由を聞かせて下さい」

「私がそれを確信したのは、あんた達とあの腐れち。こが戦った時よ。あいつは、恋がいることを予想していたのに敵の戦力を大幅に見誤って、結果的に一万近い兵士達を駄目にした。その時点でまず、軍事的手腕が無いことは証明されたわ」

恋がいたのを予想していたにも関わらず、あんなにお粗末な采配だったのか……。

「次は政務に関してね。ボクが見る限りでは一応やってはいるんだけど、基本的に朱里と雛里、諸葛亮と鳳統の二人に頼りっぱなしでどちらかと言うと本人は、さぼってどこかに抜け出してる時間の方が圧倒的に長かったわ。一番上に立つ人間が決断しないといけないような案件とかも、優柔不断なのか全然判断が下せない。要するに、政治的手腕もないってことね」

今の話だけで、北郷の下で働いている文官達の苦勞が何となく想像出来てしまうあたり、俺もやはり苦勞人の一人ということだろう。

「そんなあいつとあんたを比べたら、袁術軍の将であろうとも、あんたの方に身を寄せた方がまだ多少は月も安全だし、結果的にそれがボクの安全にも繋がるっていう答えが自ずと出て来たわけ。分かった？」

「けっこう、細かく見ているんですね？ …… 姑みたいだ」

「当り前でしょ！ 月とボクを保護した人間が、どういう人物なのかくらいは見極めさせて貰う権利があるわ！ それと、誰が姑よ、誰が！」

「いえ、こちらのことですのでお気になさらず……」

とりあえず、賈馱の言うことは尤^{もつて}もだ。保護してもらった恩があるとはいえ、肝心の保護してくれた人間が無能ないしそれに近い人物だとしたら、この二人のように離反してもおかしくはないだろう。

「じゃあ次に、貞操の危機…… でしたっけ？ その観点からの理由を、教えて下さい」

「そうね…… とりあえず、ボク達を見る目がいやらしいし、誰かれ構わず女の尻をいつも追いかけて回してばかりだったわ。あとは、場所を気にせず平然と口説き始めたり、いちゃつき始めたりするし……。あと本人は無自覚なのかもしれないけど、女なら誰でも喜びそうな言葉を自然と囁いていたりするから、そういう面では質^{たち}が悪いわね」

「…… たしかに、それはなかなか質が悪いですね。ということは、今劉備軍に残っている人達は、北郷さんに骨抜きにされてしまった末期の状態の人、もしくは末期一步手前の人達が集まっている可能性が高そうですね。それと、彼の女性を見る目がいやらしいのは、重々承知しています。…… 何せ、連合の時もそうでしたから」

そういえば、七乃のこともそういう目で見ていたのだろうか？ 今さら確認する術はないが、もしそうだったなら許すわけにはいかな

い……。最悪、鉄の処女の製作も本気で視野に入れておく必要が出て来るかもしれない……。

「そうなの！？ ほら月、やっぱりあんな腐れち。この下から去って正解だったのよ！」

「で、でも詠ちゃん。ご主人様は、紀霊さんの名前さえ出さなければすごく優しかったし、よく考えたら紀霊さんだって立派な男の人なんだよ？」

董卓の言葉に、賈馱ははっとした様子で、俺のことを睨みつける。それに加えて、犬が威嚇するかのように、ぐるるる、と呻き声を上げている……。

「そうだった！ 紀霊、あんたが男だったのをすっかり忘れてたわ！ で、もしやあんたもあの腐れち。こみたく、ボクの月のことをやらしい目で見てたりするんじゃないでしょうね！？ 答えなさい！」

まず、男だと言うことを忘れられていたことがショックだ。そして、再びロリコン疑惑をかけられたことがこの上なく心外だ。

「董卓さんは、とても可愛らしい方だとは思いますよ？ ですが俺にはもう、この人だと心に決めた女性がいますので、董卓さんのことをそのような目で見ることはありません。……それとだな、あいつと俺を同類に見るのだけは止める。俺は、女なら誰でも良いわけじゃないんだ……」

おっと、つい素の口調が出てしまった。いきなり喋り方が変わったものだから、目の前の二人も驚いている。

「そ、そう、それは悪かったわ……。でもあんたにその気が無い以上、ここにいる限り月の貞操の危機は訪れないと言っても過言じゃないわね。……ふふふ、これでボクの月に手を出す人は誰もいない……」

何か最後、危ない一言が耳に入って来た気もするが、ここはあえて聞かなかったことにしておこう。主に、自分のために……。

「まあ、だいたいの事情は分かりました。では、最後に一つだけ。……本当に、戻らなくても良いんですね？」

「ボクには、月を守り通すっていう使命がある。あそこにいたら、月のことを守れない。だから……戻らないわ」

今の賈駆はさしずめ、姫を守る騎士と言ったところか。それほどまでに、強い意志を彼女から感じた。

「そうですか……。では改めて、二人のことを歓迎させて頂きます。それと、これから俺のことは八雲と呼んで下さい。仲間として迎え入れた以上、堅苦しいのは嫌ですので」

「それなら、私達も真名をお預けします。私の真名は、月です。八雲さん、これからよろしくお願いします」

「ボクの真名は詠よ。今はこんな恰好してるけど、これでも軍師だから。よろしく頼むわね」

「月に詠ですね？ では二人とも、これからよろしくお願いします」

その後、軍内での二人の立場はどうするのかを話し合った結果、月はそのまま侍女として働き、詠は月一人にそんなことはさせられないからと、侍女と軍師を兼任することが決まった…。

S i d e : 白蓮

星や月達がここを去ってから数日後、寿春城が陥落し、袁術達が下？へ落ち延びたと、細作より報告があった。星も袁術達と共に下？へと逃れられたらしいが、紀霊の名前だけは一向に上がって来ることはなかった。さすがにあの手勢じゃ、星くらい強くないと生き残れないだろう。

北郷は、この好機を逃すべきじゃないとして、孫策達と共に袁術軍の共同討伐をしようと提案した。これに対して、軍師と武将の間で意見が真つ二つに割れる。

朱里と雛里は、敵には恋と星がいるし、下？は先日的一件での賠償として明け渡したのだから、攻めること自体に正当性が無い。今は内政に力を注ぎ、今後の基盤作りを急ぐべきだと主張した。

これに対して愛紗達は、下？にいる袁術軍はまだ赴任したばかりなのだから、防衛手段が整っていない。奇襲と民への情報操作を同時に用いて奴らを下？より追い出すことが出来れば、桃香の名も上がるし、遅れ気味になっていた軍備の拡張や生産力の増加も見込める。だから、なるべく早く攻め込むべきだと主張した。

愛紗達の主張に、戦力差はどう補うつもりなのかと雛里が意見すると、同じく袁術軍を憎んでいるはずの孫策達に手を貸して貰おうと、北郷が発言した。それにより、袁術軍ともう一戦やらかすことが決

定された。北郷自らが、孫策に応援要請の旨を書き記した書状を書き、その書状は孫策の下へと送られた。そしてそれから一週間後、その書状の返事が返って来ることになる…。

木簡の整理が一区切り付き、気分転換がてら散歩にでも行こうとしていたら、何やらしきりに辺りを見渡す朱里と雛里の姿が見えた。その手には、何やら書簡らしきものが握られている。その二人の行動が気になった私は、そつと二人の後を追うことにした。

二人を追って行くと、武器庫の裏に二人が隠れて行くのが見えた。気付かれないよう、そつと覗いてみると、積み重ねていた材木に腰掛けて、さつき手にしていた書簡を読んでいる。いったい何が書いてあるのか気になるから、武器庫の陰に隠れて話を聞いてみることにした…。

「……はあ、ほとんど予想通りになっちゃったね、雛里ちゃん」

「うん。ご主人様も、まさか提案を断られるなんて思っていないだろうから、この書簡を見たら怒り出しちゃうかも。……朱里ちゃん、もう一回だけご主人様を説得してみよ？　もしかしたら、下？へ攻め込むのを取り止めてくれるかもしれないし」

「実はね、私もそうしようと思ってたの。でも雛里ちゃん、もしまた駄目だったらどうする？」

「……その時は、桃香様達には悪いけどお暇を貰って、星さんや月ちゃん達を頼ろう？　軍師としての力を必要とされてないなら、私達はいてもいなくても変わらないし……」

不味い……。このままじゃ、非常に不味い！　もし、朱里と雛里がいなくなってみろ。天然で理想家の桃香に、桃香の理想に殉じそうな愛紗と鈴々、目も当てられないような暴走が目立つ北郷、最近保護した麗羽達三バカの抑え役がいなくなり、尚且つこの軍の頭脳と精神的支柱を同時に失うことになる！　それだけは、それだけは、何が何でも避けられないといけない！　私には、そんな中でやっていく自信はない！

私は決心して、武器庫の陰から一步踏み出し、朱里達へと近付いた。

「朱里、雛里、話は聞かせて貰ったぞ」

「はうあつ！？」

大声を上げて盛大にひっくり返った。その際、どうやらお尻を強く打ったのか、摩っている。……何か、悪いことしたな。

「……その、なんだ、驚かして済まない。……それより、今話してたのは本当なのか？」

「……は、はい。この書簡を見せて、もう一度だけご主人様を説得してみます。それでも駄目だったら、ここを出て、もつと役立てるような場所に行こうと思います。でも私達は愛紗さん達のように強くはないし、人見知りもしてしまうので、親しい人のいる軍しか頼れません……。そうになると、星さんや月ちゃん達のいる袁術さんのところが無難かと」

この二人の覚悟は本気だ。なら、私も腹を括ろう

「分かった。じゃあ、私も北郷の説得を手伝おう。それでも駄目だったら、その時は私も部下達を連れて、二人と共にここから出る」

「え！？ 白蓮さんまでここを出なくても！」

「良いんだ。元々転がり込んできた身なのに、まだ大して役に立ててない。このまま穀潰しになるよりかは、その方がはるかにマシだ。それに、二人には護衛も必要だろ？」

い、言えない。二人がいなくなったら、私の心労が跳ね上がるから、そうならないためにも二人にはいてほしいだなんて、絶対に言えない……。

「白蓮さん、ありがとうございます！ 三人で力を合わせて、ご主人様を説得しましょうね？」

「お、おう！」

今は、昼時から一刻半ほど過ぎた時間だ。この時間なら、北郷は桃香と共に政務に励んでいるだろうから、ちょうど良いだろう……。

二人のいる政務室の前に着いた。二人とも緊張しているよう見えるが、それだけ北郷を説得しようという意気込みが伝わってくる。

……伝わっては来るんだが、部屋の中から何やら嫌な音が聞こえて来る。私達は三人揃って、その音が何なのか想像が付いていた。その証拠に、全員顔が赤い。

「しゅ、朱里、雛里、だ、大丈夫か？」

「「あ……ひゃい」」

駄目だ、二人とも完全に思考が停止してる。ここはまず、私が先に
行つて話が出来るような状態にするしかないな……。

「二人とも、ちょっとここで待つてくれ」

覚悟を決めて政務室の扉に近付き、取っ手に手を掛けてゆつくりと
開く。それと同時に中から聞こえて来るのは、寝台の軋む音、北郷
の呻き声、肌と肌がぶつかり合い、それによつて生じる水音、そし
て桃香の喘ぎ声。見えるのは、散らかり放題になっている、二人分
の服と下着。……二人は、互いを求め合っている最中だった。

気付かれないよう、出来るだけゆつくりと扉を閉める。他人の情事
を見といてあれだが、冷静を保てた自分を褒めてやりたい。まあ、
それが出来たのも、私の中にあつた僅かな希望が消えたからだと思
うが……。

「朱里、雛里、二人は今、性務が忙しくて手が離せないそうだ。書
簡は私の方で何とかしておくから、二人は荷物を纏め始めてくれ」

「「……………」」

一生懸命悩んでいたのが馬鹿みたいと言わんばかりに呆れている二
人は、一度だけ頷くと、私に書簡を渡してそれぞれの私室に向かっ
て行く。受け取った書簡は、扉の前に置いておくことにした。二人
の邪魔をしたくない……というのは立て前で、本音を言うと、これ
以上この場にいたくないからだ。それにこの書簡も、夕方にでもな

らない限り誰にも見つからないだろう。中の二人は、どうせ疲れて寝てしまつたろうし……。

部屋から離れ、兵舎に向かう。自分に付いて来た兵士達を呼び出し、付いて来たい奴だけ付いて来いと言う前置きをしてから、事情を説明した。兵士達は私の話を聞き、どこまでも付いて行く覚悟は出来ていると言ってくれた。兵士達に出立の準備を急がせ、私も私室へと戻る。

着の身着のまま転がり込んできたせいもあつてか、私の部屋にはこれと言ったものはない。あつても精々、剣と鎧に兵法書。何と可愛げのないことかと、自分が恨めしく思う時もあったが、今この時だけは好都合だった。

「あ、あの、白蓮さん、いらつしやいますか？」

朱里の声が、部屋の外から聞こえる。扉を開けると、最低限の荷物だけを纏めた朱里と雛里が、立っていた。

「……もう、良いのか？」

「「はい」」

「じゃあ部下達を呼んで来るから、ここで待っててくれ」

二人を部屋に残し、兵舎へともう一度足を運ぶ。兵士達の方も準備が済み、今からこつちに来るところだった。

兵士達には、城外での部隊訓練を装って先に城の外で待機しておくようにと伝え、朱里達を迎えに行く。

「朱里、雛里、行くぞ？」

「はい！」

いつもは元氣一杯の鈴々も、呂布から受けた傷が完全に癒えたわけじゃないから、未だに寝た切り状態が続き、愛紗は鈴々がやれない分、山のように重ねられた軍事関連の書類や木簡と格闘中。麗羽達は、どこで何をしているか分からないし、北郷と桃香に限っては、『ヤリ盛りの君たちへ』状態……。つまり、私達が出て行くのを、誰一人知らない。気付いた時にはいなくなっているというわけだ。

城門前で一度止まり、城の方へと振り返る。

「じゃあな桃香、北郷、愛紗、鈴々……」

別れの言葉を呟き、私達は彭城を後にした。その後、私達がいなくなったのに気付いたのは、日が沈み切った後だったというから驚きだ。

ちなみに、孫策から送られて来た書簡には、こう書かれていた……。

『我ら孫呉は、袁術軍の共同討伐の件について、劉備軍に対し一切の協力をしない。我らが信用するに足らぬ者達に貸し出す兵士など、我が国には一人たりともないからだ。追記するならば、我が孫呉の地を取り返した時点で、袁術を討伐することに、もはや何の意味も為さない。この件において、我らに被害が及ぶものならば、我が友である紀霊に、手を貸すことも辞さないことを、ここに警告しておく』

白蓮の決断（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

デレるな、危険（前書き）

いやはや、何と言いますか、今回も七乃（の性格）がちよっと変になつてゐるかもしれません……。とりあえず、女性の心情とかが上手く書けないです……。

その代わりと言っちゃなんですが、一刀のクオリティは相変わらずです。

そんなわけですので、本編の方、どうぞ

デレるな、危険

Side：一刀

良くないことが、二つ起きた。一つは、孫策が俺の要請を拒否したこと。しかもその手紙の文面から考えるに、あの野郎が生きているっていうのがさらに気に食わない。孫策も孫策だ、何で憎んでいるはずの軍のやつと友達になんかなくてんだよ……！

もう一つは、朱里と雛里、そして白蓮が、いつの間にかいなくなっていたこと。どうしてなのか、俺には良く分からない。朱里と雛里には結構無理をさせていたかもしれないけど、一応最低限の政務はこなしていたつもりだ。だから、二人がいなくなった意味がさっぱり分からない。白蓮のことだってそうだ。俺達との間に、特に何か問題があったわけじゃないし、袁紹達を保護した時も、仕方ないって言うてたから、それも関係ないはず……。

「どうして、三人共いなくなっただろう……？」

「もしかして、ご主人様が気付いてないだけで、本当は朱里ちゃん達が傷付くようなこととかしたんじゃないの？ ほら、ご主人様ってば気が多いから」

「そんなわけないだろ？ 少なくとも女の子には、優しく接していると思うし……」

こんな可愛い子達に囲まれて、優しく接しない男などいないだろう。もしいるとしたら、そいつは間違いなく、同性愛者かブスが好みの奴だ。

「もしかしたら、逆にそれが原因ではないのですか？ ご主人様は、その、可愛い女子であれば誰に対しても、それらしい素振りをすぐお見せになれますし……」

「そう？ 俺としては、そういうつもりはないんだけど……」

そっぴやここに送られて来る前、聖フランチエス力で普通に高校生活を送っていた時も、女子からは案外人気あるみたいに言われてたっけ。俺自身、そんなには意識したことは無かったけど……。いやー、あの野郎とは違って、モテる男つてのは辛いもんだよなあ。現にこの世界に来てからも、桃香と愛紗と鈴々の三人から好意を向けられているし、俺だって三人のことが好きだ。じゃなきゃ、三人を平等に愛したりなんかしない。何と言つても、三人揃って美少女だし、桃香と愛紗はスタイルも良い。鈴々は……数年後に期待って感じかな。

後はここに星達がいってくれば、桃香達とはまた違ったアクセントになったんだろうな。本当に惜しいことをしたと思う……。でもまあ、星達の代わりと言っちゃなんだけど、袁紹達もいるし、そう難しく考え過ぎることも無いだろう。

「ねえご主人様、袁術さんの所に攻め込むのはやっぱり止めにしたかい？ 今うちでまともに戦えるのって、愛紗ちゃんしかいないし、その愛紗ちゃんまで鈴々ちゃんみたいに怪我しちゃったら嫌だよ。それに朱里ちゃん達もいないから、私とご主人様は今まで以上に政務を頑張ってこなさないとけないし……」

「……そうか。じゃあ戦を仕掛けるのは一旦止めにして、とりあえず今は内政に力を入れることにしよう。人手が足りないようなら、

あの三人の中で唯一常識人な斗詩に手伝いを頼めば良さ。愛紗もそれで良いか？」

「私は、お二人がそれで良いのでしたら、それで構いません。……それに、鈴々や星、白蓮殿が抜けたことで、兵達の訓練や軍務の方が依然より滞っておりますから、私はそちらの穴埋めをしなければなりませんし……」

「なら、軍務の方には猪々子に手伝ってもらおう。斗詩にも言えることだけど、あの袁紹に仕えてたんだ。これくらいなら、問題なくこなしてくれるだろ。話は俺の方で付けておくから、二人は先に仕事に戻ってくれ。俺もすぐに戻るから」

「はい（分かりました）」

二人と一度別れ、斗詩と猪々子を探すことにした。とは言っても、やることもないだろうし、暇を持て余してるだろうから、割り当てた部屋にいると思う。

まずは斗詩の部屋へと足を運ぶと、都合よく猪々子もいてくれた。事情を説明すると、二人とも快く引き受けてくれた。まあ、もともと俺達に保護されたんだし、少しは手伝わなきゃいけないとは思っててくれたんだろうな。

二人には、明日から手伝ってくれば良いからと伝えて、俺は桃香のいる政務室へと戻ることにした…。

S i d e : 八雲

月と詠を改めて迎え入れてから数日経ったある日の夜、知り合いである星を頼って来たという三人組が、二百人弱の白馬に乗った騎馬兵を連れてここへ来たという報告を受けた。その三人組の特徴を聞くと、騎馬隊を指揮しているあまり目立たない女性と、可愛い少女が二人だという。今はどこにいいのか聞いてみると、星が私室へ招き入れて対応しているとのことらしい。

ある程度想像は付くが、とりあえず星の私室へと向かうことにした。部屋の前に着くなり、扉を軽くノックする。

「どなたですか？」

「星、今入っても大丈夫ですか？」

「ええ、構いませぬぞ。どうぞ、入って来て下され」

お邪魔します、と声を掛けて中に入ると、そこにいたのは、以前交渉の席に座っていた諸葛亮と鳳統、それと……ええと……「公孫賛だよ！」　そうそう、公孫賛の三人がいた。

「どうして、貴女方がここへ？」

「八雲殿、この三人は私と同じく一刀殿を見限り、飛び出して来たようなのです。ですが頼る当てが私しかいないため、ここへと流れて来たようですね……」

星から事情を説明されて、改めて三人の方を見る。……この三人が抜けたら、あの軍はまともにやっていけないだろう。

「紀霊さん、お願いです！　一生懸命働きますから、私達をここへ

置いて頂けませんか？」

「うーん……」

正直に言ってしまうと、諸葛亮と鳳統に関しては悩む必要すらない。軍師が多過ぎる気がしないでもないが、二人の能力を鑑みれば、二つ返事で歓迎しよう。だけど、公孫賛の能力だけがいまいち分からない。……それより、俺っていつからこの軍の人事部に異動したんだ？ たしかに、恋達と直接交渉したのも、星を引き抜いたのも、月達と話し合いをしたのも全部俺だけど……。まあ、気にしたら負けか。七乃も美羽様も、こういった人事に関する交渉は、いっさいしないし……。

今ここに、自称ではあるが、人事部長八雲が誕生した。目指すべき目標は、戦乙女でありながら、巧みな交渉術で次々と部下を増やしていく、あの敏腕人事部長レ。ス。……冗談は、これくらいにしておこう。

「それなら諸葛亮さんと鳳統さんには、詠やねねと共に軍師として働いて貰いつつ、時間の空いている時には内政や事務の手伝いをして頂くとしましょう。……それと真に聞き辛いのですが、公孫賛さんは何が得意ですか？ 例えば、政務が得意だとか、軍務なら問題ないだとか……」

「そうだなあ……。これでも一応、元幽州太守だ。政務も軍務も、それに兵の調練だって、一通りある程度は出来ると思うぞ？」

「ある程度、ですか？」

「むう。そうだよ。悪かったな、ある程度で。どうせ私は、どこに

でもいる普通な女だよ……ふんっ」

そう言うと、拗ね始めてしまった。星達は見慣れているようで、苦笑いを浮かべていたが、俺はちよつと違う。彼女は政務が出来て、軍務が出来て、おまけに兵の調練まで出来ると来た。政務か軍務のどちらかに偏る将が圧倒的大多数を占める中、こういうオールラウンダーな武官がいてくれるというのは、軍にとっても非常に有益なことだ。特に、今のうちのように武官が少ないとなれば尚更。北郷も、勿体無いことをしたもんだ。

「……素晴らしい」

「「「へっ!?」「」」

「何かに突出するわけではない代わりに、どのような仕事でも卒なくこなしてくれる。これはとても素晴らしいことですし、誰しも皆が出来ることじゃありません」

「で、でも、私は星のように腕が立つわけでもなければ、朱里や雛里のように頭が良いわけでもないんだぞ……?」

今まで普通だ普通だと言われ過ぎたのか、何か卑屈になり過ぎてんな……。

「たしかに、公孫贇さんの仰られることは事実でしょう。現に俺だって、星には勝てませんし、諸葛亮さん達よりも頭は悪いです。ですが、星に内政をやらせて出来るかと言えば、出来たとしても貴女のようにそう上手くは行かないでしょう。諸葛亮さんや鳳統さんが兵の調練を行えるかと言われたら、陣形に関しては出来るかもしれませんが、基礎鍛錬や手合わせなど、個人の能力を引き上げるよう

なことはあまり出来はしない。でも貴女なら、この三人に出来ないことを一人で行うことが出来る。……貴女は、紛れもなく優秀な人なんですから、そう自分を卑下する必要はないんですよ？」

「……そ、そうかな？ えへへ」

本人も、思ってた以上に褒められたのが嬉しかったのか、今度は一人だけ照れ笑いを浮かべている。……今まで、どれだけ評価されて来なかったんだよ？

その後、三人と真名の交換を済ませ、雑談を交わしていた。博識な人達との会話が新鮮だったこともあり、他愛もないような話題で話が盛り上がっていた。だから、気が付くことが出来なかった。扉の向こうの人物に…。

S i d e : 七乃

美羽様がいつもよりも早く寝付いてくれたから、何となく八雲さんと話そうと思つて部屋に行ったのに、肝心の本人がいない。それで城の中を探してみたら、星ちゃんの部屋から何やら楽しそうな話し声が聞こえて来る。扉に耳を当ててみると、部屋の主である星ちゃんに、八雲さん、それと複数の女の人の声……。

聞き慣れない女の人の話と八雲さん達の笑い声が、扉の向こうから漏れ聞こえて来る。私と話してる時は、あんな楽しそうに笑ったりしないのに……。そんなことを思い始めたら、話を聞いているのが嫌になり、扉から離れる。

「……………どうしちゃったんだろ、私」

胸を掻き乱すような、それでいて胸を締め付けられるような、今まで感じたことの無い痛みを伴う黒く濁った感情が、私のことを支配して行く。

「……………あの時言ってくれた言葉は、嘘、だったのかなあ？ ううん、あの人は嘘を吐くような人じゃないし、あれはきっと本心、だよね……………」

不安に思っ心に押し潰されないよう、自分に何度も大丈夫だと言い聞かせる。それでもやっぱり、完全には不安を拭い切れない…………。

言葉では言い表せないこの気持ちは、いったい何なのか。今の私には、この気持ちを何と呼べばいいのか分からなかった。ただ一つ言えることは、この場に居たくないということだけ。だから私は、部屋の前から足早に立ち去ることにした。

美羽様の眠る部屋へと戻る途中、気が付くと頬が濡れていた。そういえば、さつきから心なしか視界がぼやけてる気がする…………。頬を濡らした正体が自分の涙と気付くのに、そう時間は掛からなかった。

「あ、あれ、可笑しいな？ どうして私、泣いてるんだろ……………」

その途端、堰を切ったように堪えていたものが溢れ出す。それと同時に、思考もぐちゃぐちゃになる。気付けば私は、本来戻るべき場所とは、別の場所へと足を運んでいた…。

S i d e : 八雲

思った以上に雑談が長引いてしまい、気付けば、星の部屋を訪れてから結構な時間が経っていた。早く部屋に戻って寝ないと、明日の仕事に響きそうだ。

部屋に戻ります、と挨拶だけ済ませて、明日も晴れるなどかどうでも良いことを考えながら、私室へと続く廊下を一人進んで行く。

部屋の前に着いて直ぐ、何故か違和感を覚えた。その違和感の正体は、扉だ。普段必ず閉めていくのに、何故か中途半端に開いている。ゆっくりと扉を開け、部屋の中を確認すると――

「……………え？」

「すう、すう」

七乃が、何故か俺の寝台で寝ている。起こそうと思い近付くと、一際明るい月の光に照らされた七乃の顔、目尻から頬にかけて乾いた涙の跡があった。…………何故だろう。七乃の顔が、どこか悲しげに見える気がする。とりあえず、起こして事情を聞いてみよう…。

Side：七乃

「――の、起きて下さい？ 七乃？」

「んう」

身体が、左右に優しく揺すられる。ゆっくり瞼を開けると、そこには不思議そうな表情を浮かべている八雲さんの顔があった。……………そうだ、私ってば八雲さんの部屋に来た後、そのまま泣き疲れて八雲

さんの寝台で寝ちゃったんだっけ……。

目を擦り、眠気を噛み殺すと、八雲さんが何か聞いたそんな顔をしていた。身体を起こして寝台の上で正座をすると、八雲さんは私と向き合う形で、寝台の上で楽な姿勢で座った。

「起きましたか。……それで、どうしてここに七乃がいるんですか？」

「え、ええと、その……」

ここにいる理由……さっきと比べて、泣いていくらか落ち着いた今なら分かる。私は、星ちゃん達に嫉妬してたんだと思う。だって、今まで私と美羽様しかいなかったはずの場所に、星ちゃん達はあっさりと入って来るし、八雲さんも私達と話す時以上に楽しそうに話しているしで、無性に淋しさのようなものを覚えたから。

でも、そんなことが理由でこの部屋に来たなんて言ったら、どう思われちゃうんだろう？　ちゃんと好きとか言ったわけじゃないのに、こんなことしたなんて知ったら、私のことを変な人とか嫌な女だと思われそうで怖い。でも、こういうのって言わなきゃ伝わらないよね……？

「……七乃」

「……笑ったり、変な風に思ったりしないって、約束できますか？」

「ええ」

私は、意を決して話し始める。今に至るまでの経緯を、その時に私

が抱いていた感情を、淋しさを感じたことを、何もかも包み隠さず全て……。ちゃんと言葉にはしてないけど、これじゃ遠まわしに好きって言ってるのと一緒に気もする。八雲さんも最初は驚いていたけど、次第に真剣な顔つきの中にどこか優しさを含んだ表情へと変わっていった。

「——これが、私がここに居た理由です。……変、ですよ？
まだ私、ちゃんと返事したわけでもないのに……」

話し終えた後、私はまた泣き出しそうになった。でも、どうせ泣くなら返事を聞いてからでも遅くないと思って、我慢することにした。何を言われたとして、ちゃんと最後まで聞こうと決心した時、急に抱き寄せられた。……せつかく堪えようって決めたのに、抱き締めてくれたその手が、今の私には優し過ぎて、また涙が零れてしまう。

「……ごめん、七乃。辛い思いをさせてしまつて。……もしかしたら、これから俺は気付かぬうちに、今日みたいな思いを七乃にさせてしまつかもしれません……」

「……それは、出来たら止して欲しいですねえ。でもそれが無理なら、せめて私だけにしかないような特別なことをしてくれませんか？」

「特別なこと、ですか？　そうですね、じゃあ……」

抱き締める手を少し緩めると、私の背中に回した手はそのまま、もう片方の空いた手が頬へと添えられる。その時、親指でそつと涙を拭ってくれた。

八雲さんが今から何をするつもりなのか、私にはすぐに分かった。

私もそれを拒む理由はないし、むしろそれを望んでいた。目を瞑り、少しだけ上を向く。そして――

「ん……」

軽く触れ合うだけの口づけ……それだけで、何故か満たされたような気持ちになる。お互いに余韻を味わうかのようにゆっくりと唇を離していく。……ちよつとだけ、名残惜しいかな。

「七乃、これで大丈夫ですか？」

これだけなのが勿体無くて、もっと甘えたくなる。

「駄目です。これだけじゃ、また星ちゃん達に焼き餅を焼いちゃうと思います。だから……その……」

は、恥ずかしくて、もう一度なんて自分からお願いできない……。口づけしといてって思われるかもしれないけど、あれはほら、してもらったわけだし……。あの、その、あうあう……。

恥ずかしさのあまり一人で混乱していると、再び抱き寄せられる。八雲さんは私を抱き締めると、そのまま寝台に倒れ込んだ。言わなくても分かると思うけど、今の私は、八雲さんに覆い被さった状態で抱き締められている。

「……七乃だけにしてあげるような特別なことは、またおいおい考えていきましよう。今日はもう、疲れました……」

二人を覆うように布団を被せると、不意打ち気味に唇を私のそれに重ねて、八雲さんは寝てしまった。

「むう……」

この間から、緊張してるのが私ばかりでずるいとか思いながらも、八雲さんの胸に顔を埋めて、愛しい人の温もりを肌で感じながら眠ることにした……。

……翌朝、何かの報告をしに来た兵士に、私達が朝から情事に耽っているとは勘違いされた。その勘違いが引き起こした噂は、たちまち軍全体へと広がり、二人でその誤解を解こうと必死になっても、逆効果になる一方だった。ついには、やりましたね紀霊將軍、とか、大將軍様おめでとうございます、だとか、称賛と冷やかしの入り混じった言葉が、兵士達から浴びせられた。

開き直った私達は、その言葉を素直に受け取り、お礼としてその日の調練の時間を二倍に延長してあげることにした。兵士の皆は私達の優しさに感激ぜっほうしたのか、大粒の涙を浮かべ、叫びにすらならないような呻き声を上げ続けていた…。

デレるな、危険（後書き）

次回は、歩く死亡フラグと名高い姐さんや、霸王様を出していただくと思っています。

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしくお願いします。

袁術軍初、まともな軍議

S i d e : 華琳

事は驚く間もなく、あっさりと片付いた。各諸侯の動きに気を配るようにと言った軍議から数日後、私達は麗羽の軍と官渡で対峙することになった。結果は、勿論私達の勝利で終わった。桂花は昔、麗羽の下で働いていたことがあったから、あの三人組の行動や考えが手に取るように分かるみたいだし、私も麗羽とは腐れ縁とも呼べる関係だから、少なくともあれの性格くらいは分かっている。

特に顕著なのは、斥候の報告が上がっていた櫓の存在。どうせ、偉そうに上から見下ろすために用意させたような物なのでしょう。そう読んだ私は、櫓を破壊するための兵器……投石機を、真桜に作らせておいた。そして、その起用が的中。その後、慌てる敵軍に突撃を掛けたことで、麗羽の軍はさらなる混乱状態に陥った。逃げ惑う兵士に、その兵士達を御しきれない無能な将。この状況が出来あがったことで、我が軍の勝利は決まった。

麗羽達は討ち取る前にどこかへ逃げてしまったけど、別にどちらでも構わない。どうせ私の前に立ち塞がることなど、もう無いのだから。私達は直ぐに軍を動かし、麗羽の支配下にあった河北四州を勢力下に入れることに成功した…。

それから七日ほど経ち、各諸侯の動きはどうなっているか、軍議を開き報告をさせている。

「桂花、現在の各諸侯の動きはどう？」

「はっ！　まず孫策ですが、袁術に謀反を起こし、独立に成功したようです。しかし、袁術は配下を連れて逃走、下？へと落ち延びたようです」

「ふむ。やはりあの程度の俗物では、英雄を飼い殺すことなど出来なかったようね。でも桂花、下？には呂布がいたはずでしょ？　それに、劉備も黙ってないんじゃない？」

「まず呂布に関してですが、どうやら袁術と手を結んだようです。報告には、呂布の手元にあった兵糧が尽きそうになったところに、あの紀霊とかいう男が交渉を持ちかけて来て、呂布がそれを飲んだとあります」

「なに！？　あの呂布がか！？」

春蘭の動揺も、分からないでもないわ。それにしても、あの男が呂布を、ねえ……。まあ呂布の方も、糧食が尽きてはどうしようも無いのだし、藁にも縋る気持ちだったんでしょう。それにしてもあの男、思ったよりも交渉事が上手いようね。……別に男に興味は無いけれど、それなりの手腕があるのなら、俗物の下に置いておくのは惜しい気もするわ。

「劉備軍についての報告は、私と風で行います」

「ええ、お願いするわ」

風と稟は、麗羽と一戦やる前に新しく私に仕える事になった軍師。

とても優秀なだけでなく、稟の鼻血……あれって何とかならないのかしら？ まあそれはともかく、今は報告をさせるとしましょう。

「劉備の陣営ですが、どうやら先ほど話に出た紀霊と呂布に戦を仕掛けたは良いものの、見事なまでの返り討ちにあったようです。そして劉備はその戦で負けた代償として、下？を袁術軍へと譲渡したとのことです。よって現時点での袁術の領土は、下？のみということになりますね」

「それとですね、ここ最近劉備さんの所から、次々と将達が居なくなってるみたいなのですよ」

「将が？ その話、もう少し詳しく聞かせて貰えるかしら？」

「はい。先ほどお話しした紀霊達との戦を境に、趙雲、公孫賛、諸葛亮に鳳統、あとは侍女のような服を着た少女が二名ほど、それに兵士の一部が劉備の下を離れ、全員揃って下？にいる袁術軍へと保護を求めたようです。そして袁術軍の方も、それを受諾したとの報告がありました。……それと彭城のみではありませんが、治安や民の暮らしが以前より悪化し始めているとも……」

抜けた者達は皆、劉備軍でも主力と言われる者達ばかり。となると、今劉備の手元に残っているのは、関羽と張飛のみ。私達が攻め込めば、大した被害も出さずに、あの男と共に滅ばせることでしよう。それにしても、どうして袁術の下なんかには優秀な者達が揃うのかしら……。もしかしたら、それもあの男が何か関係しているのかもしれないわね。ふふ、ますます興味深くなって来たわ。

「じゃあ、我らは次にどうするべきか。桂花、風、稟、腹案を述べなさい」

では私が、と桂花が一步前に出る。

「私の示す腹案は、ただ一つ。徐州へと侵攻すべきです。あの地の治安は悪化し、今や劉備達が治めるには過ぎたる地。ならば民の為に、華琳様の進む覇道の為にも、これを期に攻め落とすべきかと……」

「華琳様、私も桂花と同意見です。徐州は手早く我が軍の物にしておいた方が、我が軍の為です」

「たしかに報告を聞く限りだと、劉備では徐州を治めるのは力不足に感じるわね。でも、袁術の方はどうかしら？ あれ自体は俗物でも、その下に居る者達に優秀なのが揃って来ているのだから、意外と治めてしまうのではなくて？」

「そうですね。諸葛亮さんや鳳統さん、それに元太守の公孫賛さんもいますから、このまま放っておけば、劉備さん達を追い出して徐州を平定することでしょう。私としては、兵隊さん達を無駄に消費する必要がなくなるので、その方が良いと思うのですよ。なので風としては、今は静観して、新しく手に入れた河北四州の方の統治に尽力し、力を溜めておくべきだと思います。……華琳様も、弱い者虐めはしたくないでしょうし」

「「うう……」」

風の言葉に、徐州侵攻を提案した二人がたじろぐ。世間の風評としたり、私がここで劉備を攻めるのは弱い者虐めにしか映らないでしょう。ならば今は、風の意見を採用しておくべきでしょうね。

「風の言う通り、世間は私達のことをそう評価するでしょう。私も己の目指す覇道に、弱い者虐めなどという泥は塗りたくは無いわ。だから今回は、風の意見を採用することとしましょう。次の一手で、最良の結果を得るためにもね……。でも、情報だけは常に集めるようにしておいて。他の諸侯の動き如何で、出撃することだって有り得るんだから。良いわね？ それじゃ、軍議を解散しましょう、各々、持ち場に帰りなさい」

軍議を閉幕し、各々が軍議の間を後にした。さて、この乱世はどういった様相を呈していくのかしらね…。

Side：八雲

白蓮達に加わったことで、この軍もかなり大所帯となった。だけど、そんな大所帯に似合わないくらいに領地が狭い。そして最近、劉備達の治める彭城の雲行きが怪しいらしいと聞く。とりあえず今後どうするべきかを、全員揃って軍議の間に集まり、話し合うことにしよう。

……事が事なので、今回は全員が軍議の間へと集まり、話し合うことになった。

「全員揃っておるようじゃな？ それじゃあ、軍議を始めるのじゃ」「話し合う内容は分かっていると思うので、提案がある人はどんどん発言しちゃって下さいねえ」

じゃあ、と遠慮気味に朱里が手を上げ、どうぞ、と七乃が発言を促す。

「最近、彭城の治安が悪化し始めていると聞いています。彭城が悪化し始めているということは、他の地域の治安も、今後怪しくなってくると思われます。ここで起こり得る問題は、治安の悪化した土地に住んでいる人達が、他と比べて比較的統治されてるこちらへと大量に流れて来る可能性があることです。もしそうなれば、備蓄し始めた食糧もすぐに底を突きかねませんし、飢えた民が暴動を起こしてしまう危険性も否定できません。そうなる前に何とかしなければなりませんから、私と雛里ちゃん、詠さんとねねちゃんの四人で、どうするべきかを考えたんですけど……」

朱里はそこで言葉を区切り、これ以上の発言をすることを躊躇っていた。そういえば、白蓮がこっそり教えてくれたな。北郷は、軍師の献策にほとんど聞く耳を持たず、挙句の果てには、政務じゃなく性務に掛かりつきりで、ほとんど上に立つ者としての仕事をしていなかったって……。

それと二人は、まだ心のどこかで、この軍でも自分達の献策を聞いて貰えないんじゃないかと思っているのかもしれない。それが俺の気のせいなら良いけど、一応その不安を少しでも取り除いておく必要はあるだろう。

「……また、献策を聞いて貰えないかもって考えると、不安ですか？」

「「……」」

二人揃って口を噤む。沈黙こそがその答え、ということか……。やっぱり、不安に思ってたみたいだ。

「ここにはもう北郷さん……二人の献策を無視するような人は、誰一人としていません。だから安心して、皆にその策を示して下さい。皆、口には出していませんけど、二人のことをとても頼りにしているんですよ？　だからこの軍の軍師として、毅然とした態度で策を示して下さい」

「「っ！？」……は、はい！」」

はつとした顔でお互いに向かい合った後、元気良く返事をする。うん、実に良い笑顔だ。これで、色々と吹っ切れてくれると良いんだけど……。

「それじゃ朱里、どのような献策なのか、先ほどの続きを聞かせて貰えますか？」

「はい！ 私達が献策した腹案はまず、彭城へと軍を進め桃香様……劉備さん達をこの徐州から追い出し、私達で徐州を統治するというものです。このままではいずれ曹操さんに攻め込まれ、劉備さん達と一緒に滅ぼされてしまいます。そして曹操さんは、さらに力を付けることでしょう。ならばそれを阻止するためにも、私達が先に徐州を統治し、国力の充実と軍備の増強を図っていくべきだと思っ
んです」

「それと同時に進めるべきことは、どこかの諸侯と同盟を結び、武官不足を解消することです。恋さんと星さんがいてくれるのはとても心強いですけど、常にお二人が居るとは限りません。それなら戦力を確保する意味でも、どこかの有力諸侯と手を結んでおくべきかと……」

たしかに、このままだと恋や星に頼りつきりになる可能性があるな。

俺としても、さすがにそれは忍びない。そうならない為にも、武官集めは急務と言えば急務か……。

「離里は、どこと手を結ぶべきだと考えていますか？」

「孫策さん達と結べるのが、一番良いんですけど……。それが無理となると、西涼の馬騰さんが妥当ではないでしょうか？ それ以外だと益州の劉璋さんになりますけど、あまり手は結びたくないですね……」

「離里が敬遠したい気持ちは分かりますよ？ あれは、候補から外しておいたほうが良いでしょう。北郷さんよりマシとは言え、負けず劣らずの凡愚ですから。賢い人ならまず、同盟を結ぶなんて真似はしないでしょうね」

「「劉璋さんのこと、何かご存じなんですか！？」」

そういえば、美羽様と七乃以外には話してなかったな。この際だから、袁紹に仕えてたこともあるって教えておくか。

「実は昔、数年ほど流浪の旅をしていましたね。路銀を稼ぐのに、劉璋さんの下で客将として働いていたことがあるんですよ。なのであの人の駄目っぷりも、彼の配下の有能さも知ってます。特に、巴郡の街を治めている嚴顔さんとその部下の魏延さん、それと劉璋さんの元配下で、今は宕渠郡にある城の城主である黄忠さんは、とても頼りになる方々です。……後は、袁紹さんの下でも客将をしてました。そういえば、曹操さんに負けたみたいですけど、今頃どこに居るんでしょうね？」

「麗羽達なら、今は北郷のところに居るぞ？ つい最近、保護された

「からな」

「……はあ、また面倒な人に保護されましたね。ただでさえ面倒な人なのに。どうします、美羽様？ このままだと、袁家の名が地に堕ちる可能性があります……」

「何故、あの男の下に麗羽がおりると、袁家の名が地に堕ちるのじゃ？」

正直言つと、これから話すことは内容が内容だけに、まだ美羽様には早い気もする。しかも、かなり憶測だらけだ。でもこのまま放置しておく、下手すれば美羽様の名まで汚されかねない事態だつて起こり得る。七乃と目が合うと、彼女は何も言わずに一度だけ頷いた。七乃も、何となく想像が付いているみたいだな。

「美羽様、よく聞いて下さい。このままだと早くて数力月、遅くても半年以内に、袁紹さんは北郷さんに食われる可能性があります」

「く、食われるじゃと！？ このままだと、麗羽はあの男に食い殺されてしまうのかや！？」

「……本当に、食われるわけじゃありません。ここでの食われるは、男女の契りを意味します」

「ほえ！？」

かなり直接的な言葉で言つたためか、美羽様も理解したようだ。心なしか、頬も赤い……ような気がする。

「もしそうなら、袁紹さんが彼の子供を身籠りでもしたら、美羽

様の意思など一切関係なく、袁家に対する世間の風評はこう変わる
ことでしょう。……名門と謳われた袁家の人間は、どこの馬の骨か
も分からないような男の子供を身籠るような、墮落した一族に成り
下がった、と……」

かなり言い過ぎだと思うが、実際そうだろう。世間では天の御遣い
なんて言われているが、事実上は無位無官の穀潰しに過ぎない。偉
いのは、劉備軍の中でだけだ。もちろん、宮中の位の中に『天の御
遣い』なんてものはないし、ましてや未来の知識があるっただけで、
皇帝より偉いなんて事はまず有り得ない。そんなこと言ったら、俺
だって皇帝より偉くなってしまふ。

「や、八雲よ、どうすれば、袁家の名を汚さずに済むのじゃ!？」
教えてたも!」

「美羽様、こういう時だからこそ、賢人の知恵を借りるのですよ?」

「そ、そうじゃな。……朱里、雛里、詠、ねね、妾にそなた達の知
恵を貸しては貰えぬか?」

……美羽様が、いつものような命令口調ではなく、きちんとお願い
した、だと? これには、素直に成長を感じずにはいられない。

荊州を失ってからというもの、美羽様は以前よりも勉強するように
なった。分からないところは俺や七乃に教わり、その成長ぶりを今
目の前で見せてくれた。仕えている者として、なんと喜ばしいこと
か。軍師の四人も驚いていたけど、すぐに返事をしてくれた。

「考えられるのは二つ。先ほど私達が献策した通り、彭城へと攻め
入り、劉備さんを追い出す。そして我が軍が、美羽ちゃんが徐州を

統治するという方法です」

「もう一つの方法は、まずは下？を返還する代わりに、袁紹さん達を引き渡してもらいます。次に、益州に行けるだけの兵糧を持つて、八雲さんのお知り合いである嚴顔さんか黄忠さんのどちらかに保護してもらうか、適当な城を占拠して、そこを根城とします。そして劉璋さんを倒せるだけの力や兵を蓄えた後、成都を制圧して、美羽ちゃんが統治……つまり、蜀の王となるというものです」

軍師としてはあまりお勧め出来ませんが、と雛里が申し訳程度に付け足す。

「わ、妾が王になれるのかや！？」

「上手く事が運べばね……。でも雛里も言ってた通り、あまりお勧め出来る案じゃないわ。この方法を取ったら、あのバカはつけ上がるわよ？ 自分は袁術軍にとって、唯一の領土である下？よりも存在価値が上なんだってね。それで美羽が蜀の王なんかになったら、それこそ黙ってないと思う。最悪、八つ当たりに近い感じで、反乱を起こしかねないわ。そんなことになってみなさい？ それこそ、他国に付け入る隙を与えるだけよ。だからボクとしては、賛成できる案じゃない」

「ねねも、詠の意見に賛成なのです。ですが逆に、最初の方法ならば袁紹に対して、美羽の方が立場は上なんだと、示すことが出来ますぞ？ 同じ袁家でも、領地のある者となない者とは、天と地ほどの差がありますからな。これであいつも、デカい口は叩けなくなるのです」

各自が意見を出し合い、美羽様も無い知恵を絞って一生懸命に理解

しようと頑張っている。そして七乃は相変わらず、うんうん唸っている美羽様のことを、恍惚とした表情で眺めている。……うん、実にうれしい軍議の在り方だ。有能な人材が入って来ても、美羽様と七乃の立ち位置は全くぶれない。そこがまた良いと思うのは、俺だけだろう。

「結局、妾はどうすれば良いのじゃ、七乃お？」

「そうですねえ。やっぱここは、皆さんの助言通りに劉備さんを追出しちゃった方が良いと思います。それに袁紹さんを助けたことにしておけば、恩を売ること出来ますしい」

「うむ。ならば劉備の下へ攻め入ることに決定なのじゃ！……これが上手くいけば、もう麗羽に苛められずに済むのじゃ」

「良かったですね、お嬢様あ」

これで、決めるべきことが一つ決まった。あとは、誰と……と言っても、馬騰しかいないか。あとは馬騰との同盟を結ぶのに、誰を使者として向かわせるかだな。

「ところでだ。彭城に攻め入るのは良いが、誰が使者として向かうのだ？」

「馬騰さんは漢の將軍ですから、こちらもそれなりの官位を持った人物が出向くべきですね。この中で、美羽様以外に宮中の位を持っている方っていますか？出来るだけ、高い方が良いんですけど……」

俺の質問の答えとして手を挙げたのは、月、恋、そして白蓮の三人

……。全員の視線が、白蓮へと集中する。武人相手だと、武人じゃない月じゃ交渉し辛い。恋は、武においては文句無いけど、彭城を攻めるのに必要だから、使者として送ることは出来ない。でも白蓮なら、何の問題は無い。だから全員の視線が、白蓮へと集中するのだ。

「な、何だよ？ 私が宮中の位を持つてるのが、そんなにおかしいつてのか？」

「いえいえ。むしろ色々な面から見て好都合過ぎて、驚きを隠せないですよ。馬騰と対等に話せそうな白蓮なら、同盟の使者としても十分ですね。あと、具体的な交渉を進める人には——」
「ボクに行かせて！」 詠？

「馬騰の下に行くついでで良い。月を、両親に会わせてあげたいの！ お願い！」

「詠ちゃん……」

なるほど。そういう意図があって、自ら交渉役に名乗り出たってわけか。まあ、劉備の下に攻め落とすくらいなら、詠の力を借りなくても十分に達成できるだろう。

「……分かりました。じゃあお土産は、馬騰さんとの同盟を結べたという吉報でお願いします。白蓮、二人のことをお願いしますね？」

「おう。任せとけ！」

これで、今話し合うべきことは無くなったな。美羽様に、軍議の終了を告げる。

「うむ。皆、御苦労だったのじゃ」

軍議を閉幕し、皆持ち場へと戻るために出口へと向かって行く。さて、俺はこれから自分の部隊の兵達の調練か――

「失礼します！ 紀霊將軍はおられますか？」

「俺はここにいますよ？ どうかしましたか？」

「將軍に、客人がお見えになっております」

「客人？ その人は、何か言っていましたか？」

「たしか、『約束を果たしに来た』とか言っていましたけど……」

約束、約束……。ああ、あの人が。

「分かった。ならその人を、調練場へ案内して下さい。……月と詠、それから恋とねねは、俺と一緒に来て下さい。会わせたい人がいるんです」

「会わせたい人？ とりあえず、期待しないで待ってるわ。行こう、月？」

「うん。それにしても、誰だろうね？」

「まあ、行けば分かるのです」

四人を引き連れ、調練場へと向かう。その間も、四人はどんな人な

のかという話で盛り上がっている。

到着すると、そこには顔まで隠せる、茶色の外套を着た人が立っていた。

「……紀霊よ、あの時以来だな。そして、お久しぶりです、董卓様——」

外套を脱ぎ捨て、姿を現したのは、予想通り華雄だった…。

袁術軍初、まともな軍議（後書き）

結局、姐さんはちよい役みたいになっちゃいました。次回は、姐さんを前面に押し出そうと思います。一騎討ちの場面をがつつり書くかは未定ですが……。

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

約束を果たす時（前書き）

今回は、話を先に進める為に、戦闘描写は短めにしてありますので、そこはご了承ください。

約束を果たす時

Side：華雄

何とも嬉しい誤算だった。再戦の約束を果たすために紀霊の下を訪れてみれば、そこには董卓様達の姿があっただから。共に来た兵士達と流離っていた頃に、董卓様が亡くなったという噂を聞いた時は、正直言って気が気では無かった。だからこそ、これまでの経緯など関係無しに、こうして無事に再会できたことが何より嬉しい。でもまずは、言わなければならないことがあるため、董卓様の前へと進む。

「……董卓様、ご無事で何よりです。それと、董卓様を守る将でありながら、この手でお守りすることが出来なかったどころか、お傍を離れてしまい、本当に申し訳ありませんでした……」

片膝を突き、頭を下げる。正直、これで済むなどとは思っていない。負傷していたとは言っても、結局は敵であった紀霊に命を救われ、再戦を理由に戦場を放棄したのだから。

「……華雄さん、頭を上げて下さい」

「……はっ」

ゆっくりと頭を上げると、董卓様の目には涙が浮かんでいた。

「こうやってまた無事に再会出来て、私は嬉しいです。ですから、あまり気に病まないで下さい。……それより、華雄さんはどうしてここへ？」

「私がここに来た理由は――」

ゆっくりと立ち上がり、後ろに居た紀霊の方へと視線を移す。

「奴と……紀霊と交わした、再戦の約束を果たすためです。ですが、ご安心下さい。奴には戦場で命を救われていますし、今回は純粋に腕比べを行うだけです」

「そう、ですか。でも、怪我だけには注意して下さいね？　八雲さんもですよ？」

「ええ、分かっていますよ。俺も七乃に、いらぬ心配を掛けたくはありませんからね。それじゃ華雄さん、始めるとしましょうか」

「ああ。……それより、兵達はあのまま放置で良いのか？」

私が指で指した方向には、これから調練を行おうとしていた多くの兵士達が居た。そしてその兵士達の大半が、今の状況を理解しきれずにいる。そんな兵士達に、紀霊がすぐに命令を出す。

「えー、今日の調練は、これから行う俺と華雄さんの模擬戦の見学に変更します。各自、間合いの測り方や位置取り、相手の攻撃の捌き方などよく観察して、今後の調練に少しでも生かしてくれることを願います。良いですね？」

「「「はっ！」「」「」

「よし、これで準備完了です。それじゃ改めて――」

鞘から得物を抜き、いつかの様に切っ先をこちらへと向ける。それを見て私も、己の得物である金剛爆斧を構える。

「あの時の続きを、するとしましょうか」

「ああ、今度は負けん！ 行くぞ紀霊！」

再戦の火蓋が、切って落とされた…。

地面を駆け抜け、戦斧を振り上げる勢いを利用して飛び上がる。

「でやあああ！」

「ふっ」

そして落下する時に生まれる力を利用しての一撃を、紀霊へと叩き付ける。だが、紀霊も私の一撃を予想していたのか、横に転がることで回避される。そして直ぐさま体勢を立て直すと、戦斧を地面に叩き付けて隙だらけになっている私目がけて、一気に接近を試みる。

だが私も、そう易々と接近を許しはしない。戦斧を構え直し、牽制の意味も兼ねての右薙ぎを放つ。狙い通り、紀霊は私の一撃を防ぎ、懷に潜り込まれるのを防ぐことが出来た。

「……あの時同様、簡単に勝たせてはくれませんか？」

「当然だ。ましてやは今は、董卓様の御前。そう簡単に、負けるわけにはいかん！」

戦斧を普段構えている位置まで引き戻し、右からの斬り上げ、左薙ぎ、袈裟と、続け様に斬りかかる。しかし相手は、それで倒せるような楽な奴ではない。私の攻撃を難なく防ぐと、左薙ぎで反撃して来た。即座に一步下がりを避けるが、紀霊に攻撃の手を緩める気配はない。右と左から一撃ずつ斬り上げを放ち、さらに唐竹で追撃をして来る。それらを防ぎ切れはしたものの、まだ油断はできない。その後十数合ほど打ち合った。

そんな中、不意に紀霊が左手を前に出したかと思うと――

「はあっ！」

「っ！？」

右脚の踏み込みと同時に左手を引き、その反動を利用した、刃を水平に寝かしての平突きを繰り出して来る。その突きの速さが予想以上だったためか、反応するのが少し遅れ、右の脇腹にうつすらと斬り傷を付けられた。

だが、それは同時に絶好の好機でもあった。平突きを放ったことで紀霊は半身の状態になり、私は避けた流れで奴の背後を取っている。

「もらったあ！」

紀霊の首目がけて左薙ぎを放つ。だがそれと同時に、紀霊も振り向きながら横薙ぎを私の首へと放って来る。そして結果は――

「……くそ、引き分けか」

「そのようですね」

紀霊が刃を水平に寝かせていたことには、それなりに意味があった。相手に突きを避けられても、横薙ぎへと軌道を変化させられるという意味が……。

それに気付けなかった私の落ち度と言うべきか、奴の勝利への執着心が負け試合を引き分けにまで持ち込んだと言うべきなのか、それは定かではない。今の私達は、お互いの首ぎりぎりの所にお互いの刃が止まっている状態なのだから……。

「いやー、良い勝負でしたね。危うく負けるところでしたよ?」

「よく言う。しかし、あともう一步という所で私も勝ちを逃すとは……」

軽口を叩きつつ、お互いに首の前から得物を退ける。これで一応、奴との再戦の約束は果たした。さて、これからどうするか……とは言っても、もう既に決まっているがな。

「そういえば、華雄さんは今後どうするつもりですか?」

「うむ。それなのだが、出来ることならば、この軍に置いては貰えんだろうか? もう二度とこの手で守れないと思っていた董卓様が、こうして生きておられたのだ。私としては、この機会を逃したくは無い。頼む、紀霊!」

「……華雄さんをここに置くかどうかは、月の判断にお任せします。さ、月?」

紀霊は月様の肩を軽く叩くと、近くにあった木へと寄り掛かった。

「……董卓様」

「……華雄さん、もう董卓は死にました。今の私は、ただの月です。それでも、私のことを守ると言ってくれるのですか？」

そのような質問は、私には無駄だった。私が主と仰ぐのは、この方だけなのだから。大きく一度頷き、それが回答だと董卓様の方を見る。

「なら、私の真名を華雄さんに預けます。……これからも、よろしくお願いしますね？」

「はっ！ 今度こそ、月様のことを守り抜いて見せます！ ……紀霊、そういうわけだ。よろしく頼む」

「こちらこそ、よろしく申し上げます」

こうして私は、再び月様を守る将として、ひいては袁術軍の一武官として仕えることとなった…。

S i d e : 八雲

華雄が新たに、うちの軍に加わった。最近、武官が不足しているなと思っていたところだったから、何とも絶好のタイミングと言っべきか。これであと、数人ほど武官が居てくれれば、どれほど心強いことか。まあ、あまり欲を出し過ぎると身を滅ぼすことになりそうだし、あまり高望みはしないように――

「「八雲しゃん！」」

木に寄り掛かっていると、急に名前を呼ばれた。声の主は――

「朱里に雛里？ どうしたんですか一体？」

大分慌てているようだけど、本当にどうしたんだろうか？

「私達、とても大事なことを忘れていました！」

「とても大事なこと？」

「はい。前の交渉の時に結んだ、不可侵の約束のことです」

「……………あ」

やばい、すっかり忘れてた。主な原因は、北郷の不適切なざまあみる発言と、孫策の下に送られた手紙、あとは美羽様の成長に感動していたからだろうな…………。

「あ、あんたねえ…………」

肩を震わせ俯きながら、詠が近付いて来る。

「なあに大事なことを、サラッと忘れてんのよお！？」

「済みません。美羽様の予想以上の成長に、感動を覚えていつ！？」

言いきる前に、脛に尋常じゃない痛みが走った。気休め程度にしかならないのは重々承知しているが、蹴られた方の脛を手で擦る。…泣けるぜ。

「……あんまりふざけると、蹴るわよ！」

「「「もう蹴ってますよ（るよ・るのです・るぞ）」「」「」

「う、煩いわね！　良いでしょ別に！」

いや、全くもって良くは無い。一方的な被害に遭って、良いでしょ別に、で済まされるこっちの身にもなって貰いたい。デコピンすんぞ？

「で、結局どうすんの？　そんな約束してたんじゃ、まともに攻められないじゃない？」

「……こうなったら、もう一つ案である益州入りを選ぶのかなさそうですね。自分で約束を結ばせといて、それを自分から破るものなら、あの人に何を言われるか分かりませんし。とりあえず、もう一度全員に集まってもらって、さっさと報告するとしましようか。朱里、雛里、ここに居ない人達を、軍議の間に呼んで来て貰えます？」

「「ひゃい！」」

噛んじやったよ、と言いつつ、朱里達は城の中へと戻って行く。さてと、じゃあこちらは先に軍議の間へと向かうとしよう…。

先に到着してからそう待つことも無く、再びこの部屋に全員が揃った。

「今度はいつたい、何の用で妾達を集めたのじゃ？　せつかく、今から七乃とお昼寝しようと思っておったのに邪魔しおって……」

「済みません、美羽様。ですが、どうしてもお話しておかなければならないことでしたので……。まずは、あちらにいる華雄さんが、新たにこの軍に入ることになりました」

調練場に居なかった面々の視線が、月の背後に立っている華雄の方へと集中する。その面々の視線を一手に浴びている華雄も、よろしく頼む、と軽い会釈だけで済ますと、早く話を進めてくれと目で合図して来る。

「さて、華雄さんのお披露目も済みまし、もう一度集まって頂いた理由を今からお話します。……実はですね、劉備さんとお互いに不可侵でいようと約束していたのを、すっかり忘れていたんですよ。なので、当初予定していた彭城攻めは中止して、益州へと行く方に計画を変更することになりました……」

「さつきは、それじゃと麗羽が付け上がるとか、色々と言っておったではないか！？　どうするつもりじゃ？」

「その辺については、ご心配なく。約束の件を忘れていた俺の失態ですので、袁紹さんが付け上がらないように、ちゃんと説き伏せますよ……」

最悪、三人まとめてドスコートっていう方法を取ってでもね……。

そうすれば、万事解決だ。

「むう……。八雲がそこまで言うのであれば、妾はそれで良いぞ。妾にはまだ良く分らんから、後は八雲に任せるのじゃ」

「はい、任されまし——」「ちょっと待ってくれ！」……どうしました白蓮？」

「彭城を攻めないってことは、あれか？ 私が西涼へ使者として行くって話も、無くなるってことか！？ 私の見せ場が、あっさり無くなるってことか！？」

「その件に関しては、益州で新しい拠点を得るまでは延期にしましょう。もちろん、その拠点でやるべきことが一段落した際には、白蓮には使者としての仕事をきちんと果たして貰いますよ？」

「あ、ああ！ 任せろ！……良かった、私の見せ場が無くならなくて」

どうやら、白蓮は自身の見せ場という物にとっても飢えているらしい。……今後も、何かしらの見せ場ないし出番を作ってあげるとしよう。どれくらい出来るかは、さすがに分らないけど……。

「それじゃ、ここを出発するための準備や段取りについては、朱里達軍師の四人にお任せするとして……。あとは、誰が劉備さん達の所に行くかですね。残った面子的に俺が行くのは決定として、あとは誰でも良いので、付いて来てくれると助かるんですけど……」

「それなら、私が一緒に行きましょうかあ？」

名乗り出たのは、七乃だった。

「それは構いませんけど、美羽様はどうするんですか？」

「それならあ、美羽様も連れて行きませんか？ 劉備さん達とは交渉
しからないですしい、美羽様の後学のためにも、交渉の席に座る
のって良い経験だと思うんですよ」

「……それもそうですね。ですが、万が一のことを考えて……。星、
俺達に同行して貰いたいんですけど、良いですか？」

「あい、分かった。何かあったら、私に任せて貰おう」

星が付いて来てくれるなら、とりあえず一安心だな。本当は恋も連
れて行きたいところだけど、そうすると城の守りが一気に薄くなる
し、戦いに来たとか勘違いされても困る。

「とりあえずこれで、新しく決めるべきことは無くなりましたね。
それじゃ美羽様、改めて軍議の閉幕を……。」

「うむ。皆、八雲が面倒を掛けたの。これで軍議は終わりなのじゃ。
……七乃、妾はお昼寝の前に蜂蜜水が飲みたいのじゃ。あとで、持
って来てたも」

「お嬢様あ、あんまり飲み過ぎると、後でお腹がいたいみたいです
よあ？」

「むう……。なら一杯だけ、水が欲しいのじゃ」

「それじゃ、持って行ってあげますから、先にお部屋で待っていて

下さいねえ？」

なるべく早くじゃぞ、と言が残すと、美羽様は一人で私室へと戻って行く。さてと、俺も部屋に戻って、劉備の所に送る書簡を認めたとしてよう……。

部屋に戻るなり、書簡に交渉をしたいという旨を書き記す。それを書き終えた後、適当な文官を見つけて、その日のうちに使者として彭城に赴いてもらった。

それから数日後、彭城で行うなら交渉に応じてやるという返事が、書簡を持って行った文官と共に返って来た。上から目線なのは非常に気になるが、こちらは交渉しようとお願ひしている身だ。大人らしく、ここは目を瞑るとしよう。そして、後で知ることになる。こんな上から目線の態度に、我慢してやる必要など無かったことを…。

約束を果たす時（後書き）

今回は、一刀達との交渉です。もしかしたら、八雲が怒るような展開になるかもしれません。

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしくお願いします。

安心と信頼のバー刀（前書き）

更新が遅れてしまって、済みませんでした。何だか上手く話がまとまらず、書いては消してをやっていたら、いつの間にか十数日も経過してました……。

次回は、いつも通りに3日から4日以内には更新したいと思います。
では、本編の方、どうぞ

安心と信頼のバー刀

Side：八雲

向こうの要求通り、交渉をするために彭城へと足を運んだ。城に到着すると、劉備達は既に玉座の間で待っていると言う。あまり待たせるわけにもいかないし、それ以前にこちらとしても長居はしたくない。一刻も早く交渉を終わらせる為にも、玉座の間へと向かうのにも自然と急ぎ足になる。

到着すると、扉の前に居た兵士が話しかけて来た。

「中に入る前に、所持している武器を預けて頂きます」

「分かりました」

鞘に結んである下緒を解き、どうぞ、と刀を手渡す。続いて、七乃と星もそれぞれ所持している得物を渡し、四人揃って中へと入る。

中に居たのは、北郷と劉備。その二人の両脇を固めるようにして、関羽と張飛が立っている。そして、長槍を手にした数十人の兵士達が花道でも作るかのように、一列に並んでいた。

「御無沙汰ですね、劉備さん、北郷さん」

「死んでくれた方が、俺的には嬉しかったけどな。で、いったいどんな交渉を持ち掛けに来たんだ？」

本当に、期待を裏切らない無礼さだな、こいつ……。まあ、こんな

ことでいちいち脱線してたら話が進まない。聞いてなかったことにしておこう。

「……話が早くて助かります。実はですね、とある有力な情報網から、袁紹さん達がこちらに居るといふ情報を得ましてね。それで、袁紹さん達の身柄を新たにこちらで、預からせて頂こうと思った次第です。……もちろん、タダなどとは言いません。対価の方も、きちんと考えてありますので」

「……その対価ってのは、いったい何だ？」

「以前、劉備さん達との交渉で頂いた、下？を返却します。これで改めて、徐州全域は劉備さんの統治下。さらには、徴収出来る税も増え、集められる兵の数も増える。一石二鳥ならぬ、一石三鳥というわけです。こちらとしても、袁家の血筋と袁家に仕える者を保護することが出来ますので、こちらにもそれなりの利益があるという訳です。どうでしょう？ 悪い話ではないと思うのですが？」

「……それ、本気で言ってるのか？」

「こちらは、至極真面目ですけど……」

そんな俺の返事を聞いた北郷の顔は、何かを企んでいるような顔だった…。

S i d e : 一 刀

こいつら馬鹿なのか？ 袁紹達欲しさに下？を返すだなんて、普通に考えても有り得ないだろ。……そうだ、良いことを思い付いた。

何もわざわざ、袁紹達三人をセットで渡す必要なんかないじゃないか。

「なあ、対価にもう少し色を付けてくれよ。例えば……」

紀霊の隣に居る、張勳へと視線を向ける。紀霊ほどじゃないけど、こいつにも借りがある。虎牢関攻略前の、軍議の時の大きな借りが……。その時の借りを返すためにも、まずはこっちに引き入れて、俺の前に跪かせてやりたい。その後は……おっと、ここから先は実現してからのお楽しみだ。

あと出来れば、袁術も貰っておきたいな。理由は言わずもがな、袁術を人質にするため。力を失った軍の勢力も、袁術の下に居る将や兵を取り込むことが出来れば、朱里達や白蓮の抜けた穴を、さらに補強出来るはずだ。それだけじゃなく、星も戻って来ることになるし、呂布も手に入れられる。でも紀霊の野郎だけは、別にいらないけどな……。

「お前の横に居る、張勳と袁術を、下？と一緒に差し出して貰おうか」

「……………はい？」

「だから！ お前の横にいる二人も、こっちに寄越せって言っただよ！ 下？を返して貰う代わりに、こっちは袁紹を引き渡す。残りの顔良と文醜は、そっちの二人と交換だって言っただ。……袁術に張勳、お前達も考えてもみろって。そいつなんかというより、俺と居た方が幸せになれると思わないか？ 特に張勳、今この場で仲間になってくれるなら、うちの軍の筆頭軍師の座が手に入るんだぞ？ ……もちろん、女としての幸せもな」

桃香達を虜にした時と同様のキメ顔で、二人のことを見つめる。すると袁術達は見つめ合った後に零れたのは、艶めかしい吐息ではなく、大きな溜息だった。

「……七乃お、あやつはバカなのかの？ いや、バカなんじゃろ？ そうなんじゃろ？」

「あははー、どうなんでしょうねえ……。でも、お嬢様にバカなんて言われたら、もう人としてお終いですよねえ。それにせつかくやったキメ顔も、不発に終わればただのキモ顔でしかないですしい。お嬢様は、間違ってもあんな大人になつちや駄目ですよお？ あ、それと私、八雲さん以外の男性に興味はありませんから、断固拒否させてもらいます。……豆腐の角に頭ぶつけて死ね、御遣い」

「七乃、嬉しいですけど、それはちよつと言い過ぎですよ？ 彼だつて子孫繁栄のために、頑張つて生きているんですから。それにほら、白蓮や朱里達も言っていたでしょう？ 彼は昼夜を問わず、一生懸命^{お仕事}性務に取り組んでいるって。……箆笥の角に小指ぶつけて、スぺ。ンカー先生の如く死ね、北郷」

「……八雲殿、その慰め文句も、正直どうかと思うのだが。……汚れた。ベルの塔をチヨンパされて（性別的にも）死ね、北郷」

「ちよ、何か色々ちよつと待て！」

何かめちやくちな言われ様だったけど、心をずつたずたに切り裂かれた気がしたけど、そんなのはこの際どうでも良い。それよりも、今すぐに確かめたいことが出来た。

「おいお前、朱里達がどこに居るか知ってるんだな？ 答える！」

「別に教えても良いですけど、その代わり、七乃達は諦めて貰いますし、要求内容は最初にこちらが提示したものにして頂きます。良いですね？」

「分かった。だから、早く教える！」

背に腹は代えられないし、朱里達が帰って来てくれるなら、袁紹達なんかすぐにでもお払い箱行きだ。

「言質は取りました。それじゃ、お教えしましょう。彼女達は袁術軍の将として、下？にいますよ」

「……それ、本当なのか？」

「ええ、真実です。嘘を吐く理由がないので」

「じゃあ、朱里達を返して貰おうか？ 三人は元々、俺達の仲間なんだから」

「お断りします」

断るだって？ こいつ、ふざけてんのか！？ 頭にきた俺は紀霊へと詰め寄り、襟を強引に掴み上げた。

「ふざけんじゃねえよ！ つべこべ言わずに、朱里達を返しやがれ！」

「断る！ 彼女達は、自らの意思でここを去り、自らの意思で袁術

軍へと仕官した！ 彼女達のことを無視して、貴方の下に返すことなど出来ない！……朱里達は、こう言っていました。北郷さんは私達の献策を聞いてくれない。私達は、必要とされていないんだって。白蓮は、貴方のところじゃ正当な評価を受けられないし、仕事も回されない。このまま大した働きもないまま、穀潰しになっていくのはごめんだからと言ってました。だから俺には、貴方に三人を返すなんていう酷な真似は出来ません。三人のことは、潔く諦めて下さい……」

「……くそっ！」

突き飛ばすように、掴んでいた襟から手を離す。

「美羽様、話は済みました。袁紹さん達を連れて、城に戻りましょう。……劉備さん、下？の方は、十日以内に明け渡すことが出来ますので」

「……は、はい、分かりました」

「それでは、失礼します」

俺達へと一礼した後、あいつらはここから出て行った…。

S i d e : 八雲

玉座の間を後にし、兵士に預けていた武器を返して貰う。……無事に交渉を終えることが出来たのは、こっちとしてはかなりの収穫だ。さすがに、七乃達を寄越せと言われた時は、一瞬だけが我を忘れて殴り掛かろうと思ったけど、何とか冷静さを取り戻すことが出来

て良かった。

今は回廊を歩きながら、袁紹達を探している。城内の案内自体は、星がいるから問題無いけど、袁紹達が保護されたのは、星がここを去った後。さすがに、居場所までは分からない。

「そういえば、袁紹さん達ってどこにいらっしゃるんでしょうね？」

「あれは目立つから、そう慌てんでも見つかるじゃろ」

たしかに、あれほど目立つ人は、大陸中どこを探してもそうはいないだろう。まあ、人の良さそうな兵士なり、侍女なりに聞けば、すぐに見つかるだろう。

すると、ちょうど良いタイミングで、向かい側から侍女が歩いて来た。

「あの、すいません」

「はい、何でしょうか？」

「袁紹さん達に会いたいんですけど、部屋がどこにあるか分からないくて」

「ならこの先の——」「おーっほっほっほー！……高笑いの聞こえるお部屋です」

侍女の人は、疲れた顔をしながら、部屋のある方向を指差す。

「……妾の言った通りだったである？」

「ええ。それじゃさつさと事情を話して、ここから立ち去るとしましょうか。お忙しいところ、わざわざありがとうございます」

「いえ、これが仕事ですので……」

では失礼します、と一礼すると、別の仕事が残っているのか、それとも早く袁紹の高笑いの聞こえない場所に行きたいのかは分からないが、足早に去って行った。

教えて貰った部屋の前に立つと、中から笑い声やら溜息やらが漏れ聞こえてくる。扉を開けると、相変わらずの構図が目に入ってきた。

「あれ、袁術様に張勳さん、それに紀霊さんに趙雲さんまで……。いったい、どうしたんですか!？」

「妾達は、麗羽達のことを引き取りに来たのじゃ。八雲よ、説明を頼むのじゃ」

「お任せ下さい。実はですね……」

とりあえず、今まであったことをざっくりと説明していった。理解度的には、顔良を十割とするなら、文醜は七割、袁紹は半分と言ったところだろう。でもまあ、それだけ理解してくれてれば十分だ。

すぐにここを出る準備をさせ、部屋を後にする。これでは、ここから出て行くだけだ。何事も無ければ良いけど、正直……何か面倒事が起こる予感しかない。そしてその予感は、悪い意味で期待を裏切らなかった…。

再び回廊を通って、そのまま城門の方へと向かうと、結構な数の兵士を引き連れた関羽と張飛が、城門前で待ち伏せていた。どうやら、タダで返すつもりは毛頭ないらしい。

「……見送りにしては、数が多くないですか？」

「退け、貴様に用は無い。用があるのは、袁術と張勳のみだ。大人しく渡すのならば、見逃してやつても良いが、渡さないのであれば――」

ゆつくりと偃月刀を持ち上げ、その切っ先を俺へと向ける。

「袁術と張勳を除いた貴様ら全員を、ここで斬る！」

「……それは、北郷さんの指示ですか？」

「そんなこと、貴様の知ることではない。さあ、どうする？ 大人しく渡して命拾いするか、この場で我らの手にかかるか。どちらかを選べ！」

どう考えても、あの男の指示以外は考えられない。美羽様を欲しがることから考えられることは二つ。一つは、美羽様を盾にして、昔のうちに孫策達の様な関係を構築すること。もう一つは……ただのロリコン野郎。でも、七乃を欲しがる理由が見当たらない。まあどのみち渡すつもりは無いから、理由なんかどうでも良いことか。……相手が悪いけど、腹を括るしかない。

「じゃあ、第三の選択肢を選びますよ。貴女達を倒し、ここを突破

するといっね……！」

「そうか。……総員、突撃準備！」

関羽の掛け声で、数十もの兵達が一斉に抜刀し、こちらを取り囲んで行く。

「七乃、美羽様と一緒に俺と星の後ろへ！」

「麗羽様、私達の後ろに——っ！」

「今だ、突撃い！」

「……うおおおお！」

四方八方から、剣を掲げた敵の兵士達が次々と突撃して来る。対してこっちは、美羽様と七乃と袁紹を中心に置き、俺と星、顔良と文醜の四人で円陣を組み、敵兵を対処して行く。

振り下ろされた剣を右に弾き、隙だらけになった兵士の胴体を右斬り上げにて一閃。返す刀で、剣を振り下ろそうとしていた別の敵兵の腕を斬り落とし、唐竹で斬り付け絶命させる。

だが相手だって、人間目がけて突撃して来るだけの猪じゃない。隙あらば、こちらの目を掻い潜り、後ろにいる美羽様達を捕まえようとして来る。

そんな時は、敵の兵士から一番近い場所に居る一人が対処し、残りの三人が上手くフォローし合う。急造のカルテットと言っても可笑しくないというのに、不思議と連携が取れていた俺達は、その後も

次々に立ち位置を変えては一人屠り、場所を変えてはまた一人と、群がる雑兵達を四人で協力して薙ぎ倒していく。気が付けば、結構な数がいた兵士達も、目の前に居る数人だけになり、俺達の足元には兵士だった者達が横たわっていた……。

その数えるほどの兵士達も、足が竦んで動けないようだから、危険視するほどじゃない。円陣を解いて、全員横一列で関羽達と対峙する。

これで残すは関羽と張飛だけ、そう思っていた。

「覚悟っ！」

「っ！？」

突然、後方から声上がる。声のする方へ目を向けると、弓を引き終わり、いつでも射れる体勢の敵兵がいた。こちらに見つからないよう、物陰に身を潜めていたのだらう。こっちも、警戒を解くのが少し早すぎた。

兵士が、標的へと鏃を向ける。その標的となっているのは――

「美羽様、危ない！」

「ほえ――っ！？」

美羽様に狙いを定め、矢を放った。その矢が美羽様に届きそうになった時、七乃が美羽様を押し倒す。

「あっっ！？」

押し倒した際に、飛来した矢が七乃の右腕を傷付けた。それでも七乃は、痛みを堪えて美羽様に覆い被さるようにし、身を呈して美羽様が矢で射られるのを防ごうとする。

「仕方ない、次——「次があると思うか？」 ひぎゃっ!？」

矢を番え第二射を行おうとしていた兵士に肉薄した俺は、矢を射れないように、刀で弓を叩き切る。攻撃する手段を失った兵士は直ぐさま逃げ出そうと背中を向けた瞬間、後ろから胸を串刺しにして始末した。

「顔良さん、周囲に誰もいないか確認してください」

「は、はい!」

顔良に指示を出した後、怪我をした七乃へと駆け寄る。

「七乃、大丈夫ですか!？」

「……は、はい、大丈夫、です……」

大丈夫と答えてはいるが、作り笑いを浮かべて我慢しているのが分かる。その証拠に、真っ白な服の袖に血がじんわりと滲み出し、大きなシミのようになっていいる。本人もそれを隠そうとして、もう片方の手で怪我した所を抑えている。そんな彼女を、少しでも宥めようと思い抱き寄せる。もちろん、傷には触らないように配慮して。

「頑張りましたね、七乃」

「……えへへ」

そつだ、美羽様は大丈夫だろうか？　もしかしたらがあるかもしれないし、確認しておいて損は無い。

「美羽様、お怪我はありませんか？」

「うむ。七乃のおかげで、妾は怪我しておらぬ。……七乃、大丈夫かえ？」

「だ、大丈夫ですよ、お嬢様」

「それなら良いのじゃ。して、八雲……」

「ええ、分かっています」

関羽達へと向き直り、疑問をぶつける。

「関羽、なぜ美羽様を狙った？」

「ふん、そんなこと決まっているだろう。我らが欲しいのは袁術そのものではなく、袁術が我が軍の手中にいるという事実のみ。袁術の生死など、黙っていれば問題ない」

「……それじゃあ七乃も」

「張勳は別だ。ご主人様は筆頭軍師がどうのと言っていたが、私はそやつが本当に軍師になれるなどとは思っていない。……せいぜい、我らが居ない時専用の、ご主人様の性のはけ口になるのが関の山だろう。どうせ、朱里や雛里には劣るのだから」

美羽様は死体であつても構わず、七乃は無能扱いな上に凡愚の欲望のはけ口ねえ。……そうかそうか。

「……星、悪いが少しだけ荒事に付き合つて貰うぞ？」

「おや、何やらあまり聞き慣れぬ口調ですな。だが、主たつての頼みならば断るわけにもいくまい。……私は愛紗、関羽の相手をしますが故、張飛の相手を頼みたい」

「分かった。それじゃあ……」

「うむ。いざ荒事の世界へと参ろうか、主よ！」

行くぞ、と声を掛け、関羽達へと同時に駆け出していく。もうこれ以上、こいつらの言動にも、北郷の下らない考えにも、いちいち我慢してやるつもりはない。今この場を以て、全員揃つて斬刑に処してやる…。

安心と信頼のバー刀（後書き）

はい、というわけで、八雲はご立腹です。

次回は設定にもあつた通りのマジギレ八雲の出番となります。……
最初で最後となりますが……。

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

徒花は、散る時までも醜く……（前書き）

3、4日とか言いながら、投稿までに二週間も掛かってしまい、申し訳ありませんでした！

今回、一刀好き、一刀至上主義者、桃園三姉妹好きな方は、あまり見ない方が良くかもしれません……。それでもよろしければ、どうぞ。

徒花は、散る時まで醜く……

Side：愛紗

流星は星だ。彼は三十合ほど打ち合っているが、油断も隙も全く有りはしない。だが、私はこんな所で負けるわけにはいかない。いや、勝つしかないのだ。鈴々と共に星と紀霊を撃破し、その後で文醜と顔良も倒す。そして守る人間の居なくなった袁術と張勳をご主人様の下に連れて行くことが出来れば、褒美としてご主人様の寵愛を一身に受けられる。ここ最近では桃香様に掛かりつきりで、全然愛して頂けなかったが、あの二人をご主人様の前に連れて行けば、今日は私のことだけを愛してくれると、きちんと約束して下さったのだ。だからこそ、私は一刻も早く終わらせなければならぬ……。

それだと言うのに、鈴々の奴は何をのんびりと戦っているんだ！……星に勝てなかった紀霊など、そう労せずとも倒せるはずなのだが――

「私を相手に余所見とは……随分と余裕だな、愛紗よ！」

「くっ！？」

星から放たれる鋭い突きが、幾度となく襲い掛かる。鈴々に気を取られていたせいもあり、少し反応が遅れたが、防ぎ切れないわけではない。偃月刀で全て弾き、横薙ぎで反撃するも、簡単に止められる。

「……さつきは警告の意味も含めてお主が反応出来る程度で攻撃したが、次に余所見した際は、その命は無いと思って貰うぞ？」

「……小癪なー！」

私達の腕はほぼ互角な以上、簡単に勝てる相手ではないし、このままでは埒が明かん。鈴々め、そんな雑魚などさっさと片付けて、早くこっちの手伝いに来い…。

S i d e : 八雲

いったいこれでもう何十合目になるのかも分からない張飛の蛇矛が、俺へと振るわれる。振り下ろし、振り上げ、右へ左へと振り回し、そして波打った刃先を俺の身体に突き立てようと突きを繰り返す。

俺はそれを悉く弾き、往なし、受け流す。そのおかげもあってか、未だお互いに無傷の状態だ。……こっちは一度も攻撃を仕掛けてないんだから、張飛が怪我していたら、それはそれでおかしい気もするが……。

「もう！ さつきから鈴々が攻撃してばかりで、張り合いが無いからつまらないのだ！ お前、何で攻撃してこないんだ？」

「……ああ、攻撃しても良かったのか？」

「当たり前なのだ！ ……あ！ さては、鈴々のことを子供だと思つて甘く見てるな？」

むう、と唸り声を一つ上げ、俺のことを不満げに睨みつける。

「じゃあ望み通り、今から俺も攻撃するでしょう。もう一度言う。

良いか、今からだぞ？」

「よし、かかって来るのだ！」

「……行くぞ」

宣言した通りに、張飛へと斬り掛かる。唐竹、右斬り上げ、左斬り上げ、右薙ぎ、逆袈裟、袈裟、逆風と連続で攻め立てるも、相手はあの張飛。巧みに蛇矛を振るい、こっちの攻撃を全て防ぎ切る。そしてこっちに隙が出来たと見るや、直ぐさま蛇矛で横に薙ぐ。

反撃として放たれたその一撃を柄尻で受け流し、弾かれた時の勢いを生かすために左足を軸にして時計回りに一回転。右足を強く踏み込んで繰り出した突きは、張飛の右肩の筋を鋭く抉り斬る。

「うつつ！？」

刀を勢いよく引き抜くと同時に、肩から大量の血が吹き出し、返り血で自分の顔や着物が紅く染まる。

「あうつ！？」

目の前の少女は苦痛に顔を歪ませながらも、その目からは戦う意思を失ってはならず、手にはまだしっかりと得物が握られている。そしてその得物を、ぎこちなく感じられる動作で頭上へと振りかざす。でも、その選択は失敗だ。

動きの鈍くなった今こそが、こちらにとって最大の好機。なら、一気に畳み掛けることを選ばせてもらおう。

「しっ！」

左斬り上げ、右斬り上げ、左薙ぎ、と三連続で斬撃を浴びせ、少女の身体にはさらに深く、そして多くの傷が生まれていく。深手を負った張飛の手はだらんと下がった状態になり、今にも膝から崩れ落ちそうだが、念には念を入れておくのも悪くない。張飛の頭を空いている左手で掴み――

「寝てろ！」

張飛を直立の状態から後ろに押し倒し、後頭部を地面に叩き付ける。

「がつ！？」

「……俺の勝ちだ。今はぎりぎりのところで生かしておいてやっているが、これ以上やると言うのなら、常世の国に行く覚悟を決めてからにしろ」

「けほ、けほ、ごふっ！？ ……はあ、はあ、鈴々……は、負けなのだ。……お兄ちゃんとお姉ちゃんは、鈴々が、絶対、に、守るのだ……！」

少女の着ている服は血と土埃で汚れ、口元も吐血した血で汚れている。左脇腹から右肩、右脇腹から左肩、腹部を横一文字にと斬り刻まれた傷は、さっきから出血が治まる気配がない。誰から見ても、立ち上がるのさえ辛そうな状態だと分かる。それでも己が信念を曲げぬために、蛇矛を杖のように使って立ち上がる。そんな満身創痍の張飛の姿が、寿春で孫策と戦った時の自分と、嫌が応にも重なる。きつと孫策にも、こう見えていたに違いない……。

「やああ！」

傷付く体に鞭を打つかのように、張飛の蛇矛が俺へと振るわれる。何度も、何度も、目の前の少女は得物を振り、攻撃する手を休めようとはしない。だが一発ずつ、本来あつた鋭さと重さが失われていく。それに伴い、一振り一振りが大振りになって、避けるのが容易になっていく。そしてとうとう、張飛は前のめりに倒れた。これ以上の戦闘は不可能と判断した俺は、刀を鞘に納め、張飛から少し距離を置く。わざわざ止めを刺さずとも、これなら失血死――

「……くう、何だか目が霞むなあ。それに、手にも足にも、力が入らなくなつて来てるのだ……。でも、負けるわけにはいかないのだ。まだお兄ちゃんに、一緒に遊ぶ約束を守つて貰つてないし、お姉ちゃんも、ご飯を食べに行く約束も、残つてるもんね……」

もう一度立ち上がるため、さっきと同じように、蛇矛を杖にして立ち上がるが、足元がふらふらとして覚束ない。……正直、これ以上の戦闘行為は無意味だ。

「諦めろ、もう俺の勝ち揺るぎはしない」

「……本当のこと言うと、何となくだけど、鈴々達は悪いことしてるのかもって感じがするのだ。それでもね、鈴々は大好きな皆を守りたい！ だからどんなに辛くても、鈴々は諦めたりしないのだ！ 戦うのを、止めたりなんかしないのだー！」

最後とも言える気力を振り絞り、張飛は蛇矛を振り回しながら突撃して来る。しかし、四肢に力が入らないせいか、さっき以上に動きが鈍重で、蛇矛に振り回されているように見えなくてもない。

「……………どうして、それも散り急ぐ？」

体勢を低くし、居合切りの構えを取る。音を立てぬよう、静かに鯉口を切り、ゆつくりと瞳を閉じて全神経を集中する。張飛の最期を、失血死なんてつまらないもので終わらせるんじやなく、少しでも華々しく飾り、意味のあったものにしてやるために……。

「ええい！」

掛け声と共に、振り下ろされた蛇矛。もう大した脅威も感じられない一撃だが、最後まで足掻いた少女に敬意を表して――

「その蛇矛^魂、断たせて貰う！」

瞳を開け、振り下ろされる蛇矛へと、今放てる最高の一撃を繰り出す。そして、その結果は――

「……………かぶ。……………お前、すつごく強いなあ。……………ごめんね、皆。鈴々じゃ、勝て、なかったの、だ――」

そう零し、張飛は力なく地面に倒れ込む。その手に握り締めているのは、波打った刃の部分だけが綺麗に無くなり、ただの鉄製の棒きれと化した蛇矛の柄。少女を中心に広がるのは、小さな赤い水溜り。そして肝心の刃の方は、俺より少し後ろの所に落ちていた。

血振りを済ませ、再び刀を鞘へと納め直し、張飛へと近付く。まだ、多少意識はあるみたいだ。

「……………何か、言い残すことはあるか？」

張飛を仰向けにさせ、訊ねる。

「……お兄ちゃんと、お姉ちゃんに、約束、守れなくてごめんねって、伝えておいて、欲しいのだ」

「承知した。その言葉、必ずや伝えておいてやろう」

「助かる、のだ。……ああ、何か、眠くなって来たなあ」

「……なら、少し眠ると良い。目を覚ます時にはきつと、お前と親しい者達も共に居よう」

「そう、だったら良いな。……お休、み………」

「ああ。眠れ、安らかに……」

ゆつくりと、少女の目が閉じられる。その死に顔は、思っていた以上に安らかなものだった。

「り、鈴々!? 紀霊、貴様あ、よくも鈴々を! 貴様は、私自身の手で殺してやる。絶対に許さ——っ!?!」

「愛紗よ、さつき警告したはずだ。余所見すれば次は、二度目は無いと……」

星の槍が関羽の両腕を的確に捉え、握りの甘くなったところで、偃月刀を弾き飛ばす。

「……うぐ! せ、星、貴様あ、鈴々の仇討ちの邪魔をするのか!」

張飛の死に激昂した関羽は、俺へと斬り掛かるうした。だから、星の警告を失念していた。そして、その罰として支払う対価は……関羽自身の命。

「八雲殿目先の仇に目を奪われ、今戦っている相手私を蔑ろにするなど言語道断、武人の風上にも置けん。……多少のことには目を瞑って来たつもりだったが、さすがにこれには失望したぞ、関雲長」

星は槍を構え直し、その切っ先を無手の関羽へと向ける。その瞳に、一切の情は感じられない。

「や、ま、待て、止め——っ!？」

「聞く耳持たんな。行くぞ! はい! はい! はい——!」

繰り出された突きは、関羽の急所を、喉、鳩尾、胸の順に穿つ。

「——つつつつ!？ ……こひゅ……………」

三段突きをまともに受けた関羽は、張飛とは打って変わり、苦悶に満ちた表情で苦しみもがきながらその生涯を閉じた。

「……堕ちるところまで堕ちたな、この愚か者め」

星は関羽の屍に背を向け、肩越しに毒を吐く。……一先ずこれで、最も脅威になるであろう二人を仕留めることが出来た…。

これでこの場に残っているのは、俺達と数人の敵兵のみだ。こいつらの処理をしなければならいけど、七乃の治療もしなければならぬ。

「星、皆を出来るだけ安全な所且つ七乃の治療を出来る場所に、案内してあげてくれ」

「……その口ぶりからして、八雲殿は我らと共に来ぬようですね」

「ああ。生き残ってる兵士達の処理をしないとイケないし、売られた喧嘩は高値で買い取ってもらうのが俺の信条だね。……それに汚れ役の仕事風景なんぞ、美羽様達にあまり見せたくはない。だから星、頼まれてくれるか？」

「了解した。安全な場所を確保出来次第、我らのうちの誰かが、八雲殿を捜して案内するとしましょう」

星は皆を連れて、この場から立ち去った。さてと、こっちも仕事を始めるとしよう。未遂とはいえ、七乃や美羽様を襲おうとしたことに変わりはない。敵兵は相変わらず、恐怖に身が竦んで動けないようだ。目の前で味方の将軍が二人揃って殺されたんだから、その恐怖も一人だろう。

「……さて、貴様らもそこで恐怖に身を震わせるのはいい加減苦痛だろう。今すぐ、楽にしてやる」

将軍二人が目の前で殺されたという現状を把握し切れず放心している敵兵達にそう伝えた後、逃げる素振りも見せない兵士達全員之首を刎ねて斬殺した。

これで残すは劉備と北郷のみだけど、何かあの二人を驚かせるような手土産は…… ああ、調度良いのがあるじゃないか。張飛の亡骸は小脇に抱え、関羽の亡骸は結んである黒髪を掴み上げて引き摺ることにした。

「さてと、あいつらは今どこにいらっしゃるだろうか？ まだ玉座に居てくれると、こつちとしてもいろいろと楽なんだが……」

とりあえず、残りの二人の居場所を探すことにして、俺も移動し始める。その道中、無表情のままで二人の亡骸を運んでいる俺の姿が余程怖かったのか、兵士達は誰一人として襲い掛かって来ることはなく、こちらのした質問全てに素直に答えてくれたので結構助かった。

聞いた話によると、二人は今も玉座にいるようだ。二人分の亡骸と共に、玉座の間へと再度足を運ぶ。

到着すると、扉の前で数十人の兵士達が興奮した様子で聞き耳を立てていた。…… たしかこいつらは、交渉の時に花道のようなものを作っていた奴らだ。何をしているのか気になって近付くと、そのうちの一人が俺に気付いて槍を構える。

「——っ！？ と、止まれ！ 玉座に何の用…… 関羽將軍に張飛將軍！？」

「この二人は、もう死んでいる。関羽は趙雲が、張飛は俺が殺したついでに、二人と共にこちらを襲った兵士達も、一人残らず殺してある。…… 死にたくなければ、今すぐにそこを退け。用があるのはこの中にいる二人だから、今ならまだ見逃してやってもいい。だが、刃向かうのなら……」

「ひ、ひい！？ い、命だけは！ 頼む、殺さないでくれ！」

「英断だな。なら、持っている武器を全部捨てて、さっさと消え失せろ」

「へ、へい！」

がちゃがちゃと音を立て、そこかしこへと支給された武器が投げ捨てられ、兵士達は一目散に逃げ出していく。……言っちゃ悪いが、劉備達に対する忠誠心は無いのだろうか？ まあ、斬る手間が省けたから、別にどうでもいいことか。

扉の前に立つと、何やら聞きたくもない劉備の喘ぎ声がただ漏れになっっている。……なるほど、兵士達はこれを盗み聞きしていたわけだ。じゃあ、さっさとお邪魔しようか。

玉座の扉を乱暴に蹴り開けると、そこには案の定、お楽しみ中の馬鹿二人がいた。……見たくもないものを見せられると、とてつもなく気持ち悪くなるというのはどうやら嘘じゃないらしい。

突然大きな音がして驚いた様子の二人が、こちらへと目を向ける。そして音を立てた正体が、返り血を浴びに浴びた俺だと分かった時の表情は、一言では言い表せないほど滑稽なものだった。

「あ、ああ、愛紗ちゃん！？ 鈴々ちゃん！？」

「……この二人は、とつくに死んでる。それと、二人が率いていた兵士達も同様だ。他の兵士や侍女なんかは、お前達よりも自身の命を優先した。つまり、お前達を守ってくれる人は、この城にはもう

誰一人としていないってわけだ」

「そんなもん、はつたりに決まってる！　おい愛紗、鈴々、そんな演技なんてしないでいいから、さっさと起きてそいつを倒せ！」

「演技じゃないぞ？　ほら」

北郷と劉備に、関羽達の傷が見えるようにする。それでも名を呼び続ける北郷の呼び声に、二人は一切返事しない。死んでいるんだから当然だ。

「お、おい、嘘だろ？　何で、どうして二人が……」

「……酷い。どうして、どうして愛紗ちゃんと鈴々ちゃんを殺したりしたんですか！？　そんなことする必要なんて、紀霊さんには無かったはずです！」

「……ふざけるなよ？　今回のことと言い、俺達と約束した不可侵の約束を破って孫策に送った、共同討伐の書簡の件と言い、自分達の行動は全部棚に上げて、こちらだけを非難するのか？　交渉しに来ただけの相手を悪びれることもなく殺そうとして来たくせに、自分達が不利になった途端にそんな戯言をほざくな！」

「うつ……」

張飛と関羽の亡骸を床に寝かせ、刀を抜く。

「さあ、貴様らにもそれ相応の報いを受けてもらうぞ。七乃と美羽様に害を及ぼすような輩は、例え神であろうと斬って捨ててやる」

「ご主人様、私の後ろに！ 一応、剣を持っておいて！」

「お、おう！」

服を着直すこともせず、お楽しみの最中の格好のままで剣を構える劉備。同じくお楽しみの最中の格好のまま、劉備の後ろに隠れる北郷。これを他の諸侯達が目にしたら、何て言うだろうか？ 末代までの恥？ 大陸一の恥晒し？ 発情期を迎えた犬共？ 下半分だけ裸の王様？ 劉備に関しては、ほぼ裸の王様？ …… 今予想出来るのは、とりあえずこの程度か。

「愛紗ちゃんと鈴々ちゃんの仇、取らせて貰います！」

剣を頭上に振りかざしたまま、劉備が突っ込んで来る。

「やああ！」

頭目がけて振り下ろされる剣は、あまりにも遅い。受け止める価値も無い。ついでに言わせて貰うと、嫌いな女の裸体なんかを見せられて、とにかく気分が悪い。気持ち悪い、ああ気持ち悪い、気持ち悪い……。

「……遅い」

「えっ！？」

左に半歩ずれて劉備の一撃をかわし、避けられたことに動揺している劉備の左胸へと刀を突き刺す。刀を抜くと大量の血が噴き出し、程なくして劉備は逝った。

「桃香あ！？……てめえ！」

「残すはお前ただ一人だ、北郷。逃げるなら、いや、もう遅いか。……ああそうだ、張飛からお前と劉備宛てに伝言を頼まれているのを忘れていた。劉備が死んだ以上、実質お前宛ての伝言になるが……」

「何だよ、その伝言って？」

「約束を守れなくてごめん、だそうだ」

「……………くっ」

四つん這いの状態で、がつくりと頂垂れる。これで、張飛との約束は果たした。改めて、北郷の料理を再開するでしょうか……。

「北郷、お前に三つの選択肢をやる。そのうちのどれか一つを選べ」

「……………どんな内容だ？」

北郷は四つん這いの格好で、睨み付けながら問い質してくる。

「待て待て、そう慌てるな。……一つ、手元にあるその剣を取って俺と戦い、見事俺を殺して生き延びる。二つ、生きることが諦めて今すぐに斬り殺される。三つ、二度と俺達の前には現れないと誓い、土下座で謝罪する。ちなみに、土下座は三十秒間が一つの目安だ」

「……………じゃあ、三だ」

そう答える北郷の顔は、何かを企んでいるようだった。土下座して

油断させておいて、手元にある剣で襲い掛かってくるつもりなのか。それとも、無事に逃げ出した後でどこかに保護して貰い、虎の威を借りる狐同然に威張り散らすつもりなのか。……どちらも不可能だと言うのに、学ばない奴だ。

「三か。……なら、これは邪魔だな」

「っ!？」

北郷の手元にあつた剣を遠くに蹴り飛ばすと、一瞬だけ表情が歪んだ。どうやら本当に、不意打ちが候補の一つに入っていたらしい。これでもう、許す気はなくなった。……初めから、許す気も生かす気もないけど。

「それじゃ、さっさと土下座してもらえるか？」

「……ちっ」

舌打ちを一つした後、嫌々感を前面に押し出しながら土下座の姿勢を取る。

「謝罪の言葉は？」

「……悪かったな。許してくれ」

一切気持ちの籠っていない謝罪というのは、されるだけ無駄だといふのがよく分かった。

「……はあ、まあそれで良いだろう。じゃあ、今から最低三十秒だ。始めろ」

そう告げると、また一つ舌打ちをして仕方なさそうに頭を下げる。
一秒、また一秒と時間を告げていく。

「——24、25」

気付かれないよう、静かに刀を逆手持ちにして、左手を添える

「——26、27」

ゆつくりと、頭上に持ち上げる

「——28、29」

狙いを、凡愚の頭に定め

「——30」

「よし、これで良いかな？」

先ほどよりかは幾分ほど晴れやかな表情で、俺のことを見上げたその瞬間——

「ああ。だからこれで、俺達とは永遠にお別れだ」

有無を言わす暇すら与えず、北郷の額を刀で串刺しにした。

「……誰も、七乃や美羽様を襲撃したことについてまで許してやるなんて言った覚えは無い。お前、何から何までお粗末だから、前世辺りからやり直して来い」

刀を引き抜き、普段よりも入念に血振りをしてから鞘に納める。…
…帰ったら、きちんと手入れをしておかないといけないな。

「さて、仕上げといくか……」

北郷の死骸を仰向けに寝かせ、その上に劉備をうつ伏せで寝かせる。
その右側にがっかりな顔の関羽を、左側に安らかな表情をしている
張飛を横たわらせる。

「張飛、常世の世界で親しい人達とちゃんと逢えると良いな。……
ふう、慣れないことはするものじゃありませんね。さ、ここにもう
用はありませんし、皆と合流して帰るとしますか」

四人が眠る玉座の間を後にした俺は、とりあえず皆と別れた城門の
方へ足を運ぶ。すると、何故か皆がいた。

「……どうして皆がここに？」

「いやな、安全な場所がすぐ見つかったから、七乃の治療は案外早
く済ませられてさ。それでアニキを迎えに行こうと思ったら、城の
どこを探しても誰もいなくなってたんだよ。これなら、城門の前で
待ってても平気かな。ってことになって、揃ってここでアニキをお
出迎えってわけ」

「……そうだったんですか」

城の中を探す手間が省けただけ、こちらとしても大助かりだ。

「では、城に戻るとするかの。……七乃や、手綱は握れそうかの？」

「はい、大丈夫ですよ。もし駄目になっても、八雲さんに代わって貰いますからあ」

「なら問題ないのじゃ。それじゃ皆の者、出発するのじゃ」

俺達は乗って来た馬に、袁紹達は厩舎にいた馬の中から適当に選んだ馬に跨り、彭城を後にした。これで心おきなく益州へと行ける…。

徒花は、散る時までも醜く……（後書き）

こんな感じで、結局四人とも退場させました。唯一、鈴々だけには救いのようなものがあつたと思います。

まだ、華雄姐さんの真名をどうするか 의견を集めていますので、ご協力お願いします。

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

帰って来た？苦労人の日々（前書き）

更新が遅れたこと、非常に申し訳なく思います。なかなか筆（指）が進まず、展開が思いつかなかったので……。そして気晴らしに、他の作者様の小説を読んでいたり、好みの音楽を漁ったりしていたら、こんなことになっていました。

今月はテストがありますので、今月は更新出来ても一回、上手く行けば二回が限界かと思いますが、よろしくお願いいたします。

それでは、本編のほうをどうぞ！

帰って来た？苦労人の日々

Side：白蓮

八雲が美羽達を連れて北郷達の下へと交渉に行ってから、数日が経った。交渉するだけなんだから、もうそろそろ帰って来るだろう。とりあえず今は、手元にある、あと少しだけ残ってる木簡やら書類やらを処理しておかないとな。何だか、嫌な予感しかないし……。

「白蓮さん、いらっしゃいますか？」

この声は、朱里か。ということは、雛里も一緒だろう。あいつらは、二人一組でいるのが一番しっくりくる。それにしても、いったい何の用だ？

「開いてるから、勝手に入って構わないぞ」

「失礼します」

予想通り、朱里と雛里が一緒に入ってくる。一旦手を止めて、二人の話を聞く体勢を取る。

「で、どうしたんだ？」

「つい先ほど耳にした話なんですけど、どうやら美羽ちゃん達が、袁紹さん達を連れて帰って来たみたいなんです」

「でもまだ本当か分かりませんし、それを朱里ちゃんと確かめに行こうかなって思いました……」

「そうか。じゃあ、私も一緒に行こう。本当に帰って来てるなら、おかえりの一言ぐらい掛けてやらなきゃだからな。……ところで、もし本当に帰って来てるとしても、あいつらの居場所の検討は付くのか？」

「……ええと」

……こうなったら、二手に分かれて探した方が早そうだな。

「なら、私は八雲の部屋に行ってみるから、二人は美羽達の部屋に行ってみよう。帰って来てるなら、私室にいるかもしれないし……」

「……そうですね。じゃあ、そうしましょう」

部屋を出て、一直線に八雲の部屋へと足を運ぶ。なに、いなかったらいなかったで、帰って来てるのかどうかを誰かに聞いて確かめれば済むことだ……。

目的の部屋に付いた私は、朱里と雛里と共に星を頼ってここに流れ来た日の夜のことを思い出した。たしかあいつは、部屋に入る前に扉を叩いてたっけか。よし、私もちよつとやってみるか。

適当に握り拳を作り、扉を数度、軽く叩いてから声を掛ける。

「八雲、帰って来てるのか？」

「……その声は、白蓮ですか？」

「ああ。入っても良いか？」

「どうぞ」

「じゃあ、失礼す……っ!？」

扉を開けると………上半身だけ裸で立っている八雲と目が合った。こ、こういうのは、見慣れてないから、何だか顔が熱くなる。なのに、目の前のこいつは一向に恥ずかしがる気配を見せない。おかげで、余計に恥ずかしい。

咄嗟に扉を閉めて、一旦心を落ち着かせる。……たしかこういう時は、深呼吸が良いんだっとな。

「ひっ、ひっ、ふー、ひっ、ひっ、ふー。……何か違うな。でもまあ、落ち着いたから良いか」

もう一度扉を開けて中に入ると、今度はきちんと着替え終えていた。まったく、驚かせやがって……。

「とりあえず、おかえり。それで、北郷達との交渉はどうだった……ん？」

ふと私の視線が捉えたのは、椅子の背凭れに掛けられている、八雲が普段着ている青色の着物。ただいつもと違うのは、その着物には血がべつたりと付いていることだ。八雲も、私の視線が着物に向けられていることに気付いたのか、気不味そうな顔をしている。

「ああ、見られてしまいましたか……」

「……お前、どっか怪我でもしたのか？」

「いえ、どこも怪我はしていません。この血は、殺した者達の返り血です。詳細は皆の前でお話しますから、後でも良いですか？」

「駄目だ。今ここで話さない限り、私はここを退かないからな」

私の意思は固く、八雲が部屋の外に出られないよう扉の前に立ち塞がり、じっと見つめる。交渉に行っただけの奴が、何で殺傷沙汰なんか起こしたのか、その真意を知りたい。

「……はあ。分かりました、手短にですが説明しましょう」

観念したらしく、八雲は彭城で何があつたのかを話し始める。交渉中にあつた、北郷との様々なやり取り。交渉は無事に終わりを迎えたが、麗羽達を迎えに行つた後で愛紗達の待ち伏せに遭つたこと。襲い掛かつて来た兵士達を、文醜と顔良の手も借りて、片っ端から返り討ちにしたこと。隠れていた兵士が美羽を殺そうとして、それを七乃が庇って負傷したことなど、聞かされること全てが私に衝撃を与えた。

「で、愛紗と鈴々はどうなつたんだ？」

「……張飛は俺が、関羽は星が、それぞれ討ち取りました。向こうは、美羽様の命と七乃を狙っていましたし、彼にあの二人を奪われるなんて屈辱を味わいたくはありませんでしたからね。言うならば、素直な心の勝利です」

「あの二人は、最後まで北郷の言いなりのままだったってわけか…」

…」

「いえ、少なくとも張飛だけは違うと思います。あの少女は立派な武人であり、同時に大好きな人を自らの手で守りたいと強く願う純粹な少女でもあったと、俺が勝手に認識しているだけですけど。…あの子のことなら、白蓮の方が分かってあげられるでしょう?」

「……………」

言われてみればそうだな。あいつらのことは嫌いじゃなかったし、世話にもなっていたんだから、何だかんだ言って淋しかったりする。…あいつらは、幸せだったんだろうか? 実際、本人達のいない今となってはどうだったかなんて誰も分からない。私があいつらの為に出来ることだって、たかが知れてる。

「……………桃香達は、どうなったんだ?」

「お話する前に、劉備との関係を聞いても良いですか?」

どうして急にそんなことを聞くのか分からなかったけど、別に聞かれて恥ずかしい関係なんかじゃないし、同門の学友で旧知の仲だと素直に教えた。

「そうですか。じゃあ、これからする話は、白蓮に恨まれても仕方がない内容かもしれません。……………ここまで言えば、ある程度は想像付くんじゃないですか?」

「……………まあな。愛紗と鈴々の話を聞いた辺りで、何となく想像は出てくるよ。それでも、あいつらの最期がどんなだったのか、最近まで付き合いのあった私には聞く権利くらいあるだろ? なに、覚悟

は出来てるよ」

「……じゃあ——」

そうして、八雲の口から桃香達のことを淡々と語られていく。

「関羽達を退けた後、俺は美羽様達と分かれて、一人別行動を取りました。美羽様に、必要以上の汚れ仕事を見せるわけにはいかなかったからです。ここまでは良いですか？」

「ああ。続けてくれ」

「一人になってまず初めにしたのは、その場で立ち竦んでいた敵兵を始末することからでした。未遂とはいえ、美羽様と七乃に襲い掛かるうとしたことは事実でしたから。それを終えた後、今度は不可侵の約束を破った北郷さん達の居場所を探すことにしました。あの二人に、自分達が犯した事の重大さを教えるために、関羽達の亡骸を抱えたままで……。しかもこの時は、かなりの量の返り血を浴びていたうえに無表情だったので、結構不気味だったと思います」

「……その時のお前に逢った奴が、不憫でならないよ。で、桃香達の居場所はすぐに分かったのか？」

「ええ。兵士の方に聞いたら、今も玉座の間にいると怯えながら教えてくれました。それで、いざ行ってみると……」

行ってみると……いったい、どうしたんだ？

「……玉座の間の扉の前で、数人の兵士が興奮した様子で中の様子を盗み聞きしていたんですよ。何故だか分かります？」

「……いや、分からない」

とは言いつつも、正直何となく予想出来てしまう自分が悲しい……。どうせ、盛ってたんだろ？

「ですよー。普通は分かりませんよ、中で劉備さんと北郷さんがお楽しみの中だったなんて……。ですがこちらに空気を読む理由がないので、兵士達を脅してその場を立ち去らせた後、玉座の間に続く扉を乱暴に蹴り開けました。すると、下半身丸出しの北郷さんとはば全裸の劉備さんが、お楽しみ中の体勢で俺のことを出迎えてくれましたよ」

「……………」

駄目だ、言葉が全く出て来ない。あまりにも予想通りすぎて、何一つとして出て来ない。てか、こんな話になるなら先に一人で聞かなければ良かったよ！でも、今さら後悔しても遅いよなあ。ここまですでに聞いちゃったんだから。

「それから少しの間、不毛なやり取りをした後、二人のことを始末しました。生かしておく必要は一切ありませんでしたし、こちらを殺そうとしたのですから、俺としては自業自得とは思っていません。……ですが、俺が二人を手を掛けたことは事実ですし、白蓮にどう思われようとも、受け入れる覚悟は出来ています」

「…………… たしかにさ、桃香は私の学友だったし、古くからの仲だったよ。北郷だって、会った当初は良い奴だったんだ。でもな、私がかここにいるのは、そんなあいつらと袂を分かったからだ。あいつらが死んで悲しくないと言ったら嘘になるし、それなりに淋しいと

も思う。……それでも、あいつらにはお前に殺されるだけの理由が十分にあっただ。お前の取った行動は、主を守るためと考えるなら当然のこと。だから……お前を恨んだりなんか、しない、よ……」

あ、やばい、涙が……。せめて、自分の部屋に戻るまでは我慢しよって決めてたのに。せめて、泣き顔だけは見られないようにと、俯いて顔を隠す。

「……………」

八雲はゆっくりとこつちに歩き出して来る。泣き顔を見られまいと背中を向けると、八雲は私の頭をぼんぼんと撫でるように軽く叩き、そのまま横を通り過ぎて部屋から出て行った。何となくだけど、あいつなりに気を利かせてくれたんだと思う。……どうせなら、胸や背中の一つでも貸して欲しかったかな。

そんなことを考えていると、堪えていた涙が一気に流れ始め、部屋には私の嗚咽とすすり泣く声だけが響いていた。

……しばらくの間泣き続けたおかげですっきりした気分になっていると、八雲が部屋に戻って来た。そこで私は、何となく疑問に思ったことをぶつけてみることにした。

「なあ、八雲。……普通さ、目の前で女が泣いてたら、男は黙って胸を貸したりするもんじゃないのか？」

「……白蓮は、いったい俺に何を求めているんですか？ あれですか？ あの女誑しが、実際にそうだったとも言うんですか？ 言っておきますが、胸を貸すのは七乃だけの特権であって、誰にでも貸すつもりはありません。まあ、美羽様は例外ですけど」

「じゃ、じゃあついでに聞くけどさ、愛人とか妾とか側室とか、そういうったのも持つ気は無いのか？ お前なら、あと何人かいけそう
な気がするけど……」

「全くもって、興味ないですね。他の方はどうか知りませんが、俺としては、後にも先にも七乃がいてくれればそれで十分です。そもそも俺は、何人も同時に愛せるような甲斐性のある人間じゃありませんし……」

こいつ、私の質問に答えるついでに、ちゃっかり惚気やがったよ。あゝあ、私の春、どっかに落ちてないかなあ……。出来れば、こんな地味で普通な私でも良いよっていう一途な奴で……。ああ、何だか考えれば考えるほど、余計に悲しくなってきたよ、こんちくしう！ おかげで、私の虚しさは有頂天になった。この虚しさはしばらくおさまる事を知らない…。

Side：八雲

白蓮への説明を終えた後、皆に軍議の間へと集まって貰い、彭城での経緯を報告した。もちろん、北郷と劉備がお楽しみの最中だった等といったどうでもいいことは割愛させてもらった。

劉備達と面識があり、つい最近まで行動を共にしていた朱里達は落ち込みはしていたものの、すぐに立ち直った。あまりにもあっさりとし過ぎる立ち直りの早さに、道端に転がる小石に対する興味と同程度の憐みを覚えてしまったのは内緒だ。

その後、袁紹達が改めて挨拶し、全員と真名を交換することになった

た。その時、無駄に勘の鋭い文醜が、月と詠の正体を当ててしまい袁紹に疑いの目を向けられたものの、二人は訳あって真名以外の名を捨てたんだという、白蓮の地味なナイスフォローで事なきを得ることが出来た。

「——以上で、彭城であったことの報告を終えます。こつちで、何か変わったことはありませんか？」

「……ええと、特に変わったことはありません。唯一変わったと言えば、月ちゃんが華雄さんに真名を授けてあげたことくらいですね」

「え？　そうなんですか、月？」

「はい。前からずっと、真名がないことを気にかけていたようだし、今までの感謝の気持ちも込めて、似合いそうなのをいくつか考えてみたんです」

「で、最終的に決定した真名は何と？」

「いったい華雄は、どんな真名を授かったんだろうか？　月はしっかりしてるから、どっかのハンマーぶん回す力。ル大先生のような壊滅的ネーミングセンスではないことを、つつい願ってしまう。」

「一番気に入って貰えたのは、^{すみれ}董でした。……私も何となく、それが一番似合うんじゃないかなって思っていたんです」

「私は月様のおかげで、良い真名を得ることが出来た。お前達にも、我が真名を預けよう。これから私のことは、董と呼んでくれ」

「分かりました」

今までなかった真名を、自らの主から名付けられたことで、人一倍嬉しそうにしている華雄。それにしても、董か……。色にもよるけど、花の色が紫のものと白のものの花言葉には、誠実という意味が込められている。それに華雄……董の服は紫色を基調としているから、たしかに似合っているかな。

「ええと……それじゃあ次は、益州への移動について話し合うとしましょうか。可能ならば、ここ十数日中に益州へと出発したいと考えているのですが、どうでしょう？ 急げば可能ですか？ ですが、もし何かしら問題があるのなら、それについても遠慮無く意見して下さい」

「まあ、急げば可能だとは思うわ。……徐州に暮らす民全てを見捨てれば、の話だけだね」

「……ですが、その代償は非常に大きいものと思われます。徐州に暮らす民からは非難の声が殺到するでしょうし、悪事千里を走るとも言えます。民を見捨てたなどという話が他の諸侯達の耳に入ることになれば、私達はあつという間に討伐対象に挙げられてしまうでしょう。そうなれば必然的に、益州へ移動などと言ってはいられないくなります。なので、ここは民の不安を解消する方を優先するべきです。益州へ行くのは、それからでも遅くないかと……」

益州へと行くことばかりに気が行き過ぎて、そういう側面やリスクにまで目を向けられてなかった。詠や雛里が教えてくれてなかったら、危なかったな。

「……危つく、美羽様の名声を落としてしまうところでした。では軍師の立場から見ても、我が軍で徐州を統治するのが最善だと思います」

すか？ それとも、他の諸侯に治めて貰うべきだと思いますか？」

訊ねた問い掛けに対して、朱里が初めに意見を述べ初める。

「徐州は、私達が統治するべきではないと思います。私達の勢力は、将の質は良いものの、それに見合うだけの兵力がありません。現存しているどの有力諸侯達よりも、脆弱と言えるでしょう」

「それが、妾達がこの地を治めてはならんというのと、どう繋がるのじゃ？」

「今ある領土は下？ だけですから問題ありませんが、特に治安の悪化してしまっている彭城を含めた四郡まで私達のみで統治するとなると、未だに人員不足の否めない私達では厳しいものがあります。これは、自領の防衛に関しても同じことが言えますね。……もし仮に、曹操さんに攻めて来られでもした場合、頑張っても追い返せるのは一回が限界。その後はじり貧となり、最終的には圧倒的な兵力差の前に押し潰されることは、火を見るより明らかかと……」

「そうですねー。そうなるくらいなら、民の不安を取り除くために然るべき最低限の措置を取り、早々に他の諸侯へと徐州を明け渡し、その対価として領内の通行許可を貰う方がよっぽど建設的なのです」

「曹操さんは領土的野心があると聞きますし、袁紹さんの治めていた河北四州も勢力下に取り込んでいますから、攻め込まれたら一溜まりも無いでしょう。あの勢力との戦闘は可能な限り避けたいですから、候補としては最有力ですね。……ただ、袁紹さんがちょっとあれなんですよね？」

ちらつと、袁紹の方へ視線を向けると、『曹操』というワードに敏感に反応しているらしく、若干不機嫌になっている。でも、ここで一番偉いのは袁紹じゃなく、美羽様だ。彼女の機嫌取りなんかしている暇も時間もない。まだまだ力のないうちは、生き残ることの方が先決だ。全滅してからじゃ、さすがに遅すぎる。

「かと言って孫呉にお願いしようにも、美羽様と七乃の二人は領内への立ち入りが禁じられているのが現状。仮に許可を貰えたとしても、他の人達……特に孫権さん辺りが黙ってはいないでしょう。荊州を取り返した今でもまだ、彼女達には恨まれていそうですし……」

「……あう」

これは別に、何も大袈裟に言っているわけじゃない。事実、寿春で療養の日々を過ごしていた数日間、孫権達からはまるで親の仇でも見るかのような目で見られていたのだから。それくらい、袁家に対する禍根が彼女達の中に根深く残っているのだ。彼女達からすれば、袁家の人間を好きにはなれるわけがない。それでも、なるべく孫家とは上手くやっていける様に努力してきたつもりだったんだけど……。

「そう考えると、やっぱり曹操が妥当だろうな。で、どうする？ 明け渡すなら、さつさと事を進めないと不味いと思うぞ？ 向こうだって、こっちに合わせてくれるわけじゃないんだし……」

「それもそうですね。じゃあ、私と雛里ちゃんに、詠さんとねねちゃんの四人で話し合って決めておきますから、皆さんは少し休んでいて下さい。決まり次第、呼びしますから」

「……助かります」

お言葉に甘え、一度軍議の間を後にし、適当な場所で休むことにした。

それから待つこと、だいたい小一時間……。誰がどの郡を担当するのかが決まったらしく、伝えるからお呼びが掛かり、再度軍議の間へと入る。

朱里達によって話し合われた結果……。

下？（留守番）…美羽様・七乃・麗羽さん・斗詩・猪々子

彭城…朱里・星

琅邪…音々音・恋

東海…白蓮・雛里

広陵…月・詠・董

曹操…八雲

……え？ どういうこと、これ？ 何で一人だけ、行き先が人の名前なの？

「あの、話が全然見えて来ないんですけど……？ ついでに、未来も見えないんですけど？」

「単刀直入に言うと、民の不安を取り除くのはボク達の方でやっておくから、その間にあんたは曹操と話を付けておけてことよ。未

来は……自分で何とかしなさい。とにかく、あんたはここの責任者
みたいなもんなんだし、皆のためにも上手くやってよね?」

「……………了解です」

彭城から帰って来て早々、数日間の単独任務もとい単身赴任が命じ
られた。また、あの苦労人生が始まるのか……。

帰って来た？苦労人の日々（後書き）

姐さんの真名に関するご意見を下さった皆さん、ありがとうございました。ねねを除けば董卓軍の真名は一字だけという共通点を教えて頂いたので、それを参考にさせて頂きました。結局最後は独断で、花言葉と服の色をかけた名前にしましたが、こういうのが良いんじゃないと提案していただいた真名と、どれにしようか悩みまくってました。

それと結局、徐州は明け渡す方向で決まりました。

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

苦勞人、さつそく苦勞する（前書き）

前回お知らせした通り、今月の更新はこれで最後となります。次回の更新は、八月に入ってからとなります。ご了承ください。

では、本編のほうをどうぞ！

苦勞人、さつそく苦勞する

Side：八雲

現在、曹操のいる陳留にまで馬に乗って向かっている最中です。どうも、人事部長だけかと思いきや、天才軍師殿達によって単身赴任のネゴシエーターに仕立てられた八雲です。しかも、その相手は曹操とか、それどんな無理ゲって感じです。ていうか、誰か一人くらい、旅のお供が居たって良いでしょうに。唯一の救いは、馬が居てくれるってことだけか。……自分で言うのも何だけど、不憫だ。

とりあえずこういう時は、歌でも歌って気分転換を図るに限る。テンションが上が리そうな曲を適当に歌を口ずさみ、自由気ままで行き先のない風に吹かれ続けながらも、ただ目的地へと歩を進める。……何だか、流浪の旅をしていた頃を思い出して、懐かしい気分になるな。

「それにしても、まさか陳留に送った使者が、出発してから五日も立たずに返事を持って帰って来るとは、さすがに予想できなかったなあ。しかも、曹操が交渉の席を設けることに快諾してくれるなんて……。これは軍師殿達の言う通り、何か裏があると思って用心しておいた方が良さそうだ」

彭城から帰った後、刀の手入れはいつも以上に入念にやったし、鞘の方も一応綺麗にした。着物や馬乗り袴も、念のために下ろし立てのものを着て来ている。こっちは袁術軍の代表もとい美羽様の名代として赴くわけだから、せめて恥ずかしくない格好である必要があったからだ。

それはさておき、下？から？州にある陳留へ最短で行くには、豫州の沛国、そして梁国を経由して行くのが一番早い。……おっと、そんなこと言ったら、徐州と豫州の国境に着いたようだ。国境から豫州側の方には、外敵の侵入を食い止めるための警備兵が見える。馬から降りて手綱を引き、警備兵へと歩いて近付いて行く。

当然の如く止められたが、念には念をと持参しておいた書簡を手渡して身分を明かすと、すぐに通行許可をくれた。話を聞く限り、俺が来たら通すようにと指示があつたらしい。いくつもの領地を治めながら、細部にまできちんと指示が行き渡っている。うちも、こういうところはどんどん見習っていかないといけない。

その後も問題なく道中を進んで豫州から？州入りし、下？を発つてから三日目の日没にして、ようやく目的の陳留に到着した…。

街の中に入って真つ先に入つて来たのは、夕方だと言うのに活気溢れる街の様子だった。ここに暮らす民は大人や子供を問わず、誰もが活気に満ち溢れ、結果的にそれが街の活気にも繋がっていく。統治する者の手腕は、そのまま街の様子に反映される。美羽様もある種一つの箱入り娘だったから、この街並みを目で見て、肌で感じて、足で歩いて貰いたかった。まだまだ発展するところはあるのかもしれないけど、美羽様に見せるには十分な模範解答と言える街だ。……まあ、本人が居ない以上、土産話として帰った時に話すしかない。

さて、目的の城にさつさと言きたいところだけど、まずは腹ごしらえをしておこう。話し合っている最中に腹の虫が鳴つたりでもしたら、恥ずかしいことこの上ないし……。そんなわけで、適当に街中

をぶらつく。

「飲茶にラーメン、肉まんに小籠包……他にも色々あるみたいで、どれにしようか迷うな。ここは、街の人にも——」

オススメを聞こうと思い、適当な人に話しかけようとした時だった。

「きゃあー！」

突然、街中に悲鳴が響いた。何があつたのか様子を見に行くと、何の店かまでは分からないが店の前に人込みが出来ていて、やけに騒ぎ立てている。すると突然、引き戸の扉を突き破る形で中年の男性が勢い良く飛び出し、そのまま地面に倒れ込んだ。良く見ると、顔には殴られたような痕がある。察するに、中にいる人に殴り飛ばされたのだらう。

男性が店から飛び出ですぐ、頭や腕に黄色の布を巻いた黄巾党の残党らしき三人組が出て来る。三人組の特徴は、細身で何か偉そうにしている隊長格らしいのが一人、チビが一人、メタボが一人で、隊長格らしき男の手には人質と思われる前掛けをつけた少女がいた。

「頼む！ 店の売上なら全部やるから！ せめて、せめて娘だけは返してくれ！」

「駄目だ。この娘は、俺達への慰謝料兼人質として貰っておくぜ。運が無かったと思って、すっぱり諦めるこつたな。心配しなくても、この娘は俺達がちゃんと可愛がつてやるから安心しとけや」

「兄貴の言う通りだぜえ。残念だったなー、おっさん」

「そ、そんな……」

「おい、誰でも良いからこの太守を連れて来い！ 大事な領民を、傷付けられたくなかったらつてな！」

腰にある剣を抜き、右へ左へとでたらめに振り回す。その光景に怯えたやじ馬達は、三人から距離を取る。少女を助けてあげたい気持ちはあるんだろうけど、相手が武器持ちじゃ恐怖心が勝ってしまうのだろう。……それにしてもあの男、剣の扱い方がなっちゃいないな。ついでに女性の扱いも、もう少し学んだ方が良いと思う。

まあ、それはどうでも良いとして、問題はあの少女をどうやって無事に助け出すかだ。他人の領内だから、あまり派手なこととは出来ない。かといって、無視するなんて以ての外だ。そんな非道德的なこと、俺には出来ない。

そうこうしている間に、騒ぎを聞き付けた警備隊らしき兵士達と、兵士達に様付けで呼ばれている長い銀髪を三つ編みに編んだ女性が駆け付けて来た。でも人質がいたとあっては、迂闊に手が出せないせめて、人質になっていいる少女をどうにか出来れば、銀髪の彼女も行動しやすいはず。しかし面倒なことに、賊達の背後は店がある。

「どうしたもんかね、まったく……」

何か手はないかと雑踏の中を掻き分けながら様子を探れば、引き戸を失ったことで店の中が丸見えになっていて、店の奥には勝手口があることも確認できた。もし勝手口の鍵が開いていれば、後ろからこっそりと近付けるかもしれない。開いていなくても、ここ一帯は平屋造りの建物ばかりだから、屋根によじ登って上から不意打ちも仕掛けられる。

再び雑踏を掻き分けて、気付かれないように横道へと入り、店を挟んで賊達のいる大通りの隣の小さな通りに出る。

目的の建物の勝手口前に着いて、一息ついてから引き戸に手を掛ける。おそるおそる扉を滑らせると、運が良いことに鍵は掛かっていなかった。そのまま音を立てないようにゆっくりと戸を開いて中に入り、三人組の様子を確認しながら、後ろ手にゆっくりと戸を閉める。

賊達だけでなく、その奥に入る兵士達ややじ馬達にも気付かれないように、柱の陰に隠れたり第1匍匐ほふくしたりして、店の表口へと進んで行く。そしてようやく、賊達と店の壁一枚を隔てた距離にまで接近することが出来た。

何食わぬ顔で外に出て行くと、兵士達ややじ馬達が再び騒ぎ立てる。中にはこそそと、俺のことを三人組の親分じゃないかとか噂する人までいた。でも賊達は、後ろにいる俺に気付く様子はない。

人質を取っている隊長格の男の背後に立ち、利き足である左足を後ろへと目一杯振り上げて――

「蹴り潰す！」

「――へっ!？」

気分はさながら、ボールは友達のサッカー少年。そんなわけで、賊の股間を全力で蹴り上げる。……………嫌な音がしたが、きつと気のせいだろう。うん、気のせい気のせい。主に自分のために、そうしておこう。…………あ、やじ馬やってる男達の大半が、苦々しい顔をし

て、蹴られた賊のことを見てる。

「へぎやつ!？」

賊は情けない声を上げた後、声にならない呻き声を上げながら地面を転げ回る。それにより、人質となっていた少女が解放された。すぐに少女を確保し、声を掛ける。

「大丈夫ですか？」

「……はい」

「よし、それじゃ早く父親のところに行って、安心させてあげると良い」

「あ、ありがとうございます!」

背中を軽く押してやると、少女は父親の下へと駆け寄り、父親は無事に戻って来た娘を抱き締める。いやはや、人質を無事に助け出せて良かった。これで、美羽様や七乃への土産話がまた一つ増えたつてもんだ。

「……お、おおお、おいい!」

「ん? 誰か呼びましたか？」

周囲を探しても、話しかけて来る人が一向に見当たらない。それでもまだ呼ばれ続けるもんだから注意して探すと、悶絶して地面を這い蹲っている賊が、俺を呼んでいた。

「……て、てめえ、汚ねえぞ……！　よりにもよって、背後から、お、俺の大事な男の証を……蹴り上げるだなんて。ひ、卑怯だとは思わねえのか……！？」

全く痛みが引かないのか、変に上擦った声でいちゃもんを付けて来る。

「そうだぞ卑怯者！　もし兄貴のが使いものにならなくなってたら、どう責任を取るつもりなんだ！　ああ！？」

まさか、賊に卑怯者呼ばわりされるとは……。

「ああ、それは失礼。最近、少々足癖が悪くなっております。……それより、人質を取ったあんた方に、卑怯呼ばわりされる筋合いはありませんが？　第一、卑怯っていう言葉の意味をきちんとご存じで？　知らないのであれば、十……いや、百回ほど調べ直すことをお勧めします。……まあ、理解出来れば、の話ですけどね。あと、使いものになるならないは、俺のじゃないですし、正直どうでも良いです……」

「ば、馬鹿にしゃがって！　殺してやらあ！」

チビが腰の鞘から剣を抜き、斬り掛かって来る。見かけ通りの素早い動きだが、それはあくまでも一般市民から見ればの話。一武将から見れば、単調な動きにしか映らない。振り下ろされた剣を右に避け、そのまま左足での後ろ回し蹴りを繰り出し、一撃で意識を刈り取る。

「おっと、これはまた失礼。どうやら、本格的に足癖が悪くなって来たみたいです……」

「野郎、嘗めやがつてえ！」

続いてメタボの方も剣を抜き、斬り掛かって来る。振り下ろされた剣を、後ろに下がって避ける。

「二人がやられた時点で、大人しく降参しておけば良かったものを……。言っておきますが、剣を抜かれた以上は手加減出来ませんよ？ 武器の扱いもろくに知らない人間に、何時までも危険物を持たせておくわけにはいきませんから。……とりあえず腕の一本くらいは、覚悟出来ているんですよね？」

脅しの意味も込めて、抜刀して刀の切っ先をメタボの方へと向ける。脅しに屈して降参するなら善し、降参しないなら宣言通りに腕の一本は覚悟してもらう。……もちろん、最悪でも骨折程度で済ませるつもりだ。戦場を知らない人達の前で人を斬ったりでもしたら、下手すれば一生のトラウマになりかねないし、美羽様の名を落とすようなことにでもなったら会わせる顔がない。

「うつ……」

「さあ、どうしますか？ 剣を捨てて大人しく捕まるか、無駄な抵抗をして痛い目見るか、早く選んで下さい。さあ、早く、さあ！」

切っ先を向けたまま、じりじりと近付いて行き、とうとう刃先が賊の喉元に触れる。あと一歩進めば、刀は喉に突き刺さるだろう。

「わ、分かった！ 武器ならほら、この通り捨てるから！ 頼む、見逃してくれ！」

剣を地面に放り投げて、両手を上げる。これにて、一件落着くと……。刀を鞘に納め、銀髪の彼女に声を掛ける。

「すみませんが、この三人組の後始末をお願いしてもいいですか？」

「ご協力感謝します！……あの、よろしければ名前を教えてくださいますか？」

「いやいや、名乗るほどの者ではありませんし、別に大したことはしていませんので、これで失礼させて頂きます。それにまだ、お仕事が残っていらっしゃるでしょ？」

「は、はい！ 誰か、この三人を縄で縛り上げて牢屋に連れて行け！」

「はっ！」

「他の者は、私と共に店内及びこの周辺に散らばっている破損物の撤去だ。それから……」

さ、銀髪の彼女が後始末に追われている間に、さっさと立ち去らせてもらおうとしよう。本当は、今すぐにも曹操に会っておきたいところだったけど、何だか無性に疲れた。何で疲れたかって言うと、警備兵に賊を任せた後、今回の一件を見守っていたやじ馬達に囲まれて、もみくちゃにされたからだ。白蓮ほどじゃないにしても、あまり褒められ慣れていない俺は、称賛の嵐というものを受けるとうも疲れてしまう。……今夜一晩はどこか適当な所に宿を取って疲れを取り、明日の朝、改めて曹操に会いに行くとうしよう。

大分早めの夕食を取り、城から最も近い場所にあった宿屋の一室を

借りて、さつさと寝ることにした…。

Side：風

仕事を終えて城に戻ってから、あの三人組の賊を捕らえるのを手伝ってくれた御仁のことを考えていた。彼は、いったい何者だったんだろうか？ 相手が黄巾党の残党だったとはいえ、動きには一切の迷いがなく、賊の意識を刈り取った時の蹴りは見事なものだった。春蘭様や秋蘭様、それと霞様に比べれば武は見劣りするだろう。だが少なくとも私や真桜、沙和では勝てないだろうし、季衣や流琉でも厳しいものがある。あの身のこなしから、私はそう感じ取った。

そこで、どうしても一つの疑問が浮かぶ。普段警邏で街を見回っている私ですら、彼のような男性を見たことがないということだ。そもそも、彼くらい実力がある人が最初からこの街に暮らして居れば、華琳様がまず見逃すはずはない。確実に、兵を指揮するような立場に居たことだろう。

「……華琳様にお聞きしてみよう。もしかしたら、何か知っておられるかもしれない」

華琳様は常日頃から忙しくしておられるから、のんびりしている場合じゃない。途中、文官達にぶつかりそうになりながらも、華琳様の私室へと急ぐ。

「華琳様、いらっしゃいますか？」

「……その声は風かしら？ 入って来なさい」

「失礼します！」

中に入ると、どうやら今は休憩中らしく、桂花さまとお茶を楽しんでいる最中だった。

「どうしたの風？」

「先ほど、街に黄巾党の残党が現れまして……」

「何ですって！？ 警邏隊は、いったい何をしていたの！」

桂花さまが、目を見開いて大声で怒鳴る。実際、警備がちゃんとしていなかったのだから、怒鳴られても仕方がない。今回のことは、私達警邏隊の落ち度だ。

「落ち着きなさい、桂花。……風、その賊共はどうなったのかしら？ あと、被害状況についても教えなさい」

「既に捕らえ終わり、今は牢屋に入っております。被害状況の方ですが、茶店の扉が壊されたのと、店内が多少荒らされたくらいです」

「その程度で済んだのなら良いわ。それで、わざわざそのことを報告しに来たのではないのでしょうか？」

「……実はその、賊を捕らえたのが、見知らぬ男性だったのです。それで華琳様の前にお連れしようとしたのですが、名乗るほどの者じゃないと言って、居なくなってしまうて……。それほどの実力を持った人がこの街にいるならば、華琳様が見逃すはずはないと思います、お話した次第です」

「それは興味深い話ね。夙、その男の特徴を教えなさい」

華琳様に、あの御仁の特徴をお伝えしようとした時……。

「いけません、華琳様！ どれほどの実力があるかは知りませんが、所詮は男。どうせ、下賤な輩に決まっています！」

桂花さまは、生粋の男嫌い。それにしても、あの嫌い方はちょっと尋常じゃ無い気がする。言い方は悪いが、まるで病的なほどの男嫌いだ。

「……桂花。私はね、可愛い女の子が好きよ。でもね、曹孟徳の覇道を支えるのに、男も女も関係ない。その者の実力が、私に仕えるに相応しいかどうか、それだけよ。だから今、貴女は私の傍にいるのでしょ？」

「……はい、華琳様あ」

桂花さまは、うつとりとした表情で華琳様のことを見つめていた。

「さてと……夙、さっき話していた男の特徴を、なるべく詳しく教えてちょうだい」

「はい。……たしか、青色の着物に、霞様のような紺色の袴を身に付けておりました。それと、この辺りでは珍しい片刃の剣を所持していました。それ以外ですと、背が高くて、終始丁寧な口調だったことくらいしか……」

彼の特徴を教えると、華琳様は何やら納得したような顔をなされた。華琳様には、あの御仁の心当たりでもあるのだろうか？

「あの、華琳様には誰かお心当たりがあるのですか？」

「ええ、一人だけね……。風、とりあえず街中を探して、方法は問わないからその男を連れて来てちょうだい。それと、貴女だけじゃ大変でしょうから、手の空いてそうな沙和と真桜にも手伝わせない。時間が時間だし、宿屋を探せば案外早く見つかるかもしれないわ」

「は、はあ……」

「さあ桂花、お茶の続きをしましょ？」

この二人はお茶会を再開するようだから、私は出て行くでしょう。失礼しました、と一声かけてから、華琳様の私室を出る。さて、まずは自分の部屋に戻って準備をしよう。

私室に戻ると……。

「ああ、邪魔してんで、風」

「お帰り風ちゃん、勝手に邪魔してるの」

「……どうして、二人が私の部屋にいるんだ？ それもわざわざ物を持ちこんでまで……」

愚痴を零しつつ、再び出かける準備を始める。二人との付き合いは長いから、こういったことはもう慣れっこだ。それに、どうせ今から二人を連れ出すんだから、好都合とも言える。

「細かいことは気にしたらあかんで、風……って、何で出かける準備なんかしとるんや？」

「華琳様に、人探しを頼まれてな。寛いどころ悪いが、二人にも付き合ってもらうぞ？」

「……あ、あかん、今日の警邏の報告書、まだ書いてないの忘れとった！　そういうわけやから、うちは付き合えそうにないわ。すまん、風」

「……そ、そそ、そういえばまだ、今日中に仕上げなくちゃいけない報告書が残っているのを忘れてたの！　そういうわけだから、沙和も行けないの」

全く……。この二人の悪いところは、こうやってすぐに仕事をさばるところや、それを注意しても全然悪いと思っていない所だ。今だって、仕事よりも自分達の趣味の方が優先されてる。これじゃないとは思っているのだけど、この二人は私の注意から言葉巧みに逃れようとするから質が悪い。

「もういい！　私一人で探しに行く！」

結局、今回も最終的に私の方が折れ、私一人で探すことにした。

外に出ると日は沈み切り、辺りはかなり暗くなっていた。こうも暗いと、探すのが大変だ。とりあえず明かりを用意し、城の近くからしらみつぶしに探すでしょう。

城から一番近くにある宿屋に入ると、私のことを新たな客と勘違いした女将さんが、笑顔で私のことを出迎える。

「いらつしゃい、お一人様かい？」

「いや、違います。私は、曹操様に仕える将の一人です」

「あ、あら、これはとんだ失礼を！……それで、あの、いったいうちにどういったご用件で？」

「実は、ある人を探していて……」

探している御仁の特徴を伝えると、この宿の一室に部屋を借りていと教えてくれた。確認した後、本人なら城に連れて行きたいと伝えると、それはさせられないと一度は拒否された。だが、彼を連れて行くのは華琳様のご命令だからだと教えると、それならばと快諾してくれ、部屋にも案内してくれた。

「この部屋です。お客さん？　ちよつと、お客さゝん！……もう寝ちゃつてるのかねえ？」

女将さんが戸を叩きながら呼び掛けるが、一向に返事が返って来ない。それどころか、中からは物音ひとつしない。もしかして女将さんの言う通り、本当に寝ているんじゃないだろうか？

「失礼する」

部屋の中へと勝手に入り、備え付けてある寝台に近付いて、本人かどうかを一応調べる。……うん、たしかにこの人だ。確認も出来たことだし、早々に彼を運ぶでしょう。

彼を抱え上げ、肩に担ぐ。……普通、ここまですれば起きるものな

のじゃないかと疑問に思いつつも、女将さんに彼の宿泊代金は後日軍の方で支払うとだけ伝えて宿屋を後にし、彼を城へと運んだ…。

苦勞人、さつそく苦勞する（後書き）

凧・真桜・沙和の口調が、いまいち分らない。そして、話も何だか纏まらない……。

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしくお願いします。

霸王との交渉（前書き）

無事に試験も終わり、ようやくこちらでの活動が再開できます。

後半部分がグダッてる感じが否めない気もしますが、ご了承ください。

それでは、本編の方をどうぞ！

霸王との交渉

Side：八雲

朝目が覚めて、真っ先に思い浮かぶ。

「……ここはどこ？」

見慣れぬ天井、見慣れぬ家具とその配置、昨日宿泊した宿屋以上に、隅々まで掃除されている部屋。……別に、昨日借りた部屋も十分に綺麗だったよ？

とりあえず、ここがどこか分からない以上、自衛のために武器が必要になってくる。だが、部屋のどこを探しても刀が無い。それどころか、脚絆と手甲も無くなっている。これは困った、無くなった私物を探す必要があるそうだ。

寝台の敷布や布団諸々を綺麗に整えてから、部屋を出よ――

「失礼しま――はぶっ!？」

扉を開けようと扉の取っ手に手を掛けようとした瞬間、急に扉が開き、誰かが胸にぶつかると。視線を下に落として誰かを確認すると、そこには見覚えのある銀髪があった。

「あの……大丈夫ですか？」

「うっ……少し鼻をぶつけたようですが、問題ありません」

「それは良かった。あ、申し遅れました。俺は袁術様に仕えている、紀霊と申します。曹操さんにお話があつて、こうして陳留へと参りました。……貴女は？」

「私は楽進。華琳様に仕えている将の一人で、普段は昨日御覧の通り、警邏隊の隊長の一人として、街の治安を守るために尽力します。」

曹操に仕えている将がいるってことは、ここは陳留の城ってわけか。……それにしても、まさか昨日の今日で顔を合わせるなんて予想もしなかったな。多分もう会うことは無いだろうと思つて、ちよつとはめを外してかつこつけてみたつてのに、蓋を開ければ次の日再開とか……。でも待てよ、あれつてかつこつけたつて言うより、ただの厨二なだけじゃね？ あ、やばい、そう考えたら一氣に恥ずかしくなつて来た。唯一の救いつて、この時代に厨二という概念がないつてことだけか。

「……あの、昨日はお恥ずかしいところをお見せしてしまつたところか、事件の解決までさせてしまい、本当に申し訳ありませんでした！」

勢い良く頭を下げ、謝罪をして来る楽進。いやいやこつちこそ、柄にもなく厨二的な言い回しをしてしまつて申し訳ありませんでした、と頭を下げたい。……とりあえず今後は、厨二的発言を極力控えるようにしよう。

「別に気にしていませんから、頭を上げて下さい。ある程度の實力があるのなら、昨日のことは当然とるであろう行動です。……誰も怪我したりせず、無事に解決出来たのですから、お互いそれで良いじゃないですか。ね？」

「……はい」

頭を上げてまあ、楽進は申し訳なさそうにしている。責任感が強いのか、必要以上に気にし過ぎる性格なのか、どちらにせよ苦勞人体質なのに変わりはないさそうだ。周瑜や斗詩といった苦勞人達と一度酒を酌み交わせば、案外すぐに意気投合しそうな気がする。いつか、路地裏同盟ならぬ苦勞人同盟なるものを作ってみたい……かもしれない。

「一つお聞きしたいんですが、どうして俺はここで寝ていたんでしょうか？ たしか、昨日は城から一番近くにあった宿屋の一室を借りて、そこで寝ていたはずなんですが？」

「華琳様から、紀靈殿を見つけたら城に連れて来るようにとご命令があったのです。その際に手段や方法は問わないと言われておりましたので、不作法とは思いましたが、宿で寝ているところを失礼させて頂き、ここへと運ばせて頂きました」

「そ、そうですね……」

まさか、熟睡中に運ばれていたなんて夢にも思わなかった。てかさ、運ばれてる途中で起きようよ、俺……。

「他に何かお聞きしたいことが無いのでしたら、華琳様達が待つ玉座の方へと案内をしたいのですが……？」

これ以上聞くことはないから、お願いします、とだけ告げ、楽進の案内の下、曹操の待つ玉座へとその歩を進める。その間、雑談一つすら交わす事も無く、ただただお互いに無言を貫いていた。戦場

に向かう最中でも一緒に雑談出来てしまう孫呉の人達と比べると、やっぱり多少なりとも話しづらいものがあるのは仕方ないか……。

そんなことを頭の片隅で考えていると、何時の間にやら玉座の間へと到着していた。ここから先は、味方はおるかサポーターすらいな完全アウエーの空間。気を引き締めて、話し合いに臨むとしよう……。

中に入ると、曹操をはじめ、連合軍で何度か見かけた夏侯惇や夏侯淵、軍師の荀？などが顔を揃えていた。

「お久しぶりです。最後にお会いしたのは連合の時ですから、大体一ヶ月と少しぶりになりますね」

「ええ。それにしても、洛陽から軍を撤退させた時の手際の良さ、なかなか見事だったわ」

「……あの時は、袁家の者達の醜態を晒してしまい、申し訳ありませんでした。現在、二度とあのようなことがないように、袁紹さん共々教育中ですので」

「あら、最近の報告だと、麗羽達は劉備と御遣いの下に身を寄せているとあったのだけれど……。それがいつの間に、麗羽達の身柄が袁術の下へと移ったのか、その経緯を簡単にで構わないから聞かせて貰えるかしら？」

「分かりました」

多分聞かれるだろうとは思っていたし、下？でも一度話しているから、そんなに苦勞することもなく、どういう経緯で何が起こったのかを簡潔に説明していく。ただ、説明だけで納得してくれるかは別の話だ。

「……とりあえず今聞いた話だけど、何か証拠となるような物はあるのかしら？」

「残念ながら、証拠になり得そうな物は所持していませんので、今お話した内容を信じて頂く他はありません。それとも、北郷さんや劉備さんの生首を塩漬けにでもして持参した方が良かったですか？」

「………そんな見たくもない物、持つて来られたら迷惑よ。無いのなら仕方ないから、一応今の段階では貴方の話を信じてあげておくことにするわ」

本当に生首の塩漬けなんて悪趣味なものを想像したのか、曹操だけでなく他の将や軍師達も、こぞって顔色が悪くなっている。……実際にそんな物を持つて来ようものなら、嫌がらせ以外の何物でもないだろう。それに何より、そんなことに塩を使うなんて勿体無いにも程がある。

「……ところで紀霊、まさかそんな話をするために、わざわざ私の下を訪れたわけではないのでしょうか？ 早く本題に入りなさい」

「……我が軍は、徐州の下？から益州の方へと本拠地を移そうと思っ
ています。そして、あの地に向かうためには、曹操さんか孫策さんの領地のどちらかを必ず通らなければなりません。ですが寿春を失った際、我が主である袁術様と張勳の二人が、孫策さんから領地への立ち入り禁止を言い渡されていまして、孫呉の領地を通ること

が出来ないんです。なので、曹操さんの領地を通らせて頂くしか、益州へ行く方法がありません。……無理を承知でお願いしているのは理解していますし、無茶や無謀と思われるでも仕方のないことだとも承知しています。それでも、曹操さん達さえ宜しければ、領内の通行許可を頂けないでしょうか？」

「一つ良いかしら？」

「何でしょうか？」

「それは本音？ それとも建前？ 言っておくけど、もしも今のが本音だったとしたら、私の領地を通すことは出来ないわね」

一筋縄で行く筈も無く、あっさりと今の言葉が表向きのことしか語っていないことを見抜かれる。昨日の一件の借りを返すためなら仕方ないくらいの感じで快諾してくれば、こっちもいろいろと助かったんだけど、やはりそうもいかないか……。

「……率直に聞きますが、今の袁術軍に徐州を統治することは可能だと思われませんか？」

「どういう意味だ？」

質問の意図を理解し切れていないらしい夏侯惇が、迷うことなく俺へと疑問をぶつけて来る。

「……今の我が軍は、劉備さんの軍から出奔してきた将や兵、それに軍師達などを迎え入れたことで、その力を徐々に増しつつあります。ですがそれは、将の質という点からのみ見た結果論に過ぎません。いくら将や軍師が充実しようとも、その将達が指揮をする兵隊

達……協力してくれる兵士達がいてくれなければ、領地を拡大するどころか、外敵から民草や領地を防衛することすらも叶わない。それが、うちの現状なのです」

「……つまり今のままでは、大勢力の敵を前にすれば一溜まりも無く潰されてしまう。だからと言って潰されないように対策を練るうにも、徐州では思っているほどの対策が完全には出来ない。それならば、潰される前に先手を打って逃げ、徐州は他の誰かに任せろ。そして自分達は、安全な場所へと一時避難して力を蓄える。そういうことか？」

弓使いだからかどうかは知らないが、察しの良い夏侯淵の的を射た発言によって、大半の将達はうちの現状を理解出来ているようだ。大半ということは、ほんの数人は理解出来ないということだけど、大した問題じゃないし放っておくでしょう。

「……徐州は、人口が多く交通の便に優れ、それでいて力を蓄えるのに適した豊かな土地。そのような土地を欲しがらない諸侯など普通はいないでしょうし、そんな誰もが欲しがる領地を今の脆弱な我が軍が治めるのは、結構荷が重いのですよ。それならば他の方に統治してもらう方が、民の安全は保障出来ることでしょう。……ましてやそれが、今大陸で一番の勢力を誇る軍であるならば尚更のことです」

「それは暗に、私の領地を通る通行料として、こちらに徐州を明け渡すと言いたいよね？ 私達は戦うことなく新たに徐州を得られるけど、貴方達には何一つとして利も得もない。それだというのは貴方は、袁術軍はこの話を持ち掛けたと言うの？」

「利も得もないだなんて、とんでもありません。徐州が戦場になら

ずに済み、民草にいらぬ不安を与えずに済む。曹操さんの軍と戦わずに済み、我が軍は無傷で益州へと向かうことも出来る。それと私的な理由ですが、大切な人達を失わずに済む。理由なんて、これだけあれば十分です。それに、ただ明け渡すだけという訳じゃありませんし……」

「何か仕込みでもあるというの？」

「ええ、まあ。ですがこれは、実際に統治した時までの秘密ということ……」

御遣い達が荒らしに荒らした徐州に暮らす民の暮らしを、袁術軍が可能な限り立て直す。そして、立て直した徐州とそこに暮らす民達を、無責任と思わせないように上手く他の諸侯に引き継がせる。利益とか手柄とかその他諸々、全部くれてやる事にはなるけど、あまり良くなかった美羽様の名声と印象を上げる事くらいは出来る。これの有無が、益州に行く際に大事ななんだと、うちの軍師達は^{こそ}挙って口にしていた。

「そういうわけですので、こちらの申し出を聞き入れては貰えませんか？」

「そうね……。一つだけ、こちらからも通行料を指定させてくれるのであれば、貴方の申し出を聞き入れてあげても良いわ」

「して、曹操さんの求める通行料とは？」

「紀霊……私のものになりなさい」

「……………はい？」

今、何て言った？ 俺の耳がおかしくなければ、曹操は俺を通行料として指名したと思うんだけど……。曹操に仕える将達も、何が起ったのか分からないとでも言いたげな顔をしている。

「あの、曹操さん、今何と？」

「あら、聞き取れなかったのかしら？ 仕方ないから、もう一度だけ言ってあげる。紀霊、袁術なんか仕えるのは止めて、これから私に仕えなさいと言ったのよ。そうすれば袁術達に、領内の通行許可を出してあげるわ」

その場に居た全員の視線が、一斉に俺へと釘付けになる。……特に、夏侯惇と荀？から突き刺さる視線はあまりにも鋭く、首筋に鋭利な刃物でも突き付けられているような錯覚に陥ってしまう。

曹操は大陸きつてのレズ、またの名を美少女好きだと聞いたことがあるし、臣下の中にもそっちの気がある人だっているはずだ。きつと、あの二人はそうなのだろう。そこに俺の様な男が入り込んで来たとあっては、確実に良い気はしないはずだ。それに大前提として、美羽様以外を主と仰ぐつもりもなければ、七乃以外のものになるつもりもない。

「……申し訳ありませんが、曹操さんに仕えることは出来ません。ですので、通行料は別のものをお願いします」

「あらそう、それは残念——」

——曹操に断わりを入れた、その時だった。

「貴様あ！ 華琳様のお誘いを断るとは何事だ！ そこに直れ、成敗してくれる！」

「華琳様！ わざわざこんな奴を、我が軍にお誘いする必要などありません！ どうせこの男も、そこらへんにいる男共と一緒に、大して使えない男に決まっています！」

「落ち着け、姉者！ 風、流琉、姉者を止めるのを手伝ってくれ！」

「はい！」

「放せ、はなせ！ 私は、あいつを成敗せねばなんのだ！」

夏侯惇は殺意に満ちた表情で手に持っていた大剣を頭上に振り翳して、俺へと斬り掛かるうとし、それを妹である夏侯淵が羽交い絞めにして抑え込む。楽進は夏侯惇の肩を掴んで、前に進めないように正面から抑え付ける。もう一人、朱里や雛里と大して背丈の変わらない少女は、夏侯惇の足にしがみ付き、これまた進ませないように奮闘している。しかし、夏侯惇の執念はすさまじく、三人がかりで抑えているのに、じりじりとこちらに近付いて来る。

「止めなさい、春蘭！」

「っ！？ ……はい」

曹操の鶴の一声によって、ようやく猪武将の暴走が収まり、猪の拘束をしていた臣下達も、その手を放して解放する。そんな鶴の一声を発した本人は、顔を俯かせ、どんな表情をしているのが全く読み取れない。でも、もし俺が夏侯惇だとしたら、絶対に悪い予感しかしないと自信を持って断言出来る。

「……春蘭、貴女、自分が何をしたのか分かっているのかしら？」

「あ、あの、華琳様？ …… いったい、どうしたのですか？」

肩を震わせながら、夏侯惇へと問いかける。その様子に何かを感じ取った夏侯惇は、普段の強気な姿勢は鳴りを潜め、小動物のように怯えている。

「……春蘭、何故紀霊に斬り掛かろうとしたのかしら？」

「それは、その、華琳様のお誘いを、この男が断ったので……」

「……私に対する忠誠の高さは認めてあげる。ただどね、今の彼は私の客人なの。言っている意味が分かるかしら？ 貴女が良かれと思っただけは、私の顔に泥を塗ったに過ぎないの。部下が客人に斬り掛かるなんて、私にとっては恥でしかないわ。貴女に分かるかしら？ 客人の前で恥をかかされた、この私の気持ち……」

「そ、そんな……！？ 私は、華琳様のためを思っ——」

「黙りなさい！ 夏侯惇、お前には罰を与える。罰は追って伝えるから、今すぐ部屋で謹慎している！ …… 秋蘭、頼むわね？」

「…… 御意。ほら姉者、早く行くぞ？ それと紀霊、うちの愚姉が大変失礼なことをして、申し訳無かった」

「…… あ、いえ、お気になさらず」

かなり落ち込んだ様子で玉座の間から立ち去っていく夏侯惇と、付

き添いで一緒に玉座の間を後にする夏侯淵。でも俺は落ち込んでいる夏侯惇に、一つだけどうしても質問をしたくて仕方が無かった。

「あの、夏侯惇さん」

「……何だ？」

「もし俺が、あそこで曹操さんの誘いに対して首を縦に振っていたら、貴女はどうしましたか？」

「……そんなもの、決まっている。今と変わらず、お前に斬り掛かっただろう……」

力なく答えると、夏侯淵に連れられて玉座の間から出て行った。彼女にとって俺の返答など、首を刎ねて殺すか、心臓を突き刺して殺すかくらいの違いしかないらしい。……理不尽にも程がある。

「さてと……桂花」

「はい、何でしょうか、華琳様？」

そんな夏侯惇とは対照的に、一際明るい表情を浮かべて、曹操へと返事をする荀？。しかしその表情も、直ぐ様曇ることとなる。

「貴女、紀霊のことを大して使えない男、確かにそう言ったわよね？」

「はい！ どうせこの男も、そこらへんにいる凡庸な連中と同じに決まっています。武に関しては春蘭ほど優れているなんてことは有り得ないでしょうし、知に関しても私達軍師の足元にも及ばないこ

とでしょう。そんな男など、我が軍に引き抜く価値もありません！」

「おや、これはまた手厳しいご意見なことで。宜しければ、その理由をお教え頂けませんかね？」

「ふん、あんたはどう見ても凡人、理由なんてこれだけで十分だわ！ あんたみたいな何の取り得も無さ気で無能そうな奴はね、華琳様に仕えちゃいけないの！ 分かったかしら？」

俺の方を向きながら、貶すように、そして勝ち誇るかのように、苟？ ははつきりと言いつ切る。残念だけど、その程度の挑発でわざわざ怒るほど俺は子供じゃないし、言つてたことも事実ではあるから、別にどうとも思わない。ただ、忘れちゃいけない。俺をスカウトしようとしたのは、他の誰でもない曹操だと言つて……。何やら面白いことになりそうな気がした俺は、あえて沈黙を貫くことにした。

「……桂花、貴女の考えはよく分かったわ。つまり紀霊は凡人で、そんな凡人を引き抜き対象として選んだ私の目も節穴。つまり私には人を見る目なんか無いと、貴女はそう言いたいよね？」

「な！？ ち、違います華琳様！ 私は、私は決して、そのようなことを思つてなどおりません！」

「あら、ならばどう違ふのか、こんな私にも分かるように説明して貰えるかしら？ 私が貴女達を部下として招き入れたのは、人を見る目にはそれなりに自信があつたからなのだけど、貴女がそれを否定するということは、それなりに理由があつてのことなのでしょう？ それとも何？ 我が軍の軍師ともあろう人間が、理由や根拠も無くただ他人を貶していたとも言つつもりなのかしら？ ……答

えなさい、荀?！」

「え、あ、その、うう……」

策士策に溺れる……ってわけじゃないだろうけど、曹操に傾倒し過ぎ、さらには自信過剰が過ぎる性格が仇となり、こういう結果を招いてしまった。他人を貶し、その結果が自爆だなんて、軍師としてはお粗末すぎる。こういう奴は私怨で策を講じたりしそつだから、あまり好きになれそうにない。

「……貴女は春蘭以上ね。客人の前で、私の顔に泥を塗り、私の誇りも汚した。貴女も部屋で謹慎していなさい! 罰は、春蘭と同様に追って伝達する。だから、早く玉座から出て行きなさい。話し合いが進められないわ」

「……………」

かなり落ち込んだ様子で、曹操へと背を向ける。そして、俺のことを呪い殺さんとするような、強い恨みの籠った眼差しで睨みつける。別にどうでも良いけど、軍師が責任転嫁とか恥ずかしいとか思わないのだろうか。

「……覚えてなさい紀霊。この屈辱、いつか必ずあんに数倍返ししてやるから」

すぐ横を通り過ぎる際、俺にしか聞こえないくらいの大きさで、恨み言をぶつけて来る。

「……………荀?さん」

「……何よ？ 話し掛けなくてくれる？ あんたの声を聞いているだけで孕みそうだわ」

「声を聞くだけで孕むと言うのが冗談であるなら良いのですが、もしそれを本気で言っているなら、座学を一からやり直した方が良いでしょう？ それと、屈辱がどうか言っていました。仮にも軍師ならば相手の人となりぐらい、この短い時間で少しは見抜いたらどうなんですか？ それすらも出来ずにただ相手を貶すだけ貶して、その因果が巡り巡って自身に返って来るとか、曹操さんには悪いですけど、軍師として致命的欠陥としか言い表せません。……それと今後は、もう少しその自信過剰が過ぎる性格をどうにかするべきですね。直さない限り、いつかまた凡人相手に、良いように足元を掬われてしまいますから」

「くっ！ あんたみたいない——」「凡人に言われたくない、ですか？ そんな凡人に言い負かされているのは、どこの天才でしょうね？」 きいー！ 覚えてなさい！」

「はい。貴女のお遊びに付き合っているほど暇ではありませんので、謹んでお忘れさせて頂きます」

「……絶対、言い負かしてやる！」

荀？は悔しそうにずかずかとした歩調で玉座の間から出て行き、曹操以外の将達は、荀？が言い負かされている現場を目にし、呆気に取られていた……。

荀？が居なくなっただけ、玉座の間が何だか重苦しいようなそうでも

ないような、何とも言えない空気に支配される。そんな中、口を開いたのは曹操だった。

「……済まなかったわね、紀霊。部下に代わって、非礼を詫びさせてもらうわ」

「あの程度、死んだ御遣い達の戯言に比べれば大したことはありません。それにしても、部下に愛されているんですね。方法こそ拙いものでしたけど、さっきの一幕でそれがひしひしと伝わりましたよ」

「普段は良い子達なのだけれどね。……話が十分逸れたようだし、一旦戻しましょうか」

その一言で、この場の空気が再び話し合いのそれへと変わる。

「……とりあえずこちらとしましては、俺を含めた人材の引き抜きだけは勘弁して頂きたいです。それ以外でなら、出来得る限りの範囲でお応えしようとは思いますが……」

「なら、今日この場で起きたことについて、他言無用ってことで手を打って貰えるかしら？ それさえ呑んで貰えるのなら、こちらの要求はそれ以上無いわ。でも、街道の指定とかはさせて貰うわよ？」

「曹操さんがそれだけで良いと仰るのでしたら、こちらとしてはそれ以上いうことはありません。街道の指定に関しては、最初から想定内ですので大丈夫です。本当に、それだけで良いんですね？」

「部下二人分の非礼に昨日の一件、貴方には迷惑をかけっ放しだったもの。借りを返す意味も込めて、そちらから出された申し出については、今言った条件で吞ませてもらうわ」

……ふう、何とか交渉成立ってところか。正直なところ、夏侯惇と荀？の一件がなければ、ここまですんなりと交渉成立とは行かなかった。あの二人の暴走に、心の中で感謝しておこう。

「稟、袁術軍を通らせる街道の選定をして。なるべく、安全な道を選ぶように。風は、稟を手伝ってあげて」

「御意（なのです）」

「紀霊、貴方達はあとどれくらいで徐州を発つ予定なのかしら？」

「そうですね……。一月以内には、益州へと出発しようと思います。出発する数日前には、使者を送ってお知らせするようになりますので……」

「分かったわ。稟、風、さっそく作業に取り掛かってちょうだい」

眼鏡を掛けた凜々しい印象の女性と、頭の上に人形のような物体を乗せた少女が、二人揃って玉座を後にする。

それからすぐ、俺も下？へと帰る旨を曹操に伝え、城を後にする。街の外へと続く大通りを歩いている際、交渉が無事に終わった安心感からか、皆にお土産を買うのをすっかり忘れていたことを思い出し、大急ぎでお茶を飲む時に女子受けの良さそうなお菓子等を買ってから、陳留を後にした…。

覇王との交渉（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

袁家勢揃いの平凡な日常（前書き）

今回はサブタイ通り、八雲を含む袁家メンバーしか出て来ません。
ご了承ください。

あと、客将時代の八雲の日常も垣間見れます。

それでは、本編の方をどうぞ！

袁家勢揃いの平凡な日常

Side：八雲

陳留から出発してから数日後の早朝、ようやく下？へと帰還することが出来た。この時間なら七乃は起きているだろうけど、美羽様はまだ眠っているに違いない。帰って来たことを報告するのは、お土産などの荷物を置いてからでも遅くはない。そう判断した俺は、二人の部屋へと行く前に、一度私室へと戻る。

荷物を置き終わり、二人の私室へと足を運ぶ。私室の前へと到着し、扉の前に立って一呼吸おいてから、控えめにノックする。

「……ふあゝ、はい」

まだ寝起きなのか、若干寝ぼけ気味の七乃の声がする。予想通り、七乃は起きていたみたいだけど、美羽様の声がしないということは、まだ寝ているのだろう。

「あふ、どなたですかあ？」

中にいる彼女の手で、部屋の扉が開かれる。一週間近くぶりに見た七乃は――

「……え？」

何故か、俺のシャツを着ていた。しかも、俺と七乃とでは体格差があるから結構ぶかぶかで、ボタンも上半分は開けてあるせいか、肩は肌蹴ているし胸元も露出されている。でも、上はまだシャツを着

ているから良い。問題は下だ。下は剥き出し、つまり下着以外は何も身に着けておらず、七乃の生足が全開ということだ。上下の境目となる裾は、これまた際どくも良い塩梅でチラリズムを成立させているし、若干俯きながら眠たそうに瞼を擦る仕草。……何これ？
こんな朝早くから、俺に七乃で萌え死ねとでも？

「あの、ええと、ただいま戻りました……」

頬を指で搔き、七乃から視線を逸らす。

「八雲さんじゃないですかあ！ お帰りなさい……って、あれ？
八雲さん、どうして私から目を逸らすんですか？ あ、もしかして何か疾しいことでもあるんですね？ 隠しても駄目ですよぉ？」

じりじりと詰め寄り、密着して来る。視線を下ろした時に七乃と目が合うが、その流れで胸元も見えてしまい、これは不味いと再び目を背ける。

「あ、また目を逸らしましたねえ？ さあ、正直に白状して下さい！
今なら怒ったりしませんから」

「……いや、その、七乃の格好がとても扇情的なもので、少々目のやり場に……」

「へ？ ……ひゃあっ！」

両腕を交差させて胸元を隠しつつ、七乃はその場にしゃがみ込む。
やばい、可愛い。こういう時は、何と言えば良かったんだっけ？
……あ、思い出した！ かあいよいよ、お持ち帰……ゲフンゲフン。

暴走気味から正気に戻った俺は、すぐに着物を脱ぎ、七乃の肩へと掛ける。これで、少しはマシになるだろう。七乃も俺の意図を理解したらしく、立ち上がって掛けてあげた着物に袖を通し、露出していた肌は膝上から下を除いて全て隠れる。

しかし、これが予想外の行動を生む。

「……すう」

「あの、七乃さん、何をしていらっしゃるんですか？」

「……何って、見ての通り、この着物の匂いを嗅いでるだけですよ
お？ はあ……」

その言葉が表す通り、七乃は着物の匂いを嗅いでいた。その表情がうつとりしているのを見る限り、もしかしくなくても七乃は匂いフエチらしい。けっこう長い付き合いだったけど、これは初めて知った。そんな彼女の姿を見て、自然と鼓動が速くなる。

「どうしてそんなことを？」

「特に意味はないんですけど、何だか淒く落ち着くんですよ。それにこういう風に羽織ってるだけで、何だか八雲さん本人に包まれているような気分になるんですよえ……」

頬を紅潮させながら、答える七乃。そんなことを言われて、我慢出来る人などいないはずだ。少なくとも、俺は我慢出来そうもない。ああ、本能に従うのは構わんが——別に、七乃^{あれ}を抱きしめてしまっても構わんのだろう？

「七乃！」

「何です……きゃっ!？」

少し強引ではあるけれど、七乃の腕を引っ張り、そのまま抱き寄せる。子供っぽいと思われるかもしれないけど、俺の匂いの付いた服なんかで満足されたくないし、して欲しくない。俺が居ない場合は仕方ないかもしれないけど、少なくとも今は違うのだから……。

お互いに自然と目が合い、それを合図にと七乃はゆっくり目を閉じ、背伸びをする。俺もそれに応える様に、彼女の唇へと自分のそれを重ね合わせる。この前はすぐに離れたけど、今回はそこから一歩か二歩ほど進んで、舌を絡ませていく。

「ん、んん、はあ、んあ、あ、んう……」

最初こそ驚いて抵抗したものの、その抵抗も次第に薄れ、途中からは七乃の方からも絡ませて来る。そしてお互いの充足感を満たすかのように、深く、長く、口づけをし続ける。

「……ぷはっ、はあはあ、ふふ……」

唇を離せば、お互いの顔が間近にあるために自然と見つめ合う形となる。その時七乃が浮かべた表情は、少し目を細めた艶めかしい微笑み。普段ならまずお目にかかれない表情に、俺が惹かれないはずもなく、さらに惚れたのは言うまでも無い。

……願わくば、もう少しこの時間を享受したいところだったけど、ここ最近の疲れがどっと押し寄せて来たため、別れ際に軽く触れるだけの口づけをしてから、部屋に戻った。

私室に着くなり、寝巻に着替えることなく寝台へと倒れ込み、そのまま意識を手放した…。

目が覚めると、窓の外は夕焼け色に染まっていた。何だかんだで、半日近く眠ってしまったらしい。こんな時間じゃ兵士達の訓練も終わっているだろうし、政務も今日くらいは回って来ないだろう。でも、そうなるややる事が無い。この状況、まさしく暇だ。

……そう言えば、美羽様に仕えてからの数年間、暇だなんて思えるようなことがあっただろうか？ 少なくとも、寿春で過ごしていた頃の俺に、暇と呼べるような時間は無かったと記憶している。毎日山積みで届けられる書簡や木簡の処理や整理、兵士達の訓練、警邏、それらに加えて時間を見つけては自己の鍛錬。プライベートタイムなんて呼べる時間は、正直寝る時だけだった。まあ七乃は七乃で、彼女にしか出来ない役割があったし、美羽様も今みたいに進んで何かを学ぼうとはしなかったから、仕方がないとも言えてしまう。

そんなことを考えていると、今までに客将として仕官して来た中で最も記憶に新しい、麗羽の下に仕官していた時と、劉璋に仕官していた時のことを思い出す。

美羽様に仕官する一年と少し前に、まずは麗羽の下に四ヶ月弱した。最初は客将というより、当時不足気味になっていた文官の手伝いとして働いていた。だが、暇な時間を見つけて行っていた自己鍛錬を麗羽に見られていたらしく、突然猪々子と模擬戦をすることになり、それで圧勝したもんだから、それからは武官としても働くように命じられた。

政務に関しては、文官が多かったこともあり、さほど苦勞することもなくこなせた。ただ、麗羽が政務を斗詩に任せっきりになることが多かったせいか、斗詩自身の仕事が滞っていたことも少なくなく、よく手伝ってあげていたのを覚えている。

軍務もとい兵の訓練は、兵士の数が今までの仕官先よりも圧倒的に多かったため、意外と苦勞した。その苦勞が美羽様に仕官してから生かされたのは、言うまでも無いことだ。

斗詩や猪々子との手合わせでは、たまに危ない場面もありはしたものの、これと言って負けたことは無かった。最後の方なんか、負けず嫌いの猪々子が斗詩を巻き込んで二対一で戦っていたけど、それでも負けることはなかった。だって、あの二人の動き、単純なんだからもん。

次の仕官先である劉璋の下には、客将として半年間だけ仕官した。まあ実際に働いた場所は、劉璋のいる成都じゃなく仕事のありそうな巴郡、桔梗さんと焰耶の下だったけど……。

あの頃は、ある意味楽しくて、ある意味辛かった。仕事と言えば、兵の訓練と警邏くらいしかなかったし、それさえ終えてしまえば、後はほとんど自由。暇さえあれば焰耶と模擬戦をし、時々桔梗さんとも模擬戦をした。それが終わると、後は酒を酌み交わしてばかりいた。二日酔いで仕事するなんて、三日に一回は必ずあった。そういえば、焰耶と桔梗さんが勝手に俺のツケにした酒代、まだ返して貰ってない。結構な金額、具体的に言っと、麗羽のところで貰った給金丸三ヶ月分だったし、利子付けて返してもらわないと……。

たまに、紫苑さんが璃々ちゃんを連れて巴郡へと遊びに来た時は、

璃々ちゃんの遊び相手を務めたり、紫苑さんに弓を習ったりもしていた。そしてやっぱり、酒を酌み交わしていた。今思うと、よくあの酒豪二人に付き合っ一緒に飲んでいたなと思う。その影響もあってか、最後の方は普通に飲み比べとかしていたし……。あれが俗に言う、若さ故の過ちというのだろうか？ そんなこともあって、あの半年間は結構あつという間だった。

元々の雇い主である劉璋については、桔梗さんと紫苑さんから話を聞き、自分でも調べていた。だからわざわざ傍にいらなくても、どんな感じの人となりなのか、政治的手腕はどの程度なのか、軍事的手腕はどの程度なのかは分かった。……一言で言うなら、上に立つべき者じゃない。政治的手腕と軍事的手腕、どちらも優れておらず、臣下の諫言も大して聞かない。それでも上手くやって来れていたのは、部下の頑張り、劉姓のおかげだろう。俺が唯一、劉璋を評価出来る点と言えば、権力に物を言わせて手当たり次第に女性を侍らせなかったことだけだ。この点だけでも、自称天の御遣いよりはマシだと思える。

桔梗さんはよく、劉璋のクソ坊主が、と愚痴を零していたし、愚痴こそ零さないものの、紫苑さんも劉璋には大した期待を寄せてはいなかった。

……そんなことをしみじみと思い返していると、いつの間にやら窓の向こうは闇に包まれていた。結構こういう風になっていたと思うと、改めて暇だったんだなと実感する。

「……そういや、今日はまだ何も口にしてないな。食堂に行けば、何かしらあるか？」

いざ食堂へと足を運んでみると、斗詩と七乃が二人並んで厨房に立

ち、残りの三人は椅子に座って料理が運ばれて来るのを今か今かと待っていた。その様子を微笑ましく思いながら眺めていると、猪々子が俺に気付いた。

「あれ、アニキ！ 帰って来てたのか！？」

「ええ、今朝方こっちへ帰って来て、ついさっきまで部屋で休んでいたもので。……報告が遅れてしまい、申し訳ありませんでした」

「七乃から聞いておったから、別に良いのじゃ。それで、曹操との話し合いは上手くいったのかや？」

「はい、曹操さんとは無事に話をつけることが出来ました。遅くても、一月もすれば徐州を発つことになります」

「うむ。八雲よ、ご苦労だったのじゃ。さあ七乃、早く料理を運んでたも！ 妾はもう、お腹がぺこぺこなのじゃ」

いつまでも立っている必要は無いので、俺も適当に空いている席へと腰掛ける。美羽様は、両手を腹に当てながら足をばたつかせ、お腹が空いてるのじゃ、とアピールし、猪々子も猪々子で、早く早く、と机を叩いて料理の催促をする。

「美羽様、もう少しなんですから、大人しく待っていきましょうね？」

「そうですね、美羽さん。それから猪々子、貴女も袁家の一員なのですから、そういうはしたない行動は慎みなさいな！」

「「うう……」」

まさか、麗羽が注意するとは思わなかった。まあ、名門と名乗っていた以上、礼儀作法にうるさいのは当然だし、私塾にも通っていたから人並み以上の教養だってきちんと兼ね備えてる。ただ基本的に、世間一般の常識というものをどこかに置き忘れているだけなのだ。だから、その常識を置き忘れてさえないければ、実は意外としっかりしてたりする。派手な外見とは裏腹に、意外と面倒見も良かったりもするし……。

それから料理が出来るまでの間、美羽様と猪々子は俺と麗羽の注意通り、行儀良く料理が完成するのを待ち続けた。

「お待たせしましたー」

七乃と斗詩が次々と料理や全員分のお茶を運び、机には彩り豊かな料理が何品も並べられる。二人も席に座り、六人全員が揃った。

「全員が揃いましたから、せっかくの料理が冷めないうちに頂くとしましょうか」

「そうですね。それじゃ八雲さん、お願いしますわ」

「はい。それじゃ、姿勢を正して……いただきます」

「……いただきます」

それぞれ箸を取り、食べたいおかずへと箸を伸ばす。……何、袁家はこんなことするはずないって？ それはあれだ、どうしてこうするべきなのかを延々と説き伏せ、自然と出来るようになるまで躡け……教え込んだからだよ。

料理の腕はどちらも衰えていないらしく、斗詩と七乃の作った料理はどれも美味しい。朝から何も口にしていなかったから、さらに美味く感じる。空腹は最高のスパイスというのは、あながち間違いないと思う。

その後も談笑しながら、袁家勢揃いで取る夕食は続いて行く。

「ん〜！ やっぱ斗詩の作った料理は、どれも美味しい！ 斗詩い、いつでもあたいの嫁に来てくれて良いからな？」

「七乃ちゃんが作ったのも有るんだけどね……。それと、文ちゃんのお嫁さんになるのは、ちょっと大変そうだから止しておくよ」

「何だよー、斗詩とあたいの仲だろ？ ……別に、恥ずかしがらなくても良いのに」

「あ、あはははは……」

いい加減、猪々子達のこのやりとりも見慣れたな。でも、見慣れたということは良いことだと俺は思う。ずっと戦に身を置いていては人を殺すだけの人形になってしまふ。こういう平穏な時を過ごせなきゃ、何のために戦うのか、誰のため戦うのか、その目的さえはつきりしない。人を殺すことで生を実感することは出来ても、その行為自体に生き甲斐や喜びを覚えてはいけない。目の前の光景を見て、改めてそう思う。

「ほら美羽さん、口元が汚れていましてよ？」

「ん？ どこじゃ？」

「もう、仕方ありませんわね。私が、取って差し上げますわ」

「んー。……んむ、ありがとうなのじゃ、麗羽姉さま」

……何か、いつの間にか美羽様と麗羽の仲が良くなってる。まるで、年の離れた姉妹みたいだ。何かあったのかと七乃に訊ねると、俺が居ない間に過去のいざこざやらを清算したらしい。たしかに美羽様の比較対象は、いつも麗羽が基準だった。でも、これからは一緒に行動するわけだし、二人の仲が改善したことに関しては、諸手を上げて賛成しよう。

夕食も終わり、お茶を飲みながらゆったりとした時間を過ごす。

「なあ斗詩ー、何か茶菓子とかないー？ 出来れば、甘いやつで」

「文ちゃん、ついさっきご飯食べたでしょ。まだ食べるの？」

「甘いもんは、別腹なんだよ。そういう斗詩だって、本当は何か食べたいんだろ？」

「う……」

「ほらな、凶星だ」

でも今食べると体重が、と言いたげな顔で、斗詩は自身の横腹を摘まむ。ちよつど良いから、部屋にあるお土産を持って来るか。

「猪々子、お土産に買って来た茶菓子が部屋にあるんですけど、それを食べますか？」

「おお、食べる食べる！」

「分かりました。じゃあ、今取って来ますね」

一度部屋へと戻り、お土産として買って来た茶菓子を持って行く。

……実を言うと、星達が何時戻って来るか分からなかったから、初めから六人分しか買っていない。その代わりと言っては何だけど、各地に散って仕事をしている皆には、個々にお土産を買ってある。

「はい、これが陳留で買ったお土産です。在り来たりですけど、饅頭を買って来ました。人数分ありますから、どうぞ召し上がって下さい」

「やったー！ あたい、この一番大きいの貰いつ！」

「ああつ！ 文ちゃんずるーい！」

「へへーん、早い者勝ちだもんねー」

自慢気な顔で言い放つと、饅頭を一口で口の中へと放り込む。その様子を、斗詩は敗者のような表情で見つめている。というか斗詩、結局はお前も食べたかったんじゃないか。しかも、一番大きいのを……。

一番大きい饅頭が食べられなかった斗詩は、仕方なさそうに二番目に大きい饅頭を手に取り、それを口にする。さすがに猪々子みたく一気食いなんてことはしなかったけど、一口食べたらあっさり機嫌を直した。

残りの皆も、それぞれ饅頭を手に取り頬張る。

「美羽様、味の方はどうですか？」

「あむ……うん、美味しいのじゃ！」

「七乃はどうですか？」

「はい、美味しいです。……あれ、八雲さんは食べないんですか？」

「いや、人数分買って来ておいてあれなんですけど、実は餡子が苦手なんですよ。そうだと猪々子、よかったら俺の分も食べますか？」

最後に一つだけ残った饅頭を手に取り、猪々子に差し出す。

「アニキがくれるってんなら、遠慮無く貰おうかな。……斗詩、ほいよ」

最後の一個を半分に千切り、その片割れを差し出す。

「……良いの、文ちゃん？ あ、でも、あまり食べ過ぎちゃうと……」

「ちょっとくらい体重増えたって、そんな変わりやしないって！
それでも斗詩が痩せたっていうなら、あたかも協力するからさ？」

……主に寝台の上でだけど」

「……何か聞き捨てならない言葉があったような気もするけど、文ちゃんがそう言ってくれるなら、半分貰うね」

猪々子が千切った饅頭を、二人仲良く頬張る。出会った当初から、

この二人の仲は変わらない。無二の親友というか、一方的な片想い
というか……。

そんなこんなで夜も更けて行き、それぞれが自分に宛がわれた部屋
へと帰っていく。

一眠りして夜が明ければ、またいつもの忙しい日々が戻って来る。
今日の様な一日中ずっと暇な日が次に訪れるのは、いったい数カ月
後……いや、もしかしたら一年後かもしれないし、数年後かもしれ
ない。下手したら、十年後とかだつて有り得そうな気がして来る。
まあ、七乃と美羽様が居るなら、そんな日が訪れるのが何時かなん
て些細なことか……。

星達全員が帰って来たのは、俺が戻って来て二週間ほど過ぎてから。
曹操と約束した期限である一月まで、あと一週間というところだっ
た…。

袁家勢揃いの平凡な日常（後書き）

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

陳留でのお土産（前書き）

今回、この時代には無い物だろうとか、手に入れた場所が違っだろうとかなど、少々原作と違うものがありますが、恋姫故に仕方なしとご了承ください。

では、本編の方をどうぞ！

陳留でのお土産

S i d e : 朱里

ふう、ようやく下？に帰って来れました。彭城に暮らす民達への措置に、私達が益州へ行く際に有利になるであろう仕込み。この二つをなるべく短い期間で、尚且つ同時進行で進めて行くのは、すごく大変でした。でもそこは、軍師の腕の見せ所。近い将来、美羽ちゃんを王にするための布石と思えば、これといって苦にはなりませんでした。

そして今は、お互いの報告を済ませるために軍議の間に集まっています。私達軍師は、書簡で連絡を取り合ってたから、お互いの成果がどれくらいかは熟知してますが、八雲さんの方は、曹操さんとの話し合いを無事に終えられたんでしょうか？ その如何で、今後の展開が大きく変わって来てしまいますし……。

「これで全員集まったようじゃな。……皆、ご苦労だったのじゃ。八雲よ、まずはお主から報告をせい」

「はい。……曹操さんとの交渉の方ですが、まあいろいろあったものの、無事に終わることが出来ました。特にこれと言った通行料も払わずに、我が軍は曹操さんの領地を通って益州へと行けます。ただ、曹操さんと約束した徐州を明け渡す期限まで、あとちょうど一週間なので、そろそろ陳留に使いを送ったり、兵士達の武器や兵糧などの荷物を纏める準備等に取り掛からなくてはなりません……」

はわわ！？ 曹操さん相手に、通行料無しで済ませるなんて驚きです！ 何かしら、対価を要求されると思っていたのに。どうやって

対価無しで交渉を済ませたのか、とっても気になります。何かコツがあるのかな？ それとも、八雲さんの人柄そのものがコツなんでしょうか？ うーん、気になります……。

「次は朱里、其方の報告を頼むのじゃ」

「は、はい！ 私と星さんが担当した彭城は、劉備さんが徐州の州牧に赴任した直後と同等とまでは行きませんでした。民の不安も大分取り除くことが出来ました。曹操さんには、いつでも明け渡せる状態です。彭城以外の各地も同様に、いつ明け渡すことになって大丈夫な状態となっておりますから、あとは八雲さんの報告にもあった通り、自分達の身の回りのことだけで済みますね」

これで、お互いに報告することは終わりました。これからは厳しい戦が予想されるでしょうから、私達もさらに気を引き締めないと……。

「じゃあこれで軍議は終わり……と言いたいんですが、朱里達に渡す物があるので、少し待っていてもらえませんか？」

「何ですか、その渡したい物って？」

「それは、持って来てからの秘密です」

ちよつと待ってて下さい、と言うと、八雲さんは軍議の間から退室して行きました…。

S i d e : 八雲

部屋へと駆け戻り、全員分のお土産の入った大きな袋を手にして軍議の間へと戻る。

「お待たせしました。陳留へと行った際、普段の頑張りに対するお礼と今回の件のことで結構無理をさせてしまったことに対するお詫びを兼ねて、皆にお土産を買って来たんです。それじゃ最初は……月と詠、こちらに来て貰えますか？」

二人を呼んで近くに来てもらい、袋の中から小さな瓶を取り出して手渡す。

「気に入って貰えると良いんですが……」

「……これは？」

「色気がなくて申し訳ないんですが、手に塗る軟膏です。侍女の仕事をこなす以上、水仕事は避けがたいでしょうから、手が荒れたりすることもあると思います。この軟膏は、そうならないように手荒れを防止しつつ、手の保湿をするためのものです」

「ありがとうございます。良かったね、詠ちゃん。最近、手荒れで悩んでたもんね？」

流石に、それは知らなかった。ここ数週間会ってなかったのだから、知らなくても当然と言えば当然なのだろうけど……。

「う、うん。……あ、ありがたく貰っておくわ」

「たまたまとはいえ、喜んでもらえて良かったです」

出だしは好調のようだ。しかし、何で陳留にハンドクリームが有ったんだろうか？ 少なくとも、この時代にはまだハンドクリームなんて無かったと思うんだけど……。でもまあ、とりあえず月と詠には気に入って貰えたようだから良いか。次は、ある意味難関かもしれない白蓮と星に渡すでしょう。

「次は、白蓮と星ですね。こちらへ来て貰えますか？」

「さて、いったい何を頂けるのやら。楽しみですな、白蓮殿」

「たしかに楽しみだけど、それは八雲の見立て次第だろ」

「えっと、まず白蓮のはこれですね。それで、こっちが星のです」

「どれどれ……………おい、八雲、これは私のか？ 本当に私のか？ もう一度聞けど、これは本っ当に私のか？」

白蓮に渡したのは、どっかの舞踏会で貴族が付けていそうな金縁の白い仮面と、金の刺繍が施された純白のマント。まるで、何かの变身セットだ。

「ええ、そうですよ。何となくですけど、いつかこれが白蓮の役に立つような気がしたんです。……それが何時かは、俺にも分かりませんけどね」

「……………そ、そうか。とりあえず、貰っておくとするよ」

白蓮は、何とも言えないような表情をしていた。こればかりは俺のセンスの問題だから、好き嫌いが出て来るのは仕方ない。白蓮には、何か別の機会で穴埋めをすることも考えとかないといけないか

な……。

「……………」

ところで、さつきから星が一言も発してないけど、もしかして白蓮以上に気に入らなかったのだろうか？

「……八雲殿、本当にこのようなものを私にくれると申すのか？」

「え、ええ。星は珍しそうな物が好きかなと思ひまして……。もしかして、気に入りませんでしたか？」

その珍しそうな物の正体は、パピヨンマスクだ。しかも、星の着物にあしらわれている蝶の羽の柄と奇しくもほぼ同じ柄。これを珍しそうと言わず、何を珍しそうと言えば良いのやら……。

「やはり……やはり私の判断は、主を貴殿に変えたのは間違いではなかった。八雲殿、感謝いたしますぞ！……これで勝つる。ふふふ、部屋に戻ったら早速試着せねば……」

「……何に勝てるのかはよく分かりませんが、星が喜んでくれたのなら何よりです」

まさかあの仮面一つで、主がどうのこうのまで話が發展するとは思わなんだ。それほどまでに星がああ仮面を気に入ってくれたのなら、こっちとしても選んだ甲斐がある。……星に渡した仮面が、後に苦勞の種の一つになるとも知らずに……。

「次は、董のですね。……サイズが合えば良いんだけど」

「さえず、とは何だ？」

「え、あ、いえ、こつちの話です。はい、どうぞ」

手渡したのは、スリットが深く入っていて、胸元も空いている薄い紫色のチャイナドレス。選んだ理由は、何となく似合いそうだったからというのは、言っちゃいけない気がするから言うのは止めておこう。もし口を滑らせてもしたら、七乃に後ろから包丁でめった刺しにされそう。それか、馬乗りでめった刺し。

「服、か。だが、どうして服なのだ？」

「何となくだったんですけど、強いて挙げるなら……」

「挙げるなら？」

「真名を得たことですし、この際気分一新して服も変えてみたらどうかなと……。まあ、着るか着ないかは董にお任せします。一応、動きやすいものを選んではいますから」

「……そうだな。せっかくの機会だから、そうさせてもらおうと思う。礼を言っておくぞ」

「いえいえ、と軽く董に返事を返したが、内心では何とか乗り切れたという思いで一杯だった。これで後は、恋とねね、朱里と雛里の分だけか。」

「次は、恋とねねですね。どうぞ、こちらへ」

「おお！ 何が出るのか楽しみですな、恋殿！」

「……………」

恋は返事こそしないものの、こくん、と一度頷き、その瞳には好奇心が満ち溢れている。

「恋への、というより二人へのお土産になるんですかね。はい、どうぞ」

「……この珍妙で薄っぺらくて丸い板は、いったい何なのですか？ それとこの球も、何だか柔らかいですし……」

「その薄っぺらくて丸い板……円盤と言っんですが、それは投げて遊ぶものです。また、球の方も円盤と同様に投げて遊ぶためのものです。ああ、誤解しないで下さいね？ あくまでもこれは、セキトや張々と遊んであげる時に使うものですから」

「な、何と！ これが遊び道具なのですか！？」

分からないのも無理はない。本来この時代に、フライングディスクだのゴムボールだのある筈がないんだから。でも、実際にこうして存在している。まあ、細かいことは別に良いか。ようは、二人に喜んで貰えるかどうかなのだから。

「ええ、そうですよ。何なら、後で実際にこれを使って遊ばせてみますか？」

「はいなのです！ 恋殿、最近ハセキト達の相手をあまりしてやれなかったから、今から楽しみですな？」

「……楽しみ。早く、試してみたい」

見慣れないものをどう使って遊ぶのかを早く知りたいのか、恋もねねもうずうずしている。二人の期待を裏切るのも悪いし、軍議が終わり次第、中庭にでも連れて行くでしょう。

「それじゃ、最後は朱里と雛里ですね。こちらへ来てくれますか？」

「「ひゃい！」」

朱里と雛里は二人揃って緊張しているのか、どこか動きがぎこちない。こういうところが、おこちゃま軍師たる所以なんだろうか？ そんなことを考えながらも、目の前に立った二人に、そこそこの大ききがある木製の箱を手渡す。

「どうぞ、開けて中を確認してみてください」

「……わあ！」

「これ、本当に頂いても良いんですか！？」

箱の中に入っていたのは、色違いの羽扇。どちらも白を基調としてはいるが、朱里の羽扇は柄の部分が薄い緑色、雛里の方は柄の部分が薄い紫色になっている。二人は羽扇を手にとると、軽く振ってみたり、お互いに羽扇を構えた姿を見せ合っている。これで少しはお子様に見られることも少なくなるだろうし、軍師特有の威厳を持たせることが出来るだろう。

「勿論です、そのために買って来たんですから。気に入って頂けましたか？」

「……あ、はい！」

「なら、良かったです。……似合っていますよ、策士孔明殿。もちろん、策士土元殿もよくお似合いです」

「策士、策士……ほうあー」

よく分からないが、はわわとあわわが二人揃って恍惚の表情でトリップし始めている。原因を調べたいんだけど、二人とも嬉しそうだし、今は放っておくとしよう。……とりあえずこれで、全員分のお土産を配り終えることが出来た。

「美羽様、全員分配り終えましたから、軍議の解散を……」

「うむ。それじゃ皆、これで軍議は終わりなのじゃ」

軍議も終わったことだし、中庭に恋達を連れて行くか。

「恋、ねね、セキト達を連れて中庭に来て下さい」

「了解なのです！ 恋殿、急いで中庭に行きますぞ」

ねねは恋の腕を引っ張り、勢い良く飛び出して行った。さて、俺はちょっと準備をしてから、中庭へ行くとしよう…。

中庭に足を運ぶと、セキトと張々を連れた恋達が既に待っていた。

「お、やっと来ましたな！ さあ八雲殿、早速これらを使った遊び方を、ねね達に教えて欲しいのです」

「分かっていますよ。まずはこっちの球からにしましょうか。こっちは単純に投げれば良いだけですから、すぐにセキト達を遊ばせることが出来ますし……」

セキトに近付き、目の前にボールをちらつかせることで、ボールに興味を持たせる。興味を持ち始めたところで、ボールを軽く放り投げる。すると――

「わんっ！」

どんな犬でも動くものを追いかける習性があるため、セキトは転がっていくボールを追いかけて、追いついた所でボールを咥えた。

「セキト、戻っておいで」

最初の一声でこそ戻っては来なかったけど、何度か呼び掛けたら戻って来てくれた。

「よしよし。偉いですよ、セキト」

きちんと戻って来たセキトを思いつ切り褒めてやり、咥えたボールを離させてから、ご褒美としておやつを手の平の上に乘せてセキトの前に差し出す。セキトも差し出されたご褒美に反応し、それを勢い良く食べ始める。

「今見て貰った通りにやれば、遊ばせることは出来るはずですよ。それじゃ……ねね、張々でやってみましようか？」

「上手くいくか分からないから、緊張するのです……」

そつ本音を零しながらも、ねねはさつき見せたのと同じ方法を張々に試してみる。すると、張々もセキトと同様に放り投げられて転がっていくボールを追いかけて、ねねの下へと戻って来た。

「おおー、張ター！ 偉いのですぞー！」

張々を撫でまわしながら、全力で褒めちぎる。

「……八雲、恋も、やりたい」

「分かってますよ。じゃあ恋は、こっちの円盤を試してみましようか」

ディスクを手に、恋に訊ねてみると、もの凄い勢いで首を縦に振る。……あんなに激しく振って、首が取れてしまったりはしないんだろうか？

「これは、投げ方にコツがいりますから、まずは少し練習しましょうか？」

「……投げ方見せてくれれば、大丈夫」

「……じゃあ、今度は張々でやってみましょう。ほら、張々」

ボールと同様に目の前にちらつかせて興味を惹かせ、ディスクに回転をかけて放り投げる。放たれたそれには揚力が生じ、地面と平行のままでゆらゆらと飛んで行く。そんな飛び方をする道具を見たこ

とが無い二人は驚いていたが、張々には遊び道具の一つでしかない。しばらく追い掛けた後、ディスクに飛び付いて上手く口でキャッチした。

さっきのセキトの件で、俺が呼んでもすぐには戻って来ないことを学んでいるため、ねねにお願いして張々を呼んでもらう。さすが相手と言うべきなのか、張々はねねの下へと一目散に駆け寄り、ねねは先程のように相方を褒めちぎる。

「はい、次は恋の番ですよ。セキトは張々よりも小さいですから、少し低めに投げてあげて下さいね。……本当に、投げ方を教えなくても良いんですか？」

「……大丈夫。さっきの八雲ので、理解出来た」

最早、何も言うまい。駄目だったなら、教えてあげれば済むことだ。ディスクを手渡し、様子を見守ることを選択する。

「……セキト、取っておいで」

「わんっ！」

恋がディスクを放り投げる。いくら恋でも、教わりもせずに最初からそんな綺麗に飛ぶわけが――

「……あるのかよ」

しかも、俺が投げた時より綺麗に飛んでいる。さすがにこれは、自信を無くさざるを得ない。あれ、おかしいな？ 何だか目から汗が……。そんな風に感傷に打ちひしがれていると――

「八雲殿、どうしたのですか！？ 傷は深いのです！ がっかりするのですぞー!?」

「……くつ、流石は恋専属の軍師。恋が付けた傷口に、躊躇なく塩をこれでもかと塗りたくって来ますね。何と抜け目のない……」

「いやー、それほどもあるのです!」

えへへへ、と照れくさそうに頬を赤らめている。……いや、褒めてねえよ？ 決して、褒めてないからな。そこ、勘違いされちゃ困るから。

「……すいません。ちょっと急用を思い出したので、部屋に戻りますね」

「分かったのです。ほら張々、取って来るのですぞー!」

愛犬達と楽しんでいる恋達と別れた後、部屋に戻り、曹操へ宛てるための手紙を認める。それを書き終えた後、適当に暇そうにしている文官に書簡を持たせて使者として送り出し、再び部屋へと戻る。そして、さっき恋達に言った通り、不貞寝という名の急用を済ませることにした…。

陳留でのお土産（後書き）

華雄の姐さんに渡したチャイナドレスは、バイオ4のエイダのものをイメージしております。

……それと次話に係る質問なんですが、月達存在を霞に教えたら、華琳の下から引き抜きが出来ると思いますか？ 意見を聞かせて頂けると嬉しいです。

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

益州へ（前書き）

前話で行ったアンケートの結果、張遼（霞）を引き抜くのは止めにしました。ついでに、今作では仲間にしません。期待していた方、申し訳ありません。

では、本編の方をどうぞ！

益州へ

各地に散っていた仲間達が集合した翌日からの数日間、袁術軍の将達はまさに猫だけじゃなく犬の手も借りたと言いたくなるほどの忙しさで、徐州を発つ準備を進めていた。それは、兵士達の武器や鎧、軍全員を賄える分の兵糧といった行軍には必要不可欠となる物資全般の準備に始まり、様々な理由でここに居残ることを選んだ者達への仕事の引き継ぎと言った、いわゆる事務処理における後始末などと言ったものにまで及ぶ……。

そして約束の期限があと二日にまで迫ったところで、曹操の下へと送った使者が戻って来た。ここでやるべきことにもちょうど一区切りが付き、何時ここを出立しても問題は無い。これらを踏まえて軍議で話し合いをした結果、立つ鳥跡を濁さずではないが、何時までもここに居残っている意味は無いと判断し、袁術軍は下？を発ったのだ……。

Side：八雲

下？を発ってから二日、今日が曹操との約束の日だ。使者として送った文官が持ち帰って来た書簡には、沛国にある城に一度寄るようと書かれていたため、まずは指示通りに沛国の城へと軍を進め、もう直ぐで到着という場所にまで来ていた。……我が軍がきちんと約束を履行するのか、曹操達自身の目で確かめるためだろう。何より沛国は、徐州の彭城と下？の両方と隣り合わせの場所にある。こちらが約束を反故にして徐州に留まっていたら、曹操達は^{かさ}大義を翳して攻め込めば良いし、こちらがきちんと約束を守れば、そのまま

徐州入りすることが出来る。どちらにしても、向こうに不利益なことは何もない。

「七乃お、あとどれくらいで着くのじゃ？」

「もう直ぐ着きますよ。……あ、ほら！ 見えて来ましたよ、お嬢様」

七乃の言う通り、前方には城が立っているのが見え、その前には風に靡かれている曹操軍の将達の牙門旗……。その光景を見ているだけで、何故かもの凄い迫力を感じる。

曹操軍の前にまで軍を進めると、曹操と軍師の荀？、曹操の護衛役であると思われる夏侯惇がこちらに近付いて来るため、美羽様と七乃を連れてこちらからも歩み寄る。……その間、荀？と夏侯惇がずっと俺のことを睨んでいた。もちろん、曹操が二人の視線を察知していたのは、言うまでも無い。

「桂花、春蘭、恥ずかしいから止めてちょうだい。……一ヶ月ぶりね、紀霊。約束の期限の方、ちゃんと守ってくれて助かるわ」

「こちらからお話を振った以上、約束を守るのは当然のことでしょう？ それに、主の顔に泥を塗るわけにはいきませんので……」

「……そういえば、袁術と張勳に会つのは連合以来になるのかしら？」

「そうなりますかね。……さあ美羽様、こういつ時こそご自身の言葉で伝えないといけませんよ？」

「う、うむ。……曹操、此度は妾達の無茶とも思える願いを聞き届けてくれたこと、感謝するのじゃ」

美羽様は両の手を重ね合わせ、曹操に対して深めのお辞儀をする。この光景に、曹操達は表情にこそ出さないものの、どうにも驚きを隠しきれないでいる。それも、当然と言えば当然なのかもしれない。曹操達が最後に美羽様を見たのは、洛陽の前で麗羽と馬鹿やつてる時の姿なのだから。あの時の美羽様と今の美羽様を比べたら……天と地までとは言わないが、小学生と高校生ほどの違いがある。

「……………別に、貴女達のために申し出を聞き入れたわけではないわ。あくまで、こちらに利があつたからよ。そこを勘違いしないようにしてちょうだい。紀霊、前に言つてある通り、街道の指定はこちらでさせて貰つたわ。それと、街道の先導役と貴方達の見張りを兼ねて、こちらから一人将を付けさせて貰うけど、別に構わないわよね？」

「はい、異論はありません。……ところで、その先導を務めて下さる方とは？」

「早めに紹介しておいた方が良くかもしれないわね。張遼！」

曹操に呼ばれて出て来たのは、元董卓軍の将にして、月の配下だった張遼だった……。

「名前くらいは知つてると思うけど、先導と見張り役にはこの張遼を付けさせてもらうわ」

「たった今紹介されたばかりやけど、うちの名は張遼や。よろしゅうな、紀いちゃん」

「え？ ……あ、ええ。こちらこそっ！？」

張遼は気さくな性格の人らしく、勝手にあだ名をつけられはしたものの、お互いに気軽な感じの挨拶で済んだ。本当、いきなり斬りかかって来るような人じゃなくて良かったよ。……だから、俺を睨まないでくれよ、猪に自信過剰。

それと七乃さん、黒い笑みを浮かべながら、曹操達に見えないように俺の背中をこっさり且つ本気で抓るのは、地味に痛いんで止めて頂けませんか？ 俺の記憶違いでなければ、七乃を不機嫌にさせるようなことは何もしてませんよね？ え、張遼が勝手にあだ名を付けた？ それはどう考えても、俺のせいじゃないでしょ！

「……紀霊、それから袁術。先に言っておくけど、私の領内で何か悪事を働こうものなら、どうなるかは分かっているわね？ もしも、そういう事実が私の耳に入ったら、私の領地から生きては出られないと思いなさい。分かっているわね？」

「……承知しています。悪事を働いた者が出た場合は、いかなる処分であっても甘んじて受けさせて頂きます。……それじゃ曹操さん、我々はそろそろ益州に向けて出発しようと思います。時間は、無限じゃありませんから」

「それもそうね。じゃあ霞、後は頼んだわよ？」

「おう、任しとき！」

「それじゃ曹操さん、失礼します」

張遼が率いる部隊の後に続き、袁術軍は沛国を後にした…。

曹操と別れて益州へと行軍を開始してから数刻、未だに月達を張遼と会わせるべきかどうか悩んでいた。お互いの無事を知らせる意味でも会わせてあげたいと思うけど、もしものことを考えると簡単には決められない。会わせるべきか、それとも会わせないべきか。その二択で思考が堂々巡りし、どうするべきかの決定がなかなか先に進まない。

「んー、どうしようか？」

「……あ、あの、八雲さん、ちょっと良いですか？」

さっきまで後方に居た月が、馬に乗って先頭の方に居る俺達の所にまで来ていた。補足説明をすると、現在、先導役を務める張遼とその部隊を先頭に、俺と七乃と美羽様に古参の兵士達、麗羽達三人を乗せた馬車、朱里達元劉備軍と白蓮に付いて来た兵士達、月達董卓軍に恋とねねが率いていた兵士達の順で、隊列を組んでいる。理由は、いくら比較的安全な街道とは言っても、賊徒が出ないとは限らない以上、対処しやすいような配置にしておいた方が良いという軍師達の進言があったからだ。

「……え？ ああ、月、どうかしましたか？」

「その、霞さん、張遼さんに会わせて欲しいんです。あの戦い以降、私達は離れ離れになってしまっていましたから、お互いに無事を確かめ合いたいんです。もちろん、私一人で会いに行くわけじゃありません。詠ちゃんや恋さん達も一緒です。でも、私達が揃っていきな

り押し掛けるのは迷惑になっちゃうと思ったので、その……」

「そのための機会を設けて欲しい、ということですか？」

はい、と月は短く返事をし、不安げにこちらを見上げて来る。……月達と張遼との再会を望むのであれば、俺がどうこう言いつもりはない。出来ることと言えば、月達に協力してあげることくらいだ。

「分かりました。じゃあ数日中、早くて今日中に顔合わせの機会を設けるとしましょう。張遼さんには、俺の方から伝えておきます。その代わりと言ってはあれですが、俺も立ち合わせて貰います。それでも良いですか？」

「……どうして八雲さんが？」

「月と詠がなぜ侍女のような服装をしているのか、いったいそれは誰が指示して着させたものなのか、それを張遼さんに説明しないといけません。俺の趣味だと勝手に勘違いされるのは、さすがに癪ですので……」

「たく、あの種馬。子種だけじゃなく、メイド服なんて間接的な面倒事の種まで残して逝きやがって。あ、でも、あいつの子孫が残された方が面倒か。男の子が生まれようが、女の子が生まれようが、どっちにしろ人泣かせな人間に育ちそうな気がするし。」

「それと、女性の会話を盗み聞きするような趣味も持ち合わせてはいませんので、説明が済み次第、俺はその場を立ち去ります。なので、話を聞かれるかもなんて心配はする必要ありませんよ？ もし信じられないというのなら、付き添いとして七乃にも来て貰いますけど……？」

「心配いりませんよ、月ちゃん。（私の）八雲さんが、あんな変態豚野郎が本当にやっていそうな変態行為、するはずないじゃないですかあ？」

「な、七乃さん、それはちょっと言い過ぎ……………じゃないですね」

「とりあえず、張遼さんには俺の方から話しておきますから」

「あ、はい、お願いします。じゃあ、私は詠ちゃん達の所に戻りますね」

俺達に軽く会釈をすると、手綱を器用に操作して馬を反転させ、元いた場所へと再び馬を走らせる。…………月って、馬の扱い上手かったんだな。まあ、ご両親が西涼にいるんだから、上手くても不思議じゃないか。

月が去つてすぐ、俺も先頭に居る張遼の下へと馬を走らせ、張遼のすぐ横に並ぶ。

「ん？ 何や、紀いちゃんやないか。どないしたん？ あ、もしかして、うちのことを口説きにでも来たんか？ 言つとくけど、うちはその様な軽い女ちゃうで？」

「残念、違いますよ。…………董卓と賈馱の二人に、会えるならば会いたいとは思いませんか？」

「…………何を言うかと思えば。大陸中に噂が流れつつたやろ？ 董卓と賈馱は死んだって。だから、あの二人に会えるなんてことはあらへん」

「その噂自体、劉備達が流した嘘だったとしたら？ 月と詠が、今は袁術軍で保護されているとしたら？」

「っ！？ …… ほんまに、ほんまに二人とも生きとるんか？ 月達に会えるんか？」

疑いの目を向けられるのは、至極当然のことだと思う。連合が解散した辺りから、董卓と賈馱は討たれたという噂が流れていたし、誰もがその噂を信じて疑わなかった。

肝心の二人の所在に関しては、劉備達が所在を隠していたから他の諸侯達に分かるはずもなかったし、袁術軍に二人の所在が移った後も劉備軍と同様に隠し続けていたのだから、他の諸侯達が『本物』の董卓と賈馱の生死について、知るはずもない……。

「二人だけじゃありません。恋とねねが居るのは知っていると思いますが、董……華雄さんも今は袁術軍にいます。ちなみに、華雄さんの真名は月が名付けたものです。……もし、俺の言葉を信じて下さるのであれば、ここ数日中に月達との顔合わせの機会を設けようと思っんですが……？」

「……なあ、今日じゃあかんの？ 会えるんなら、一日でも早い方がええんやけど……」

「別に構いませんよ。月達だって、少しでも早い方が嬉しいでしょうから。……それじゃあ、今日の行軍を終えて野営の準備も整ったら、俺がお迎えにあがりますので、そちらの兵士達には適当に話を通しておいて下さいね？」

「分かった、ちゃんと話しくわ！」

「お願いします。それじゃ、俺はこれで」

短めに挨拶を済ませ、行軍の邪魔にならないように一度列から外れてから、手綱を操り馬を反転させる。長蛇の列を一気に逆走して、今度は月達の下へと急ぐ。きっと、喜んでくれることだろう。

事情を知らない麗羽達や朱里たちなんかはすれ違う際に、一人列を逆走する俺を見て不思議そうな顔をしていたが、特に気に掛けることなく駆け抜けて行き、月達のいる場所まで到着した。

「月！」

「あ、八雲さん。どうしたんですか？」

「今、張遼さんに会って来ましたよ。それで確認したところ、出来ることなら今日会いたいと言っていましたよ」

「本当ですか!？」

「ええ。なので、今日の行軍を終えて野営の準備が整い次第、俺が張遼さんを迎えに行きます。皆が待機できるような天幕も、野営の準備の時にこっちで用意しておきます」

月達を天幕へ案内するのは、七乃に頼めばやってくれるはずだと思う。天幕の組み立ての方は……うちの隊の兵士達に協力してもらおう。

「……何か、いろいろやって貰って悪いわね」

「気にしなくて良いですよ、善意でやっているだけですから」

詠が張遼を説得して、うちの軍に引き込んでくれたら良いなっていう期待が無いと言えば嘘になる。でも、張遼の今の主が曹操である以上、詠達が頑張つて説得したところで、仲間になつてくれる可能性は限りなく低いだろう。下手したら、関係を拗らせることにもなりかねない。

「そうだ詠、先に言っておきますけど、張遼さんを仲間になるように説得しなくて良いですからね？」

「……鼻肩目で見ても、霞はけっこうな戦力になるわよ？ それを、みすみす手放す気なの！？」

「今の主が曹操さんであることを考えると、引き抜いた時の報復や対価の要求が怖いですからね。それに何だか、話し合いだけで納得してくれなさそうな気がするんですよ。一言で表すと……好戦的って言っんですかね？」

そういえば、孫策はかなり好戦的だったな。このところ会っちゃいないけど、周瑜に苦勞を掛けていそうな気がするな。それが原因で、何かしらの病に罹つてなきや良いんだけど……。

「たしかに、霞殿はけっこう好戦的ですからな。戦場での一騎討ちか、それぞれの部隊を率いての勝負で勝ちでもしない限り、仲間になつてはくれなさそうなんです。ですが、そう都合良く戦場で出会うことは無いでしょうな」

「それは言えてるわね。それにまだここは曹操の領内だし、事を荒

立てて曹操との関係を悪くするのは、今のうちの状況からして得策じゃない、か……」

「はい。だから今日は難しいことは考えず、単純に張遼さんとの再会を楽しんで下さい」

「……分かった。じゃあ、そうさせてもらっわね」

溜め息を一つ吐いた後の詠の顔は、何やら緊張から解放されたような穏やかさが感じられ、とても良い顔をしているように見えた。

「それじゃ、俺は美羽様達の下へと戻りますね」

再度手綱を操り、七乃達がいる列の前方へと馬を走らせる。七乃と美羽様を乗せた馬に追い付いてから、さらに数刻ほど行軍をしたところで今日の行軍は終了した…。

辺りはすっかり暗くなり、所々に篝火の火が灯っているのが分かる。月達に待機してもらった幕も立てたし、月達の案内役も、行軍中に七乃へ頼んであるから大丈夫。あとは、俺が張遼を迎えに行けば良いだけだ。

張遼の陣地へと足を運ぶと、当然の如く兵士に呼び止められたが、名前を名乗るとすぐに理解し、張遼のいる天幕まで案内してくれた。

「張遼さん、お迎えにあがりました」

「おう！ ほな、行こか」

拙いながらも、張遼を月達の待つ天幕までエスコートする。その間、お互いに無言でいた……というより、何か話し掛けるような雰囲気じゃなかった。

天幕に到着し、中に入ると、既に中にいた月達と七乃の目が入口にいる張遼へと集中する。

「霞さん！」

「……………月！ 詠！ 恋にねね、それに華雄も！ ……皆、無事やったんやな」

目尻に涙を浮かべながら、皆で抱き締め合うようにお互いの無事を確かめ合う。すると、張遼の視線がふと月と詠の服装へと向けられる。

「それにしても、何で月と詠はそんな格好しとるん？ これじゃまるで、侍女みたいやんか？ ……もしかして、この服は紀いちゃんの趣味なんか？」

それはあかんよ、と張遼が目で訴えて来る。

「はあ、そう言われると思ってましたよ。ですが、それは大きな誤解です。これは別に、俺の趣味じゃありません。この服を着せたのは、今は亡き自称天の御遣いですよ。そこは、勘違いしないで下さいね」

「……………それ、ほんまなん？」

「本当よ……。そのことに關しては、お互いに積もる話もあるだろうから、その時に話すわ。まずは、お互いにどういう経緯があったのかを話さない？　じゃあまずは、董からね」

「分かった。……私は――」

月達は、俺と七乃がまだ天幕の中にいるのも忘れ、話に没頭し始める。

……さて、いつまでもここに居るのは無粋だ。俺達は邪魔だろうから、七乃に目で合図を送って静かに天幕を後にし、他愛無いことを話しながら美羽様が一人で待っている天幕へと向かう。

天幕の中に入ると、寝台に腰掛け足をぶらぶらと遊ばせながら、ちびちびと蜂蜜水を堪能する美羽様の姿があった。その姿があまりにも微笑ましいものだったからか、俺と七乃は思わず顔を見合わせ、ついつい笑みが零れてしまう。俺と七乃が笑っているのに気付いたのか、美羽様はジトつとした目でこちらを見て来る。

「……お主ら、今妾のことを笑ったであろう？」

「ち、違いますよお。お嬢様の仕草が可愛かったから、つい微笑んじゃっただけなんです。ですよ、八雲さん？」

「ええ。なかなか可愛らしかったですよ、美羽様」

「むう……」

笑ったことに対して拗ねる美羽様を、さりげなく挟むようにして寝台へと腰を下ろすと、美羽様は蜂蜜水を飲みほしたのか、手にして

いたマグカップのような容器を近くにあった台の上に置く。七乃はそれを確認すると、美羽様を優しく抱き寄せ、俺はその頭を撫でたり髪を指で梳いたりする。……どうやら満更でもないらしく、さっきまで拗ねていた美羽様の顔が、少しずついつも通りの表情へと戻っていく。

「お嬢様、少しは機嫌を直して頂けましたかあ？」

「まだじゃ。……だから、もうちょっとだけこのままでおらぬと、妾の腹の虫は治まらぬ」

まだ若干拗ねたような感じで言いながら、その小さな手で両隣にいる俺達の服をぎゅっと掴む。……主と言っても、本来ならばまだまだ甘えたい盛りの年頃の少女。この時だけは主と家臣の関係ではなく、我が儘な妹と妹を可愛がる一人の兄と姉として過ごした。

少しして眠くなったのか、美羽様は目を擦り始めた。

「眠そうですね。お嬢様、明日も早いでしょうから、今日はもうお休みにられますか？」

「うみゅ……」

「じゃあ七乃、美羽様のこと、お願いしますね？」

「はい、任せて下さい」

「それじゃ二人とも、お休みなさい」

天幕から出た俺は、その足で夜警を行っている兵士達の下へと向か

う。無論、夜間に警備を行う兵士達の指揮を執ったり、自身でも陣内の見回りを行つたためだ。休み？　んなもん、無いに決まってるだろ…。

益州へ（後書き）

あと一話か二話（たぶん一話）は、行軍中の話になると思います。

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

教訓、軍師の言うことは聞いとくもんや……（前書き）

関西弁、難しいです。いや、もしかしたら関西弁にすらなっていないかもしれません。……というわけで、今回は霞視点のお話となります。

では、本編の方をどうぞ！

教訓、軍師の言うことは聞いとくもんや……

時間はほんの少し遡り、紀霊と張勳が去った天幕の中…。

S i d e : 霞

「——とまあ、こういった経緯で今に至るというわけなのです」

董は、紀いちゃんとの再戦の約束を果たすために戦場を離脱した後、付いて来た兵士達を養うために賊の残党狩りやお偉いさんの用心棒をやって路銀稼ぎをして、下？で月達や紀いちゃんと再会。そこで月に真名を名付けて貰った。ちなみに、その話を聞いた時にうちも真名を交換しといた。

恋とねねは、兵糧が尽きかけとる所に袁術軍から紀いちゃんが来て、兵糧を分けて貰うかわりに同盟を組み、当時本拠地にしまった寿春へと向かう際に起きた劉備軍とのいざこざで、攻撃して来た相手をとおりあえず返り討ち。

月と詠は最初、恋達と戦って返り討ちにおうた劉備軍に保護されつつたけど、上に立つもんがあまりにも愚図やと詠が判断したから、紀いちゃんに頼んで保護してもらった陣営を袁術軍に変更した、と。……皆、それなりに苦労しとったみたいやなあ。うちは春蘭との一騎討ちに敗れて、隊の奴らと一緒に投降しただけやったから、そこまで苦労せえへんかったけど……。

「じゃあ、最後は霞ね」

「多分、うちのが一番短いと思うで？ ……うちは虎牢関で春蘭、

夏侯惇に一騎討ちで敗れて、うちの隊の兵士達に手出ししないって条件で曹操軍に投降したんや。その後はずっと、曹操の部下の一人として騎馬隊を率いとる」

「……それだけか？」

「それだけや」

「本当に短かったですな……」

まあ、ええやん、と軽めの返事を返しておく。……そういえば、さつきから紀いちゃんと張勳の姿が見当たらへんな。もしかしたら、二人ともうちに気を利かして出て行ってくれたのかな？……まあ、ちようどええ。月達の話には紀いちゃんの名前が良く出とったし、この際どう思っとんのか、聞いてみるとしよか。

「なあ、ちよつと聞いてもええか？」

「何ですか、霞さん？」

「月達は紀いちゃん……紀霊のこと、どう思っとるん？」

「八雲さんのことですか？ うーん……」

月が首を横に傾げながら考え始め、詠達も顎に手を当てたりしながら、それぞれ考え始める。少し経って、それぞれ答えが浮かんただのか、全員揃って小さく頷いた。

「優しくて良い人だと思います。いろんな人のことを見ているし、誰にでも丁寧だから」

「切れ者なんだかそうじゃないんだか、よく分からない奴ね。あとはやっぱり、何だかんだでボク達全員の恩人ってところじゃないかしら」

「好敵手であり、模擬戦で一番勝ちたい相手というところだろうな」

「……セキト達の面倒も見てくれるから、面倒見が良い人」

「一家に一台ド。。もんと言いたくなるくらい、軍に一人いるだけで色々と助かるような人なのです」

……ねねの例え方がよく分からんけど、とりあえず便利な奴って考えとけばええんやろか？ それにしても、月達の恩人か。それを知っとつたら、お礼の一つくらい言っとつたのに……。

「でも……今思うと、もし八雲さんが美羽ちゃんに仕えてなかったら、私達は今頃どうなってたんだろうね？」

「一番可能性が高そうなのだと、董と霞を除いた全員が、揃ってあのチ。コ太守に保護されているというのが妥当なところじゃない？ はあ、自分で言っというてあれだけど、そんな日常想像したくもないわ……」

詠は苦虫を噛み潰したような苦々しい顔をして、月達もどこか苦笑いを浮かべる。……うちは天の御遣いとか言われとる男のことはあまり知らんから分かんけど、そんなに嫌な奴やつたんやろうか？

「なあ詠、天の御遣いってどんな感じの奴やつたん？ 全然知らんから、想像しづらいわ」

「そういえば、私も天の御遣いとかいう男をよく知らんな。ついでだから、私も教えて貰おう」

「じゃあ、今から言うことを想像してみなさい。容姿に関しては、文句の付けようはないわ……」

ふむふむ、顔がええんは良いことやな……。

「だけど、ちよつと目を離すと仕事をほったらかして女の尻を追い掛け始める。たまに仕事したと思ってたら、そんな驚くほど大した量じゃなく、むしろ上に立つ者としては少なすぎるくらい。そうね、量的には月が洛陽でこなしていた政務の半分以下つてところかしら。他には、相手の力量とか二の次で、大分お粗末な采配を振るうわ。あとは、所構わず呼吸をするようにいろんな女を口説くし、手を出すのも早い無節操。酷い時は、他人の女にまで手を出そうとした時もあったわね。ついでに、時々剣の稽古もしてたけど、稽古した翌日はすぐに全身筋肉痛になってたわ。それでも、女は抱くんだけどね……。どう、そんな男に仕えてる生活を想像してみた感想は？」

「……最悪や、聞かん方が良かったわ。そんなんが華琳のところにいたら、一日どころか半日で斬り殺されとるやろうな」

「私もだ……。貧弱な男に仕えるくらいなら、部下を引き連れて傭兵でもやっていた方がはるかにマシだ」

……何か、天幕の中が急に辛気臭い感じになってもうた。こういう時は皆で酒でも飲んで、ぱあーっと嫌なこと忘れるのが一番やな。ここに来る際に、持参しというて正解やったわ。

「な、何か変な空気になってもうたし、うちが持って来た酒でも飲んで、嫌なことは忘れよか？ うん、それがええ！」

「そうだな、そうしよう。いや、そうするべきだ！」

「そ、そうね。二人がそこまで強く言うのも珍しいし、そうしましよるか」

「じゃあ、私が注ぎますね」

月が、全員分の水飲みに酒を注ぎ入れる。全員分の水入れに酒が注ぎ終えた所で、それぞれ水入れを手にし、眼前に掲げる。

「そんじゃ……」

「……」「乾杯！」「……」

乾杯が済むと同時に、うちと董は煽るようにして酒を流し込んで行く。残りの四人はそこまで酒に強くないせいか、うちらのように一気に飲んだりはいしない。

それでも何杯か飲んでいくうちに、誰もがだんだんと陽気な気分になつていった。そんな中、うちは皆にある質問をぶつけてみた。

「なあ、こん中で好きな男とか、好き合ってる男がいるっちゅう人はおらんの？」

「……」「……」「……」

「なんや、浮いた話の一つも無いんかい。……まあ、うちもあらへ

んけど」

少しの間、天幕内に沈黙が流れる。

「……何か、年頃の娘がこんなんで本当に良いんやるか？」

「ボ、ボクには月がいるから、別に構わないわ！」

「いや、それもそれであかんやる」

……そういや、華琳も女好きやったな。当分先の話とはいえ、世継ぎとかはいつたいたいdoesn'tすんのやる？　ぶっちゃけ、あの女好きが男とまぐわうとか想像出来んわ……。

「誰でもええから、良さげな奴とかそっちにはおらへんの？　ほら、紀いちゃんとかおるやんか？」

「……あー、それは無理ね」

「何で？」

「あれは七乃、張勲にご執心だ。他の女には、いつさい目もくれん。たとえ、どれだけ完璧な女が誘惑しに来てもな……」

ほお、それはまた面白そうな話を聞いたわ。

「んな男、いるわけないやろ？　年頃の若い女が近付いて、鼻の下伸ばさん男がいるわけないやん」

「でも、実際に八雲さんはそういう方なんですよ。だから私、あの

二人の關係にちょっと憧れてるんです。何だか、私の両親を見てるみたいで……」

月の言葉に、詠はたしかにと呟きながら一つ頷く。

「そこまで言うんやったら、うちがあいつをたらし込んだろやないか？」

「……止めといた方が良いと思うわ。正直、七乃の実力が未知数だし、怒った時にどれだけ怖いのかも知らない。けど、嫌な予感がするの。だから、止めておきなさい。言つとくけど、冗談とかで言ってるわけじゃないからね？ これは、紛れもなくボクの本心」

詠の言葉には、全員が力強く頷く。

「んな心配せんでも、うちが本気出したら、どんな男もいちころやつて。大丈夫、問題あらへん」

「……一応、ボク達は止めたからね？」

「まったくー。心配性やなあ、詠は……」

酒を飲んだこともあつて、うちの気も大分大きくなつてたし、かなり調子にも乗つてたと思う。だから、詠の心配もちよつとした冗談みたいなもんとか感じとらんかった……。

その後も世間話なんかをしながら酒を飲み続けて、そろそろお開きにせんと明日の行軍に差し支えるということで、今日は解散することにした…。

翌日から、うちは皆に宣言した通り、紀いちゃんを誘惑し始めてみた。行軍の時は特に何もせんかったけど、行軍が終わって野営の準備が出来たら、うちの方から会いに行つて、まずは仲良くなることから始めた。まあ、紀いちゃんの腕にわざと自分の胸を当ててみたりはしたけどな。……唯一不満だったのは、うちがせっかく胸当ててみとんのに、ほとんど動揺しなかったことや。大きさ的にはそこそこ自信あつたんやけど、軽くへこんだわ。

まあ、まだ初日やし、出だしはこんなもんでええやろうと思つて紀いちゃんの日幕を後にすると、少し経つて天幕の方から紀いちゃんの悲鳴が聞こえて来た。……戻ろうか迷ったけど、何や嫌な予感しかせえへんかったから、聞かなかつたことにして自分の陣地に戻ることにした。

その翌日、昨日と同じように紀いちゃんの日幕に出向くと、入口の前に何故か兵士が立つとつた。

「紀いちゃん中におる？」

「申し訳ありません。今日は、誰も入れるなと紀霊將軍から言われておりますので、今日のところはお引き取り下さい」

「体調でも崩したん？」

目の前に居る兵士に聞いてみると、中から何やら声が聞こえて来た。耳を澄まして聞いてみると――

「――なさい、七乃。許して――。……ぶつぶつぶつぶつ」

今にも死にそうな感じの紀いちゃんの声が聞こえて来た。たしかに、こんな状態じゃ誰にも会いたくはないやろうな。……うちやって、あんな状態の人間に好きで会いたいとは思えんわ。

「……あれ、大丈夫なん？ 医者に見せた方がええんやないか？」

「……ええと、多分平気です。ですので、とりあえず今日のところは……」

「まあ、しゃあないわな。じゃあ、うちは帰るとするわ」

今日は諦めることにして、天幕に背を向けて帰ることにした。だから、気付いとらんかった。天幕の陰から、うちのことを睨みつけとる奴がいたことに……。

それから数日間、天幕に出向くのは控え、流石にもう立ち直ったやろうと思つた時に紀いちゃんの天幕へと足を運んだ。

入口のそこには誰も立つとらんみたいやから、もう大丈夫なはず。そう思つて、中に入る。

「紀いちゃん、今……」

目の前の光景に、思わず言葉を失う。

「すう、すう……」

「ふふつ。柔らかあい」

寝台に腰掛けた張勲の腿に、紀いちゃんが頭乗せて寝てた。で、張勲も張勲で、眠つとる紀いちゃんの顔を見下ろすように眺めながら、嬉しそうに微笑みながら頬を指で弄って遊んどった。

何か、うちが居ちゃあかんような空気を感じ取った時、不意に顔を上げた張勲と目が合ってしまった。すると、紀いちゃんを見とった時と同じような笑み……いや、よく見たら目がこれっぽっちも笑ってへん。もの凄い冷やかな感じの笑顔を、こっちに向けて来る。その笑顔に、うちは戦の時とはまた違う恐怖を覚えた。その証拠に、背中には嫌な汗が流れとる。

「……何の用ですか？　せつかく、八雲さんと二人きりで過ごしているのにい」

「あ、いや、すまん。入る天幕間違えたわ」

「そうですかあ。……じゃあ、邪魔なんでとっと出てってくれませんか？」

うちは、逃げる様にして紀いちゃん为天幕を後にした…。

……逃げる様にして紀いちゃん为天幕を出てった日から数日後の朝、うち为天幕から出ると、兵士達がこっちを見ては何やらひそひそ話をしていた。うちがそいつらに目を向けると、何でもないような素振りをして仕事に戻ったり、慌ててどっかに走り去り、またひそひそと話し始めたりする。……何やら、やたらと気味が悪い。

その理由を確かめるべく、うちはひそひそ話をしとる二人の兵士達

に後ろから近付き、逃げられんように腕を首へと回して、尋問を始めた。

「自分ら、さつきからうちの方見て、何をこそこそ話しとるん？」

「……」

「黙ってないで何か言えや！　言わんとしばくぞ？」

「じ、実は、張遼様はとても男癖が悪く、いろんな男を誑かしているという噂を耳にしたもので、我らもそのことについて話し合っておりまして。その……中には、張遼様のことを悪女やら泥棒猫だなどと言ったような噂までありまして……。だから、ここにいる者達は皆、今朝からその話題で持ち切りなのです」

啞然とした。何時の間に、そんな根も葉もない噂が出回ったんねん！？

「その噂が広まってんのは、張遼隊の中だけの話なんか？」

「え、いや、そこまでは我らも……」

「まあええ。とにかく、その噂に関してはまったくの嘘や。他の奴らにも、そう言つとき！」

「は、はあ……」

うちはその後も、噂の出所を突き止めるために自分の隊の兵士達全員に話を聞いて回った。それで分かったことは、その噂を広げたのは、うちのとこの兵士じゃないってことだけ。

これでもう、噂の出所として考えられるんは、袁術軍の方しかない。そう思つて足を運ぶと、袁術軍の兵士達もうちを見ながらひそひそと話をしとつた。中には、同情や憐みを感じさせるような視線まで向ける奴までおつた。

それでも、うちは一人で噂の出所を突き止めようと躍起になつて探し続けた。けど、噂を流した奴は一向に見つからん。……これ以上は、今日の行軍に支障が出る。そう思つて引き返そうとした時、うちの方へ張勳が近付いて来た。

「どうかしたんですかあ？」

「……誰かが根も葉もないつまらん噂を流したせいだな、朝から兵士達にじろじろ見られて気味悪くてしゃあないんや。で、その噂を流した奴を突き止めようとしたとこなんやけど、一向に見つからんくてなあ……」

「それは大変そうですね。隊の方達との信頼に、罅が入らないと良いですけど。……じゃあ、頑張つて下さい。噂を流した犯人、見つかるの良いですね？」

そう言つて、うちの横を通り過ぎて行つた――

「……………この泥棒猫風情が」

「ひっ!？」

ぞくり、と背筋に何かが冷たいもんが走る。張勳が小声で罵るように言い放つた言葉に反応したうちは、咄嗟に振り返り、張勳へと視

線を向ける。相手もそれが分かったのか、立ち止まると、半身のよ
うな形で振り向く。そして、数日前に天幕の中で見せたのなんか比
べ物にならん程の冷めた表情でうちのことを一瞥すると、もう興味
が無くなったと言わんばかりに、何も言わずそのまま立ち去って行
った。

その後ろ姿を見て、うちは確信した。噂の出所は張勳^{あいつ}であることを
そして後悔した。詠の忠告を、ちゃんと聞いておけば良かったと……
……。うちは、軽々と触れちゃあかんものに触れてしまった。張勳が、
実際にどんな方法を使ったのかは知らん。けど、明らかにそのこと
が原因で、この現状を引き起こしとるのは間違いない。

うちは何とも言えん恐怖に駆られ、その場に立ち尽くすしかなかった。

それからというものの、うちは先導役を務め終わるまでの間、紀霊の
天幕だけでなく紀霊本人にも近付くのを必要最低限にまで控え、張
勳との接触は可能な限り避け続けたのだった……。

教訓、軍師の言うことは聞いとくもんや……（後書き）

……何か、七乃に微ヤンデレ成分が混じってしまった。

霞の口調に変な所がありましたら、知らせて頂けると嬉しいです。

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしくお願いします。

軍師達は影で動き、主は歌姫の片鱗を見せつける（前書き）

……すみません、投稿するまでに時間が掛かった割に、何だかごっちゃりした感じになってしまっている気がします。それでも良ければ、どうぞご覧下さい。

では、本編の方をどうぞ！

軍師達は影で動き、主は歌姫の片鱗を見せつける

益州へ向けて行軍を始めてから、一ヶ月半もの月日が過ぎた。その間、特にこれといった問題が起こることもなく、無事に進軍を行っていた。……唯一、あの日の一件以来、張遼が紀霊と張勳の二人に対して急激によそよしくなったりしたもの、あれに関しては自業自得というのが、張遼の部隊の兵士達を含む全員の見解であり暗黙の了解であるため、別に可哀想だとは誰も思っていないかった。

そして現在、袁術軍は司隸州京兆尹郡けいちよういんにて野営を行っていた…。

S i d e : 朱里

ふう……。やっと、今日の行軍が終わりました。私達は馬に乗って移動しているとはいえ、流石に疲れが溜まって来ました。兵士さん達は徒歩での行軍ですから、私達よりもずっと疲れていることでしょう。

そんな中でも、八雲さんは兵士さん達に積極的に声を掛けたり、夜警やその指揮を引き受けてくれます。ねねちゃんと詠さんには、数日前に私と雛里ちゃんの二人でお願いした頼み事をやって貰っていますし、白蓮さんは斗詩さんと共に、麗羽さん達のお守り役を引き受けてくれています。……そろそろ、私と雛里ちゃんも軍師としての仕事をしないといけません。

そんなわけで、私と雛里ちゃんの二人で使っている天幕に詠さん達をお呼びし、さっそく一計を講ずることにしました。……講ずると

言っても、そんな大したものじゃありません。一言で言えば、仕込みの続きみたいなものです。

「とりあえず、二人に頼まれたことは調べておいたわ。で、これがそうよ」

「詠さん、ねねちゃん、お疲れ様です」

「……調べるのに、意外と骨が折れたわ。とりあえず、一応確認して貰える？」

「えーと、どれどれ……」

詠さんがちよつとした愚痴を零しながら机の上に置いたのは、今回の行軍に使われている街道が書かれた地図の束。その束の一番上にある地図を一枚手に取り、雛里ちゃんと一緒に目を通してみると、私達をお願いしておいた通り、益州までの道程とこの街道が益州のどこに続いているのかが、分かりやすく記されていました。……つまり、この地図を手にしていれば、益州の方から私達がいる街道へと入り、こちらと合流することも可能になるというわけです。

「どう？　ボク達の方でも念入りに確認はしておいたから、多分どこにも問題ないと思うんだけど……」

「……はい、どこにも問題はありません」

どうして、こんなことを詠さん達に頼んだのか。その理由は、私達がまだ徐州にいた頃にまで遡ります。私達は徐州の各地で様々な措置を施している傍らで、現在の益州内部の情報を得るため、益州の主要な都市とその周辺へ間者を放っていました。物事を円滑に進め

て行くためには、相手の弱点を知り、そこを上手く攻めることが大事ですから。

あとは人心を煽るための流言を流させる工作員を、既に放っている間者と交代する形で送り込むだけなんですが、益州に暮らす民が劉璋さんのことをどう評価しているのかが分からないと、どういった流言を流せば良いのか、指示の仕様がありません。

「で、この後はどうするの？ 各地に工作員を送り込むうにも、向こうの情報は手元に何も無いのよ？ あるとしても……」

やっぱり、詠さんもそこに気が付いていましたか……。

「現状は、八雲さんだけが頼りですね。じゃあ、早速ここにお呼びして、話を聞かせて貰うとしましょうか？」

「それなら、ねねが呼んで来るのです」

ねねちゃんが天幕から飛び出して行き、しばらく経つと……。

「呼んで来たのですぞ」

「朱里、俺に何か用ですか？」

「はい。八雲さんに、益州の民のことをお聞きしたいんです！」

「具体的には？」

「……益州の民が、劉璋さんにどのような評価を下しているのか、それを教えて頂けませんか？」

そう答えると、八雲さんは何かを思い出すような仕草を少しだけした後、ゆっくりと話し始めました。

「……益州に暮らす民が常日頃から願っていたのは、安心して暮らすことの出来る平穏な日々。しかし、上に立つ者はそれを許しはしませんでした。官吏の大半は、常に権力争いによる無意味な内乱を繰り広げ、時には裏で賄賂による取引を行い、国や民の為ではなく、自らの地位や私腹を肥やすことばかりに執着してばかり。正直言つて、俺がいた頃の益州内部は酷い有様でしたよ。……あそこは、権力欲に塗れ、金があれば何でも出来ると付け上がってる官匪共の巣窟でした。そしてそれは、今も変わってはいないでしょう。官匪共が自ら、甘い蜜の出る木を切り捨てる筈がないんですから……」

中には、国や民のためを思い、危機感を募らせる真面目な文官もいましたけど、と八雲さんは付け足しました。

「……だからこそ、益州に暮らす力なき民達は劉璋さんに対し、無能な太守という、上に立つ者にとって最低の評価を下しました。まあ、当然といえば当然ですが……」

「今の話を聞く限り、十分……いや、十二分に納得の出来る評価ね。やってることは、十常侍の奴らと何ら変わらないじゃない。国あつての民じゃなく、民あつての国なんだから。そんなことも分からない奴らなんかに、好き勝手されてる益州の人達が憐れだわ……」

「ええ……。ですが話をしてもらったおかげで、私達の方も次の工程に移れます。八雲さん、ありがとうございました！」

「いえいえ。何をするのかは分かりませんが、朱里達軍師のこと

でしょうから、軍の為になることだと信じていますよ。……そうだ、あと一刻ほどしたら、兵士達の慰撫のためにちよつとした出し物をするんですが、よかつたら朱里達も見に来ませんか？　少しは気晴らしになると思いますよ？」

出し物って何なのでしょう？　何をやるのか八雲さんに聞いてみましたけど、それは来てからの楽しみということで、と言われてしまい、準備がまだあるのと言って天幕から出て行ってしまいました。……うーん、何をやるのか気になります。

「ねえ雛里ちゃん、せっかくだから八雲さんの言ってた出し物、見に行かない？」

「うん！　……詠さん達もどうですか？」

「……そうね。ボクも何をやるのか気になったし、月達を誘って見に行くことにするわ。でもまずは、やることを終わらせないとね？」

「そうですね。それじゃ、ちよつと行って来ます」

私と雛里ちゃんは、地図の束を半分ずつ手に持ってから天幕を後にし、作業員の部隊の方々の所へと足を運び、その場で編成を済ませる。そして、詠さんとねねちゃんが用意してくれた地図をそれぞれに手渡し、流言の内容について指示し、それ以外のことについても事細かく指示を出してから、作業員を一斉に送り出しました。……その際、成都へ送り込む作業員の方には、ある一通の書簡を持たせ、袁術軍の使者としての役割も担って貰っています。

これで、今のとこやっておくべきことはもう終わりました。私は雛里ちゃんと共に、八雲さんの言っていた出し物というのを見に行く

ことにしました…。

S i d e : 八雲

…………… ああ、やばい。人前で何かを披露するのは久々だから、何だか異様なほどに緊張する。顔には出てないから、緊張してるとは思われてはいないだろうけど。

一方、出し物の主役になる美羽様と七乃はと言うと……。

「にゃ、にゃにゃのおー！」

「お、おぜうさま、お、おおお、落ち着いて下さい！ こういう時こそ、深呼吸です。ほら、一緒にやりましょう？」

「そんなことで、落ち着けるわけがないであろう！ もうすぐ本番なのじゃぞ！？ それより八雲、お主はなぜそんなに落ち着いていられるのじゃ！」

「そうですね！ どうして一人だけ、そんな風に落ち着いていられるんですか？」

…………… ほらね。

「俺だって、それなりに緊張してますよ？」

ほら、と言って、二人の方に手を出す。その手は、緊張から小刻みに震えが起こっているし、掌は若干汗ばんでいる。二人も、俺の手を触ったことで、緊張しているのは俺も同じなんだということを理

解してくれたらしい。

「……そろそろ時間ですから、二人とも行きますよ？」

「……う、うむ」

「はあ、緊張しますねえ」

なんて言いながらも、三人揃って観客達の前に出る。舞台は即席と呼ぶに相応しく、篝火が二箇所の数個ずつ置かれ、その篝火の間に椅子が一つだけぽんと置いてある。……もちろん、準備していた人の置き忘れなんかじゃない。あの椅子は、俺が座るためのものだ。そもそも、どうしてこうなったのか……。

それは今から一刻半ほど前、俺が陣内を歩き回っている際、想像以上にぐったりとしている兵士達がちらほらと見受けられたことが事の始まりだったりする。

古参の兵士に話を聞いてみたところ、ここまでまともな休養が取れず疲労困憊だというのもあるが、娯楽らしい娯楽がないため、気を晴らす手段も無い。そのため、鬱屈した気分が徐々に膨らんでいき、兵士達をさらに疲れているように見せているらしい。……たしかに、兵士達にまともな休息を取らせてやる事が出来ず、強行軍になっってしまった日も少なからずあった。そして、その結果がこれだ。

それならば、こっちで何とかしてみようということで七乃に相談したところ、緊張して恥ずかしがる美羽様が見たいという理由から、皆の前で歌ってもらうのはどうかと提案して来た。

七乃曰く、美羽様が緊張して恥ずかしがる表情が見れて、自分は幸せな気分になれる。見に来た兵士達は、そんな美羽様を見て、何だか和やかな気分になるとのことだ。

……でも俺は、それによつて兵士達の何割かが変態という名の紳士に目覚めてしまうかもしれないという、一抹の不安を抱えていた。部下達が、『いつも心に、Yes ロリータ No タッチ』とか叫び出さないか、ちよつとだけ心配になったのはここだけの秘密である。

まあ、美羽様の唯一と言つても良い特技は歌を歌うことであり、その腕前はというと……身内最頂を抜いてもかなり高い。むしろ、金を取つてもおかしくないほどだ。それだけ歌が上手いんだから、兵士達の慰撫として十分に成り立つ。俺も何度が聞いたことがあるが、その度に驚かされた。例えるなら、歌姫も真つ青の圧倒的歌唱力、とでも表現すれば、少しは伝わりやすいかもしれない。数だけ無駄に過ぎるアイドルグループなんかじゃ、太刀打ちすることすら敵わない。……ちなみに七乃も、これまた歌姫も腰を抜かすほどの実力の持ち主だったりする。

……ごほん、話を戻そう。七乃が美羽様にそのことを話し、二人がかりで説得した結果、美羽様は歌うことを条件付きで承諾してくれた。その条件というのが、まさに俺と七乃の二人だった。七乃は美羽様の横で共に歌い、俺は楽器の演奏。この条件を飲まなければ歌わないと言い張るので、俺達はそれを飲むことにし、現在に至るというわけだ……。

俺は用意されていた椅子に腰掛けると、琵琶を持ち、何時でも演奏を開始できる準備をしておく。美羽様と七乃は、篝火の炎に照らされて、全身が赤く染められている。そのおかげか、緊張によつて紅

潮した頬や耳の赤さも良い感じに誤魔化せている。

わざわざ足を運んでくれた兵士達や将達は、騒いだりせずにこちらへと視線を向ける。美羽様は数回ほど深呼吸をした後――

「み、皆の者、わざわざ足を運んでくれたこと、感謝するのじゃ。

気晴らしになるかは分からぬが、妾達は精一杯歌うから、出来れば最後まで聞いていったも。……七乃、八雲、準備はよいな？」

「はい、何時でも」

「……うむ。それじゃ始めるのじゃ！」

こうして、美羽様と七乃の初めての舞台の幕が上がった。

俺は琵琶を弾き始め、二人は歌い始める。

「~~~~~」

演奏しながら観客を見渡せば、誰もがその歌唱力に圧倒されて言葉を失っている。それに二人の歌声に釣られたのか、張遼の部隊の兵士の姿まで確認することが出来た。……でも、二人の歌声には若干の緊張が混じっていて、まだ本調子とは呼べない。

そうしている間にも一曲目が終わり、辺りは再び静寂に包まれる。美羽様と七乃は、観客達が何も反応してくれないせいか、不安そうに互いの手を握り合っている。

だが、その不安も――

「「「「「ほわあああああああああああああ！」「」「」

「袁術様あーーーーー！」「」

「大將軍様あーーーーー！」「」

「ひゃあ！？」」

突如湧き上がった大歓声に掻き消され、二人は突然のことに驚いて尻もちを突いてしまった。俺はすぐに琵琶を椅子に起き、二人へと手を差し出す。二人はその手に捕まって立ち上がると、さっきとは打って変わって嬉しそうな表情で観客である兵士達の方へと視線を移す。

「美羽様、七乃、あそこを見て下さい。どうやら張遼さんのこの兵士も、二人の歌声に誘われたようですよ？」

「あ、本当だ。私達の歌、思ったよりも好評だったみたいですねぇ。お嬢様、どうします？ この勢いのまま、二曲目も行っちゃいますかあ？」

「もちろんなのじゃ！ 八雲よ、早く戻らんか。次の歌が歌えないであろう？」

「はいはい」

まったく。うちの姫様はお調子者なんだから……。

「はいは一回で良い！」

「はい。……よいしょと」

椅子に戻り、琵琶を持ち直して、二曲目の演奏を始める。今度は、歌い手の二人も緊張している様子は全く見られないし、観客達も異様に盛り上がっている。

その後、二人は何だかんだ十曲ほど歌い、兵士達の興奮も冷めやらぬまま、二人の初舞台は幕を閉じたのだった……。

翌日、うちの兵士達の気分転換が出来たのは良いが、昨夜の一件で張遼のこの兵士達も含めて皆はしゃぎ過ぎたせいか、昨日以上に疲れが溜まってしまったらしい。そんなわけで、急遽一日だけ行軍を中止して、休息を取ることとなったのは、言うまでも無く予想外だった…。

軍師達は影で動き、主は歌姫の片鱗を見せつける（後書き）

次回は、ついに益州へと入ろうと思います。

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

袁術軍、益州の地に足を踏み入れる（前書き）

投稿が遅れてしまい、申し訳ありません。急いで書いてはいるんですが……。

とりあえず、本編の方をどうぞ！

袁術軍、益州の地に足を踏み入れる

S i d e : 八雲

休息を入れて再び行軍を始めてから五日、袁術軍は司隸の扶風郡と涼州の武都郡を隔てる国境に到着した。あとは、街道を南下して行けば益州へと辿り着ける。でもこれより先は曹操の領地外となるため、張遼とはここで別れることとなり、月達は別れの挨拶を済ませに行っている最中だ。

一方、月達を待っているこちらにも、ただのんびりと待っているわけじゃない。今のうちに、今後のことについて少し話し合うため、朱里と雛里へと近付く。

「朱里、雛里、二人ともちょっと良いですか？」

「何ですか？」

「今後のことで少し……。当分の間の拠点をどこにするかを考えなくちゃいけませんし、そうなると劉璋さんの方へ使者を送らなくてはいけませんから」

「それなら、心配ありません。詠さんとねねちゃんの下、私と朱里ちゃんの方で既に手は打っておりますから」

「……え？」

何でもないかの様に話す二人に対し、一人思考が追い付かずに茫然としている俺。もしも現実世界に吹き出しがあったとしたら、何時

の間に、だとか、どういうことだ、とか言っただけでそんな気がする。

二人も俺の状態を見て話を理解し切れていないと察したのか、ここ数カ月間に、軍師達が裏でどのようなことをしていたのかを事細かに説明してくれた。……やはり頭脳戦となると、本職が相手じゃ二歩も三歩も劣るのも無理は無いかな。

「……なるほど。物事を優位に進められるような手回しは、既に済ませておいた、というわけですか。さすが軍師、おかげで今後やるべきことが円滑に進められそうですね」

「えへへ」

朱里達が先回りして色々と手回しをしてくれていたおかげで、益州に入ってから苦勞が少しは軽減しそうだ。……もしかしたら、白蓮の出番も少しばかり早まるかもしれない。でもまだ、このことは本人には内緒にしておこう。

今後のことについて話すという用事が済み、美羽様達の下に戻ると、月達と何故か張遼の姿があった。……とりあえず、月達がここに戻って来ているということは、もう別れの挨拶も済ませたと考えても良いのだろう。でも、張遼がいる意味は何だ？

「……ちょ、張勲？」

「……………」

七乃は張遼の呼び掛けに対して、返事をせずにじつと睨みつけるだけ。張遼は一瞬怯みはしたものの、すぐに一言目を告げ始めた。

「あ、あんな……うち、あんたに言つとかなあかんことがあつてな。それを言いに来たんや。聞いてもろてもええか？」

「……手短にお願いします」

「うん。実はな——」

話し始めた張遼の口から語られたのは、俺を誑し込もうとして来たことへの謝罪だった。話を聞く限りだと、どんな女性が誘惑しに来ても俺が誑し込まれることはない、と董が明言した。その言葉に対し張遼は、そんな男がいる筈ない、それを証明するために俺を誘惑してみせると発言。詠に止めておいた方が良くと忠告されるも、それを無視したためにこうなつてしまつたらしい。

ただ本人が言うには、今回のことに関してはあくまでも酔つていて気が大きくなり、そのせいで調子に乗り過ぎてしまつたのが原因らしく、別に俺に気が合つてやつたわけではないらしい。……こつちも、その方が助かる。元より、こつちだつて誑し込まれるつもりは毛頭ない。

「じゃあ、八雲さんに気があつたわけじゃないんですね？」

「せや。だからな張勳、堪忍してもらえんか？　うちかて、別に悪気があつたわけじゃないんや」

「……分かりました。じゃあ、今回だけは許してあげます。ですが、次はなんてことが起きたりでもしたら、その時は容赦しませんからね？」

「……お、おおきに。……その、紀霊もすまんかつたな？」

「今後はお互いの為に、こういったことが無いようにお願いします。……さあ、それじゃそろそろ出発するとしましょう。張遼さん、ここまでの先導、ありがとうございます。曹操さんにも、よろしくお伝えください」

全軍進め、という俺の掛け声と共に袁術軍は行軍を再開し、武都郡と足を踏み入れた…。

袁術軍が武都郡へと入ったのと同じ頃、益州の主要都市へと送り出された袁術軍の工作員達は次々と各目的地へと到着すると、諸葛亮に出された指示通り、既に送り込まれていた間者達との入れ替わりを無事に果たし、間者達は袁術軍の本隊目指して各自行動を開始していた。

また、成都へと送り込まれた工作員達は、もう一つの仕事である袁術軍の使者という任務をこなすために成都城へと登城し、手渡されていた書簡を益州の州牧である劉璋へと差し出した…。

S i d e : 桔梗

ああ、全くもって胸糞悪い。あのクソ坊主が急に招集を掛けるから何かと思いきや、ただか書簡一つのためなんぞに呼びおって……。周りを見渡せば、大半はわしが嫌いな文官共ばかり。わしと同じような武人など、数人しかおらぬ。これでは、溜息の一つや二つ、吐きたくもなるというものだ。

……：そういえば、ここ最近見かける軍服と同じ物を着た者が一人お

るが、あれはいったいどこの軍の者であろうか？ たしか、あの軍服と同じ物を来た輩をここ数力月前から巴郡の方でも見かけておるし、紫苑のいる宕渠の方でも見かけられているという報告も挙がつておったが……。

「皆、よく来てくれた。今日お前達を呼び出したのは他でもない、我が手にしているこの書簡について、お前達の意見を聞かせて貰いたいからだ。この書簡を届けに来たのは、そこにいる袁術軍の使者つまりこの書簡の送り主は、袁術ということになる」

「それで劉璋様、その書簡にはいったい何と書かれておられるのでしょうか？」

「……読むのが面倒だ。誰でも良い、この書簡を我に代わりこの場で読み上げる」

「では、私めが……」

そう言つて、劉璋に仕える中年太りの文官が書簡を受け取り、読み上げ始める。その内容は、袁術軍が目の前のクソ坊主に保護を求めているというものだった。…… よりにもよって救援要請をしてきたのが袁術とは、わしらもつくづく運がない。ただでさえこの国には、玉座で偉そうにしておるクソ坊主がいるというのに、そこに袁術が加わるとなれば、この国の民は今まで以上に苦しむこととなるう。じゃが、わしが諫言したところで、あやつが素直に言うことを聞くことはないであろう。…… 仮に聞いたとしても、ここにいる文官共があればこれやと手を打って、邪魔をするに決まっておる。つまり、打つ手がない。これでまた一つ、頭痛の種が増える。

「それでは、誰でも構わぬから意見を聞かせて貰おうか？」

「所詮、袁術はまだ小娘。まず使い物にはならぬと、考えておいて良いでしょう。ですが最近、武官と文官共にそこそこ優れた者達を部下に迎え入れたという風の噂を耳にしました。……劉璋様の権威をさらに高めるためにも、劉璋様にお仕えする我らのためにも、ここは迎え入れるべきかと存じ上げます」

文官の一人の発言により、この場にいる者の大半が何かを思案しては、何か企んでいるかのような表情をうつすらと浮かべる。……やはり、この文官共は腐っておるな。なぜここで、民のためという言葉が出てこない？ 答えはたった一つ、どう立ち回ったら劉璋のお零れに与ることが出来るのかしか、考えておらんからだ。

「……おや？ 劉璋様、この書簡の文面に、久方ぶりに聞く名が書いてありますぞ？」

「ほう。で、何という名だ？」

「以前、客将として半年ほど劉璋様に仕えていたはずの、紀霊とかいう若者の名です。まさか、袁術軍にしようとは思いませんでしたな」

「ほう。……たしか、そんな名の者が客将として仕えに来ていたな。……敵顔、その者はたしか貴様のところで働かせていたと我は記憶しているが、あいつは使えるのか？ 正直に答えよ」

「……使えるか使えないかで聞かれたら、あやつは使える方であるうな。だがあくまでも、あの時のあやつはという意味だから、そこは履き違えないで頂きたい」

……八雲のやつ、よりもよって袁術なんぞに仕官するなど、血迷った行動としか思えん。あれほど士官先だけはちゃんと選べと、それこそ耳にたこが出来るかというほど言い聞かせておいたというに……。

「そうか……。まあ、貴様がそういうのであれば、それは事実なのであろう。……よし、我らは袁術軍の救援要請を受け入れる。皆、それで異論は無いな？」

「……仰せのままに！」「……」

文官共は、右手で作った拳に左手の掌を乗せ、頭を少し垂れて臣下の礼を執る。頭を垂れているため、玉座に腰を下ろしているクソ坊主からは見えんだろが、わしには奴らがほくそ笑んでいたのが見えていた。

その後の話し合いで、袁術軍には巴西郡の安漢が与えられることとなり、先ほど書簡を読み上げておった文官が、クソ坊主の指示で早速筆を走らせ始めた。

……たしか安漢は、今いる成都、わしが納める巴郡、紫苑が納める宕渠の三ヶ所から、そう離れてはあらん。しかもあそこには、現政権に不満を持つ者達の中で、わしや紫苑ほどとは言わんが、周囲に対してそれなりに影響力を持つ張伊の爺がおったはずだ。

それにも拘わらず、袁術軍を安漢に与えるということは……文官共はこの機会に袁術を用いて、現政権に不満を持つわしと紫苑に対して睨みを利かせつつ、あの爺のことは近くで見張って行動を可能な限り制限させる腹積もりなのであろうか？

「劉璋様、書簡の方が書き上がりました」

「ふむ。ならば、それを使者に持たせて、丁重に送り出せ。それと、あの老体に知らせを出しておけ」

「承知致しました。それでは使者殿、ささ、こちらへ……」

袁術軍の使者を送り出したことで、玉座の間に少しの間静寂が訪れる。

「……私は疲れた。お前達、もう戻って良いぞ。今日はこれで解散だ」

邪魔だと言わんばかりに、劉璋は払いのけるかのように手を振る。呼び付けておいて、用事が済んだらさっさと帰れとは、相変わらず無礼な奴だと思いながら、わしは城を後にし、巴郡へと帰った…。

袁術軍は涼州武都郡を七日で横断し、益州は巴西郡へと辿り着いた。これにより、袁家を再興させる計画の第一段階である益州入りを果たした…。

Side：八雲

ようやく……ようやく、益州へと辿り着いた。徐州を発ってから、実に二ヶ月間も袁術軍は行軍し続けることになるとは、思ってもみなかった。途中途中で休息を多めに取って、騙し騙しで何とかここまで来たけど、将も兵も関係なく疲労の色がはつきりと滲み出ている。

だが、何も悪いことばかりというわけじゃない。益州に足を踏み入れて直ぐ、朱里達軍師によって放たれていた間者達や、劉璋の下に袁術軍の使者として出向いていた工作員と合流することが出来た。そのため、一度軍を止めて、将全員で集まっている。……報告はまだ聞いていないから何とも言えないが、朱里達軍師の手回しの結果が、まずはこうして無事に形となってくれたのは、素直に喜ばしいことだと思う。

俺以外は益州の土地勘や内情に乏しい現状、間者の方の報告を聞きたいところだけど、今は行軍中。聞くことになるであろう情報量の多さとその情報を整理するための労力を考えると、こんな平地のど真ん中じゃなく、もう少し落ち着いた場所の方が望ましい。

だが、使者の方の報告は別だ。その報告の結果如何で、冗談抜きで紫苑さんか桔梗さんのどちらかに保護を求めなくてはいけないし、最悪の場合は領地に侵略してきたということで討伐対象に挙げられて戦闘になるかもしれない。今の疲れ切った状態で戦えば、敗北は必至……。そうなれば、この数力月が全て水泡に帰してしまう。

「……貴方が、劉璋さんの下に使者として出向いた工作員ですか？」

「は、そうです！ こちらの書簡に、劉璋からの返答が……」

差し出された書簡を受け取り、緊張した面持ちでそれを開き、内容を確認する。

「……………」

「や、八雲さん、何と書いてありましょか!？」

「……雛里、地図を」

「は、はひ！……どうぞ」

朱里と雛里が噛んだのを何事も無かったかの如くスルーして、雛里から地図を受け取る。この地図には、街の場所や隊商がよく使うような街道に山はおるか、衢地^{くち}や川が干上がったことによって出来た谷なども記されている、官軍や漢王朝が使っている物と同じ正確な地図だ。……腐っても、うちは三公を輩出したことのある名門袁家。王朝に仕えていたこともあるのだから、こういった物も一つくらいは所有していたりする。

地図を広げ、書簡に書いてあった街の名と照らし合わせてみる。書簡には、安漢の統治を袁術軍に任せると書き記されていた。その安漢を地図で探すと、今いる巴西郡の南部にあることが分かった。そのまま安漢の周囲を調べてみると、成都、巴郡、宕渠の三ヶ所とそう離れていないことも分かった。紫苑さんや桔梗さんを引き込んだいうちとしては、絶好の場所と言えるだろう。だからこそ、相手の意図が読めないのが気掛かりだ。

「……一つ聞きたいんですが、どうして我が軍にこの地を任せるのか、その理由を聞いていたりしませんか？ どんな些細な話でも構いませんので、何かしら覚えがあるのなら、話して下さい」

「理由などは分かりませんでした。その地を治めているのは現政権のやり方に不満を持っている者らしいという話ならば、小耳にはさみました。それ以外は何も……」

現政権に不満……つまりは、桔梗さんや紫苑さんと同じような考え

を持つ人。これは、実際にその人にあつて、話を聞いてみる必要がある。

「そうですか……。分かりました、一度下がって休んで下さい」

「はっ！」

使者を下がらせ、この場にいる皆へ書簡の内容を伝えると、あと数日で久々に入浴出来ると喜ぶ者、久しぶりにゆつくりと休息が取れそうだと一安心する者、まだ進むのかと愚痴を零す袁家の二人、相手の意図が読めない以上は慎重になるべきだと考える者と、反応は人それぞれだった。でもまあ、どんな反応であれ安漢へ行くことに変わりはない。そこが、うちの新しい拠点となるのだから。

「それじゃ、新たな居城となる安漢の街へ向かうとしましょう。皆も疲れているとは思いますが、あと数日ほどの辛抱です。各部隊の兵士達にも、そう伝えて下さい」

集まった将達は、各々が率いる部隊へと戻って行く。かくいう自分も、自ら率いる隊の下へと向かった。

「紀霊隊、集合しろ！」

号令を掛けると、隊の兵士達が続々と集まって来る。……が、その足取りはまるで、鉄球の付いた足枷を両足にはめられた囚人のように重たい。

「皆、疲れて休んでいるところを呼び出して済まない。これから行軍を再開し、安漢という街まで向かうが、到着までにあと数日は掛かる。辛いと思うが、あと数日の間だけ辛抱して欲しい……」

申し訳無く思いながらそう伝えるが、兵士達は誰一人として嫌な顔をする事は無かった。……本当、部下に恵まれたとつくづく思う。全軍への通達が済んだらしく、続々と他の隊が先頭にいらっしゃる。と近付いて来る。

「……さあ、行こうか！ 紀霊隊、進め！」

今度は、俺が先導役として長い隊列の先頭に立ち、袁術軍は一路、新たな拠点となる安漢へと軍を進めた…。

袁術軍、益州の地に足を踏み入れる（後書き）

張イのイは環境依存だったので、カタカナにさせて頂きました。ちなみに正史でのこの人をかなり省略しまくって説明すると、劉璋を擁立したにも関わらず、いろいろと進言したけど聞いてくれなかった恨みから、荊州の州牧である劉表と結託し、州内の豪族を率いて数万の軍勢を擁して劉璋に叛逆した人物です。……部下に裏切られて、死んでしまいましたかね。

部下に裏切られて亡くなったのは、張飛とかが有名ですね。

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

絡みあう思惑と独断（前書き）

毎度、投稿が遅れてしまい申し訳ありません。

では、本編のほうをどうぞ！

絡みあう思惑と独断

S i d e : 八雲

誰もが疲労困憊だったため、安漢へ到着するまでには四日を要した。でも、今の状態で言えば及第点という所だろう。城下の街へと続く城門の前には、護衛らしき兵士達を数人ほど連れた、温厚そうな老人が立っている。整った身形からして、おそらくはこの街の長かなのだろう。

馬から降りて、美羽様を連れて彼らの前へと立つ。兵士達からこちらへ向けられる視線に、好意といったものは一切ない。あるのは、袁術軍に対する猜疑心だけだ。

「……お主らは、袁術軍の者で間違いないかの？」

「はい。俺は袁術軍の将で、紀霊と申します。そして隣にいるのが

――」

「妾が袁術じゃ。劉璋殿の計らいにより、今日からこの街で世話になる。よろしくお願いするのじゃ……えーと？」

「……まだ名乗ってなかったのう。儂は張イ、この街の長をしておるただの老人じゃよ」

「そうじゃったか。では張イ殿、改めてよろしくお願いするのじゃ」

きちんとお辞儀をして挨拶を済ませる美羽様を見て、表情こそ変え

ないものの、どこか驚いている様子の張イさん。過去に美羽様に会ったことがあるうが、会ったことは無いが噂や風評の類なら聞いたことはあるうが、結局それは過去の美羽様でしかない。過去の情報しか知らない人からすれば、今の美羽様は真逆の存在に映るのだろう。

「……驚かれていますようですが、どうかなさいましたか？」

「い、いや、何でも無い。とりあえず、ここじゃ話も進まん。城に向かうとしよう。さあ、儂に付いて来ると良い」

「……そうだ。張イさん、城内の部屋や兵舎に空きはありますか？ 皆、二ヶ月以上にもなる行軍で疲弊してしまったので、少しでも早く休ませてあげたいのですが……」

後方で待機している、約二万の軍勢の方へと視線を向ける。

「……ふむ、問題ないじやろう。どちらにもまだ、たくさん空きがある。城に着いたら、部下に案内させよう。他に、聞きたいことはないかの？」

「はい、大丈夫です。それでは、城までの誘導の方、お願いします」

これでようやく、休息を取らせることが出来る。後方で待機している皆に手で合図を送った後、張イさんの誘導の下、安漢の街へと入っていった。街に入るなり、民衆からは先程の兵士と似たような感じの視線が送られて来る。だが、そんな視線に対しても表情一つ変えることなく、肅々と城までの道を進んでいく……。

城に到着してすぐ、張イさんの部下の案内によって兵士達は兵舎へ

と、将達は各自に宛がわれた空き部屋へと向かう。俺も部屋へと向かい、今日はもう休むことにした。

部屋に着くなり、荷物を適当に放り投げ、寝台に倒れ込む。眠気がすぐに襲ってきたが、抵抗する気にすらならない。寝台に横たわってからものの数秒のうちに、意識を闇に落とした…。

袁術軍が安漢へ到着したのと同じ頃、劉璋の下から戻った嚴顔は休む間もなく、ある物を手にして旧知の仲である黄忠の居城へと一人足を運んでいた…。

Side：紫苑

執務室で政務をこなしていると、桔梗が来ていると報告があった。これといった連絡も無く突然会いに来るなんて、桔梗にしては珍しいこともあるものね……。まあ、ちょうど仕事も一区切り付いて、今日やる分は終わったんですし、璃々も連れて会つとしましょう。

私室に戻ると、璃々が一人つまらなそうに人形遊びをしていた。…本当なら、母親である私が傍にいてあげないといけないのに、実際はこうやって寂しい思いをさせてしまっている。…母親、失格なのかもしれないわね。

「……あ、お母さん！ お仕事終わったのー？」

「ええ、今日はもうお終いよ。……ねえ璃々、桔梗が来ているみたいなの。お母さんと一緒に、桔梗に会いに行かない？」

「桔梗さん来てるの！？ うん、行く行くー！」

「そう。じゃあ、お母さんと一緒に行きましようか？」

璃々の方へ手を差し伸べると、うん、と元氣良く返事をしながら私の手を取ってくれた。愛娘と手を繋ぎながら、桔梗が待っているであろう城の中庭にある休憩場所へと向かうと、案の定桔梗の姿があった。

「紫苑、璃々、こつちじゃ！」

「もう、どうしたの桔梗？ 連絡も寄越さないで急に来るから、驚いたじゃない」

「まあ、良いではないか。ほれ紫苑、まずは一杯……」

そう言っ、私に杯を差し出す。中身が水のように透き通っているのと、桔梗の顔が少し赤くなっていることから考えて、どうやら杯の中身はお酒みたいね。

「……桔梗、まだお昼よ？ 飲むにしても、少し早過ぎるんじゃないかしら？」

「……よく言う。そんなこと言っておいて、お主の手はしっかりと杯を手にしておるではないか」

「あらあら、ばれてしまったら仕方ないわね。それじゃあ、せっかくだし頂こうかしら」

杯を持ち直し、注がれていたお酒を一気に飲み干す。……ふう、や

っぱりお酒は美味しいわ。

「おお、良い飲みっぷりじゃなあ。さて、じゃあわしも……。ん、ん、ん……ぷはあ」

「お母さんと桔梗さんだけずるいー！ 璃々も何か飲むー！」

「おお、すまんすまん。とは言ったものの、璃々に酒を飲ますわけにもいかんし……」

「当り前でしょう？ まだ幼い娘にお酒を飲ませる親が、どこにいうと言うの……。璃々、今お母さんが何か持って来てあげるから、ちよつと待ってなさい」

席を立てて一度城に戻り、璃々に出すためのお茶を用意してから、二人のいる中庭へと戻る。

「はい、璃々」

「ありがとー、お母さん！」

「どういたしまして。……ところで桔梗、私に会いに来たということとは、何かそれなりの理由があるのでしょうか？」

「……うむ」

新たに注いだ、杯から溢れそうな量のお酒を一息に飲み干すと、桔梗の顔色が変わる。もしかしたら、あまり良くないことでもあったのかもしれないわね……。

「紫苑よ、あの袁術が救援要請を出し、その要請をクソ坊主が受諾したのは知っておるな？」

「……ええ。詳しい事情までは分からないけど、部下からの報告である程度は聞いているわ。それがどうしたの？」

「実は……袁術の所に、八雲が仕官しておるらしい」

「……それ、焰耶ちゃんには話したの？」

「いや、まだ話してはおらん。焰耶に話せば、八雲の下へ単騎で殴り込みを掛けるのが目に見えておる。袁術軍が救援要請を出した理由、劉璋が袁術軍を安漢へ送った意図……そもそも袁術軍、八雲が敵と味方のどちらとなるのかも、はつきりと分かんのだ。そんな状態で、不必要に戦力を割くことは出来ぬ……」

もう少し落ち着きを持ってくれれば良いのじゃが、と本音を零す桔梗を見て、私はつつい笑いってしまった。焰耶ちゃんは桔梗に似てどこか好戦的などころがあるし、良くも悪くも一直線だから、普段から落ち着いた感じの八雲君が相手だと、どうしても軽くあしらわれてしまうのよね……。

「とりあえず、当分の間は周囲への警戒を強化した方が良さそうだ。紫苑、お主も気を付けるのじゃぞ？」

「ええ、分かったわ。桔梗も気を付けてちょうだいね？」

「分かっておる」

「……………」

さつきからやけに大人しいなと思い、璃々の方へ目を向けると、頬を膨らませてご機嫌斜めとなっていた。

「どうしたの、璃々？」

「お母さんと桔梗さんのお話、良く分からないからつまんない！ねえお母さん、そういうえばお話の途中でお兄ちゃんの名前出てたけど、何で？」

「あ、ええと、それはね……」

考える素振りを見せて答えを濁しながら、視線では桔梗へと助けを求める。桔梗も桔梗で、仕方が無い、と言いたそうな表情を浮かべた。

「……璃々よ、八雲の奴がここからそう離れてはおらん街に来てると言ったらどうする？」

「え、お兄ちゃんが近くに来てるの！？ 会いたい！ お母さん、会いに行こー？ 桔梗さんも一緒に良いでしょ？ ね？」

「駄目よ、璃々。八雲君や桔梗、それにお母さんにもそれぞれ都合やお仕事があるんだから、我慢してちょうだい。今は会えなくても、璃々が良い子にしていれば、きっと八雲君の方から会いに来てくれるわ」

「……本当？ じゃあ璃々、良い子にしてる！」

「そう。良い子ね、璃々」

機嫌を直し笑顔で答える娘を撫でながら、若干の罪悪感が生まれるけど、璃々の機嫌を直すためには嘘も方便と割り切ることも大事なかもしれない。でもこれが、嘘ではなく現実になるだなんて、思ってもみなかった…。

S i d e : 八雲

安漢にて休息を取ってから数日……。その間に、俺はある人物と使者を通して連絡を取り、会う約束を取り付けていた。そして現在、その人物と会うため、一人馬に跨ってある場所へ向かっていた。皆には詳しいことは話さず、ただ七日ほど留守にするとだけ告げて、朱里達軍師には張イさんに事情を話してこちら側に引き込んでおいて欲しいとだけ頼んでおいた。

ただ一人、七乃だけにはどういった理由で留守にするのかを話しておいた。当然、今からやろうとすることに対して反対されたが、こちらとしては皆にやらせるわけにはいかなかったし、ましてや七乃にだけは絶対にさせるわけにはいかなからと伝え、半ば強引に理解して貰った。

「お、ようやく着いた」

目的地である城に到着した。馬から降りて、人目に付きにくい場所に馬を待機させてから街の中へと入る……。

「……この街は相変わらず、か」

街の中は多くの店が並び、一見栄えているようにも見える。誰が見

ても、そのように映ることだろう。だがそれは、建物だけを見た時の話。暮らしている民衆の顔には、曹操が治めている陳留で見た時の様な活気が一切感じられない。……大通りを外れれば、死んでいるのか生きているのか、声を掛けなければ分からないような人っている。

始めてここに来た時に抱いた感情と、何一つ変わらないものが自分の心の中に蘇って来る。甘い蜜を嚙って私腹を肥やす人間達と、虐げられ続ける民衆が暮らす街。それがこの街、成都の現状だ……。

出来ることならすぐにでもこの圧政から解放してあげたいところだが、今はまだ戦力も揃わなければ、その時期でもない。でも、近い将来必ず攻め落とす。益州の民を助けるためにも、袁家再興のためにも……。

その後も街の様子を確認しながら、成都城へと進んでいく。

城に到着するなり警備を行う兵士達に止められたが、事情を話すとすんなりと通してくれた。上から指示があつたんだと思いたいが、肝心の上司が内輪もめしてばかりだし……。

城内に入ると、中にいる兵士達は緊張感の欠片も無く、侵入者とかが来ても対応出来そうにないほどにだらけきっていた。……最早、何も言うまい。

城の中を進んでいき、玉座の間の前へと到着した。扉の前で一度立ち止まり、息を整えて自分を落ち着かせる。ここから先は、俺が独断で行う一人芝居。……美羽様、一時とはいえ忠義に背くことを許して下さい。今だけ下郎の仮面を被り、腐りきった下賤の者を演じさせて頂きます……。

玉座の間に行く扉を開けて貰い、玉座に座る劉璋と彼に付き従う文官達の前へと進む。ある程度近付いた所で、片膝を床に突いて拱手する。

「……劉璋様、ご無沙汰しております。文官の皆様方も、お久しぶりですね」

「そうだな。まさか、貴様が袁術の下にいるとは思わなかったぞ。……して、今日はいつたい我に何の用だ？」

「はつ。我が主である袁術様が体調をお崩しになられたため、私が名代として、ご挨拶と共に我が軍を保護して下さったお礼を申し上げに参った次第です。劉璋様、我が軍を保護して下さいましたこと……我が主に代わり、この場を借りてお礼申し上げます」

ちなみに、美羽様が体調を崩したというのは、真っ赤な嘘だ。嘘を吐いた所で、こいつらには分かるまい。

「ふん、構わぬ。だが、拾ってやった以上はそれなりの働きはして貰うぞ？」

「……具体的に、我らは何をすれば良いのでしょうか？ 安漢の統治を任されたのは良いのですが、聡明な劉璋様のことですから、何か別にお考えがあるのではと思いますが……？」

よくもまあ、思ってもないことを口に出来ると、我ながら思ってしまう。いや、演じているからこそ、心にもない言葉を紡ぎ出すことが出来るのか……。とりあえず、今はこのまま媚びを売る感じでいよう。劉璋達の意図も掴まないといけないし……。

「……何だ、分からぬのか？」

「……恐れながら劉璋様、私もある程度の教養は身に付けておりますが、根は生粋の武人。ですので、劉璋様や文官の皆様ののように俊秀ではございません。ですので、劉璋様のお考えをお聞かせ願いたいのです。……保護して下さった御恩に、報いるためにも」

「そうかそうか、ならば聞かせてやろう。誰でも良い、あ奴に説明してやれ」

「こほん、では儂が説明して進ぜましょう……」

そう言つて出て来たのは、頭髪が綺麗さっぱり抜け落ち、かなり年老いた文官。……さて、いったいどんなことを喋ってくれるのか、楽しみだ。

「紀霊よ、お主は張伊という男を知つておるかね？」

「はい。安漢に着いた際に、一度顔を合わせました。……あのご老体が、何か？」

「あの者は嚴顔や黄忠といった、劉璋様を君主とした現政権に対して否定派の者でな。今でも何かある毎に、儂らに対してああだこうだと文句を付けて来るのじゃよ。まったく、犬のようにきやんきやん吠えおつて。煩くてたまらんわい」

「……そうだったのですか」

「うむ。そこでじゃ。お主には張伊と嚴顔と黄忠、この三人の行動

を監視し、定期的にこちらに報告して貰いたい。それと、もしもあの者共が劉璋様に反旗を翻すようなことがあった時には、お主達だけで対処して欲しい。この頼み、受けては貰えんじやろうか？」

説明を聞く限りだと、いざという時に自分達は傍観で何もせず、俺達だけで本気の桔梗さん達と戦え、と……。つまりはだ、最初から俺達を使い捨てにするつもりだったってことか。袁家を使い捨てにしようだなんて、良い度胸してくれてんじやねえか……。

拱手している手が怒りによって無意識に震え、握り拳を作っている右手の掌には、これでもかと爪が食い込む。それを気取られぬよう、右の拳を包む左手にも自然と力が入ってしまう。……堪えろ、俺。せつかく、袁術軍を安漢に送り込んだ意図がはつきりと分かったんだ。今は堪えなければ、全部無駄になってしまう……。

「……承知いたしました。どちらも、我が軍が全責任を持って行いましょう。劉璋様達は安心して、内政の方だけに尽力下さい」

「そうかそうか、受けてくれるか。いやのう、儂らは内政があまりに忙しくて他の事にまで手が回らん故、お主らだけで対処してくれるのであれば、儂らとしても重畳ちゆうじゆうというものじゃよ」

「いやはや、そうですねあ。それにしても紀霊よ、ここ数年見ぬうちに、随分と変わったではないか。正直、敵顔らのようにお主も否定派の人間ではないかと危惧しておったのだぞ？」

「……人間、環境が変われば考えも変わるといふものです。それに、よく言うではありませんか。長い物には巻かれろ、と」

「ほっほっほ、若いのに分かっておるではないか。のう、皆の衆？」

その問い掛けに、周りの文官達は満足そうな笑みを浮かべて笑い声を上げる。劉璋も、満足気な顔をしている。……とりあえず、こいつらからある程度の信用を得ることは出来たと見て良いだろう。あとは、出鱈目な情報をあたかも真実であるかのように報告して、こいつらからの信頼度を高めていけば良い……。

「では劉璋様、文官の皆様、私はこれにてお暇しようと思えます」

「そう急いで戻る必要もあるまい。貴様を新たな同士として迎え入れたことを祝し、我は今から酒宴を開こうと思っておるのだぞ？」

「いえ、相手の情報収集を行うのであれば早いに越したことはありませんし、劉璋様からの信頼を得るためには、少しでも早くから仕事に取り組んだ方が良いでしょうから……」

「ほう。そういうことならば、酒宴は我らだけで行うとしよう。貴様は、私の信頼を一日でも早く得られるよう、せいぜい努力して我に尽くせ」

「御意。それでは、失礼致します……」

立ち上がり、一礼してから玉座の間を後にする。その後も成都の街から出るまでは、何とか愛想良く振る舞い続けた。

成都から出た後、予め人目に付きにくい場所に待機させておいた馬に乗り、手綱を引いて直ぐさまその場から駆け出す。

周囲に誰もいないような場所に到着したところで、一度馬を止めて

「あああああああああああああ！」

ずつと堪えていた怒りを解消するため、空を見上げながら叫び声を上げた。……正確には、叫び声を上げざるを得なかったという方が正しい。

もしも、このまま怒りを一切発散せずに安漢へと帰れば、誰彼構わず怒りに任せて怒鳴り散らしてしまったかもしれない。その相手が、美羽様や七乃になってしまったとしたら、自分で自分を許せなくなることだろう。それだったら、人知れず一人で怒りを発散した方が何倍もマシだった……。

「……ふう、これで少しは解消出来たかな」

それでも、俺の中に残っている怒りは未だに燻り続けている。これを本当に解消するためには、成都を……劉璋を討ち取ることでは消えはしないだろう。そのためにも、今は冷静になって、成都攻略の準備を進めなければならない。……袁家を嘗めてくれた代償は、お前が思っている以上に高く付くぞ、劉璋。

その後、ある程度怒りとストレスが解消された俺は気分を一新して、改めて仲間の待つ安漢への帰路へと就いたのだった…。

絡みあう思惑と独断（後書き）

今回は、紫苑と桔梗のどちらか、もしくは両方とのお話タイムとなる予定です。

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしくお願いします。

さあ……話し合おう（前書き）

……一度書き上げた物を、気に入らないからという理由で全消しすること一回。半分まで書いて消すこと三回。出だしに納得がいかなくて、消すこと二回……。

とりあえず言えることは、更新が遅れて申し訳ありませんでした。

次は、一週間以内に上げられるように頑張ろうと思います。

それでは、本編の方をどうぞ！

さあ……話し合おう

Side：八雲

何事も無かったかの様に、成都から帰って来た俺を待ち受けていたのは――

「お、お帰りなさい、八雲さん」

「ただいま、七乃。それに皆も……あれ？」

何だか、嫌な予感がする。何でかって？ そんなの、七乃の背後で皆が横一列に並んでいるからだよ。……額に青筋を浮かべ、これ以上はないであろう笑顔で。青筋さえなければ、男なら誰もが惹き付けられるような笑顔だというのに……。

「七乃、これはいったいどういった種類の出迎えで？」

「えっとお……実はですね、八雲さんが皆に秘密で成都の方に行っていたのが、皆に知られちゃいました。もう、七乃ちゃんってばドジっ子……てへっ」

首を傾げて可愛らしく舌を出しながら、拳骨で頭を軽く叩き、笑って誤魔化そうとする。……ああ、こんな状況でも七乃は可愛いな……とか思ってる場合じゃねえ！ やばい、これは早く逃げないとやばい。いくらなんでも、相手が悪過ぎる。それも、絶望的なまでだ。

だが、いざ逃げようとしても、足が言うことを聞いてくれない。目

の前にいる彼女達から発せられる重圧プレッシャーによって、足が竦んでしまっているからだ。その感覚はまるで、鎖で繋がれたかのようで……。

気が付いた時には、恋を筆頭とした武官達によって既に周りを取り囲まれ、逃げ場を完全に失っていた。……おお、厄い厄い。

その後、俺がどのような目に遭ったのかはご想像にお任せするが、簡単に説明するなら、武官達から半ばサンドバック状態で一方的に肉体言語で語られ、休む間もなく軍師達と月から心決られる説教を受け続け、止めと言わんばかりに麗羽と美羽様の二人からありがたい御高説を承った、とだけ言っておこう……。

当然、そのお仕置きが終わった後は、成都の街の状況はどうだったのか、成都で何をしていたのかを、洗い浚いきりきりと吐かされたのは言うまでも無い……。

話を終えた後、皆の表情を窺って見ると、やはり話した内容が内容だけに、皆の表情は暗い。どこか重苦しく感じる空気の中、白蓮が静かに口を開いた。

「……なあ八雲、どうして一人で成都に、劉璋のどこなんかに出向いたんだ？　それも、私らに相談もしないで……」

「……誰かに媚を売ったり、変なこと言われて不快な思いをする損な役回りには、俺一人で十分だからですよ。そもそも前提として、こういう汚れ仕事じみたことを、皆にやらせるわけにはいきませんでしたし……。皆には、皆の為すべきことがある。俺には、俺の為すべきことがある。劉璋の件に関しては、俺が為すべきことの内の一つだったに過ぎません」

「……前から薄々思っではいたが、八雲殿は重度の苦勞性、もしくは苦勞性の塊としか思えませぬな」

「……時々、自分でもそう思うことがあります」

星に言われたことは、自分でも何となく分かる。きっと俺は、根っからの苦勞性なんだと思う。俺以外に苦勞性な人と言えば、斗詩と周瑜くらいしか浮かばない。……特に周瑜は、孫策に苦勞を掛けられ過ぎて、病の一つでも患ってなければ良いけど……。

「それにしても劉璋め、妾達を最初から使い捨てにするつもりだったなんて許せぬ！」

「あのー、お嬢様あ……？ 忘れてるかもしれませんが、私達って人のこと言えないんですよ？」

「ん、どうしてじゃ？」

「……孫策さん達を散々こき使った挙句、謀反を起こされて寿春を追い出されたのは、何処の誰か、もうお忘れですか？ 今は色々と勉強してかなりマシになったとはいえ、寿春で偉そうに踏ん返り返っていた頃の美羽様は、はつきり言っただけ劉璋となかなか良い勝負でしたよ？」

「うぐ、そう言われると言いつ返し……」

いや、言い返されてもこっちが困るか……。まあ、その責任の一端は、俺と七乃が美羽様を甘やかし過ぎたせいでもあるわけだから、今後は同じ轍を踏まなければ良いだけの話だ。

「……そういえば、張イさんが見当たりませんけど、説得の方はどうでしたか？」

「それでしたら、問題なく済ませておきました。私達に、協力して下さるそうです。今は片付けないといけない案件が拵がっているそうで、手が離せないと言っていましたよ」

「そうでしたか。張イさんの方の説得、ご苦労様でした。とりあえず、今のところは順調みたいですな」

さて、次は紫苑さんと桔梗さんの説得か……。どっちから、交渉を進めていこうか。やっぱここは、紫苑さんからの方が良いかな。桔梗さんの説得にも、力を貸してくれそうだし。

……あ、でも待てよ。桔梗さんを後に回すということは、必然的に焰耶も後に回すということでもあるわけだ。出会った瞬間に、模擬戦を挑んで来そうな気がしないでもない以上、やっぱり面倒事は先に片付けておくのが無難だろう。

「うむ。それで八雲殿、我らは次にどう動きますかな？」

「……俺は、厳顔さんの方から交渉を行おうと思います。黄忠さんも厳顔さんも俺の知り合いですので、二人との交渉に関しては俺に任せておいて下さい。その間、恋や星達は兵士達の調練や自己の鍛錬を頼みます」

「了解した。それに関しては、我らに任せておくが良い」

「軍師の四人は、現政権否定派の中で、他にも袁術軍に協力してくれそうな人がいないかどうかを調べ、直接会って話すなり、書簡で

連絡を取り合ってみるなりして下さい」

「分かりました」

……よし。これで今後、少なくとも紫苑さんと桔梗さんを仲間に引き込むまでの間の我が軍の動きは決まったな。

「七乃、蔽顔さんの下へ使者を送っておいてくれますか？ 書簡を持たせるのであれば、俺の名前を勝手に使ってしまったって構わないので」

「分かりました。それじゃあ、今日中に書いて、送り出しておきますねえ」

「お願いしますね。……ふああ」

……流石に、帰って早々のハートフルボッコで、身心共にいろんな意味で疲れた。後のことは皆に任せて俺は一足先に部屋で休み、翌日の早朝、俺は巴郡へ向けて出発した…。

S i d e : 桔梗

城の上部から街の様子を眺めておると、兵士から八雲の名義で書かれた一通の書簡が届けられた。内容は、話したいことがあるから、近々会いに行くという、とても簡素な物。

八雲が来ることに關して、わしには何ら問題は無い。聞きたいことがある以上、あやつの方から来てくれるのは助かる。ただ、問題は焰耶じゃ。顔を見合わせた瞬間、八雲に殴りかかるやもしれん。そ

の可能性を考えると、焰耶と八雲が顔を合わせることもない場所を確保しなければならん。やはりこういう場合は、木の葉を隠すなら森の中、か……。

「誰がある！」

「はっ！」

「城門を守る兵士達に、八雲が到着したら城ではなく街の中にある適当な酒家に通すよう、伝えておいて貰えるか？」

「では、直ちに伝えて参ります！」

「うむ、頼んだぞ」

指示を出し終えると、兵士はすぐにそれを伝えに城門へと向かって行った。……流石に街中であれば、焰耶に見つかったとしても何も出来はせんだろう。わしとて、毎日木簡の山と格闘しておるのだから、可能な限り面倒事は避けたいというものだ。

それから数日後のある日の昼、部屋でいつものように政務を行っておると、一人の兵士が部屋に入ってきた。

「失礼します」

「ん、どうした？」

「先ほど、城門の方に紀霊殿がお見えになりましたので、お言い付け通り、街の酒家へと案内しておきました」

「ご苦労。では、その場所まで案内して貰えるか？」

「はっ！」

兵士に案内された店は……よりによって、わしと焰耶が勝手に八雲のツケにして酒を飲んでいた酒家だった。とりあえず中に入り、八雲らしき人物を探す。少しの間探しておると、人目に付きにくい店の一番奥の席で、一人でのんびりとお茶を飲んでいるあやつの姿を見つけた。近付いて行くと、向こうもわしが来たのに気付き、椅子から立ち上がって会釈して来た。……ほう、昔に比べて背格好や顔付きが、大分逞しくなっておるな。

八雲のいる席へと向かう途中に、店主に酒を注文し、八雲の向かい側に座るとほぼ同時に注文した酒が机の上へと置かれた。

「……お久しぶりですね、桔梗さん」

「うむ、そうじゃな。……さて、久しぶりに再会したのだから世間話と洒落込みたいところだが、今はそうもいかん。早速だが、本題に入って貰おうか？」

「その前に、確認しておきたいことがあるんですが？」

「何じゃ、言うてみい」

「袁術軍について、桔梗さんや紫苑さんはどこまでお知りになられていますか？ 袁術軍^{うち}に対する理解度の程度によって、こちらの事情とか桔梗さんが知っておきたい情報について、説明しておく必要があるでしょうから……」

袁術軍について知っておることなど、たかが知れておる。八雲が仕えていることと、袁術には張勳という傳役がいること、それ以外は名も実力も未知数な者達がいづらか袁術の下にいること……これくらいしか分かん。だが、分からのならば聞けば良い。八雲が、答えてくれると言っておるのだから。

「正直に言おう。袁術軍についての情報を、わしらはほとんど持つておらん。だから八雲よ、わしの質問に答えて貰うぞ？」

「分かりました。俺が知っている範囲、話せる範囲でお答えします」

「そうじゃな……。まずは――」

わしはまず、自分が一番知りたいこと……袁術軍が劉璋に保護を求めた理由、袁術軍を安漢へと送った劉璋の意図、八雲がわしらと敵対することはあるのか、まずはこの三つについて質問をぶつけてみると、元から話すつもりだったと告げられ、それぞれ納得のいく説明をして貰うことが出来た。

「ふむ……。あー、んー……」

「まだ何か、聞きたいことはありますか？」

「あー、いや……」

八雲が敵でないことも、袁術軍が劉璋に保護を申し出た理由も、どうして袁術軍が安漢へと送り込まれた意図も分かった。だが、まだはつきりさせておかないとらんことがある。袁術達がわざわざ益州まで来て、何をするつもりなのか……目的が不明のままだ。

「……八雲、お主の知っている範囲、話せる範囲でなら答えてくれるのであったな。それならば、袁術軍は何を目的として益州^{こしゅう}に来たのかも、答えて貰えるのか？」

「良いですよ。というか、むしろ今日はそのことについてお話するために、来たようなものなので……」

「ほう？　ならば、説明せい」

「俺達が益州に来た目的……それは、袁家再興のためです。その目的を実現するためには、袁術様をこの国の新たな王に据える必要がありますが、そのためには是が非でも討ち取らなければならぬ人物がいます。ですが、如何せん劉璋を打ち破るほどの戦力を、我が軍はまだ持ち合わせてはいません。張伊さんには協力を取り付けてあるのですが、それでもまだ心許無い状況です。なので、桔梗さんにも力を貸して頂きたいんです……」

……八雲の言う、討ち取らなければならぬ奴とは、劉璋であることには間違いない。劉璋が消えれば、たしかにこの国は今よりかは良い方向へと向かって行けるであろう。だが、それは新しく君主となる者が、一角の君主であればの話。袁術に会ったことは無いが、良い話もまた全くと言って良いほど聞いたことが無い。……それにしても、あの張伊の爺がのう……。

「八雲……わしには、袁術に君主が務まるとは到底思えん。奴に関して、良い話を聞いた試しがない。いくらお主が仕えておるからとは言え、もっとマシなのはおらんのか？」

「……言った筈ですよ？　俺達の目的は、袁家の再興だと。そして俺達の主は袁術様。新たな王として据える候補など、初めからだ

一人です。……それに、身の回りの環境や個人の心の持ちようで、人は案外変わるものですよ？」

「では、袁術は変わったと？」

「ええ。……子供ですので、まだまだ未熟な部分が有りはしますが、確実に一步一步成長して行っていますし、今後の成長次第という将来性も見込めます。……先見の明の無い暗愚と、自分達の教え次第では大成するかもしれない少女。この国を思うのならば、桔梗さんはどちらを選びますか？」

八雲がこんな大事な話の最中で、嘘を吐くなどとは思えん。先の無い王を選んで民を食い潰されるか、自分らの手で蓄えんじゅつを育て、大輪の花を見事咲かせるかの二択、か……。

「……八雲よ、もしも袁術があのかのクソ坊主同様、地に堕ちるようなことがあった時、わしは弟子であろうと容赦はせんぞ。それでも良いか？」

「っ！？ ……ええ、勿論。その覚悟は、出来ています。そう言うということは、もしかして……？」

「ああ。わしらの力、袁術に力を貸そうではないか。この国を変えようとする者など、長らくおらんかった。そんな折に、お主らが来た。おかげで、わしも昔を思い出したよ……」

紫苑と共に、武器を手に取ったあの日……。軍人になって、この国を変えるのだと夢見た昔を……。いつの間にか初心を忘れてしまっておったが、あの頃のわしらの夢を実現させようとしている者達が、こうして目の前におる。……ならばいくさ人として、次代の奴らの

ためにここで一花咲かすのもまた、粹な計らいではないか。

「桔梗さん、ありがとうございます……！」

「ふっ、礼などいらんさ。……ところで、この話はもう紫苑にはしておるのか？」

「いえ、実はまだなんですよ。焰耶を後回しにしておく、後で面倒事を起こされるような気がしてならなかった……。本当なら、桔梗さんにも紫苑さんの説得を手伝って貰いたい所だったのですが、焰耶の説得の方が厄介そうなので、桔梗さんにはそっちをお願いします。……いくら何でも、出会い頭に鈍砕骨でぶん殴られたくないので」

「……その判断は、正解じゃな。では、焰耶にはわしの方から話をしておくから、紫苑の説得はお主に任せるとしよう。あの未亡人殿に、よろしく伝えておいてくれ」

「分かりました。……それじゃ、そろそろ出ましょうか」

互いに、頼んだ酒と茶を飲み干し、代金を支払って店の外へと出た……。

八雲と共に酒家から出ると――

「あれ？ どうして桔梗様が街に……ん、お前は八雲じゃないか！？」

「……あちゃー」

何と間の悪いことか……。今は警邏の最中なのか、たまたま店の前を通り過ぎようとしていた焰耶と、街中で鉢合わせてしてしまうとはな。

「おい八雲、久しぶりに会ったのだ！ 早速、私と一勝負しろ！」

「……却下」

「な、何故だ！？ ……ああ、分かったぞ。私に負けるのが怖くて、怖気付いたんだろう？」

「いいえ、そういうわけじゃありません。あんな鈍器で殴られたりでもしたら、下手をすれば得物ごと俺の身体が壊れてしまうからですよ。そして何より……」

「何より、何だ？」

「面倒だからです。そういうわけなので、諦めて下さい。それじゃ、俺はこれで失礼しますね」

「あ、こら待て！」

わしらに一礼して、去ろうとする八雲の着物の後ろ襟を焰耶は驚掴みにすると、そのままもの凄い勢いで、ずるずると城の方へと引き摺って行ってしまった。

「……まったく、面倒じゃな」

しばらく呆けた後、仕方なく焰耶達の後を追いつけ、城へと辿り着くと……焰耶に引き摺られたことで、多少着崩れた着物を丁寧に直している八雲と、地面に横たわり息を荒げながら、軽い痙攣の様なものを起こしておる弟子の姿があった。……何があったのかは、簡単に想像できる。

「……はい、俺の勝ちです。いらぬ面倒を掛けさせないで下さいよ、全く」

「ま、待て……！ ふあ、模擬戦で、あつ、人をくすぐるだなんて、んあ、卑怯、だぞ……！」

地面で一人悶えながら、涙目で八雲へと悪態を吐く。……焰耶は人一倍、肌が敏感じゃからな。しかもそのことは、八雲にも当然のように知られておる。……ただでさえ敏感肌だと言うのに、腹だの太腿だのといった、誰でもくすぐったく感じる箇所が丸出しなのだから、八雲にそこを狙われるのは仕方があるまい。せめて、八雲と一戦する時くらいは、隠せば良いものを……。

「別に俺は、焰耶と模擬戦をやるだなんて一言も言っていないし、そもそも攻撃手段としての撥りは禁止だなんて、焰耶は言っていないじゃないですか！。やだー」

「くうっ!？」

「それじゃ、今度こそこの辺で失礼します。焰耶、次はちゃんと手合わせしますから、今日はそれで勘弁して下さい。……あ、桔梗さんも戻って来ていましたか」

「済まんな、八雲。わしの方から話すと言った早々、迷惑を掛けて

しまつて」

「いえいえ、こういつた面倒事は慣れていますから。それじゃ桔梗さん、今度こそこの辺で失礼します。……また近い内に、会いましょう」

そう言つてこちらに背を向けると、八雲はそのまま去つて行き、焰耶は八雲の背中が見えなくなるまで、悪態を吐き続けていた。いい加減騒がしいから、弟子の頭に拳骨をくれて黙らせたのは、言うまでもない…。

さあ……話し合おう（後書き）

あえて、桔梗の方から行ってみました。思ったよりも、あっさりと行きすぎた気がしないでもないですが……。そういうわけですので、次回は紫苑の方に行きたいと思います。

それと次回作の件について、いくつか御意見を頂いていますが、まだまだ募集してますので、そちらにも目を通して頂けたらと思います。

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしくお願いします。

二人の夢と原点（前書き）

……また更新が遅れてしまい、申し訳ないです。次話は、可能な限り早く更新しようと思います。

それでは、本編の方をどうぞ！

二人の夢と原点

Side：八雲

巴郡の城を発ってから数日後、俺は桔梗さんの説得に成功したという報告を手土産に、安漢へと戻って来た。皆への報告は簡単に済ました後、足早に私室へと戻る。部屋に着くなり、筆と墨と紙を用意して書簡を認め、それを部下に持たせて紫苑さんの下へと送り出した。

その作業を終えた後、今度は城下にある街へ足を運ぶ。紫苑さんの一人娘である璃々ちゃんへ、何かしら手土産を持って行くためだ。

……今思えば、あの子がどんな物を好むのか、あまりよく知らないそれに加え、年端もいかぬ少女がどんな物を好むのかも分からないと来た。……とりあえず、見るだけ見てみるとうかがうか。

街にある店や露店を、虱潰しに見て回してみる。その結果、喜んで貰えそうな物は、人形が装身具がくらいだった。装身具と言っても、あの子の年を考えれば髪飾りか、髪を結びりボン辺りが妥当だろう。ただ、どちらを買うかの二択で迷ってしまう。

……結局、迷いに迷った結果、ある一つの結論に辿り着いた。久しぶりに会ったのだから、どちらかで迷うくらいならばどっちも買ってしまう、と。

さっそく、人形が売られていた店へと足を運び、璃々ちゃんが気に入ってくれそうなものを改めて探すことにした。

「……うーん」

「何かお探しかい？」

「ええと、可愛い人形は無いものかと思ひましてね」

「……あんたみたいな若いにいちやんが、人形使つて遊ぶつてのかい？」

「いや、違いますからね！？」

女将の口から洩れた発言に、思わずツツコンでしまった。というか、どういふ風に考えたら、そんな思考に行き着くのか知りたいよ。少なくとも、俺は人形遊びが好きな変態じゃない。

「……宕渠郡で暮らしている知り合いに、一人娘がいますね。その子と久しぶりに会うので、土産として買って行つてあげようかと思ひまして」

「何だ、そうだったのかい！　じゃあ、じっくり見て選んで行つておくれ」

「ええ、そうさせて頂きます……」

女将の言葉通りにじっくりと人形一つ一つを見て行き、個人的にこれかな、という物を選ぶと会計を済ませ、綺麗に包んでもらった。……こうしておけば、仮に城に持ち帰ったとしても、包みを開かない限りはいらぬ誤解や勘違いを生むことはないだろう。

続いて向かったのは、髪飾りや髪留めなどが、ずらりと並べられていた露店。璃々ちゃんは、髪色よりも濃い紫色のリボンをしていた

はずだったから、暖色系のリボンを数本と、花卉の形をした細工が
あしらってある髪飾りを購入した。……気に入ってくれるかどうか
は、本人次第だろう。

両方とも買い終わり、これ以上街でやることもなくなった俺は、城
へと戻ることにした。到着するなり、結構な量の木簡を抱えている
張伊さんと、張伊さんの後ろに付き添ってさらに多くの木簡やら書
簡を抱えた文官達と出会った。そして、その場の流れで仕事を手伝
うことになり、仕事が終わった時には、既に夜も更けていた。……
というか、この街についてほとんど知らない人間に内政の手伝いを
させるって不味くないんだろうか？ まあ、こちらに不備はなかつ
たとは思っけど……。

そんなこんなで翌日、璃々ちゃんへの手土産を手にも、宕渠郡へと向
かった…。

数日かけて、紫苑さんの居城がある宕渠郡へと到着した俺は、荷物
片手にさっそく城へと向かうことにした。

街の中に入ると、街にある市は人で賑わっていて、一目で良い街だ
と知ることが出来る。治安の良さに関しては、巴郡や安漢にも言え
ることだが、これは偏に城主を務める人間が人格者だからなのだろ
う。美羽様にも、いずれはそうなって貰いたい。そのためには、美
羽様を支える俺達周りの人間もしっかりしないと…。

そんなことを頭の片隅で考えながら、都市を通り抜けて城へと辿り
着く。城の前にいる守備兵達には当然のように止められるが、事情
を話すと、守備兵とは別の兵士の案内で客間へと通された。

しばらく待っていると、客間の扉がゆっくりと開かれた。扉の向こう側にいた人の姿を確認した俺は、椅子から立ち上がり、扉の方へと体ごと向き直る。

「……久しぶりね、八雲君。元気そうで良かったわ」

「紫苑さんの方も、元気そうで何よりです」

会うのが久しぶりというのもあつてか、お互いに笑顔を浮かべて、当たり障りのない感じの挨拶で済ませる。挨拶を終えた所で紫苑さんが俺の向かいの席に座り、話し合いが始まった…。

Side：紫苑

何年かぶりに再会を果たした彼は、年の割にどこかしっかりした感じの少年から、成熟してきた大人の男性へと変わっていた。土別れて三日なれば刮目して相待すべしと言うけど、八雲君もまた例外じゃなかったということね。娘も、大きくなるわけだわ……。

……誰かしら、今私のことを年増だの婆だの言ってくれやがったのは？ これでも私は、まだ二十代後半のうら若きお姉さんよ？ さあ、正直に出て来なさい。今正直に出て来るのであれば、曲張比肩の弓の味を味わうのは、心臓と眉間と両腕両足の計六箇所だけで勘弁して――

「……し、紫苑さんって、あの頃と変わらず艶麗ですよ。顔には出ませんでしたけど、全然変わってなくて、内心とても驚きましたよ」

「っ！？ あ、あら、そうかしら？ もう、八雲君つては見ない間にお世辞まで言える様になったのね？」

「いやいや、お世辞なんかじゃないですつて。紫苑さんを見れば、十人中十人が綺麗だと答えますよ」

「そうなの？ ……まあ、本当はお世辞だったとしても、男の人からそう言つて貰えるのは嬉しいわ」

——命拾いしたわね。あともう少しで、不特定多数の人達に矢の雨を降らせるところだったわ。

「……ところで八雲君、今日はどういった用で私の所に？」

「実はですね、紫苑さんに聞いて貰いたい話があるんです……」

さつきまで穏やかな顔をしていた八雲君の顔が、少し真剣な顔付きに変わる。その表情を見て、何かを感じ取った私は気を引き締め、話を聞けるような体勢を取る。

「私に聞いて貰いたい話……？」

「はい。……ある目的を実現するため、紫苑さんに協力して貰いたいんです」

「……………」

八雲君の言う目的というのが、いったい何なのかは分からない……。それに今の彼は、劉璋側の人間なのかそうでないのか、それも分か

らない。いくら知人と言つても、八雲君は不明なことだらけの軍の人間なのだから、そう簡単に警戒は解けないわ。……無いとは思つけど、璃々にもしものことがあつてはいけないもの。

「……話だけなら、聞いても良いわ。でもその前に——」

「——こちらの事情や立場についても話せ、ですよ？」

「……話が早くて助かるわ。それで、それについては話して貰えるのかしら？」

「もちろん、そのつもりです。手を貸して欲しいとこちらから願っている以上、包み隠さずお話しします。……それと、今からする話は既に桔梗さんの耳にも入れてある話ですので、紫苑さんが我が軍について何が知りたいのかも、一応理解していますよ」

「そう……。なら、さつそく良いかしら？」

「分かりました。では——」

八雲君の顔付きが先程以上に引き締まり、より真剣さを感じさせた……。そして彼の口から、次々と私の知りたかった事柄について次々と、そして淡々と語られていく。一度桔梗に話しているからか、それとも単に場慣れしているためからなのか、八雲君の話はとても分かりやすい。

……何より、彼が私達と敵対することはないと分かつて嬉しかった。もしも彼が敵対したとして、いざ私達と戦うことになった時、それを何かの拍子に娘が知ってしまったら、きっと深く悲しんだらろうから……。

八雲君達の身の上話が終わると、次は袁術軍が何をしようとしているのかの話へと移った。それがどんな目的なのかと訊ねると、彼はただ一言……。

「……劉璋を討ちます。そして、袁術様をこの国の新たな王とします」

「……え？」

一瞬、耳を疑った。

「……あ、ええと八雲君、今何て？」

「劉璋を討ち、袁術様を後釜に据えろと言ったんですよ」

……どうやら、聞き間違いではなかったようね。劉璋を打ち取ったとしても、袁術を後釜に据えるのであれば、根本的な部分は何も変わらない。私から見れば、袁術はまだまだ子供。子供を権力の一番強い地位に置けば、私腹を肥やそうとする者達が集うのは必定。しかも、そう言う人間に限って人前では善人を装う。そして、もしも袁術が付け入られてしまったとしたら、今と何一つ変わらなくなってしまう……。

「ねえ、八雲君。劉璋を討つところまでは良いのだけれど、劉璋に付き従う官吏達はどうするの？ 彼らを放っておけば、次に誰を据えたとしても、下手をすればまた良い様に操られてしまうだけだと思っただけね……」

「……そうですね。とりあえず、自分の目で確認済みの官吏に関し

ては駆逐します。ですが、彼らは劉璋に従う官吏達のほんの一部にしか過ぎないはず。残った膿も、なるべく早く絞り出さないとけないでしょう。その方法はまた後でじっくり考えるとして、彼らが袁術様を操り人形にするのは、まず不可能です。これに関しては、断言出来ますよ」

「どうして、そう言い切れるの？」

「袁術様には、幼少の頃より仕えている張勳という傅役がいます。彼女は長い間、たった一人で袁術様を、権力に媚びるしか能のない大人達から守って来ました。今では俺もいますし、共に主を支えてくれる仲間達もいます。それに加え、張伊さんと桔梗さんからお力添えをして頂けることになりましたから……」

「……あの二人が？ いったい、どうやって二人を説得したの？」

「張伊さんの方はうちの軍師に任せておいたので、どう説得したのかは分かりませんが、桔梗さんの説得に関しては、話し合い以外には特に何もしていませんよ」

……意外なものね。桔梗なら、勝負をふっかけるくらいしそうだと思っただけねど。それとも、八雲君の話に何か思う所があったのかしら？ もう少し、話を聞いてみる必要があるそうだね。

「今まで話して貰ったことは、桔梗にも話してあるのよね？ 他にどんな話をしたの？」

「ええと……うちの主はまだまだ未熟なところがありますが、着実に成長はしているし将来性も見込めるということ。あとは、この国を思うのであれば、先見の明の無い暗愚の下に付いて日々を過ごす

よりも、教え方次第では一角の君主として大成するかもしれない少女の可能性に賭けてみませんか、とも話しました」

「なるほどね。……それで桔梗の方は、貴方に何か言っただけでなかったかしら？」

「……そういえば、こちらの頼みを承諾してくれた際に、何かを懐かしむような顔を思い出したと仰っていました。何の事かまでは語ってくれませんでしたけど、桔梗さんにとっては大事なことだったのかもしれませんが……。紫苑さん、何か心当たりありませんか？」

「……やはり、貴女もまだ忘れてはいなかったのね。共に軍人を目指す決めた時、いつか実現させると語り合ったあの日の夢を……。話を聞いた今ならば、桔梗が八雲君達に力を貸すと言ったのも頷けなくはない。」

「……あるわ。だって、私と桔梗の原点に通ずる事ですもの」

「お二人の原点に、ですか？」

「ええ。もう、ずっと前のことよ……」

椅子から徐に立ち上がり、部屋に取り付けられた窓の方へと足を向ける。窓枠に片方の手を掛け、あの頃を思い出しながら、窓の向こうに広がる景色を眺めていた……。

——力無き人々を守る……。互いに武芸を極め、軍人になろうと決心した時に私達が抱いた心。その気持ちは次第に強くなり、何時の日かこの腐敗した国を変えてやろうという気持ちへと変化していつ

た。……だけど、この国の今後を思って行って来た私達の諫言や行動の大半は実を結ぶことなく、この国の内部は未だに官匪の伏魔殿と化したまま……。

だからと言って、この国を変えたいと思う気持ちを失ってはいなかった。その思いは自分でも気付かぬうちに心の奥隅でひっそりと燦り続け、その機会が訪れるのをずっと待っていたのかもしれない。それを証明するかのように、桔梗は八雲君の提案に乗った。一度は為し得なかった昔の夢を、今度こそ実現させるために。……そして、その思いは私も――

「――さん、紫苑さん！」

「っ！？ え、あ、どうかしたの？」

いつの間にか、八雲君が私の後ろに立っていた。

「それはこっちの台詞ですよ。どうしたんですか？ 窓の外を見たまま、ぼうつとしているだなんて……」

「あらあら、それはごめんなさいね。ちょっと昔のことを思い出しながら、考え事に耽っていたの……」

いけない、少々考え事に没頭し過ぎていたようね。

「それで、紫苑さんは一人で何を考えていたんですか？」

「八雲君達に、手を貸すかどうかよ」

「……それで、紫苑さんのお答えは？」

「……私の力、貴方達に預けるわ」

桔梗があ頃の夢を諦めてはいなかったように、私だってまだ諦めたわけではないのだから……。

「本当ですか！？ はあ、良かった……」

私の返事を聞いて安心したのか、話を始める前の穏やかな表情へと戻った。

「紫苑さん、ありがとうございます。今後とも、よろしくお願いします」

「ええ、こちらこそ。……そうだね。ねえ八雲君、久しぶりに璃々に会って貰えないかしら？ あの子、きっと喜ぶはずだから」

「良いですよ。俺も、璃々ちゃんにお土産を渡したいですし」

「そう。それじゃ、行きましょうか？」

「はい」

八雲君は娘へのお土産が入っていると思われる荷物を手にし、一緒に客間から出た後、璃々の待っている私の私室へと案内した…。

S i d e : 八雲

紫苑さんの説得を無事に終えた俺は、紫苑さんの私室へと通された。

部屋の中に入ると、大きな寝台の上でうつ伏せになりながら、一人で人形遊びをしている璃々ちゃんの姿があった。

「璃々ちゃん、久しぶりだね」

「え？ ……お兄ちゃん？」

「そうだよ？」

「わーい、本当にお兄ちゃんの方から会いに来てくれたー！」

璃々ちゃんは寝台から降りると、こちらへと駆け寄って来た。……随分と、大きくなったもんだ。

「お兄ちゃん、いつここに来たの？」

「ついさっきだよ。出来ることなら璃々ちゃんに早く会いに行きたかったんだけど、どうしても紫苑さんとお仕事の話をしなくちゃいけなかったから、会いに来るのが遅くなったんだ。ごめんね？」

「ううん、良いよ」

「そっか。優しいね、璃々ちゃんは。そんな璃々ちゃんに……はいこれ、お土産だよ」

手にしていた荷物を下ろし、璃々ちゃんの前へと差し出す。

「やったー！ 開けても良い？」

「うん、開けてごらん」

気に入って貰えると嬉しいけど、と心の中で呟きながら、璃々ちゃんの様子を窺う。

「……あ、これ！」

そう言つて荷物の中から取り出したのは、人形の方だった。……もしかして、既に持っていたりとか、そういうパターンか？

「もしかして、持つてる人形だったかな？」

「ううん、違うの。これね、この間からずつとお母さんに欲しいって言つてたお人形さんなの！ お兄ちゃん、ありがとう！」

どうやら人形の方はお気に召してくれたのか、笑顔を浮かべ、胸の前でしっかりと両手で抱き抱えている。この顔を見ると、じつくりと見て買った甲斐があったというものだ。

「……あら、まだ何か入っているみたいね。何かしら？」

そう言つて紫苑さんが取り出したのは、もう一つお土産にと買つてあった数種類の色のリボンと髪飾り。

「八雲君、もしかしてこれも……？」

「ええ、そうですよ。二人で一緒にお出掛けする時にでも、付けてあげて下さい。そろそろ璃々ちゃんも、お洒落に気を使い始めるよな年頃でしょうから」

「それじゃあ、ありがたく使わせて貰うわ。良かったわね、璃々」

「うん！」

紫苑さんの説得に成功したし、璃々ちゃんにお土産も渡した。これで、ここでやるべきことは終わった。あともう少しここで過ごしたら、帰り支度を始めるとしよう――

「八雲君、この後はどうするの？」

「もう少しここでゆっくりさせてもらった後、帰り支度をしようと思ってます」

「ええ、もう帰っちゃうのー！？」

「璃々、我が儘言っちゃ駄目よ？ 八雲君にだって、都合というものがあるでしょう？」

「やだ！ 璃々、まだお兄ちゃんとお話したり、遊んだりしてないよー！」

そう言いながら俺の足にしがみ付いて来ると、目を潤ませて上目使いで見上げて来た。……困ったな、いくら身長差があるから仕方ないとしても、こんな目で見られたら断わるに断われない。紫苑さんに視線を向けると……困ったように苦笑いを浮かべた後――

（おねがい）

と、声を出さずに口だけ動かして見せた。……まあ、急いで帰るほどでもない、か。

「……やれやれ、こつちのお姫様にも困ったものですね。紫苑さん、数日ほどお世話になっても構いませんか？」

「もちろん、構わないわ。部屋も余っていることだし、その方がこの子も喜ぶでしょうから」

「なら、お言葉に甘えて数日ほどお世話になります。それと、桔梗さん達に手紙を出してもらえませんか？」

「良いけれど、内容は？」

「安漢で待っている皆と顔合わせをして頂きたいので、桔梗さん達には一度宕渠へと来て貰って、一緒に安漢へ向かいたいという旨を書いておいて頂ければ十分です。あと張任の同行については……桔梗さんの判断にお任せするとも書いておいて下さい」

「分かったわ。それじゃあ今書いてしまうから、書き終わるまで璃々の相手よろしく頼むわね」

そう言つと、紫苑さんは部屋に備え付けられていた机へと向かい、手紙を認め始めた。そして、俺はと言つと……。

「お兄ちゃん、お出掛けしよー」

「ああ、良いよ。それじゃあ、どこに行こうか……と言っても、今からだと城下くらいしかないか。璃々ちゃんは、それで良いかい？」

「うん、良いよ」

「それじゃ紫苑さん、ちょっと一緒に出掛けて来ますね」

「はい、いつてらっしゃい。璃々、八雲君の言うこと、ちゃんと聞くのよ？」

「はい！」

璃々ちゃんは元気良く返事をした後、早く行こうと言って、急かすように俺の手を引っ張る。その結果、少々急ぎ足な感じになりながら、俺達二人は城下街へと足を運んだ。

街に着いてからしばらくの間、二人で街を適当にぶらつき、久々にのんびりとした時間を過ごしてから、城へと戻った。……その間、お団子やらお饅頭やら串焼きやらを、店の前を通る度に買ってとねだられた。断ろうとすると目を潤ませて、お願い、と上目使いで来るもんだからこつちも断わり切れず、ついつい全部買ってしまった。分かってはいるんだけど、何か断わり切れない。この年で大人に貢がせるなんて……璃々ちゃん、恐ろしい子だ。

璃々ちゃんを連れて紫苑さんの私室へ戻ると、紫苑さんが一人でお茶を飲みながら寛いでいた。手紙は書き終えたのかと聞いてみると、既に書き終えて、部下に持たせてあると話してくれた。……流石、仕事が早い。

その後は三人で雑談をしながら過ごし、一緒に夕食を頂いた後、一足先に宛がってくれた部屋で休ませてもらうことにした。

それから数日、桔梗さん達がここに来るまでの間、俺は紫苑さんの下で世話になることになった…。

二人の夢と原点（後書き）

前回の桔梗に続き、今回の紫苑もあっさりな感じがしますが、作者の力量不足なので、そこはご容赦下さい。……改めて、申し訳ないです。

それと、活動報告の方に書いてあった次回作のアンケートに協力して頂いた方、ありがとうございます。主人公の方の設定はちよくちよく変わるかもしれませんが、ルートやヒロインに関しては、頂いた意見を元にしようと思えますので、今後もアンケートにご協力のほど、よろしくお願いいたします。

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

持つ者と持たざる者（前書き）

お、遅れてすみませんでした……。年を跨ぐ前に、出来たらあと一話は更新したいと思います。

では、本編の方をどうぞ！

持つ者と持たざる者

S i d e : 八雲

あれから十日ほどが経った現在、俺は紫苑さんらを連れて安漢の街へと帰還し、城へと向かっている最中だった。……普段と違う点と言えば、同行について桔梗さんに一任していた張任がこの場にいることだけだろう。

——それにしても、紫苑さんの下でお世話になっている数日間はずいぶん普段よりも疲れた。璃々ちゃんの遊び相手、紫苑さんが決裁する政務の手伝い、兵士達の訓練の補佐役。これだけならまだ、大して疲労が溜まるような内容じゃない。問題は、桔梗さん達が到着してからだ。

まずは、模擬戦をしると煩い焰耶を相手に、朝から晩まで城の敷地内で鬼ごっこ。しかも、ただの鬼ごっこではない。鈍砕骨を振り回した状態の焰耶との鬼ごっこだ。

たしかに、次やる時はちゃんと手合わせするとは言った。でも、次に会った時とは一言も言っていない。……あの時ばかりは、焰耶の顔が般若のように見えてしまった。女性の顔をそう表現するのは失礼だとは思うが、実際にそう感じてしまったのだから仕方が無い。ちなみに、本人にこのことは言っていない。もし口を滑らせていたら、この身は今頃どうなっていたのか……。

焰耶から逃げ切っても、身心共に休まることは無かった。夜の帳が下り、部屋で休んでいるところに張任がやって来たかと思うと――

「久々の再会を記念して、僕が幼女と熟女それぞれの魅力について語ってやるっ」

「いや、別に良いです……。むしろ結構です」

「そう遠慮するなよ。……そうだなあ、じゃあまずは幼女の方から――」

と、こちらの意見を無視して彼は語り始め、こっちはそれを全力で聞き流し始めた。……口を開けば変態なのに、見た目は超が付くほどの二枚目だというのだから、本当に質が悪い。

一方的な変態談義も何とか終わり、やっと解放してくれるのかと思いきや、なぜ貧乳は希少価値なのか、巨乳の浪漫と秘めたる魔力について、再び語り出す始末……。無視して寝ようとする強制的に叩き起こされ、結局彼が満足して部屋を出て行った頃には、完全に日が昇りきっていた……。

その翌日にもまったく同じことが続き、これ以上は流石に身が持たないと判断した俺は、紫苑さん達にお願いして出発を早めてもらい、今へと至る……。

大通りを抜けて城へと辿り着いた後、紫苑さん達を客間へと通し、俺は皆を呼ぶために一度退室した。

部屋を出てからまず向かったのは、美羽様と七乃の私室。宕渠へと出向いた日から換算すれば、かれこれ二週間くらい留守にしていたことになる。……今思えば、あの二人と知り合って以降、これほど長く二人の傍を離れたことは無かった気がする。

二人の部屋の前に着き、一息吐いてから軽く部屋の戸を叩く。それからすぐ、部屋の戸がゆっくりと開かれると、七乃の姿が視界に入った。

「ただいま、七乃」

「あ、八雲さん、お帰りなさい！ お嬢様、八雲さんが帰って来ましたよー」

部屋の中にいる美羽様に呼び掛けると、トタトタと部屋を走る足音が聞こえ、その音が止むと同時に美羽様が七乃の隣に現れた。

「美羽様、ただいま戻りました」

「遅かったではないか、八雲！ いったい、何をしておったのじゃ？」

頬をほんの少しだけ膨らませると、妾は怒っておるのじゃぞ、と言いたげな顔をしながら両手の拳を腰に当てて見上げて来る。そんな主の姿を見て、七乃は両手を頬に当てて恍惚に浸っていた。……相変わらずの平常運転だ。

「申し訳ありません。本当はもっと早く戻って来るつもりだったんですが、どうせなら皆にも黄忠さん達と面識を持ってもらおうと思ひまして……。一度宕渠の方に巖顔さん達をお呼びしてから、一緒にこの街へと戻って来たので、すっかり遅くなってしまいました」

「そうだったんですかあ。で、その黄忠さん達は今どちらの方に？」

「今は、客間で待って貰っています。なので、一度皆を玉座の間に

集めた後、黄忠さん達を玉座の間へと連れて行き、そこで顔合わせをしようかと」

「なら、私とお嬢様で皆を呼んでおきますから、八雲さんは黄忠さん達を連れて来て下さい」

「分かりました。それじゃ、またすぐ後で」

二人の私室を出て客間へと戻った後、五人に事情を説明し、玉座の間へと向かった…。

Side：七乃

八雲さんに伝えておいた通りに皆を玉座の間へと集め、彼が黄忠さん達をお連れして来るのを、雑談を交わしながら待っていた。その雑談の内容はもちろん、今からこの場に来る黄忠さん達がいったいどんな方達なのかの一つに尽きる。

待ち始めてから少しして、重々しく開かれる扉の音が玉座の間に広がった。それとほぼ同時に、この場に居た全員が雑談を止め、皆の視線が玉座の間の入口へと集中する。

まず、玉座の間へと入って来たのは八雲さん。彼に続いて最初に姿を現したのは、綺麗な紫色の髪をした妙齡の女性に、彼女と同じ髪色をしたまだ幼い女の子。

次に入って来たのは、これまた妙齡で、薄く紫がかった銀色の長髪を簪で一つに束ねた女性に、私達と同じくらいの年齢と思われる、黒髪だけど前髪の一部が白く染まっている女性。

最後に入って来たのは、俗に言う美青年といった風貌の男性。……
八雲さんのお知り合いの方々が、まさかこんなに綺麗な方ばかりだ
とは思いませんでしたね。

私達の目の前で立ち止まった八雲さんが、こちらへどうぞ、と促す
と、後ろに付いて来ていた五人が横一列に並び、私達と相對してい
く。

その時、紫色の髪をした女性と、銀髪の女性、それと黒髪の女性、
この三人がそれぞれ立ち止まる度に――目を疑うほどのたわわな
胸が大きく上下に揺れるのが、非常に目を引いた。……べ、別に、
羨ましくなんてこれっぽっちも思っでなんかいませんよ？ ……
…何て、ちぢましい。

麗羽さまとお嬢様、それと斗詩ちゃんと恋ちゃん以外の人達も私と
同じことを考えていたのか、羨望の眼差しで目の前にいる三人の胸
を穴が開かんばかりにまじまじと見つめていると、突然、玉座の間
に手を叩く音が鳴り響く。その音に驚き、私達は我に返った。

音のした方へ目を向けると、手を叩いていたのは八雲さんだった。

……うう、何とも恥ずかしいところを見られちゃいました。

「……それじゃ、始めましょうか。……紫苑さんから順番に、簡単
にで良いので挨拶をしてもらえますか？」

「ええ、分かったわ」

紫苑さんと呼ばれた女性は、こほん、と小さく咳払いをした後、右
手を胸元に置き、微笑みを浮かべて話し始めた。

「袁術軍の皆さん、はじめまして。私の名は黄忠、字は漢升と申します。私の隣に居る子は、私の娘で名を璃々と言います。これから母娘共々、よろしくお願いしますね。ほら、璃々も皆さんに挨拶して？」

「よろしくおねがいします」

元気一杯に挨拶をする璃々ちゃんの姿に可愛らしさを覚え、黄忠さんに対しては、所作の一つ一つが淑やかで、余裕のある大人の女性という印象を受けた。……綺麗でお淑やか、そのうえ巨乳だなんて、男性受けが良さそうですね。……おっぱいこのやろつ。

「次は、わしらじゃな。……わしの名は嚴顔。知っているとは思いますが、巴郡の太守をしておる」

「私は嚴顔様の部下で、名は魏延、字は文長だ」

……何でしょう。魏延さんから、董さんと同じ匂いを感じる。……それにしたって、この二人も随分と胸が大きいですねえ。嚴顔さんに至っては黄忠さんと同様、麗羽さまのよりもずっと大きいですし、あの三人の中で一番小振りなはずの魏延さんでさえ斗詩ちゃんより大きいとか、この世の不条理をもの凄く感じます。……ああもう、本当にちっちゃいですね、おっぱいこんちくしょう。

……こほん、これで残るはあと一人。いったい、どんな人なんですよ……？

「僕は張任、魏延と同じく嚴顔様の部下で、紀靈とは友人だ。よろしく頼むよ」

と、言いながら、張任さんはこちらへと一礼した。どうやら、常識人のよう――

「……なあ、紀霊。僕の前に、こんな美少女達をほいほい連れて来てしまつて良かったのかい？　こう見えて僕は――」

「……幼女だろうと熟女だろうと貧乳だろうと巨乳だろうと、構わず食つちまう男なんだぜ、とか言い出すつもりなのでしょう？　……そういう変態的発言は、この場では慎んで下さい」

「ふつ、僕の言おうとしたことを先読みするとはやるじゃないか。じゃあご褒美に、幼女の魅力応用編を語つてやろう。どうだ、嬉しいだろ？」

「……十分割に斬り刻まれたいのなら、聞いてあげてもいいですよ？」

「……美少女達を愛でられなくなるのは嫌だから、今回は止しておくとしよう。それに、ごほん、おほん……何だが、今日は喉の調子も芳しくないようだ」

「まったく……。今回は君達と袁術軍の顔合わせが一番の目的なんですから、皆を連れて来なければ話が始まらない。後で一人一人挨拶に出向かせてなんていたら、それこそ時間の無駄でしょう？」

「それもそうか。……にしても、可愛い子ばかりだなあ、ここ」

……どうやら、私の認識が間違っていました。彼は常識人の皮を被つた、ただの変態でした。お二人は御友人とのことですが、八雲さ

んがあんな変態にならないでくれて、本当に良かったです……。

「それはそうと張任、今のやりとりで、うちの将達に随分と引かれてしまっているみたいですよ？」

「いやいや、流石にそれは——え？」

私達の方を見た瞬間、あの人は絶句してしまいました。それもそのはず。だって、私達は一人も欠けることなく張任さんからかなり距離を取り、冷やかな視線を送っていたんですから……。

「ちょ、皆酷くない！？ 敵顔様、黄忠様、いくら何でもこれは酷いと思いませんか？」

同意を求める様に、隣にいる黄忠さん達に訊ねてみたけど——

「……当然じゃな」

「……当然ね」

「当然だろ……」

「とうぜんとうぜーん」

私達のように張任さんから距離こそ取らないものの、大人三人は呆れたように当然だと言い放ち、璃々ちゃんは大人達の真似がしたかったのか、同じ言葉が無邪気な感じで言い放った。

「そ、そんな……。な、なあ紀霊、お前は酷いと思うよな？ な？」

「……まあ、当然ではないでしょうね」

「だ、だよな！」

「ええ。彼女達に引かれたのはむしろ必然でしょう、常識的に考えて」

この一言が止めとなったのか、張任さんは隅っこの方でいじけだしてしまっただけ、誰一人見向きもしない。

その後、私達の方も一人ずつ自己紹介をしていき、顔合わせが終わった。……恋ちゃん、まさかあの飛將軍と謳われた呂奉先とは知らずに驚かれたり、お嬢様を含め子供っぽい体躯の人達がやけに多いこともあってか、八雲さんは少女趣味なのかと勘違いされたり、そのせいでせつかく塞ぎ込んだ変態が復活したりで、何かごたごたした感じの終わり方でしたけどね…。

S i d e : 星

顔合わせが終わると、ほとんどの人達はまだ残っている案件やら仕事やらを片付けるために、玉座の間を後にしていく。まあ、今日は非番であり、特に急ぐような仕事がある所ない私にとっては無縁な話だ。

さてと、せつかくの休日なのだし、今日は昼からメンマを肴にゆっくりと酒を飲むでしょう——

「八雲、今日はわしらに付き合え。今夜は、あれをやるぞ」

「あれ、ですか？ ……別に良いですけど、久々なのでお手柔らかにお願いします。二人共、自重って言葉を知らないですし、最終的に二人を介抱するのは俺なんですから……」

「仕方ないわよ。だって、我慢出来ないんですもの。ねえ、桔梗？」

「そうじゃな。八雲も、小さいことを気にしておるようじゃいかなぞ。現にお主だって、何だかんだで気持ち良さそうにしておったではないか？」

「そ、それはそうですけど……」

ほとんどの者が退室した中、八雲殿が黄忠殿達と話し合っていた。

……ふむ。私の勘が、何やら面白そうな雰囲気があると告げている。どれ、私も話に混ざるとしよう。そのついでに、八雲殿をちよつとからかってみるのも面白いかもしれない。

私は三人にそつと近付き、八雲殿の背後から声を掛けてみた。

「何を話しておるのだ？」

「っ！？ ……何だ、星か。ふう、驚かさないで下さいよ」

「何やら面白そうな雰囲気がしたもので、つい。……で、いったい何の話をしておったのですかな？」

「桔梗さんに、飲み比べに付き合うように言われまして」

ほう、飲み比べとはまた、何とも面白そうな催しだ。……そういえば、八雲殿とは一度も酒と一緒に飲んだことは無かったな。ここは、

私も参加しても良いか訊ねてみるとしよう。

「私も、その飲み比べに参加したいのだが、よろしいか？」

「全然構いませんよ。……さてと、面子はこれぐらいで良いとして、場所はどうします？」

「城壁の上でなんてどうかしら？ 今日にはよく晴れてるから、夜になれば星や月もよく見えるでしょうし、お酒で火照った身体を夜風が冷ましてくれるから、きっと気持ち良いと思うわ」

月見酒、というわけか。それはそれで、なかなか風趣なものやもしれんな。

「わしは、酒が飲めるのならどこでも構わんよ」

「もう、桔梗つたら……。趙雲ちゃんは、外で飲むってことで構わないかしら？」

「うむ。夜空を見ながら酒を煽るのもまた、乙なものだろう。反対する理由は、何一つありはすまい」

「俺も星と同意見ですね。たまには趣向を凝らした飲み比べというのも、一興かと……」

「じゃあ、これで決定ね。八雲君達は何かしら仕事が残っているのでしょうか？ 私と桔梗は、これで一旦失礼するわ」

そう言うと、二人も玉座の間から出て行き、私と八雲殿の二人だけとなった。……からかうのならば、今かもしれない。

「そういえば……」

「どうかしましたか？」

「いやなに、最初三人が話していたのを聞いた時、何やら如何わしい会話を交わしているように聞こえてしまったのを思い出しましたな。聞いていた人次第では、酷い勘違いをしていたやもしれませんぞ？ 現に、私とて初めはそう思ってしまったくらいですからな」

「そんなでしたか……？」

「今夜やるだの、久々だからお手柔らかにだの、我慢出来ないだの、字面だけ取れば十分に勘違いされても可笑しくは無いと思いますが？ それに、何だかんだで気持ち良さそうにしていたと言われた際に、否定し切れて無かったではありませぬか。……もし七乃が聞いていたとしたら、三人はそういう関係なのだと勘違いを起こして、八雲殿に事実を確認するまでもなく、悲しみのあまりきつと卒倒していたでしょうな……」

「うつ！？ ……そう言われると、返す言葉がありませんね。今は、聞かれたのが七乃でなくて助かったと心から思いますよ。……今後は、気を付けておかないと……」

ちよつとからかうだけのつもりだったはずなのだが、気付けば八雲殿が本気で安堵の表情を浮かべていた……。

それから数刻が経ち、私達は城壁の上で改めて顔を揃えた。壁に背を預けるようにして座り込み、空を見上げれば——真っ暗な空には幾つもの星が瞬き、ぼんやりとした青白い月の光が私達を照らし

ていた。

視線を空から地上に戻せば、八雲殿が人数分の杯に酒を注いでいる最中だった。

「言つて下されば、私が注いだものを……」

「良いんですよ。この二人と飲む時は、俺が酒を注ぐのが決まりごとみたいなものですから。……はいどうぞ、星」

「これは忝い」

杯を受け取った後、八雲殿が二人にも酒が注がれた盃を手渡し、最後に自分の分の杯を手にした。それを見て私も杯を掲げようとすると、黄忠殿に制された。

「さて、これで乾杯の準備は整ったけど、その前に……」

「ん？」

黄忠殿がそう言うと、厳顔殿と共に私へと視線を向けて来る。

「これからは仲間として共に過ごすのだし、せつかくこうやって杯を交わすのだから、お互いに真名を預け合おうと思うのだけど……良いかしら？」

「無論、良いに決まっている。……私の真名は、星だ。二人共、受け取って欲しい」

「ええ、確かに。私の真名は紫苑と言うわ」

「わしの真名は桔梗じゃ。受け取ってくれ」

「うむ。二人の真名、しかと受け取った」

紫苑と桔梗の二人とお互いに真名を預け合い、改めて杯を目線と同じ高さに掲げる。

「それじゃあ——」

八雲殿のその一声の後、皆で声を揃えて乾杯と言い、互いの杯を一度当て、注がれていた酒を一気に煽り、飲み比べが始まった……。

出だしは好調で、私達はその後も次々と酒を胃に流し、気が付いた時には既に空となった一升瓶が十本ほど、辺りに散乱していた。もう確実に、一人で三升は飲み干したことだろう。酒を嗜むとはいえ、これだけ飲めば酔いも回って来る筈なのだが……この三人は、一向に顔色が変わらない。むしろ、酔っているのは私だけ。

その後もしばらく飲み続けたのだが、やはり私が一番最初に酔い潰れた。私も人並み以上に酒を飲んではいた方だが、この三人は私の比じゃなかった。八雲殿は五升、紫苑と桔梗の二人は六升もの量の酒を最終的に飲み干したのだが、三人揃って未だにほろ酔い気分という感じだった。……ああ、夜風が良い感じに当たり、火照った身体から熱を奪っていくのが何とも心地良い。

「……紫苑、もう酒が無いぞ？」

「あら、もう無くなっちゃったの？」

「無いものは仕方ありません。今日はこの辺でお開きにしましょう」

「……それもそうね」

「まあ、寝酒にはちょうど良かったわ」

……この三人、いくら何でも強過ぎやしないだろうか？ 酒宴なんぞ開いたら、城中の酒が無くなってしまいかもしれん。

「それじゃ、片付けましょうか」

「なら八雲君は、星ちゃんを部屋まで運んであげてちょうだい。大分酔っているみたいだし、そんな状態で部屋まで歩いて戻るのは危ないわ」

「そうですね。じゃあ、ここの片付けをお願いします」

「任せておけ」

「二人共、お休みなさい。……星、行きますよ？」

「うう」

酔い潰れた私は八雲殿に背負われて部屋へと運び込まれ、酔い覚ましに彼が持つて来た水を飲んでから寝た……。しかし翌朝、やはり酒が抜け切らなかつたのか酷い二日酔いの状態で朝を迎えることとなった。

最悪の朝を迎えた私だったが、もう一人最悪の朝を迎えた人物が、城壁に腰掛けていた。それは――

「……八雲殿、その顔の紅葉はいつたい？」

「……………」

返事が無い。どこかの、真っ白に燃え尽きた拳闘士のような……。

ふと彼の首筋に目を落とすと、赤い唇のような模様がうつすらと付いているのが見えた。まさかそれが、昨夜泥酔した私が無意識のうちに関首筋に強く吸い付いて出来た痕だというのを知ったのが、そのさらに翌日のことだったのは、また別の話…。

持つ者と持たざる者（後書き）

次回作についてのご意見を、まだまだ承っていますので、よろしければそちらの方にもコメントを頂ければ幸いです。

コメントやアドバイス・誤字等がありましたら、よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3218s/>

真・恋姫無双 もう一つの袁家に仕えし者

2011年12月23日11時31分発行